

私本「葛飾北斎 年譜で迎える画工の一生」

村井 信彦

【初めに】

本稿は前稿『私本 葛飾北斎ハンドブック 年譜で迎える画工の生涯』改訂2版を増補して改題したものである。若干の修正及び加筆し、ハンドブックというテキスト的要素を無くし、一般的な参考図書としたが、前稿の執筆意図は変わらないので、ハンドブックの「初めに」を以下再録しておく。

葛飾北斎は研究者によるさまざまな角度でのアプローチに関わらず、伝説の域を抜けない推測の部分が少なくない。一言でいえば「謎」多き有名人なのである。

制作年、刊行年、作品の解釈及び画題等の読み方の違いは言うに及ばず、北斎の生き方に関わるあらゆる面で謎が多いが、先学者の地道な研究が常になされているので、新たな事実や発見が今後もなされるに違いない。

私もまた在野の素人ながら、自分なりの北斎像を描きたいという思いがあった。そのため、諸研究を参考にしながら、改めて年譜を作成し、作品と関連づけるという基本的な作業により、北斎の全体像を浮き彫りにする方法をとった。(略)

在野の研究であるので、資料は各種展覧会、図録、種々の参考資料に拠らざるを得ないため、思い違いや訂正すべきところもあるかもしれない。掲した図録等は、多くは出典を明示しているものの、所蔵館等の不記載や来歴不明の作品も多々あると思われるので、あくまでも参考としての掲載であることをお断りしておく。

かつて芥川龍之介は「昔から前人の造った大きな花束が一つあった。その花束へ一本の花を挿し加へるだけでも大事業である。その為には新しい花束を造る位の意気込みも必要であらう。この意気込みは或は錯覚かも知れない。が、錯覚と笑つてしまへば、古来の芸術的天才たちもやはり錯覚を追つてみたのであらう」(『文芸的なあまりに文芸的な』三十九「独創」)と述べた。

本稿で一本の花を挿し加えることができたか誠に心もとない。前述したように北斎に関わることは、永遠の謎解きとしか言いようがない。今後、新事実や従来の説を覆す論考も出るに違いないことを念頭に置けば、本稿もまた永遠の未定稿であることをご理解いただきたい。不備極まりない私本だが、多少でも参考にさせていただければ幸いである。

なお、北斎と関わりの深い曲亭馬琴の動静についても多少記述した。

付録に「春峯庵事件」「應為作品」「所蔵館一覧」を付したので参照されたい。

最後に、酒井好古堂主人にご教授いただいた部分も多く、感謝申しあげたい。

令和4年(2022)4月4日記

改定 令和7年(2025)1月1日記

【凡例】

- 西暦や算用数字の関係もあり、横書きの年譜とした。
- 年齢は全て数え年で表記している。
- 制作年の枠組に示した落款・印号は、筆者が知り得るその年の作品に限定している。
- ◇印は周辺の世相等を示している。
- ○は北斎以外の刊行物等を示している。
- ★は北斎に関わる事項を示している。
- ●は北斎の作品・刊行物を示している。
- ☆は揃物等の各図を示している。
- 洒落本・滑稽本・黄表紙・読本等は、特に注釈がない限り当該本の挿絵の落款を指す。
- 作品は原則として刊行年で示している。
- 作品の色摺り表記は、本来、肉筆画には「着色」を、その他は「色摺」と表記している。
- 作品分類の「絵暦」、江戸期では「大小」と称されたが、本稿では一般的な「絵暦」と表記する。
- 作品の寸法（法量）はセンチ単位で、縦×横のように表記している。肉筆画以外は、初摺や版元の再摺等により、所蔵館の作品のサイズに若干の違いがある。
- 作品（挿絵を除く）はできるだけ簡単な説明を施し、同画題等の検索の便宜に供するように配慮した。ただし、未見のものは表題にとどめた。また、説明は知識不足による不備なものもあり、碩学の教えを待ちたい。
- 参考資料等の著者の敬称は原則省略した。
- 引用資料の『葛飾北斎伝』（飯島虚心著）は、岩波文庫版（平成 11 年：1999 年刊、鈴木重三校注）を使用した。同書の初版は明治 26 年（1893）に浮世絵商の蓬枢閣から出版された。
- 引用資料の『葛飾北斎年譜』（永田生慈著）は『北斎研究』22 号（平成 9 年 4 月 18 日発行 葛飾北斎美術館編 東洋書院発行）所収のものを参照し、本文中では『年譜』と略記する。
- 書名・人名・引用文には、原文にはない振り仮名や句点を施してある。また、引用文の旧漢字は現行漢字に、ふりがなは現代仮名遣いとした。必要があれば原文に当たっていただきたい。読み方が不明の場合は筆者の判断で記した。また、本文中の北斎名および画号については、原則としてルビは付していない。
- 図版は主に Web 上に公開されている画像・展覧会図録・画集等を中心に掲載し、出典を明記するよう配慮した。ただし、図版に付した所蔵館等と図版は必ずしも一致しない。同一図の所蔵先を示すにすぎない。
- 作品所蔵施設等は代表的な施設を取り上げているので、全ての所収施設を記載しているわけではない。

【目次】

宝暦 10	1790	1 歳	誕生の謎・・・・・・・・・・・・・・・・・・11 当時の銭相場・・・・・・・・・・・・・・・・12 北斎の父母の謎・・・・・・・・・・・・・・・・12 北斎の父は中島伊勢、母は小林平八郎の孫娘か・12 北斎の兄妹・・・・・・・・・・・・・・・・・・13 北斎の実父は川村家の長男か・・・・・・・・14
宝暦 13	1763	4 歳	鏡師の養子の謎・・・・・・・・・・・・・・・・14 養子に入ったのは20歳頃？・・・・・・・・15
明和 2	1765	6 歳	絵暦・錦絵誕生・・・・・・・・・・・・・・・・16 六歳より物の形を写す・・・・・・・・・・16 百歳の後に至りては此道を改革せんことをのみ願ふ 16
明和 3	1766	7 歳	妹没・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
明和 4	1767	8 歳	生涯関わる曲亭馬琴誕生・・・・・・・・・・17
明和 5	1768	9 歳	美人で評判の笠森お仙たちのプロマイド・・17 中島鉄蔵を名乗る・・・・・・・・・・18
明和 7	1770	11 歳	役者似顔絵確立・・・・・・・・・・19
明和 9/安永 1	1772	13 歳	浮絵確立・・・・・・・・・・20 貸本屋で働く・・・・・・・・・・20 この頃の貸本屋の実態・・・・・・・・・・20 写本一冊八文で貸す・・・・・・・・・・21
安永 2	1773	14 歳	彫刻家の弟子になる・・・・・・・・・・22
安永 4	1775	16 歳	黄表紙誕生・・・・・・・・・・23 筆耕彫としての作品・・・・・・・・・・23
安永 5	1776	17 歳	大首絵登場・・・・・・・・・・24
安永 7	1778	19 歳	勝川春章門に入る・・・・・・・・・・25 春章一幅価千金・・・・・・・・・・25
安永 8	1779	20 歳	第一期春朗期・・・・・・・・・・25 富士塚が建つ・・・・・・・・・・26 勝川春朗を名乗る・・・・・・・・・・26 絵師デビュー・・・・・・・・・・26
安永 9	1780	21 歳	黄表紙挿絵師の始まり・・・・・・・・・・28 廓遊びで幫間と知り合うか・・・・・・・・29
以下安永年間			
天明 2	1782	23 歳	艶本処女作・・・・・・・・・・33 初の美人画か・・・・・・・・・・34
天明 5	1785	26 歳	第二期春朗期・・・・・・・・・・37 勝川派から一旦離れ、群馬亭と称す・・38 貧窮により唐辛子、柱暦を売る・・・・・・・・38 雅号の推移・・・・・・・・・・39 「改」は「改め」改号は30・・・・・・・・39
天明 6	1786	27 歳	北斎結婚する・・・・・・・・・・40 天明年間の北斎自身の黄表紙著作はない？・・41
天明 7	1787	28 歳	第三期春朗期・・・・・・・・・・42 長男誕生・・・・・・・・・・42 絵暦・摺物を描く・・・・・・・・・・43 浮絵を描く・・・・・・・・・・44
以下天明年間			春朗期の最も早い肉筆絵（版下絵）・・・・・・・・46

			印号・辰政と雷震の由来・・・・・・・・・・	47
			春朗期唯一の大型美人画・・・・・・・・・・	49
天明 9/寛政 1	1789	30 歳	長女、阿美与誕生・・・・・・・・・・	58
			戯作の草紙を描く・・・・・・・・・・	58
			日千両・市村座の芝居絵本を描く・・・・・・・・	58
以下、天明末～寛政初期				
寛政 2	1790	31 歳	出版統制令により極印制度が始まる・・・・・・・・	62
			春朗時代唯一の中国歴史画・・・・・・・・・・	70
寛政 3	1791	32 歳	次女誕生・・・・・・・・・・	71
寛政 4	1792	33 歳	北斎の師・勝川春章没・・・・・・・・・・	75
			世界一の画工を志すも春好の悪意のおかげ・・・・・・・・	76
			勝川派に固執せず。狩野融川に入門したか・・・・・・・・	76
			春章による破門はなし・・・・・・・・・・	77
			曲亭馬琴との幻の初提携か・・・・・・・・・・	77
寛政 5	1793	34 歳	第四期春朗期・・・・・・・・・・	80
			長男富之助を中島伊勢の養子に出すか・・・・・・・・	80
			狩野融川の怒りを買う・・・・・・・・・・	80
			叢号を用いる・・・・・・・・・・	82
			落款「春朗」を記した唯一の肉筆画・・・・・・・・	83
			「鍾馗図」が貧窮を救い画業に精進する・・・・・・・・	83
			絵暦以外の最初の摺物・・・・・・・・・・	83
			摺物の名手北斎 生涯に 949 点・・・・・・・・	84
寛政 6	1794	35 歳	この年までを春朗期とする。年末より宗理と号す	85
			写楽登場・・・・・・・・・・	85
			春朗期の作品数と挿絵数・・・・・・・・・・	85
			妻きみ没す・・・・・・・・・・	86
			年末に宗理と号し俵屋一門の頭領となる・・・・・・・・	86
			菱川宗理は門人宗二・・・・・・・・・・	86
			曲亭馬琴との初の共作か・・・・・・・・・・	87
			初の狂歌本を手がける・・・・・・・・・・	87
			役者絵から離れる・・・・・・・・・・	88
			浮世絵一枚十六文～十八文・・・・・・・・・・	89
寛政 7	1795	36 歳	宗理期始まる・・・・・・・・・・	90
			この年より狂歌本に意欲・・・・・・・・・・	90
寛政 8	1796	37 歳	曲亭馬琴の読本第一作・・・・・・・・・・	92
			「こと」と再婚・・・・・・・・・・	92
			住吉広行に土佐派を学ぶ・・・・・・・・・・	92
			摺物にも意欲・・・・・・・・・・	93
			副号としての「北斎」現る・・・・・・・・・・	94
			この年より画風一変、宗理型美人も登場・・・・・・・・	94
			初の誹諧摺物・・・・・・・・・・	97
寛政 9	1797	38 歳	菱川宗理は北斎にあらず・・・・・・・・・・	100
寛政 10	1798	39 歳	娘・阿栄誕生の謎・・・・・・・・・・	107
			カピタンからの注文に北斎の心意気・・・・・・・・	107
			北斎の大和魂・・・・・・・・・・	108
			歌麿、北斎らの所業を非難する・・・・・・・・	109
			宗理号を譲り北斎辰政と号し俵屋から独立・・・・・・・・	110
			北斎流確立 明画の筆法を以て浮世絵をなす・・・・・・・・	110
			黄表紙『化物和本草』で号・可候を用いる・・・・・・・・	113

			黄表紙『化物和本草』号・可候を用いる・・・・	113
			忠臣蔵シリーズの開始・・・・	114
			落款と印の使い分け・・・・	116
			北斎辰政改名通知の亀・・・・	118
			見立てとやつし・・・・	121
寛政 11	1799	40 歳	江戸読本登場・・・・	123
			北斎期・不染居北斎と号す・・・・	124
			三囲神社の箱提灯と扁額を見事に描く・・・・	124
			全図北斎号による最初の狂歌本・・・・	125
寛政 12	1800	41 歳	宗理様式美人の評価・・・・	139
			北斎の最も早い時期の自画像・・・・	140
			画狂人北斎号登場か・・・・	144
以下寛政年間			春朗期の最も早い肉筆画か・・・・	153
			津和野藩伝来摺物・・・・	161
寛政 13/享和 1	1801	42 歳	次男誕生・父没か・・・・	185
			白猿との交流・・・・	185
享和 2	1802	43 歳	全図を描いた唯一の帖装狂歌絵本・・・・	194
享和 3	1803	44 歳	読本初の挿絵・・・・	205
			「亀毛蛇足」印初出か・・・・	206
			寛政 6 年以降久々の役者絵・・・・	212
			東海道シリーズ始まる・・・・	214
			北斎作品の重要文化財指定第 2 号・・・・	220
			絵入読本此人よりひらけたり・・・・	230
			読本と肉筆画に意欲、曲亭馬琴との 読本コンビの始まり・・・・	230
享和 4/文化 1	1804	45 歳	永井荷風の絵解き・・・・	262
以下享和末～文化 前期				
文化 1	1804	45 歳	音羽護国寺で大達磨を描く・・・・	282
			米一粒に雀二羽と、大紙に大馬と布袋の大画を描く	283
文化 2	1805	46 歳	文化 2 年の浮世絵等の価格・・・・	289
			この年のみ画号九九屋を用いる・・・・	292
文化 3	1806	47 歳	合巻時代に入る・・・・	299
			馬琴宅に寄宿中、母の年忌の香典で馬琴と争う・	299
			木更津に逗留・・・・	299
			行元寺の波に感銘を受ける・・・・	300
			人体の骨格を知らざれば真を得ること能わず・	300
			読本に傾注し始め、落款に北斎に葛飾を冠する・	301
			馬琴、北斎の挿絵が気に入らず、二編以降は 高井鴻山の翻訳・・・・	301
			北斎の勧めで執筆・・・・	301
文化 4	1807	48 歳	馬琴に低姿勢・・・・	311
			最後の役者絵か・・・・	313
文化 5	1808	49 歳	長女嫁ぐ・・・・	315
			次女没す?・・・・	315
			亀沢町に新居を構え、書画会を催す・・・・	316
			挿絵で馬琴と争う・・・・	320
文化 6 年	1809	50 歳	柳亭種彦との親交・・・・	322
			北斎の看板絵は中評でも鳥居派に並び描く・	323
			彫刻頗る鮮明なり・・・・	324
文化 7	1810	51 歳	馬琴・北斎、文化七年に団円す・・・・	328

			北斎子へゆきおらんだの十露盤けいこなす・・・・	329
			ドラ孫誕生・・・・	330
			看板絵は苦手・・・・	330
			絵手本の初作。この頃より戴斗号を用いるか・・・・	331
			娘阿栄が初めて挿絵を描く・・・・	332
文化 8	1811	52 歳	戴斗期・・・・	343
			辰政ト云シ頃ノ門人・・・・	343
			北斎と号としてからの門人・・・・	344
			前～は「さきの～」・・・・	349
			戴斗号登場・・・・	349
文化 9	1812	53 歳	絵手本の時代・・・・	351
			長男没し、後妻と別居か・・・・	351
			第一次関西旅行『北斎漫画』の下絵を描く・・・・	351
			名古屋滞在の様子・・・・	351
			谷文晁、北斎の先触れとなる・・・・	352
			またまた馬琴と口論・絶交か・・・・	353
			規矩方円説・・・・	358
文化 10	1813	54 歳	印・亀毛蛇足を譲る・・・・	361
文化 11	1814	55 歳	北斎号を門人に譲り翌年より戴斗号を使用・・・・	360
			尾上梅幸に媚びず・おじぎ無用・みやげ無用・・・・	360
			北斎はとかく人の真似をなす・・・・	361
			この頃の弟子 250 名以上・・・・	361
			『北斎漫画』初篇刊行・・・・	361
			『北斎漫画』一冊 銀二匁八分・・・・	362
			艶本名作『喜能会之故真通』・・・・	366
文化 12	1815	56 歳	馬琴との連携終わる・・・・	369
			北さいも筆自由に候へ共、己が画ニして 作者ニ随ハジ・・・・	370
			主号としての戴斗号現る・・・・	370
			三つ割の法を説く・・・・	372
			北斎翁、割り出しに精しかりし・・・・	373
文化 14	1817	58 歳	阿栄嫁ぐか・・・・	378
			第二次関西旅行・・・・	379
			二度目の大達磨を描く・・・・	379
			屁くさいの芝居がかった借金申し込み状・・・・	380
以下文化年間			文化初期から西洋銅版画に関心を示す・・・・	385
			潮干狩図の謎・・・・	431
			北斎作品の重要文化財指定第 1 号・・・・	431
			為一翁は曲画を善す・・・・	434
			「北斎筆」の落款と印葛飾は二代目北斎か・・・・	461
文化/文政 1	1818	59 歳	彼人ハちとむつかしき仁故、『北越雪譜』の 挿絵ならず・・・・	473
			2.3 月頃、牧墨僊宅から伊勢・紀州・大坂・京都へ 行き江戸に帰る・・・・	473
			翁は葛飾一族の画祖なり・・・・	474
			初の大大判鳥瞰図・・・・	476
			北斎、蕙斎の一覧図を窃かに笑う・・・・	476
文政 2	1819	60 歳	戴斗を北泉に譲り、為一号を翌年から用いる・・・・	477
文政 3	1820	61 歳	為一前期・・・・	483
			この頃より為一号を用いる・・・・	483
			阿栄、夫の絵を笑い離縁・・・・	483

文政 4	1821	62 歳	阿栄、応為（オーイ）と号し、美人画に長ず・・・484 四女阿猶没か・・・489 北斎の挿絵一枚金一分二朱・・・489 連想遊びの狂歌本・月癡老人為一号を用いる・・・490 落款に年齢を記す・・・496
文政 5	1822	63 歳	長女阿美与、離婚して孫と同居する・・・498
文政 6	1823	64 歳	川柳デビュー 俳号卍を用いる・・・506 北斎の川柳・・・507
文政 8	1825	66 歳	長女阿美与没・・・513 『誹風柳多留』に序文を書く・・・518
文政 9	1826	67 歳	北斎工房の絵、大量に海外へ・・・521 シーボルトが持ち帰ったとされる 15 図・・・521 文政 9 年頃、フランス国立図書館蔵の北斎に 関わる作品 25 図・・・524 更に「江戸の風景」6 図発見・・・529 大英博物館所蔵の素描・・・531
文政 10	1827	68 歳	卒中を患うも自家薬で回復する・・・534
文政 11	1828	69 歳	シーボルト事件勃発・・・536 妻こと没す・・・539 ドラ孫を永寿堂に奉公に出す・・・539 「水滸伝」は北斎の画で売れる・・・539 挿絵はさすがに北斎なれば評判よろしく・・・539
文政 12	1829	70 歳	ペロリン藍が輸入され使用される・・・542 またまた馬琴の批判・・・542 新発見の下絵集・・・545 為斎の作画か・・・546
以下 文政年間 以下 文政後期～ 天保前期			酒を嗜まず、茶を好まず、絵に似たる画を書くす。 真をはなれて真を写す・・・553
文政/天保 1	1830	71 歳	為一後期 錦絵の時代・・・558 どら孫の尻拭いと窮乏生活・・・559 北溪の絵手本を北斎名で出版・・・560 文政 4 年に続き落款に年齢を記す・・・560
天保 2	1831	72 歳	この年の信州小布施・高井鴻山宅に寄宿するは疑問 562 真実の虚構か、虚構の真実か『富嶽三十六景』・・・565 表富士 36 図・・・565 追加された 10 図（裏富士）・・・580 落款の謎・・・583 「極」印・「改」印の謎・・・585 永寿堂の広告・富士の形、異なる事を示す・・・585 富士講・講元の永寿堂の策略・・・585 富士の頂角、広重は 85 度、北斎は 30 度くらい・・・585 ペロ藍の発見・・・586 ペロ藍とは・・・586 ペロ藍の絵で流行おびただしく・・・586 あれこれ印の使い分け・・・587
天保 3	1832	73 歳	長女阿美与の元夫 柳川重信没す・・・591 鶏の足跡が竜田川の紅葉に・・・592 立田川の紅葉絵は失敗だったか・・・592

天保 4	1833	74 歳	<p>広重 保栄堂版東海道五十三次刊行・・・・・・・・・・ 596</p> <p>歌川広重、北斎と会った？・・・・・・・・・・ 597</p> <p>『北斎漫画』パリに到着・・・・・・・・・・ 597</p> <p>この頃の北斎の評判・・・・・・・・・・ 598</p> <p>総て総身に画法充滿したる人・・・・・・・・・・ 599</p> <p>余の美人画は、阿栄におよばざるなり・・・・・・・・ 599</p> <p>阿栄の絵、気韻生動、筆力非凡なり・・・・・・・・ 600</p> <p>年齢入り落款を以後継続して記す・・・・・・・・ 611</p>
天保 5	1834	75 歳	<p>画狂老人卅期 80代から肉筆画に傾注・・・・・・・・ 614</p> <p>愚老も久々疝痛にて、未歩行不相成候・・・・・・・・ 614</p> <p>卅に改め、北斎なることを知らず・・・・・・・・ 615</p> <p>どら孫を自立させるも、依然物入りの生活・・・・・・・・ 615</p> <p>イメージとアイデアが縦横に広がる富嶽百景・・・・ 625</p> <p>色をすて、墨色の濃淡で大地の空気が動く・・・・ 626</p> <p>真面目の画訣この譜に尽せり・・・・・・・・・・ 626</p> <p>己六歳より物の形状を写の癖ありて・・・・・・・・ 626</p> <p>初めて川柳の号である「卅」の落款を用いる・・・・ 627</p> <p>歌川広重、北斎の富士を評価する・・・・・・・・ 632</p>
天保 6	1835	76 歳	<p>浦賀に塾居・・・・・・・・・・ 633</p> <p>『唐詩選』の画料の残額を請求・・・・・・・・・・ 633</p> <p>旅先の旅住之場所は、したゝめ不申候・・・・・・・・ 634</p> <p>百歳の頃は、画工の数にも入るつもり・・・・・・・・ 635</p> <p>投米会で糊口を凌ぐ・・・・・・・・・・ 635</p> <p>『武者絵』の画料、金一両と銀四十二匁を受け取る 636</p> <p>天保飢饉を肉筆画帖等で乗り切る・・・・・・・・・・ 637</p> <p>富嶽百景三編以後、肉筆画に傾注・・・・・・・・・・ 644</p> <p>表題の表記の異同『百人一首うはがゑとき』・・・・ 650</p> <p>大正 10 年、版下絵からの錦絵刻版・・・・・・・・ 655</p> <p>『百人一首うはがゑとき』の版下絵・・・・・・・・ 663</p>
天保 7	1836	77 歳	<p>秋頃まで浦賀に逗留・・・・・・・・・・ 663</p> <p>歌川風の鼻、どうぞ此のやうにならぬやうに・・・・ 663</p> <p>北斎の晩年の支援者・高井鴻山と出合う・・・・・・・・ 664</p> <p>北斎の細密画批判に反論、不学者の論一笑に 備ふのみ・・・・・・・・・・ 665</p> <p>酔中筆の拙き画・・・・・・・・・・ 667</p>
天保 8 年	1837	78 歳	<p>林町から本郷に住むか、放蕩孫没か・・・・・・・・ 669</p> <p>天保 8・9 年は作画減少・・・・・・・・・・ 669</p>
天保 9	1838	79 歳	<p>天保 9 年の浮世絵等の価格・・・・・・・・・・ 670</p>
天保 10	1839	80 歳	<p>この頃、家には飯器なし。土瓶、茶碗二、三個あるの み・・・・・・・・・・ 671</p> <p>初めて火災に遭う。此の頃の貧苦は、殊に甚しかりし 672</p> <p>車一台分の縮写（スケッチ）の図を消失・・・・・・・・ 672</p> <p>生涯の肉筆画 1326 点、80 歳以降 134 点・・・・・・・・ 672</p> <p>北斎の孫、多知女に結婚祝いの「鯉図」を贈る・・・・ 673</p> <p>西瓜図の謎・皇室との関わりは？・・・・・・・・ 673</p> <p>曲亭馬琴、失明するも『八犬伝』執筆に意欲・・・・ 678</p>
天保 11	1840	81 歳	<p>最後の一枚鳥瞰図・・・・・・・・・・ 678</p>
天保 12	1841	82 歳	<p>阿栄、其の品行は頗る正し、常に翁の傍にありて、 孝養怠りなし・・・・・・・・・・ 682</p>

			『新編柳樽』に序文を書く・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 682
天保 13	1842	83 歳	柳亭種彦、取り調べで北斎の所業を口にせず・・・・・・・・ 684
			七代目市川団十郎、江戸拾里四方処払・・・・・・・・・・ 685
			一両が 6 貫 5000 文となる・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 685
			榎馬場の仮住まいの様子・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 686
			その部屋、物置と掃溜と、一樣なるが如し・・・・・・・・ 686
			礼儀礼讓をなすことを好まず・・・・・・・・・・・・・・・・ 687
			猫一疋も描くこと能わず、己及ばずとて自棄てん
			とする時は、即これ其の道の上達する時なり・・・・・・・・ 687
			読本挿絵の評判遠のくも、絵に於ては天下一品・・・・ 687
			小布施に行く 八の字のふんばり強し夏の富士・・・・ 687
			小布施訪問はいつか・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 688
			小布施訪問の目的は・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 688
			高井鴻山の北斎の印象・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 688
			小布施までの道のり・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 689
			北斎の自画像・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 689
			北斎自画像とアゴの四角ナ女・・・・・・・・・・・・・・・・ 690
			北斎作品の重要文化財第 3 号・孫なる悪魔を
			払う「日新除魔」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 694
天保 14	1843	84 歳	文化庁の「国指定文化財等データベース」の記事・ 694
			浮世絵一枚 20～30 文・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 697
			転居 60 回・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 697
			阿栄の「関羽図」松代にあり・・・・・・・・・・・・・・・・ 697
			小布施での除魔図作画の様子・・・・・・・・・・・・・・・・ 700
以下天保年間			
天保/弘化 1	1844	85 歳	長寿番付に入る・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 714
			二度目の小布施行きにお栄を伴ったか・・・・・・・・・・ 714
			自らの誕生の年月日を示す・・・・・・・・・・・・・・・・ 714
弘化 2	1845	86 歳	阿栄を伴い三度目の小布施行きか・・・・・・・・・・ 720
			小布施行きの謎・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 721
			牛嶋神社の額絵復活・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 722
			牛嶋神社にあったもう一つの額絵・・・・・・・・・・ 723
			鬼ヶ島図のスケッチ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 731
弘化 3	1846	87 歳	大坂の偽北斎・百歳の余までハ、死亡之沙汰ハ、
			まづ休みに仕候・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 726
			犬北斎はあっても、北斎名に二代目なし・・・・・・・・ 727
			紺縞の木綿を着、六尺の天秤棒の杖と草履履き・・・・ 727
			画風公聴に達す・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 728
			めがねをかけず、背も曲がらず、健脚の達者・・・・ 728
			雨でも草履、法華経を唱え歩き、雑談を厭う・・・・ 728
			病気再発する・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 728
			最後の読本挿絵・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 729
弘化 4	1847	88 歳	松代藩士宮本慎助に「日新除魔」の絵を渡す・・・・ 731
			この年応為は 50 余歳か・・・・・・・・・・・・・・・・ 732
			長寿の葉・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 732
			この頃から「百」に執着・・・・・・・・・・・・・・・・ 732
			蚊帳を売って観劇する・・・・・・・・・・・・・・・・ 732
			この年、広重と接触したか・・・・・・・・・・・・・・・・ 733
			鳳凰図天井絵下絵・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 733

			鳳凰状・・・・・・・・・・・・・・・・・・	734
			中島鉄蔵藤原為一の落款・・・・・・・・	738
以下弘化年間	1848	89 歳	馬琴没す・・・・・・・・・・・・・・・・	741
弘化 5/嘉永 1			長寿会では自分が一番壮健・・・・・・・・	742
			北斎デザインの立体造形物・・・・・・・・	742
			四度目の小布施行き・・・・・・・・	742
			北斎の画は「画」というしかない・・・・・・・・	743
			北斎、終焉の地に移る・・・・・・・・	743
			本間北曜、晩年の北斎の弟子になる・・・・・・・・	743
			93 回の転居をする・・・・・・・・	744
			転居三百、百庵にならひ・・・・・・・・	744
			身体は壮健、歩行は自由・・・・・・・・	744
			金銭を得るも、消費すること土茶のごとし。	
			常に赤貧・・・・・・・・・・・・・・・・	745
			画法・画論を展開する『画本彩色通』・・・・・・・・	745
			油絵具の調法を示す・・・・・・・・	746
			己六歳より八十八年独立して、心に怠らざりし事	746
			陰影法について・・・・・・・・	746
			九十歳よりハまた々画風を改め、百才の後に	
			いたりてハ此道を改革せん・・・・・・・・	746
			制作年の分かる最後の摺物・錦絵・・・・・・・・	748
			小布施にある北斎画・・・・・・・・	751
嘉永 2	1849	90 歳	画工北斎 此せつ大病のよし・・・・・・・・	752
			北斎逝く・・・・・・・・・・・・・・・・	752
			天我をして五年の命を保たしめば、真正の	
			画工となるを得べし・・・・・・・・	753
			親族等の会葬無くも多くの参列者あり・・・・・・・・	753
			『北斎漫画』十三編の刊行年はいつ？・・・・・・・・	754
			『北斎漫画』まねもならざる画風の筆癖・・・・・・・・	755
			翁の遺墨若干葉を画本中に補い入れて十五編とする	756
			北斎最後の傑作・・・・・・・・	758
以下、江戸時代（年代不詳）			・・・・・・・・・・・・・・・・	759
北斎没後			・・・・・・・・・・・・・・・・	761
嘉永 6 (1853)			応為の菊図。鴻山の菊図の謎・・・・・・・・	761
【付録】			春峯庵事件・・・・・・・・	768
【付録】			参考資料：阿栄（応為）・・・・・・・・	769
【付録】			葛飾北斎末裔・・・・・・・・	775
【付録】			判型・・・・・・・・	777
【付録】			北斎作品を所蔵する美術館等・・・・・・・・	778

宝暦10 (1760) 庚辰 1歳 時太郎

◇2月6日、宝暦の大火。神田旅籠町明石屋卯兵衛より出火。市村座〈境町。現東京都中央区日本橋芳町二丁目と人形町三丁目辺〉と中村座〈葺屋町。現東京都中央区人形町三丁目辺り〉が焼失。中村座は3月に新築、再開する（小池章太郎『考証江戸歌舞伎』三樹書房より）。

◇宝暦期に江戸に居酒屋が多く出来始める（飯野亮一『居酒屋の誕生 江戸の呑みだおれ文化』ちくま学芸文庫より）。

◇長崎オランダ商館の江戸参府（寛政元年：1789まで毎年参府する）。

◇徳川家治、10代将軍となる。

【誕生の謎】

★9月23日、葛飾郡本所南割下水に生まれたとされる（飯島虚心『葛飾北斎伝』鈴木重三校注 岩波文庫版 p31 以下、『葛飾北斎伝』と表記）。

※南割下水は、現江戸東京博物館前から墨田区錦糸4丁目10番付近までの下水で、現在は暗渠となり「北斎通り」と呼ばれる。この辺りの本所亀沢二丁目辺が誕生地と推測される（現東京都墨田区亀沢2-15-10辺）が、確証はない。

【南割下水 明治41年頃 / 「墨田の今昔—写真カタログ—」資料提供：墨田区立緑図書館】1・2

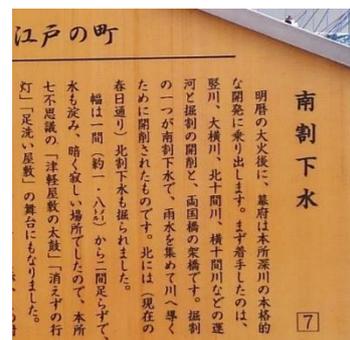


★本所の渡し場を豎川といい、この豎川より北に北割下水（現春日通り）、その南に南割下水があった。この辺り一帯は葛飾と呼ばれていた。両割下水とも幅九尺（約272.7cm）で主に排水用であったらしい（墨田区の説明では、1間〈1.8m〉から2間としている）。

3 墨田区緑町公園の案内板

当時、長屋の裏店は二軒が向かい合って建ち、1m程度の路地の真ん中に下水が流れているのが一般的だが、南割下水はそれより少し広い堀川のようなようであり（明治期の写真による）、昭和初期に埋めたてられた。

北斎がどのような家に住んでいたかは不明だが、おそらく幼少期は長屋であったと思われる。当時、長屋の家賃は安く、職人なら三日程度で稼げる額であった（『江戸から東京へ』



東京都教育委員会編、平成 23 年：2011 年度版）。

棟割長屋の内、一般的な九尺二間の裏長屋注1は月 500 文（約 12,500 円）、戸無し長屋注2や老朽化した長屋、なめくじ長屋注3等は月 300 文（約 7,500 円注4）。土方の日当は 300 文（約 7,500 円）なので、2 日働けば一般的な長屋の家賃が払えた。ちなみに、平均月 15 日の労働だったらしい（『大江戸万華鏡』ひとつくり風土記¹³ ¹⁴ 農文協）。

注 1) 裏長屋：表通りの裏に造られていたので、こう呼ばれた。間口九尺（約 2.7m）二間（奥行約 3.6m）。四畳半一間、台所と玄関を兼ねる土間。隅に枕屏風。奥が取り外しのできる雨戸つき。

注 2) 戸無し長屋：開く所は入り口のみで部屋の三方は壁で仕切られている。

注 3) なめくじ長屋：現東京都墨田区業平1-7-2 の小梅銭座跡辺にあった最下等の長屋。水はけが悪く、風通しも悪いので、ナメクジが大量に発生するといわれた長屋。

【当時の銭相場】

注 4) 1 文=25 円で換算した。本来米相場で換算するのが一般的だが、本稿では蕎麦一杯 16 文（現在注のかけ蕎麦：400 円程度）の庶民相場を現在（2018 年現在）の相場に当てはめた。因みに一両は江戸中期の平均 5000 文（5 貫文）なので約 125,000 円であった。いうまでもなく同じ江戸期でも時代によって貨幣価値は異なる。天明期には一両は 6000 文（6 貫=約 150,000 円）となり、江戸後期の天保 13 年（1842）には銭相場公定で、一両 6500 文（6 貫 500 文=約 162,500 円）と定められた。

注) 現在とは、本稿初期執筆頃の 2010 年代を指す。

【北斎の父母の謎】

★北斎の肉筆画「大黒天図」（天保15/弘化元年：1844。現在所在不明。弘化元年条参照）の落款に「天保十五年甲辰子ノ月甲子ノ朔日子ノ刻 宝曆十庚辰年九月甲子ノ出生」（旧曆 1760 年 9 月 23 日。西曆 1760 年 10 月 31 日出生）とある。また『浮世絵類考 補記』（式亭三馬著）には「本所ノ産」とある。⇒天保 15 年（1844）「大黒天図」参照。

★北斎の父については、北斎の墓の傍らに刻された「川村市良衛門」（石工・仏師。号：仏清）を指して「蓋し市良衛門」は、北斎の父の俗名にして」とある。（『葛飾北斎伝』p 178）。但し、川村家は後妻のこと女の実家であり、川村市良衛門が北斎の父ではないとする説もあり。

【北斎の父は中島伊勢、母は小林平八郎の孫娘か】

★一方で、同『葛飾北斎伝』では「父は、徳川家用達の鏡師にして、中島伊勢といひ、母は、吉良上野介の臣、小林平八郎の孫女なり」（p 31 ルビは筆者、以下同じ）とも述べている。「北斎常に我母は小林平八郎の孫女なりと語りたるよし」（p 32）とも伝える。

★『浮世画人伝』（関根黙庵著・明治 32 年（1899）刊。p 108）による出生記事では「父は中嶋注伊勢とて、幕府用達鏡師なりき。母は吉良上野介義央（「よしなお」とも）の家臣小林平八郎とて、武芸絶倫の聞えありしが、孫女とかや。平八郎は、元禄十五年、赤穂の義士復讐の夜に、防戦して斃れしが、この時八歳なる女子一人あり、吉良家滅亡の後、

親戚に寄りて成長し、他家に嫁して女子を産めり。此の女子中嶋伊勢の妻となりて、宝暦九卯年正月三日、本所割下水の家に北斎を生みたり」（筆者注「宝暦九卯正月三日」は誤り）とある。

注）「中島」は「中嶋」とも表記されるが、本稿では、多くの論考が使用している「中島」と表記する。

※上記記事から、小林平八郎の孫娘は四代目中島伊勢（32歳）の妾で、伊勢は翌年の宝暦11年（1761）に本所松坂町（現東京都墨田区両国3丁目）へ移るまで、神田乗物町の自宅から割下水の妾宅へ通い、ここで北斎は誕生したとする説もある。

★安田剛蔵『画狂北斎』（昭和46 有光書房）では、曲亭馬琴が文化5年（1808）5月23日の北斎の手紙注の余白に朱記した「叔父御鏡師中嶋伊勢が養子になりしか」の文の「叔父」に注目して、次のような考えを示している。

「しかし、筆者が推定するように川村氏某女が中島伊勢の二号となって北斎を生んだのが事実とすれば」（p34）という前提で、「北斎の父である伊勢は実子がなくて、或はあっても夭折して家督相続人がなかつたため実弟が直つて当主の伊勢を継いだのであろう。ところが当主の伊勢がまた同じような事情に立ち至つたので、相続人を選ぶに当り血脈の絶えることを憂えて兄の妾腹の子である北斎に白羽の矢を立てたのであると考えられる」（p37）としている。すなわち、川村家の娘が中島伊勢の妾となり北斎を生み、伊勢の弟が養子にしたとする。

※同書では「当の北斎は曾て川村氏を称したことはなく、生涯中島氏を称していたことは厳然たる事実である」の述べている（p33）。

注）北斎の手紙：自分宛の書簡を曲亭馬琴は丁寧に保管していたが、それを川瀬一馬が昭和18年（1943）に『曲亭来簡集』としてまとめた。その中に「朱記」で、「（略）壮年その叔父御鏡師中嶋伊勢が養子になりしが、鏡造りのわざををせず、その子をもつて職を嗣がせしが、そは先だちて身まかれり」と記されている。

【北斎の兄妹】

★誓教寺の北斎の墓の側にある川村市良衛門の墓の右側には、北斎誕生前に早逝した兄（微陽童子。宝暦九己卯年〈1759〉三月二十四日に没）と兄（微緑童子。宝暦三癸酉〈1753〉四月朔日没）、および妹（春巖童女。明和三丙戌〈1766〉二月二十二日没）が記されている。

「蓋し市良衛門は、北斎の父の俗名注にして、此の童子童女は、皆其の子なるべし。されば微陽童子、微緑童子は、北斎の兄にして、春巖童女は、妹なるべし」（『葛飾北斎伝』p178）。

※童子童女名のふりがなは本稿筆者（以下「筆者」とする）による仮の読みかたである。

注）北斎の父の俗名として：市郎衛門は「仏清」とも称したとされる。北斎は初め仏清の墓に埋葬され、後に北斎の孫である白井多知女、あるいは多知女の子の加瀬昶次郎により建てられた墓に移されている。現存するこの墓の基石には「川村氏」と刻まれている。

【北斎の実父は川村家の長男か】

瀬木慎一『狂人北斎』（講談社現代新書）では、北斎の父は川村家の長男であるとする。川村家の二男が鏡師の中島家に養子に入り伊勢と称したが、子がなかったため北斎が中島伊勢の養子に入ったとしている。

宝暦11(1761) 辛巳 2歳 時太郎 (8歳までの幼名)

◇山東京伝生 (～1816)。

◇葺屋町(現東京都日本橋人形町三丁目辺り)の操り人形の結城座より出火。同所にあった市村座も昨年に続き類焼した(小池章太郎『考証江戸歌舞伎』より)。

宝暦12(1762) 壬午 3歳 時太郎

◇相撲興行(3月、深川八幡境内：現東京都江東区富岡1-2)。

※以下、相撲興行の記録は「資料館ノート 第106号」(江東区深川江戸資料館 平成26年11月16日発行)及びWikipedia「本場所の一覧」による江戸相撲に限る。

宝暦13(1763) 癸未 4歳 時太郎

◇相撲興行(4月、神田明神 10月、浅草八幡宮)

◇5月5日、小林一茶生 (～1828)。

◇平賀源内、『物類品隲』(2巻)で、ペルシャン・ブルー注を初めて紹介する。この色は、後に北斎や他の画工が好んで使用するようになる。

「ベレイン ブラーウ 紅毛人持来ル。扁青(注：青い水晶状の結晶)ニ似テ(略)扁青ニ比スレバ色深クシテ甚 鮮ナリ(略)」(早稲田大学デジタル版による)

注)ペルシャンブルー：1704年、ドイツ・ベルリンにおいて、ディースバッハによって発見された。一般に、ベルリン・ブルー、あるいはペロ藍と呼ばれる。天保2年の項参照。

【鏡師の養子の謎】

★中島伊勢(幕府御用鏡師)の養子となる。伊勢は北斎の叔父という(『江戸の奇才 北斎展 葛飾北斎とその弟子たち』島根県立石見美術館 2005年 所収の永田生慈の記述を『永田生慈 北斎コレクション100選』P5(島根県立美術館 2019年)で紹介)。

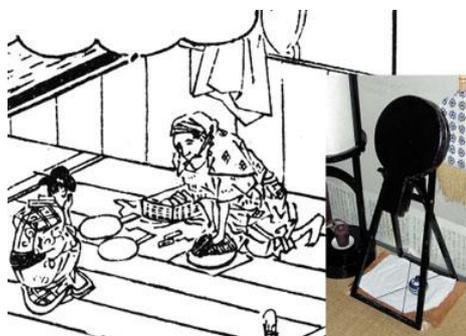
※中島伊勢は幕府御用達で、それなりの地位と名誉があったと思われる。お目見格として登城も赦される身分で、吉良家取り潰し後に、その西北一帯を御鏡の工房として拝領を許可され、本所松坂町に移転したとされる。

※宝暦10年版『宝暦武鑑』に〈御鏡師かんたのり物丁 中嶋伊勢〉とあり、宝暦12年版『宝暦武鑑』に〈御鏡師 本所松坂壺丁目中嶋伊勢〉とあるので、中島伊勢は宝暦12年には本所松坂町の元吉良屋敷の一面に移っている(現東京都墨田区両国3-7-5 松坂町公

園辺)。

※鏡は銅と錫の合金で形を造り、表面の鑄造面を磨き、水銀と明礬・砥粉を混ぜたものを塗り、磨いて鏡としたもので、変色したり曇ったりするため常に磨く必要があった。鏡師は鏡面を磨くのを主な仕事とした。

4 鏡師の仕事場と鏡 (WEB「江戸散策」17 回より (深川江戸資料館))



★8 歳までは時太郎と名乗ったか。

【養子に入ったのは 20 歳頃?】

★『きよくていらいかんしゅう曲亭来簡集』 (月之巻画工之部) 別添朱記 (宝暦 10 年 (1760) 条参照) に「壮年その叔父御

用鏡師中嶋注伊勢が養子になりしか鏡造りのわざをせず。その子をもつて職を嗣かせしか、そハ先たちて身まかれり」 (筆者注: 「その子」は北斎の長男・富之助を指す) とある (「国立国会図書館デジタルコレクション」より)。

注) 中嶋: 表記は「中嶋」「中島」とされることが多いが、本稿では「中島」と表記する。

※通説では、15・6 歳頃には中島家を出る。北斎は結婚後、長男富之助を中島家に入れ、その職を継がせたというのである。

※田崎暘之助『浮世絵の謎』では以下の説を展開している。

『きよくていらいかんしゅう曲亭来簡集』 (月之巻画工之部) 別添朱記の「壮年その叔父」部分に着目し、当時の壮年は馬琴が好んで用いる言葉で、15 歳から 20 歳くらいを「弱壯」と呼んでいることから「壮年」は 20 歳から 30 歳前後を指すとして、「北斎が中島家へ養子に入ったのは通説の五・六歳ではなく、二十歳から三十歳前後だったことになる」 (p148) としている。

この説によれば、北斎は養子のまま、19 歳で勝川春章かつかわしゅんしょうに入門したことになる。あるいは、4・5 歳で養子になり、数年で中島家を出、やがて 20 歳頃に再び中島家に入ったが、それは形だけの養子で、後に結婚後に長子富之助とみのすけを代わりに養子に入れ、自らは絵師の道に進んだことかもしれない。

また、伊勢を叔父とするところから、北斎の父は川村家の長男で、川村家の二男が中島家の養子になったが子がなかったので、北斎が叔父の養子に入ったとする説がある (瀬木慎一『画狂人北斎』講談社現代新書 p23)。⇒宝暦 11 年【北斎の実父は川村家の長男か】参照

ほうれき 宝暦14/明和1 (6/1~) (1764) きのえさる 甲申 5 歳 ときたろう 時太郎

◇4 月 19 日、江戸深川三十三間堂注の通し矢あり。12 歳の久保田源太くぼたげんたが雷雨の中、4 月 18 日の酉の刻 (午後 6 時) から 4 月 19 日の未の刻 (午後 2 時) までに 14,320 射中 11,638 本を通す。但し、正規の 120m の半分の 60m の距離であった (墨田区「下町文化」264 号)。

注) 深川三十三間堂: 深川 (富岡) 八幡宮 (現東京都江東区富岡 1-20-3) の東側にあつ

た。

◇相撲興行（3月、浅草八幡宮、10月、深川八幡境内）。

◇琉球使節来朝（将軍家治即位の慶賀使）。

明和2(1765) 乙酉 6歳 時太郎

◇相撲興行（10月、深川八幡境内）。

◇十返舎一九生（～1831）。

◇この頃、伊藤若冲が「動食綵絵」（群魚図）でベロ藍を最も早く使用したとされる。

【絵暦（大小）・錦絵誕生】

◇鈴木春信（1725?～1770）が絵暦注を描き、この年から翌年に掛けて新年挨拶として俳諧趣味人の間で絵暦のデザイン（大小絵）を競う交換会が流行し、春信の「清水の舞台より飛ぶ美人」（明和2年）などが錦絵誕生の礎となった。

注）絵暦：その年の大小月を判じ模様のように絵の中に書き入れたもの。裕福な粋人がアイデアを出し浮世絵師が作るようになった。

5 鈴木春信：清水の舞台より飛ぶ美人（絵暦：足立区立綾瀬美術館 ANNEX）



【六歳より物の形を写す】

★この頃より好んで物の形を写す。天保5年（1834）刊『富嶽百景』初編の跋文（後書き）に「己六歳より物の形状を写すの癖ありて」（私は6歳から物の形を画き写す習性があった）とある。

【百歳の後に至りては、此道を改革せんことをのみ願ふ】

★弘化5年（2/28 改元：嘉永元年：1848）刊の絵手本『画本彩色通』初版の自序にも同様の記述あり。「己六歳より八十八年、独立して心に怠らざりし事を、いかでか、今方寸の昏中に演尽すことを得べき。（略）」

同書跋文には「（略）九十歳よりは又々画風をあらため、百歳の後に至りては、此道を改革せんことをのみ願ふ。長寿君子のわが言のたがはざるを知り給ふべし」とある（『葛飾北斎伝』p266～288）。

〈6歳から88年間、自分なりに怠らずに絵を描いてきたが、どうやって四角い紙に描き尽くすことができるのだろうか（序文）。90歳からはいっそう画風を改め工夫して、100歳以降は絵の道を更に突きつめ改革することを願っている。どうぞ長寿の方々よ、私の言うことに嘘はないと御承知ください（跋文）〉（以上、筆者による意識）。

明和3(1766) 丙戌 7歳 時太郎

◇相撲興行（10月、深川八幡境内）。

【妹没】

★妹没（春巖童女。名は「春」か。年齢不詳）。北斎の墓所・誓教寺（浄土宗：東京都

台東区元浅草4-6-9)の過去帳には春巖童女について「施主 川村市郎右衛門」の名があるという。

※『葛飾北斎伝』(p176)によれば「按ずるに、画狂老人の墓の傍に、古き碑石あり。正面に、春巖童女、明和三丙戌年二月二十二日」とある。

6 北斎墓の左にある春巖童女たちの古い碑石：現在は無い

(<https://okab.exblog.jp> より転載)



明和4 (1767) 丁亥 8歳 時太郎

◇相撲興行 (3月、深川八幡境内、10月、深川八幡境内)。

【生涯関わる曲亭馬琴誕生】

◇曲亭馬琴、6月9日、深川(現東京都江東区平野1-7-8付近の松平家邸内)で生まれる。父は旗本松平信成の用人滝沢興義(下級武士)、五十石取り。母は細川家の家士吉尾門左衛門の女もん。名は興国。字は、瑣吉。通称、清右衛門。別号：著作堂主人、蓑笠漁隠、愚山人など。更に解と改名(～1848)。北斎と馬琴は良くも悪くも生涯関わりを持つことになる。

○10月、役者評判記『明和伎鑑』(淡海三磨(栗本兵庫)著。勝川春章画。伏見屋清兵衛版か)が「河原乞食の事を天下鎮撫の武家に擬して述作するなどは、公儀を畏れない不届至極の者なり」(大田蜀山人『半日閑話』明和六年条)として作者淡海三磨は遠島・流罪となる。挿絵の勝川春章は咎めなし(宮武骸骨『筆禍史』より)。

○大田南畝(四方赤良 1749～1823)、19歳で狂詩狂文集『寝惚先生文集』を刊行。

○河村岷雪(生没年不詳)、『百富士』(早稲田大学図書館蔵)。後年の北斎の『富嶽三十六景』『富嶽百景』に影響したとされる。

明和5(1768) 戊子 9歳 中島鉄蔵

◇1月13日、本所出火により江戸大火。

◇12月4日、麴町出火により江戸大火。

◇12月11日、白隠禅師没(84)。

◇相撲興行(9月、本所回向院境内、11月、市ヶ谷八幡宮)。

【美人で評判の笠森お仙たちのプロマイド】

◇江戸谷中の笠森稻荷(福泉院にあった稻荷神社。その跡に功德林寺が建立れる。現東京都台東区谷中7-6-9)参道にあった鍵屋という水茶屋の女お仙(笠森お仙)は、美人と評判で、一筆斎文調(「笠森お仙茶屋図」出光美術館蔵)や鈴木春信(「お仙の茶屋」「お仙と菊之丞とお藤」東京国立博物館蔵。「お仙茶屋」立命館大学図書館蔵)らが多く描いた。

大円寺（ここにも谷中のもう一つの稲荷神社があった。東京都台東区谷中 3-1-2）に、大正8年に永井荷風により建てられたお仙の碑がある。大円寺に碑があるのは、永井荷風が福泉院と混同したためといわれる。お仙の墓は正見寺（東京都中野区上高田1-1-10）にある。

同様に、浅草奥山（浅草寺裏一帯で見世物小屋が多くあった）の銀杏下の楊枝店・柳屋おふじ（銀杏おふじ）、浅草二十軒店（浅草寺仲見世）の大和茶屋・鳶屋お芳も美人で、明和の三美人といわれた。いずれの美人も浮世絵美人画としてブロマイドのように売り出されたと思われる。

○上田秋成、『雨月物語』成稿。

【中島鉄蔵を名乗る】

★中島家の養子としてこの頃に鉄蔵を名乗ったか。

※リチャード・レイン『伝記画集 北斎』（p7）では明和9年（1772）頃より鉄蔵を名乗ったとする。

明和6（1769）己丑 10歳 中島鉄蔵

◇相撲興業（4月、深川八幡宮、10月、深川八幡宮）。

◇6月15日、山東京伝（浮世絵師名：北尾政演）生（～1816）。

◇10月12日、青木昆陽没（72）。

◇10月30日、賀茂真淵没（63）。

◇唐衣橋州（1743～1802）、四方赤良（大田南畝〈蜀山人〉1749～1823）らと四谷の座敷で初の狂歌会を開き、後の狂歌盛行の基をなす。

◇ツンベルグ注、江戸で浮世絵を買う（その内、鈴木春信の2図がスウェーデンに現存しているという（『在外日本の至宝』7巻「浮世絵」所収の檜崎宗重「末期浮世絵史潮」p121）。

注）この記事にあるツンベルグが、安永4年（1775）8月13日に来日し、翌安永5年（1776）11月23日まで滞在した植物学者カール・ペーター・ツンベルグ（Carl Peter Thunberg 1743～1828 ツェンペリーとも）と同一人物かは不明。年代が合わない。

明和7（1770）庚寅 11歳 中島鉄蔵

◇この頃、江戸で釣りが流行。類似本に続き、この年、釣りの指南本『漁人道志るべ』（玄嶺老人著）が刊行される。佃島、鉄砲洲、洲崎、中川、品川の釣り場、他に隅田川百本杭（両国橋北側に水流を和らげるために百本の杭を水中に打った場所。現東京都墨田区両国1丁目～横網2丁目の隅田川沿い）辺の鯉釣り、春の彼岸頃の鮒釣り、八十八夜過ぎの中川の鱈釣りなどを紹介している（林綾野・美術出版社『浮世絵に見る江戸の一日』などによる）。天明期には釣りの隆盛につれ、釣り具も豪華となったという。

◇6月15日、鈴木春信没（46）。

◇鳥居清長（1752～1815）、細版注役者絵を始める。細判は明和から寛政期の役者絵に多く用いられた。

注）細判：小奉書（33.3 cm×47.0 cm）を横にして縦に三つ切りにしたサイズ（約 33.3 cm×15.6 cm）。

◇相撲興行（3月、芝西久保八幡宮、11月、市ヶ谷左内坂長龍寺）

【役者似顔絵確立】

○一筆斎文調（1725?～1794?）と勝川春章（1743～1792）合作の役者似顔絵「繪本舞台扇」（雁金屋伊兵衛版。大英博物館蔵）により役者似顔絵を確立。扇型の枠の中に半身像を描き、枠外に役者名と、演じる俳名を描くという写実表現が誕生した。好評によりすぐ同年に改編・再摺版が出た。

明和8（1771）辛卯 12歳 中島鉄蔵

◇2月25日、日本橋村松町よりの出火で江戸大火。

◇相撲興行（3月、深川御船蔵八幡境内〈現東京都江東区新大橋2丁目〉、10月、深川八幡宮境内）。

◇3月4日、杉田玄白・前野良沢・中川淳庵ら、ドイツ解剖学者クルムス（Kulmus, Johann Adam 1689～1745）の『解剖図譜』（Anatomische）のオランダ語訳『ターヘルアナトミア』（原題：Anatomische Tabellen）を見ながら、小塚原刑場（現東京都荒川区南千住2-34-5 延命寺辺）での腑分け（人体解剖）を実見する。安永3年（1774）に、この3人により『解体新書』として翻訳される。

◇6月4日、歌人・国学者：田安宗武没（57）。

◇百姓一揆・村方騒動（農民が村役人等の不正を暴いて領主に訴えることをいう）・都市騒擾等が全国で増加（東京都教育委員会『江戸から東京へ』平成23年度版所収、青木虹二『百姓一揆総合年表』より）。

◇江戸深川洲崎弁天前（現東京都江東区木場6-13-13）に懷石料理店「升屋」（望汰欄）が開業。

◇この頃より、役者絵は一筆斎文調の人気から勝川春章の人気に移る。

明和9/安永1（1772）（11/16～）壬辰 13歳 中島鉄蔵

◇1月、田沼意次、老中に登用さる。

◇2月29日、目黒の大円寺（現東京都目黒区下目黒1-8-5）より出火、江戸市中の3分の1を焼失したといわれる。行人坂（目黒区下目黒1丁目付近）の大火とよばれる（ツンベルグ『江戸参府随行記』p170）。死者14,700人、行方不明者4,060人といわれる。

◇8月、大風雨災害。「年号は安く永くとかはれども諸色（物の値段）高くて今は明和九」という落首が出たという（尾崎周道『北斎 ある画狂人の生涯』p23）。

◇相撲興行（11月、本所回向院境内注）。

注) 本所回向院：現東京都墨田区両国 2-8-10。明暦3年(1657)の大火(振袖大火)の犠牲者を祀ったのが始まりの寺。

◇一筆斎文調、役者絵をやめる。以後の動向不明。

【浮絵確立】

○歌川豊春(1735~1814)、浮絵「江戸名所上野仁王門之図」(錦絵：永寿堂版)を描く。上野仁王門はこの年9月に焼失しているの、それ以前の作ともいう。豊春は明和8・9年(1771~72)頃からオランダ画法を参考にするなど透視画法(遠近法)を確立する。

【貸本屋で働く】

★中島伊勢の没後、本所横網町(現東京都墨田区両国1丁目辺。JR両国駅より南東に国道14号までの当たり。現横網町とは別)にも住むか。

「北斎は、実母と何不自由なく暮らしていたが、ある日を境に不遇となったと思われる。すなわち中島伊勢たる実父の死である。

北斎と実母は、中島家の十分な手当てで暮らしていたから、実父の死は生活の貧窮へつながることであった。北斎、幼名を時太郎、後に鉄蔵といった。父の死後、本所横網町に移り、鉄蔵は貸本屋の丁稚となり、たちまち世間の荒波にさらされた」(田崎暘之助『浮世絵の謎』p162)

★この頃迄に中島伊勢の家を出て貸本屋の丁稚になる(檜崎宗重『北斎芸術論』p8)。北斎は中島家を出た後も生涯中島姓を捨てなかったという。

★『葛飾北斎伝』(p35)には「一説に、幼時貸本屋某の小奴となり、四方に奔走し、苟も暇あれば、貸本の画注をみて自ら書き、遂に画道に志せしともいふ」とあり。

注) 画：この字は絵手本その他のルビで「が」と読むことが多いが「え」と読むことも多い。本稿では出典のルビに従うが、ルビが無い場合は「え」と読む。また、「画く」は「かく」ではなく「えがく」と読む事が多いのでそれに従う。但し「画本」は「えほん」と読む。

★安田剛蔵『画狂北斎』(p16)では「(中島伊勢の養子になる)その又以前には、貸本屋の小僧となった事があるように伝えられているが伝説の域を出ない」としている。

★瀬木慎一『画狂人北斎』(p31)では、中島伊勢の養子に入ったのは貸本屋の小僧や彫師の弟子になった後で、勝川春章門に入った19歳以前のこととしている。

【この頃の貸本屋の実態】

★この頃の貸本屋の目玉商品は艶本や話題になった読物であったらしい。江戸の貸本屋は文化5年(1808)5月には江戸12組の組織構成がなされ、世話役33人で、全部で656人いたという。(『画入読本 外題作者画工書肆名目集』東京堂出版・長友千代治『近世貸本屋の研究』所収p43)。

★『地本草紙問屋名前帳』(国立国会図書館蔵)による資料を、江戸東京博物館が紹介しているが、それによれば、本所・深川に40軒、浅草に42軒、外神田・下谷・湯島等に64軒、本町組に74軒、小日向組に33軒、神田組に60軒、日本橋南組に95軒、京橋南

組に 109 軒、芝金杉・品川・三田・白金に 38 軒、麴町・老幡組に 39 軒、四谷組に 33 軒、さらにその他合わせて 656 軒と紹介している。また、一店で 170 軒から 180 軒の客を持っていたという。

※封切(新刊書籍)本(300 文=約 7,500 円:1 文 25 円で計算)の値の 3 分の 1 から 6 分の 1 の値で借りられた注。江戸時代後期では一卷 24 文(約 600 円)、古本 16 文(約 400 円)、貸出期間は約 10 日から 2 週間位という(広庭基介「江戸時代貸本屋略史」昭和 42『図書館界』所収)。

注) () 内の価格は本稿筆者による換算。江戸期の価格を現在価格に換算するのは容易ではない。江戸末期の平均価格は 1 文=16.5 円との換算があるが、蕎麦一杯 16 文を現代のかけ蕎麦 400 円と想定し、平成 30 年(2018)時点では仮に 25 円相当とした。上記引用参考資料には現在価格は記載されていない(宝暦 10 年の項参照)。以下、本稿で記載される価格はこれによる。

※貸本屋の丁稚たちは、大風呂敷あるいは笈箱を背負い、更に小さな箱を乗せ、そこに薄物の本を重ねて得意先をまわった。13 歳の北斎が貸本屋の丁稚になった経緯は明らかではないが、それが事実とすれば、「貸本屋は素人でも簡単に取りかかることのできる商売であり、初心者が本業を身につけるまでの渡世の手段にしていたこともわかる。したがって、専門の貸本屋ばかりがいたとは決して言い切れないのである」(長友千代治『近世貸本屋の研究』p36)ということから、とりあえずの仕事に就くということであったのだろうか。動機はともあれ、貸本屋で多くの書物に触れる機会を持ったのは、後の北斎の創作に役だったと思われる。北斎は博識家であった。

左 7 貸本屋の図 右 8 うす物売り(『近世貸本屋の研究』より)

【写本一冊八文で貸す】

※塚原浩柿「江戸時代の軟文学」(大正 2 年:成光館出版部『趣味研究 大江戸 全』所収)では江戸時代末期(万延・文久期)の貸本屋について次のように記している。

「(略)此の貸本屋が、其の得意場として廻るのは、第一が丸の内その他の諸大名の勤番長屋。其れに続いて御旗本御家人の富い家の次三男。町家の楽隠居の柳橋、金春あたりの芸者屋。吉原初め四宿(筆者注:千住・板橋・内藤新宿・品川)の遊女屋などで有る。

(略)兎に角二百六十大名といふ上中下の屋敷が皆其れであるから(筆者注:諸大名の勤番が暇であることを指す)、其の貸本の闇がしいこと羽が生えて飛ぶがやう。見たいと云ふ本は一月も前から口を掛けて置かぬと容易に手に入らない。されば貸本屋では、版本などと一々買つては引合ぬから、写本にする、其の写本も、門戸を張つて居る筆耕書きなどに頼んでは費用が掛るからと云ふので、少し繁昌する家では、皆な其の書き人を二人なり三人なり雇つて写させる。然して又其の版本を写本に為せるには、他にも自然ら所以が



あつて爾來貸本は一部幾許でなく、一冊何文といふ見料で貸したものの、それには版本の細かい字の一冊を四十八文（筆者注：約 1,200 円）で貸すよりも、其れを十冊に写して直させて、一冊八文（筆者注：約 200 円）で貸した方が遥かに割が好い。のみならず、借人の方でも一冊四十八文と云ふよりも、一冊八文、十冊八十文といふ方が、銭は高くても出し心が好い、と云ふ様なので、武王軍談、漢楚軍談、十二朝軍談、太閤記でも、後風土記でも、又新作のものでも、少し出方が闊しいとなると直ぐ写させる、然して其の写す字は、ツカを取る為（筆者注：嵩を殖すため）長く大きく書く、だから当時の俗諺に、手紙などを一行四五字ぐらゐの走り書きにしたものを、『貸本屋』の字のやうだ、と嘲つたものである」（ルビは筆者による）

安永2 (1773) 癸巳 14 歳 中島鉄蔵

◇相撲興行（閏 3 月、深川八幡宮境内、10 月、本所一ツ目八幡御旅所注）。

注）御旅所：神が巡行の途中で休憩したり宿泊する所。神社などに設けられ、神輿を安置したり、立ち寄ったりする。一ツ目弁財天（現江島杉山神社：東京都墨田区千歳1-8-2）か。

◇版元・蔦屋重三郎（1750～1797）、新吉原五十間道注に開業。

注）五十間道：吉原大門（現東京都台東区千束4 丁目の東側辺）を出た所の曲がった道をいう。

【彫刻家の弟子になる】

★この頃、彫刻家の弟子となる。

※「鉄蔵十四五歳の時、彫刻家某に就き、彫刻を学ぶ」（『葛飾北斎伝』 p 35 ルビは筆者）。

※安田剛蔵『画狂北斎』によれば、彫刻家に就いたのは 16 歳から 19 歳とする（p 15）。

※文化 5 年(1808)5 月 23 日の曲亭馬琴宛北斎の手紙の末にある馬琴自筆の朱書きに「北斎はじめは削斲（筆者注：版刻）をまなびしが云々」との文あり。

※北斎は、晩年に一本の髪の毛を小刀で三本に割いてみせたという版刻の技術の賜を示すエピソードがある（定村忠士『いま、北斎が甦る』河出書房新社 p 36）。

※彫師は、頭彫（筆者注：顔面と髪の毛の生え際を彫る）、胴彫（筆者注：頭彫以外の部分を彫る）、筆耕彫（筆者注：文字を彫る）の三種があり、北斎は一番下の筆耕彫であつたらしい。（『浮世絵八華 5 北斎』所収、永田生慈「北斎の生涯」 p 119）。

安永3 (1774) 甲午 15 歳 中島鉄蔵

◇3 月 18 日、建部綾足没（56）。

◇相撲興行（4 月、深川八幡宮境内、10 月、深川八幡宮境内）。

◇蔦谷重三郎、吉原の遊女評判記『一目千本』などの出版を始める。

○前野良沢（1723～1803）と杉田玄白（1733～1817）、『解体新書』を刊行。

○長崎のオランダ語通司・本木良永（1735～1794）訳『天地二球用法』でコペルニクスの「地動説」が紹介される。

安永4（1775）乙未 16歳 中島鉄蔵

◇相撲興行（3月、深川八幡宮境内、10月、深川八幡宮境内）。

◇5月、講仲間取締令。富士講は、江戸時代に流行した民衆信仰。富士山を崇敬する人々で構成する。浅間講ともいう。般若心経などを唱えて富士に登山し祈願することを目的とする。但し、このときの禁止令は、講名を示さず「町中にて、職人日雇取軽き商人等講仲間を立て」という表現で、寄り集まりを禁じただけのものだが、実質富士講の禁止であった。

◇7月18日（西暦8月13日）、スウェーデン人のカール・P・ツンベルグ（Carl Peter Thunberg）がオランダ人植物学者・医師として長崎のオランダ商館に赴任する。

◇9月8日、女流俳人：加賀千代女没（73）。「朝顔につるべ取られてもらい水」

◇アメリカ、独立戦争始まる（1775年4月19日～1783年9月3日）。

【黄表紙誕生】

○恋川春町（1744～1789）『金々先生栄花夢』（謡曲「邯鄲」の翻案）。黄表紙の嚆矢となる。黄表紙は、表紙が黄色であったところから名付けられた江戸後期の草双紙。洒落や風刺を特色とし、絵を中心として余白に文章を綴った大人向きの絵物語。二つ折りの半紙5枚で一巻一冊とし、二、三冊で一部としたが、しだいに長編化し、合巻に変わった。

※北斎は安永9年（1780）に黄表紙『白井権八幡随長兵衛 驪山比異（翼）塚』から黄表紙の挿絵に関わる。

○向井去来（1651～1704）の俳諧論書『去来抄』が、没後71年目に刊行される。

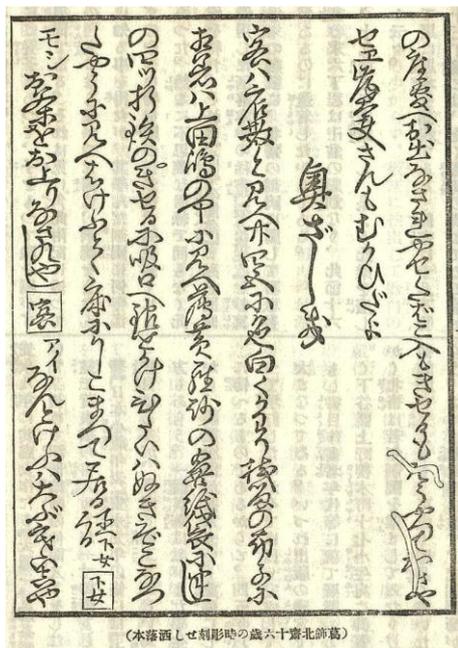
【筆耕彫としての作品】

★洒落本『楽女好子』（「らくじょごうし」とも）『青楼楽美種』注1と同一本か。一冊。雲中舎山蝶注2（行成山房大公人）作。国立国会図書館蔵

遊客が青楼（遊郭のこと）に遊ぶ様子を描く（現所在不明）。その文字部分（末六丁注3ほど）を彫るか。

注1）『洒落本大系』第六巻解説（p420～423）より。2）雲中舎山蝶：本所横網町の大山田源兵衛の息子。狂歌を唐衣橋洲に学ぶ。注3）末六丁：全十八丁の終わりの六丁（12ページ）のことで、北斎は全編の三分の一を担当した。一丁とは、袋綴じの裏表の2ページいう。

9『楽女格子』筆耕部分（太田記念美術館 Web より）



※同本巻末で石塚豊介子(1799～1862、考証家)は「為一翁云、此書の末六丁程は予が(筆者注：『洒落本大成』6巻の解題では「予が」の文字は無く「卍翁」と表記される)彫刻なり、此節十六歳なりと云々、十九歳まで産業とし、是より此業を廃し画師になりしと云々」〈大正7年、朝倉無聲『浮世絵私言』43号。飯島虚心『葛飾北斎伝』p36所収)と記している。2005年『北斎展図録』(日本経済新聞社)所収の永田生慈「北斎の画業と研究課題」にも同文が紹介されている)。

安永5(1776) 丙申 17歳 中島鉄蔵

- ◇相撲興行(1月、浅草八幡宮、10月深川八幡宮境内)。
- ◇将軍の日光社参が中止となる(天保14年：1843まで)。
- ◇カール・P・ツンベルグ(Carl Peter Thunberg)、江戸参府に出発(西暦3月4日、旧暦1月15日)。将軍に謁見(西暦5月8日、旧暦3月21日)。江戸出発(西暦5月25日、旧暦4月8日)。長崎から帰国のため母船に乗船(西暦11月23日、旧暦10月13日)。帰国に向け出帆(西暦12月3日、旧暦10月23日)。以上、『江戸参府随行記』(ツンベルグ・平凡社東洋文庫)による。
- ◇平賀源内、長崎で手に入れたエレキテル(静電気発生機)を修理・復元する。
- ◇式亭三馬生(月日不明～1822)。
- ◇4月13日、池大雅没(54)。
- ◇7月4日、アメリカ独立宣言。
- 大田南畝(四方赤良)、洒落本『世説新語茶』『南客先生文集』(この頃か)。
- 北尾重政、勝川春章共作『青楼美人合姿鏡』(実在の花魁を描く)。

【大首絵登場】

○勝川春章「東扇」(大判錦絵。扇枠に描く初代中村仲蔵の「仮名手本忠臣蔵」五段目の「斧定九郎役者絵」東京国立博物館蔵)などで大首絵注の先駆となる。以後、大首絵は連作される。

注)大首絵：人物の、主に首から上を画面に大きく描く絵。

- 上田秋成、読本『雨月物語』刊。
- 鳥山石燕(1712～1788。俳人・画師。門人に喜多川歌麿、恋川春町ら)、『画図百鬼夜行』により妖怪絵師の地位を築く。北斎の『百物語』(天保2年：1831)に影響したか。

安永6(1777) 丁酉 18歳 中島鉄蔵

- ◇相撲興行(4月、深川八幡宮境内、10月、深川八幡宮境内)。
- 与謝蕪村、『夜半楽』(俳詩「春風馬埧曲」を収める)。

安永7(1778) 戊戌 19歳 中島鉄蔵

- ◇相撲興行(3月、深川八幡宮境内、11月、深川八幡宮境内)。

※この年3月の興業より、一場所晴天8日間から10日間の興行となる（『大江戸万華鏡』所収「ひとつくり風土記」13 48 p 680）。

【勝川春章門に入る】

★人形町に工房を持つ勝川春章（1743～1792）注に入門。彫刻の業を廃す。

※『葛飾北斎伝』（p 37）では「安永六年、鉄蔵十九歳の時、彫刻の業を廃し、浮世絵師勝川春章の門に入て」（ルビは筆者）とあるが、安永六年（1777）とあるのは安永七年（1778）の誤り。また、「HOKUSAI」新聞（小布施：北斎美術館：2015GW号）によれば入門は安永8年（1779）としている。

注）勝川春章：この時弟子30人といわれ役者絵の一派を形成。始め宮川を名乗る。俗称：祐助。旭朗井西爾と称す。また李林春草と号す。勝川春水の門人となり、英一蝶の草筆を学ぶ。門人に春好、春英、春朗（北斎）、春江注、春常などがいた。

注）春江：竜田舎錦編『新增補浮世絵類考』の宮川長春系譜には勝川春章の弟子として記載されているが詳細不明。

※「勝川」は、『葛飾北斎伝』（p 40）によれば「按ずるに、宮川、勝川は、もと地名にして尾張国海西郡（筆者注：現愛知県海西郡）にあり。勝川は訓みてカチカワなり」という（ルビは筆者による）。

※養子先の中島家から春章入門の支度金（筆者注：束脩）を出してもらい、その後、中島家の長男没後に中島家に戻る約束を反故にして、そのまま浮世絵師の道を歩んだという推測もある（リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p 8 河出書房新社）。

【春章一幅価千金】

※この年、春章の役者絵等は賞賛され、安永4年（1775）の洒落本『後編風俗通』（内題「後編女風俗通」金錦先生注¹著）跋文の冒頭に「春章一幅価千金注²」（筆者注：中国宋代の蘇軾の絶句詩「春夜」の起句「春宵一刻価千金」のもじり）と記された。一枚の絵がそれほどの価格で売れたということである。

「一幅」とは肉筆画を示す言い方であるが、安永4年、（1775）頃には春章（数え年33歳）はまだ肉筆美人画は描いていないので、数点確認されている柱隠しの錦絵（版画）美人画等の、「一枚の絵」程度の意味と考えられている。春章が肉筆美人画を描くのは、天明後期に勝川の代表の座を弟子の春好、春英に譲った後である。

注1）金錦先生：恋川春町と目されるが未詳。戯作者朋誠堂喜三二（平沢常富）説もある。（『洒落本大成 第6巻』解題 p 414）

注2）跋文の冒頭に書かれた一文だが、この文に続き「花有青楼之錦絵 月有両国之楼船」などとあり、この時世の華やかさを象徴する一文であることが分かる。この本の挿絵を春章が描いたことを示すものではなく、春章の絵もまた華やかさを持つという文脈である。

安永8（1779）己亥 20歳 勝川春朗

【第一期春朗期】

◎「春朗」号は寛政6年(1794)頃まで使用する。

◇相撲興行(3月、深川御船蔵八幡境内注、10月、深川八幡境内)。

注) 御船蔵：現在の東京都江東区新大橋1～2丁目辺で、ここにあった八幡宮(明和8年条を参照)。御船蔵に幕府の軍艦「安宅丸」が係留されていたので、この辺りを「アタケ」と呼んだ。歌川広重の「大はしあたけの夕立」(大判錦絵。安政4年(1857)『名所江戸百景』)に描かれた所。

◇12月18日、平賀源内獄死(51)。大名屋敷の修理を頼まれた際に、酔っていたため修理計画書を盗まれたと勘違いして大工の棟梁二人を殺傷し、11月21日に投獄され、獄中で破傷風に罹り死亡した。

【富士塚が建つ】

◇江戸高田に住む植木職人高田藤四郎が、戸塚村の水稲荷(現東京都新宿区西早稲田3-5-43)の別当・宝善寺境内に、富士五合目より上の形を模して5mほどの築山を造る。戸塚富士とも高田富士ともいう。これが朱楽菅江の洒落本『大抵御覧』(安永8年：1779)に「新富士」として記され、以後、富士信仰により江戸中に富士塚が建てられる。

◇長崎オランダ商館長イサーク・ティチング(Isaac Titsingh)による浮世絵収集が始まる。

◇松前藩、ロシアの通商要求を拒否。

○大田南畝、滑稽本・風流落咄『鯛の味噌津』。

【勝川春朗を名乗る】

★勝川春朗を名乗る。師の春章の「春」と、春章の号「旭朗井」の「朗」からつけた号という(安田剛蔵『画狂北斎』p15)。

【絵師デビュー】

●吉原細見本『金農町』(7月。横小判。勝川春朗画。鱗形屋孫兵衛版。天理大学附属天理図書館蔵)

※北斎は1丁裏に挿絵一図を描き、同図の右下に「勝川春朗画」と書き入れている。奥付に「安政八巳亥歳秋七月」とある。吉原の店の紹介を主にした内容。

図は花魁とその両脇に禿が立ち、三人の前に桶提灯を下げた若い衆が立っている。図の右には机の上に棕櫚団扇と冊子と棕櫚の葉を生けた花瓶が置かれている。近くで蝶が1匹舞っている。

『江戸吉原叢刊』(八木書店 2011年)の解題は「春朗の最初の作品としては、安永八年八月頃の細判役者絵「岩井半四郎のかしく」等が挙げられてきたが、本書の挿図はそれよりも若干早い時期の作例である」(永田生慈『葛飾年譜』より)としている。絵師として役者絵より早いデビューか。

※版元の鱗形屋は、吉原細見の版行を独占していた。

★北斎のデビューは、一般に次の4作(細版役者錦絵)「四代目岩井半四郎 敵討仇名かしく」「中村里好 ふく清女ぼう」「三代目瀬川菊之丞 正宗娘おれん」「二代目市川門之助の小間物屋六三郎」(焼失)とされている。

注) 元禄期以降、役者絵については、鳥居派が芝居幕開けから 10 日以内に芝居絵を描くことが主流であったが、勝川派の北斎が役者絵を描いたのである。この年から寛政 6 年 (1794) まで細判役者絵を約 60 点余りを描いたといわれる。寛政 6 年以降も数点の役者絵はある。

●役者絵「四代目岩井半四郎 敵討仇名かしく」(8 月頃。細判錦絵。勝川春朗画。伊勢屋三次郎版注か。29.9×13.7 島根県立美術館：永田コレクション/北斎館/中右コレクション/すみだ北斎美術館蔵) 10 四代目岩井半四郎敵討仇名かしく (すみだ北斎美術館)

※安永 8 年 8 月 1 日から中村座 (すみだ北斎美術館では市村座としている) で上演した「敵討仇名かしく」(桜田治助作) に取材。

注) 伊勢屋三次郎：『東京国立博物館図版目録』(浮世絵版画篇 下) では、同館所蔵「中村里好のふく清女ぼう」にある○の中に三つの点のある版元印を「伊勢三」と表記している。従来、この印は不明とされていたが、これは伊勢屋三次郎(永樹堂)を指すと思われるので、同様の印のある本図も伊勢屋三次郎とする。

※「かしく」は歌舞伎「八重霞浪花浜荻」(通称「かしく」) に出る人物。寛延 2 年 (1749) 3 月 18 日、大坂道頓堀新屋敷油屋の抱えのかしく(本名八重)が兄殺しにより死罪となった事件を脚色したもの。四代目岩井半四郎(1747~1800)は、女形の名優。屋号は大和屋。



●役者絵「三代目瀬川菊之丞 正宗娘おれん」(8 月頃。細判錦絵。勝川春朗画。伊勢屋三次郎版か。29.2×13.5 東京国立博物館/島根県立美術館：永田コレクション蔵)。

※三代目瀬川菊之丞(1751~73)は、女形の名優。屋号は浜村屋。安永 8 年 9 月 1 日から市村座で上演した「新薄雪物語」(近松半二他作) に取材。

おれんは刀工の正宗の娘。おれんの背後の衝立に描かれた爪を立てたような波の絵は、後年の「北斎波」の原型と思われる。(八木書店『江戸の絵本 画像とテキストの綾なせる世界』所収、マティ・フォラー「葛飾北斎と初期門人たち一享和・文化文化・文政期に焦点を絞って」p 265)。



●役者絵「中村里好 ふく清女ぼう」(8 月頃。細判錦絵。勝川春朗画。伊勢屋三次郎版か。30.2×13.8 東京国立博物館/中右コレクション蔵)。

※北斎が「勝川春朗画」とした期間に、中村里好がふく清女房を演じた記録が『歌舞伎年表』に見られないことから、デビュー作品とするには疑問視するむきがあったが、初代里好の中村座の「敵討仇名かしく」から取材した作品で、福清女房おかじを演じた姿を描い

たと考証されるに至り、この絵を含めた4点がデビュー作とする説が有力視されている
(安田剛蔵『画狂北斎』(p191)。



図は、櫛を挿した髷と前帯の姿で、松の木のある舞台に、体を少し左にくねらせて立っている様子。

※中村里好(1742~86)は安永2年(1773)8月に同名を襲名。屋号は塙屋。

12 中村里好ふく清女ぼう(東京国立博物館)

●役者絵「二代目市川門之助の小間物屋六三郎」(8月頃。細判錦絵。勝川春朗画。28.9×13.8)。上記中村座の「敵討仇名かしく」に取材。関東大震災で焼失したとされる。

※二代目市川門之助(1743~94)は、安永期に若手四天王(二代市川八百蔵、三代沢村宗十郎、初代尾上松助)の一人といわれる。屋号は滝野屋。

安永9(1780)庚子 21歳 勝川春朗、春朗、勝春朗、まりこ(方里固?)

◇相撲興行(3月深川三十三間堂境内、10月、芝神明宮)。

◇5月17日、小野田直武(洋風画家)没(32)。

◇10月、深川茂森町(現、江東区木場4丁目辺)に無宿養育所が設置される。

◇12月17日、頼山陽生(~1832)。

○耳鳥齋(1751以前~1802または1803)の『絵本水也空』刊(戯画風役者画集。八文字屋八左衛門版)。与謝蕪村等の影響を受け鳥羽絵スタイルを洗練化する。岡本一平に影響したといわれる。「鳥羽絵」は、一般には鳥羽僧正の「鳥獣戯画」風な軽いタッチの画をいう。『北斎漫画』に影響があったか。

【黄表紙挿絵師の始まり】

●黄表紙『驪山比翼(翼)塚』(『驪比翼塚』とも。正月。角書「白井権八幡随長兵衛」。中本注二冊。作者不詳。勝川春朗画。西村屋与八版。国立国会図書館/東京都立中央図書館加賀文庫/大東急記念文庫蔵)

注)中本:美濃紙半裁二つ折り(約14.0cm×20.0cm A5判に近い)で、黄表紙の主流の体裁。

※北斎の黄表紙挿絵本の最初のものか(『浮世絵大系8北斎』所収、岡畏三郎「総説葛飾北斎」)。

13 驪山比翼塚(国立国会図書館)

※前年の安永8年(1779)7月に上演された江戸肥前座で初演された義太夫世話物人形浄瑠璃「驪山比翼塚」をそのまま筋書きにしたダイジェスト版。黄表紙の場合、作者名がなく画工名のみ記してあるのは、作者を兼ねるのが通例なので、



北斎(春朗)の自画作かとも考えられている。

※北斎の錦絵初作は前年8月上演のものからなので、それ以前の浄瑠璃に取材している点に注目されるという(『2005年北斎展図録』解説 p 307)。

※現在の目黒不動(東京都目黒区下目黒3-20-26)の仁王門近くにある権八と小紫の比翼塚(目黒比翼塚)をモチーフとする。

※安田剛蔵『画狂北斎』では本書は北斎の入銀本(自費出版のこと)としている(p 17~19)。

【廓遊びで幫間と知り合うか】

●黄表紙『大通一寸廊茶番』(正月。「いきちよん注1 ちよんくるわのちゃばん」とも。また『日本古典籍総合目録』によれば、「いきちよんちよんくるわのちゃばん」とも。二冊。社楽斎万里注2 作、勝川春朗画、西村屋与八版。国立国会図書館/東京都立中央図書館加賀文庫/大東急記念文庫蔵)

注1) 「いきちよん」は、江戸通人言葉で「粹なこと」をいう。

注2) 万里:万里作『嶋台目正月』(天明7年:1787)の山東京伝の序文では「まんり」と読んでいる。

※安田剛蔵『画狂北斎』(p 17)では本書も入銀本としている。

※作者の社楽斎万里は北斎と親しかった吉原の幫間と推測されている(森銚三『続黄表紙解題』中央公論社 p 296。安田剛蔵『画狂北斎』 p 16)。尾形光琳風の絵も描いたらしい。

※廓の相場は中等以下で90匁(享保以後)程度と言われる。一両は江戸中期で銀60匁=5000文。1文は現在の相場で25円程度として、一両は約125,000円。銀1匁は125,000÷銀60匁=約2,084円。すなわち90匁は約187,560円となる。

これほどの高額を若い北斎が支払えたのは、中島家からの援助があるからであり、中島家の養子身分が続いていたのではないか、あるいはこの頃に養子に入ったとの推測もある(田崎暘之助『浮世絵の謎』 p 166~167)。

●黄表紙『一生徳兵衛三乃伝』(正月。三冊。作者名・画工名無し。松村弥兵衛版)

※大久保葩雪『増補青本年表』(『新群書類従』所収)では市場通笑作、春朗画としていることを、井上隆明「北斎の初期戯作と挿絵」で紹介している(1993年『代表作シリーズ大揃い 北斎』所収。日本浮世絵博物館。読売新聞社刊)による)。

※勝川春章や北尾重政の絵かと思うほどの画風(檜崎宗重『北斎論』 p 97)であり、黒田源次(「北斎の春朗期について 其一」『浮世絵』51号所収)、及び、棚橋正博(『日本書誌学大系 48(1)黄表紙騒乱前編』所収)によれば、画風から春朗の挿絵ではないとする(『年譜』による)。

●黄表紙『日蓮一代記』(春。三冊。まりこ作。勝川春朗画)

※作者名「まりこ」は、吉田暎二によれば「万里固」とする。また万里固は北斎の戯作名とする説もある(『年譜』による)。

●役者絵「三代目瀬川菊之丞 奴の小方(関の小方)」(5月頃。勝春朗画)

※5月5日より上演の市村座「女伊達浪花帷子」に取材。『歌舞伎年表』4巻（岩波書店）に掲載（伊澤慶治「勝川春朗の役者絵考証（一）」『北斎研究』16号による）。

●役者絵「二代目小佐川常世 女房やばせ」（8月頃。細判錦絵。春朗画）

※8月朔日（1日）より上演の森田座「紅白粉四季染分」（河竹新七作）に取材か。小佐川常世（1753～1804）の屋号は錦屋。

●役者絵「坂田半五郎の定九郎 音羽次郎三郎の与市兵衛」（9月頃。細判錦絵。春朗画 東京国立博物館蔵）

※9月9日より上演の中村座「仮名手本忠臣蔵」（二世竹田出雲・三好松洛・並木千柳作）に取材。

●役者絵「四代目岩井半四郎 おかる」（9月頃。細判錦絵。勝川春朗画。29.1×12.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵）。

※9月9日より上演の中村座「仮名手本忠臣蔵 九段目」に取材。

●役者絵「二代目市川門之助」（役名なし。この頃か。役者絵を描き始めた初期の絵と思われる。細判錦絵。春朗画。大国屋久兵衛版。29.2×13.3 個人蔵）

※三升紋注の着物をはだけ、左足を米俵にかけて見栄を切る図。天明7年（1787）にも「市川門之助 すけつね」を描いている。

注）三升紋：市川家の紋。升を三つ重ねた図柄。

【以下、安永年間】

●武者絵「難波六郎常仁」（安永7年～10年〈1778～81〉。縦長判色摺。春朗画。版元印：屋根形に「与」。ボストン美術館蔵）

※いなづまの光る中、滝の前で岩に足を掛け、刀に手を掛けている鎧姿の武者絵。

14 難波六郎常仁 (https://jokky2.exb_log_jp/tags/「平家」より転載)

●錦絵「てうせんのこうけいし」（安永年間〈1772～81〉）。

「朝鮮の弘慶子注」。細判。春朗画。版元不明（㊦印がある）

30.8×13.5 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

注）弘慶子：安永から天明期に流行した弘慶子という飴や菓を売った行商人。

※傘をかざして朝鮮風な竹の子笠を被り、身体をよじらせて売り声を出す弘慶子を描く。画面上には「てうせんのこうけいし アッホアッホアッホ」と売り声が記されている。

●不明「やりおどり」（安永年間〈1772～81〉。無款。27.3×14.1 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』所収「長瀬武郎コレクション寄贈総目録」による。



安永10/天明1 (4/2～) (1781) 辛丑 22歳 勝川春朗、春朗、是和斎（戯作名）

◇相撲興業（3月、市ヶ谷左内坂長龍寺、10月、本所回向院境内）。

○鶴岡蘆水（翠松斎：生没年未詳、江戸中期）、「東都隅田川両岸一覽」。北斎の同名の狂歌絵本『隅田川両岸一覽』（享和3年～文化3年〈1803～06〉）に影響した。

●黄表紙『有難通一字』(正月。角書「本性銘暑」『葛飾北斎伝』では「本性酪署」と表記する〈p37〉1月。二冊。是和齋注戯作。画工名無し。松村屋平兵衛版。東洋文庫蔵) 是和齋:「是和齋」を北斎の戯作名とする説があるが、『葛飾北斎伝』の校注者鈴木重三は「是和齋」は北斎と同一人物とする確証はないとしている(『葛飾北斎伝』p30・p37脚注、及びp340〈p29補注五〉)。

また、飯島虚心は割注で、「按ずるに、是和齋は、訓みてコレワセイ、伊勢音頭の囃子に、ヤットセイ、コレハイセイ、コノナンデモセーといへる、コレワセイを漢字にはめたるなり(略)」と述べ「是和齋」は「コレワセイ」だとしている(同p38割注)。

『日本小説年表』(朝倉無声)では、傍注に「是和齋は勝川春朗、後葛飾北斎の仮号なりといふ」と記し、画工を北尾政演(山東京伝)とする(国立国会図書館デジタル版 p130)。

※本書は、本所押上の日蓮宗法性寺(柳島妙見堂:現東京都墨田区業平5-7-7)の縁起を題材にしたもの。北斎は妙見を信仰していた。

四方山人(大田南畝)の青本評判記『菊寿草』(安永9年〈1780〉1月刊。一冊。本屋清吉版)中、「実悪之部」で「上上吉 本性銘暑 有難通一字 松村座」と表記される。松村座は版元名を指す。

●洒落本注『公大無多言』(正月。一冊。行成山房大公人〈雲中舎山蝶〉作。勝川春朗画。天理大学図書館蔵)

※序文に「丑の春」とある。北斎は、挿絵1図のみ描く。

注)洒落本は、蒔蕪本とも呼ばれ、明和6年以前に刊行された多田爺(多田屋利兵衛)の『遊子方言』(須原屋市兵衛版)が始まり。対話の言語に江戸言葉を使うのが特徴。式亭三馬、十返舎一九、柳亭種彦、為永春水などが執筆し、歌舞伎作者の河竹新七も江戸言葉を使って脚本を書いた。寛政3年(1791)には風紀紊乱により洒落本は禁止されたが、実際には文化年中(1804~1818)まで刊行された(大正2年、成光館出版部『趣味研究 大江戸 全』所収、上田萬年「洒落本と山東京伝」による)。

●洒落本『喜夜来大根』(一冊。梨白散人作。春朗画。本屋清吉の出版目録に「安永十年丑初春」と記載される。慶応大学図書館蔵)。

※堂駄先生の洒落本『奴通』(安永9年:1780刊か)の序文と本文の冒頭、および物語の場所を変えて梨白散人作として改題出版したもの。

※『洒落本大成』補巻の「洒落本写本年表」によれば、『喜夜来大根』は天明年間の刊とする。

●役者絵「三代目沢村宗十郎のしげたゞ」(細判錦絵。春朗画。6月の中村座「壇浦兜軍記」に取材〈『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』昭和55年 太田記念美術館による)30.5×14.0 太田記念美術館:長瀬コレクション/フォッグ美術館蔵。)

※沢村宗十郎(1753~1801)。屋号は紀伊國屋。寛政3年(1791)にも同題の役者絵がある。裱姿で縁側の前に立ち、左手の折りたたんだ扇子をだらりと下げる図。

天明2(1782)壬寅 23 歳 勝春朗、春朗、是和齋（戯作名）、東都魚佛（戯作名）、
闇雲山人（隠号）、万里

◇天明の飢饉始まる(天明7年：1787まで)。

◇相撲興行(2月、浅草八幡宮、10月、深川八幡宮境内)。

◇この頃より江戸に鰻の蒲焼屋が出始める。

◇3月23日、楯取魚彦没(60)。国学・歌人・画家。

○酔狂道人何必醇(曾谷学川)、料理本『豆腐百珍』。

○山東京伝、黄表紙『御存知商売物』。京伝の出世作となる(森銑三『黄表紙解題』p246)。

○大田南畝、黄表紙『年始御礼帳』、黄表紙『源平惣勘定』(梶原再見二度の賭)(天明6年にかけて刊行)。

★この頃より勝川春章調より離れ、役者絵だけでなく、若干の美人画・風俗画も見られる。ふくよかな美人図など鳥居清長(1752~1815)の影響も見られるとする。

●黄表紙『四天王大通仕達』(正月。二冊。是和齋戯作。春朗画。松村屋弥兵衛版。国立国会図書館/ボストン美術館蔵)

※巻末の絵の右はじに「是和齋戯作」とあり、左はじに「春朗画」とある。両者が同一人物ならば「春朗自画」などの表記となるだろうから、同一人物ではないと推測する意見もある(井上隆明「北齋の初期戯作と挿絵」(日本浮世絵博物館『大揃い北齋』)に所収)。
※森銑三『黄表紙解題』(p337)及び朝倉無声『日本小説年表』では天明2年の刊とする。

●黄表紙『鎌倉通臣伝』(正月。二冊。東都魚佛注戯作。春朗画。鶴屋喜右衛門版。ボストン美術館蔵)

注)魚佛：北齋の戯作名か。リチャード・レイン『伝記画集 北齋』(p326)では「細工人魚佛作」とある。

※『戯作者撰集』(石塚豊芥子編。天保11年~弘化2年(1840~45)成立)天明二年(1782)の項で「魚佛 前北齋戴斗為一翁の事也」とある。但し『葛飾北齋伝』の校注者鈴木重三は「魚佛」を北齋と同一人物とする確証はないとしている(同書p340)。

一方、『古典籍総合目録』(『書名索引 著者名索引』第三巻 国文学研究資料館)では北齋の号としている。

『日本小説年表』(朝倉無声)では、傍注で「是和齋、魚佛共に画工北齋の仮号なりといふ」と記している(国立国会図書館デジタル版p132~133)。

●洒落本『富賀川拝見』(春頃。中本一冊。蓬萊山人帰橋注述。春朗画。上総屋利兵衛版。序文に「天明二とらのとし春」とある。15.5×11.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵)。

注) 蓬萊山人帰橋：生没年未詳、戯作者。一説に高崎藩士・河野通秀こうの みちひでという。作者は洒落本『通仁枕言葉』(天明2年：1782)など、江戸・深川を題材にすることが多く、本書では男に真心を疑われる仲町なかつちやう(現東京都江東区門前仲町)の遊女おたよを通して深川女の意気地が写實的に描かれている。北斎は一図のみ描く。



15『富賀川拝見』(島根県立美術館)

【艶本処女作】

●艶本注『笑本股庫嘉里橡えほん ぐく かりじょう(元は女扁に象)志』(1月頃。墨摺。中本一冊。六話。勝春朗画。文章も北斎。序文に「寅の初春 闇雲山人書」とあり。扉絵の部屋の天袋に「勝春朗画」とある。北斎の艶本処女作)。

※「闇雲山人」は北斎の隠号とする(『芸術新潮』1989年3月号所収、林美一「北斎艶本への挑戦」p41)

注) 艶本：当時「絵本」「笑本」などと同様に「えほん」と読んだという。ただし、本稿では、一般的な「えんぼん」のふりがなを記す。溪斎英泉の『艶本恋の操』(文化10年：1813)、歌川国貞『三国女夫意志』(文政11年：1828)の内題「艶本三国一」、歌川国芳の『艶本拾壹段返』(天保3年：1832)など、例は少ないが「えんぼん」と読んでいる。

●咄本『はなし』(この頃か。中本黄表紙仕立て一冊。自惚山人皆山五郎治作。勝春朗画。西村屋与八版。17.2×12.9 島根県立美術館蔵)

※題名未詳。柱(小口部分)に「はなし」とあるので、これに従ったと『2019 新北斎展図録』(p313)で永田生慈が解説している。五つの小話が収められている。同解説では、中の「民風」は、力士の二代谷風梶之助をモデルにしていて、関取とあることから、大関に昇進した天明2年頃の出版と見なされるとしている。

●役者絵「五代目市川團十郎あげまきの助六いしかわだんじゅうろう あげまき すけろく」(5月頃。細判錦絵。勝春朗画。版元印：入り山形の下に「上」、更にその下に「双」が四つ並ぶ。31.5×13.5 日本浮世絵博物館蔵)。

※5月5日より上演された中村座「助六曲輪名取草」に取材。

市川團十郎(1741～1806)：定紋は三升。屋号は成田屋。俳名は百猿、三升、男女川など。

16 五代目市川團十郎あげまきの助六(日本浮世絵博物館)

図は、市川團十郎が蛇の目傘を右手で翳し、左手は懐ふところから出し、



左で結ぶ喧嘩鉢巻をして、高下駄を履き、刀を落とし差しにして見栄を切る。背後に防火水の桶がある。

【初の美人画か】

●錦絵『中洲八景』(3 図が確認されている。中判揃物。万里注画。平均：21.5×16.8「中洲」は大英博物館のカタログでは「NAKAZU」と表記している)

注)万里：吉原の幫間とも、北斎の偽名ともいわれ、確定しないが、安田剛造は、この年の「万里」署名の美人図は春朗の作とする(『画狂北斎』p182)。

北斎の挿絵のある安永9年(1780)に刊行された黄表紙『大通一寸廊茶番』の作者「万里」(吉原の幫間・長門万里)とは別人(同書p55~56)で、本図の「万里」は幫間の万里と親しかったことによる北斎の署名らしいと同書では推測している。詳細は不明。

☆〈浮洲の落雁〉

※若衆が竿を差して停めている舟から釣りをしている女。その背後の中洲に下りている雁の群れと飛び立つ雁の群れが描かれる。

☆〈大橋の帰帆〉

※隅田川岸辺の「筒屋」と書いた看板の下がる茶屋で、団扇を持って立っている女と座っている女。足元には朱塗りの膳に盃と料理の入った皿が置かれている。二人の芸者風の女が涼んでいる図。図の左には大橋の一部が描かれる。大橋は、両国橋の前称。

17 大橋の帰帆(大英博物館)



☆〈川岸の晴嵐〉

※島田髻に櫛を挿した二人の芸者風の女が、川岸を愉快そうに話ながら歩いている。二人の着物の裾は歩く勢いで大きく乱れている。

天明3 (1783) 癸卯 24歳 勝春朗、春朗

◇英国政府と米合衆国代表が独立戦争終結のパリ条約を結ぶ。

◇天明の飢饉続く(天明7年：1787まで)。

◇相撲興業(3月、深川八幡宮境内。11月、本所回向院境内)。

◇2月4日、近松半二没(59)。

◇5月17日、柳亭種彦生(～1842)。

◇8月5日、浅間山の大噴火。

◇12月25日、与謝蕪村没(68)。

◇葛谷重三郎、日本橋通油町に地本問屋として進出。屋号は耕書堂と称す。

○この頃、北尾政演(山東京伝)の『青楼名君自筆集』(天明3年版。色摺。大判二枚続。天明4年刊の葛谷重三郎版より以前に描かれた吉原遊女の風俗絵)をオランダ商館長イサーク・ティチング(Isaac Titsingh)が持ち帰る。翌天明4年(1784)、葛谷重三郎が画帖

仕立の『吉原傾城新美人合自筆鏡』(色摺。大奉書全紙判・大判横 2 枚分。39.4×54.5)として改題版を出す。

○大田南畝(蜀山人)と朱楽菅江、『万載狂歌集』を編纂。

○9月、司馬江漢、「三圃之景図」で腐食銅版画(エッチング)の制作に成功。

○勝川春章、「婦女風俗十二ヶ月図」

★この頃、三田台町に住むか(天明4年〈1784〉1月出版の黄表紙『咸陽宮通約束』巻末文に「すとんだゆめをミたのだい町 春朗画」とあることから)。但し、この文は単なる洒落とみられている(安田剛蔵『画狂北斎』)。

「ミたのだいまち」が「三田台町」と表記するかどうかは不明。下町の墨田区や台東区や江東区には古名の町は見当たらない。「台町」とすれば高台であろうから、目黒区や港区の「三田」が想像されるが、北斎の住居としては不自然である。やはり「とんでもない夢を見た」からの洒落とゴロ合わせと考えるのが妥当であろう。「恐れいりや(入谷)の鬼子母神」の類である。それにしても、後の続きの「だいまち」に全く意味がないわけではなく、言葉遊びとしても、なんらかの町名が意識されていたと思われる。

●役者絵「三代目市川団蔵 花形隼人」(1月頃。細判錦絵。勝春朗画)

※正月 15 日より上演された中村座「江戸花三舛曾我」(桜田治助作)に取材。但し三代目は安永1年(1772)没なので、四代目市川団蔵(1745~1808)か。屋号は三河屋。

●役者絵「岩井半四郎 長吉姉」(8月頃。細判錦絵。勝春朗画)

※8月1日よりの中村座「勝相撲団扇揚羽(双蝶々曲輪日記)」に取材。

●役者絵「三代目瀬川菊之丞 けいせいあづま」(細判錦絵。勝春朗画)

※8月1日より上演された中村座「勝相撲団扇揚羽(双蝶々曲輪日記)」に取材。

●役者絵「中村仲蔵のてん竺徳兵衛実ハそうふくわん」(8月頃。細版錦絵。勝春朗画。

29.7×13.3 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※8月8日より上演された市村座「けいせい帷子辻」の二番目大切注(笠縫専助・宝田寿来作)に取材。『長瀬武郎コレクション図録』(太田記念美術館。昭和55年)では、8月市村座「江戸鹿子娘道成寺」に取材としている。

注)大切：歌舞伎の二番目狂言(世話物)の最終幕をいう。

※仲蔵の天竺徳兵衛実ハそうふくわんが、口に巻物をくわえている。

足元には大きな蝦蟇が見上げている図。

●役者絵「中村仲蔵の景清」(細判錦絵。春朗画。31.2×13.3 太

田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

18 中村仲蔵の景清 (太田記念美術館)

※3月の中村座「寿万歳曾我」に取材。

●役者絵「市川團十郎の大星由良之助」(細判錦絵。春朗画。29.0

×13.8 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※5月の中村座「忠臣蔵」に取材。二刀を差し、黒地に袖が白い鋸歯文様の羽織を着て「い」と書いた采配を手にして立つ大星由良之助。



足元には「忠」と書かれた提灯が置かれている。

天明4 (1784) 甲辰 25歳 春朗、勝川春朗、勝春朗

◇諸国に大飢饉。

◇若年寄田沼意知(田沼意次嫡男)が旗本佐野善左衛門(佐野政言)に江戸城中で斬殺される(35歳。墓：勝林寺：現東京都豊島区駒込7-4-14)。

オランダ商館長イサーク・ティチング(Isaac Titsingh)は、佐野善左衛門は、井の中の蛙状態の幕府の中でただ一人世界を見ていた人物で、この事件で開国は完全に閉ざされたと嘆いたという(「Wikipedia」より)。

◇司馬江漢、覗くと立体感のある視眼鏡器具を制作。

◇相撲興行(3月、本所回向院境内、11月、本所回向院境内)。

◇この頃、磯田湖龍斎(1735~1790)、石川豊信(1711~1785)、勝川春章(1743~1792)、北尾重政(1739~1820)、歌川豊春(1735~1814)、鳥居清長(1752~1815)らが活躍。

◇この頃、喜多川歌麿(1753?~1806)のデビュー期でもある。

●黄表紙『咸陽宮通約束』(1月。二冊。著者名なし。春朗画。伊勢屋幸七版。東洋文庫/国立国会図書館蔵)

注)北斎が天明2年(1782)に三田台町に住んだとされる根拠として、天明4年に出版された『咸陽宮通約束』の巻末図、(め)の模様のある着物を着た男が座っている図の脇に

「すとんだゆめをミたのだい町 春朗画」とあることが挙げられている。但し、前述したように単なる洒落と思われる。

19『咸陽宮通約束』(国立国会図書館)右：拡大図

※国立国会図書館デジタル版の表紙の題簽には、「勝川春朗画作」とある。最終丁に「春朗画」とある。文溪堂作といわれるが、作者名はない。黄表紙評判記『江戸土産』(天明4年：1784。一冊。



同穴野狐作。前川庄兵衛版)に本書名がある(永田生慈『年譜』による。以下『年譜』と表記)

●黄表紙『野會喜伽羅久里 義経辻』(1月。『観伽羅久里義経山入』とも。三冊。井久治(幾治)茂内作。勝春朗画。岩戸屋喜三郎版。東京国立博物館蔵)

※この年刊行の黄表紙評判記『江戸土産』(一冊。同穴野狐作。前川庄兵衛版)に本書名がある(『年譜』による)。

●黄表紙『運開扇之花香』(春。表紙に『円通誓大通光/運開扇子花』。二冊。作者名なし。春朗画。松村屋弥平衛版。立命館大学 ARC 蔵)

※巻末の図の右下に「春朗画」とある。

●黄表紙『鵠頼政名歌芝』（南仙笑楚満人〈1749～1807〉作。春朗画。村田屋治郎兵衛版。東京都立中央図書館蔵）

●談義本注『教訓雑長持』（1月。中本五巻。合巻一冊。伊藤単朴作。右十葉勝川春朗画。竹川藤兵衛版。宝暦2年（1752）『今様下手談義』（静観房好阿作。辻村勘七版）の再刻版。北斎は各巻に2図、計挿絵10図を描く。22.0×15.8 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

注）談義本：宝暦（1751～1764）から安永（1772～1781）にかけて多く刊行されたもので、談義僧（仏教の教義を面白く教える僧や講談師の口調をまね、おかしみの中に教訓を交え社会の諸相を風刺した。滑稽本の先駆（『デジタル大辞泉』より）。

●相撲絵「渦ヶ淵勘太夫 高寄市十郎」（この頃か。天明3年～4年〈1783～84〉とも。間判注錦絵。勝春朗画。シカゴ美術館蔵）

注）間判は、大奉書の大判（約39.0cm×26.5cm）と中判（大判の2分の1。約19.5cm×26.0cm）の中間の大きさ（約33.0cm×23.5cm）。

※春朗期の相撲絵は間判2枚、細判3枚の計5枚が確認されている。寛政初期と思われる細判相撲絵に「高根山与一右エ門 千田川吉五郎」（細判）、「花頂山五郎吉 和田ヶ原甚四郎」（細判）、「雷電為右衛門 盤井川逸八」（細判）がある。

●相撲絵「鬼面山谷五郎 出羽海金蔵」（この頃か。天明4年～寛政2年〈1784～90〉とも。間判錦絵。勝春朗画。東京国立博物館蔵）

20 鬼面山谷五郎 出羽海金蔵（国立国会図書館）



※「勝春朗画」の落款のある間判相撲絵二枚の内の一枚。

●役者絵「五代目市川團十郎の悪七兵衛景清 二代目市川門之助の畠山重忠」（1月。細版注錦絵。無款。版元未詳。31.9×13.8。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

注）細版：横小奉書の縦3分の1。約

※1月、市村座「若紫江戸子曾我」に取材。

天明5（1785）乙巳 26歳 勝春朗、春朗、春朗改群馬亭、（可笑門人雀声）

【第二期春朗期】

◎天明5年～6年（1785～86）を第二期春朗期とする。勝川派の画風を消化した時期とされる。

◇この頃、江戸で寿司、天麩羅、蕎麦、鰻蒲焼の屋台が増える。

◇相撲興行（江戸場所は不景気のため開催されず）。

◇5月25日、石川豊信没（75）。浮世絵師。

○前野良沢、『蘭日辞典』。

○山東京伝、洒落本『令子洞房』。黄表紙『江戸紫艶気樺焼』。

○大田南畝、狂歌撰集『徳和歌後万歳集』。

○鳥居清長、絵本『絵本物見岡』（江戸名所絵）。

【勝川派から距離を置き、群馬亭と称す】

★この頃、勝川派から距離を置き、群馬亭と称す。

※寛政6年（1794）の「拈図」（寅南呂注。8月頃。摺物）には、妻の死を悲しみ「君馬亭春朗画」と表記して、「群馬」ではなく特別に「君馬」を用いている。「群馬亭」は今年と翌6年の2年間だけ使用し、「春朗」が正式な号とされる。

注）寅南呂：寅の年、南呂は8月の異名。

【貧窮で唐辛子や柱暦を売る】

★群馬亭と改名する事で、一旦勝川派から離れたと思われる。そのため貧窮生活となり、唐辛子売りや柱暦売りをしたとされる。

※「此の頃、小伝馬町（筆者注：〈現東京都中央区日本橋小伝馬町〉）に住し、専ら狂歌の摺物を画く。従来摺物（筆者注：版元の企画によらず個人的に依頼されて描くもの）は錦絵とことなり別に画法ありて、風趣賤しからざるを旨とす。宗理の摺物もとより超凡にして、乗り請ふ者多しと雖、未だこれを専業とし、口腹を養ふに足らざるなり、貧困殊に甚かりし。よりにて業を転じ活計をなさんとすること屢なり。宗理一日七色蕃椒（筆者注：七色唐辛子）を売りあるきしが注1、売れずして止む。（本文割注）七色唐がらしは、陳皮、胡麻など、七種と唱へ、食物の味を助くる料なり。些少の資本にて、調整し得るものなれば、これを売るものは、大抵貧窮人なり。又歳晩（筆者注：年の暮れ）に際し、柱暦注2をうり歩行きしが、浅草蔵前へ来りし時、先師春章夫婦に行き逢い、面目を失ひしと。（本文割注）此のこと、北斎嘗て地本問屋山藤に語りしよし」（『葛飾北斎伝』p46 句読点・ルビは筆者による）。



21 著作堂（曲亭馬琴）「近世流行商人狂哥絵図」（国立国会図書館デジタルコレクションより）

注1）江戸の唐辛子売りは、売り物の入った六尺（180 cm）ほどの大きさの張ぼての唐辛子を背負って「とんぐたうからし ひりゝとからいはさんしよのこ すわぐからいほこしよの粉 けしの粉 胡麻のこ ちんひの粉 とんぐぐ たうがらし」（「近世流行商人狂哥絵図」より）のような口上を述べながら売り歩いたという。

注2）柱暦：柱などに貼る暦。

※引用文中「宗理」とあるが、春章存命中の記事であるので寛政4年とする。「宗理」は後の名を引用したものか）。

※「群馬亭」：「群」の「君」は夫人、「羊」は美の意味。「馬」は「午」、「亭」は「至る」とも訓む。故に「美しい妻が馬に乗って来る」の意。丙午に生まれた女子は、気が強く男を食い殺すという迷信があり、その前年の結婚を控える風習があることから、翌年の丙午での結婚を意識した署名だという（安田剛蔵『画狂北斎』p41）。

群れる馬のイメージから子ができた喜びからの改名という見方もある（瀬木慎一『画狂人北斎』 p43）が、年代が合わない。

●黄表紙『^{おんねんうぢのほたるび}怨念宇治の螢火』（二冊。作者不明。勝春朗画。松村屋弥兵衛版。国立国会図書館蔵）
※第2巻末尾の絵に描かれた葛籠の脇に「勝春朗画」とある。北斎の自画作とも言われる。

22『怨念宇治の螢火』最終丁（国立国会図書館）



【雅号の推移】

芥川龍之介は「^{がごう}雅号」において次のように述べている。北斎の落款号の推移について考察する上で示唆的である。

「僕は昔の文人たちの雅号を幾つも持つてみたのは必ずしも道楽に拵へたのではない。彼らの趣味の進歩に応じておのづから出来たものと思つてゐる」（『続澄江堂雑記』四「雅号」大正14年11月12日条）

【「改」は「あらため」 改号は約30】

※北斎はたびたび号を変え、前号の後に「改」を入れることが多い。本稿では「かい」とは読まずに「あらため」と読む。ちなみに北斎は生涯に号を改めること約30回といわれる。更にいくつかのヴァリエーションを加えると非常に多くの落款となっている。

●黄表紙『^{おんねんうぢのほたるび}親譲鼻高名』（正月。中本三冊^{かしょう}可笑門人雀声（北斎の戯作名か）作。春朗^{あたらため}改群馬亭画。松村屋弥兵衛版。19.2×14.5 島根県立美術館：永田コレクション/国立国会図書館蔵）

※本書に勝川春章の「^{だんじゅう}団十郎の暫図」を写す。享和元年（1801）、『^{げかいたわけはなをちてんぐ}下界驪鼻落天狗』と改題・再摺される。 23 親譲鼻高名：最終丁（国立国会図書館）



●役者絵「^{せがわきくんのじょう}三代目瀬川菊之丞 白酒売お菊」（2月頃。細版錦絵。春朗画 29.0×13.4）2月、桐座「^{ごへんげ}五変化の一 初代菊之丞十三回忌」に取材。あるいは寛政3年（1791）3月中村座「^{すけろくめかりのぼたん}助六 縁牡丹」に取材か。

●錦絵「^{あちのせき}茶の湯」（「^{あちのせきにびじん}茶席二美人」とも。この頃か。中判。春朗画。^{つたやじゅうざぶろ}蔦屋重三郎版。21.0×15.7 フランス国立図書館/日本浮世絵博物館蔵）

※茶室の茶釜の脇で亭主の女と客の女が手をついて挨拶している図。松斎沙明（江戸後期に陶工で茶道に通じた同名の人物がいたが当人か不明）の狂歌「茶にあらず/われは狂歌のすき屋より/にぢりあからん御一席まで」、宿屋飯盛（石川雅望）の狂歌「^ろ炉の釜の/音に/きこへし/よみ人の/うたは/格別/たぎり/たるもの」が添えられる。

天明6(1786) 丙午 27 歳 群馬亭、春朗改群馬亭、春朗、勝春朗、(白雪紅) : きみ

(19 歳)

◇全国飢饉。

◇1月22日、江戸大火。

◇2月9日、日光山大火。

◇5月19日、歌川国貞(三代豊国)生(～1864)。

◇7月12日～18日、集中豪雨で利根川が氾濫により隅田川洪水。本所・深川地区浸水。

◇9月8日、将軍徳川家治没(50)。

◇8月27日、老中田沼意次失脚。

◇相撲興行(3月、浅草八幡宮、11月、浅草八幡宮)

◇深川の無宿養育所、地続きのため逃亡者が多く廃止。寛政2年(1790)、佃島沖に人足寄場を設置。

◇烏亭焉馬(1743～1822)、噺の会を始める。狂歌等を通じ大田南畝(蜀山人)らと親交あり。五世市川團十郎の後援者。江戸落語中興の祖といわれる。大工の棟梁で、住まいのある本所相生町(現東京都墨田区緑1-3-4)にある堅川から「立川焉馬」や、市川團十郎をもじって「立川談州楼」「談州楼焉馬」なども名乗った。

【北斎結婚する】

★きみ(19歳)と結婚。(この頃か。安田剛蔵『画狂北斎』(p41)での推測)。

●黄表紙『二一天作二進一十』(1月頃。中本三冊〈合本一冊〉。通笑注門人道笑作。群馬亭画。松村屋兵衛門版。17.6×12.9 天明8年(1788)と寛政12年(1800)に『人間万事二一天作五』(群馬亭画)として改題再摺される。(島根県立美術館：永田コレクション/立命館 ARC 蔵)。

24 二一天作二進一十(島根県立美術館)

注)通笑：黄表紙作者市場通笑(元文2年～文化9年：1737～1812)のこと。日本橋通油町の表具屋。

●黄表紙『蛇腹紋原之仲町』(正月。二冊。春朗改群馬亭画。白雪紅(詳細不明)注作。榎本屋吉兵衛版)

注)白雪紅：『日本古典籍総合目録データベース』

(国文学研究資料館)及び『国書総目録』(岩波書店版)によると「白雪紅」は北斎としている。

檜崎宗重『北斎論』(アトリエ社)では、黒田源次の「作者は白雪であって白雪紅ではない。同時に画工も春朗改群馬亭画となつてゐる。そして序文を两国広小路住人前銭志門といふのが書いてゐる。年表の記者に従ふと『白雪紅 群馬亭が一時の仮号なるべし』といふことであるが、此筆法から言ふと前銭志門も群馬亭の異称であらう」という記事を紹介している(p32)。『黄表紙総覧』(棚橋正博)では北斎としていない。

●黄表紙『我家楽之鎌倉山』(正月。中本二冊。合本一冊。「わが家楽の釜盃」の意。



作者名なし。群馬亭画。榎本屋吉兵衛版 島根県立美術館：永田コレクション/東洋文庫蔵）。『年譜』では「群馬亭画作」は誤りとする。

●黄表紙『新蛇腹細見臍』（二冊。可笑門人雀声作。画工群馬亭画。榎本屋吉兵衛版。島根県立美術館蔵）

●黄表紙『前々太平記』（中本五巻五冊。最終丁に「自惚山人戯作」とある。勝春朗画。花押。榎本屋吉兵衛版。17.2×12.6 島根県立美術館：永田コレクション/立命館大学蔵）

※正徳五年（1715）刊の軍記物語、『前々太平記』（平住専安作。号：橘墩）を下敷きにしたものとする。聖武天皇からの歴史を扱ったもの。自惚山人は、日本橋横山町一丁目の煙管屋・池田屋久三郎。北斎の弟子で浅野（朝野）北水と号す。天文学を学ぶ。

【天明年間の北斎自身の黄表紙著作はない？】

●黄表紙『大仏左捨』（白山人可候作。画工名無（きよろり戯作とも）。三冊。国立国会図書館蔵。寛政5年（1793）に『東大仏楓名所』と改題再刊されている）

注）白山人は北斎とする説があるが、疑問視されている。「可候」は寛政10年（1798）『化物和本草』で用いられ、他所で自身「そろべく」とし、その由来を述べているが、本稿では一般に称される「かこう」と読む。但し、白山人可候と寛政10年からの可候が同一人かは疑問視されている。

「棚橋（正博）氏はこれを（筆者注：白山人を北斎とする説）否定して、可候を石山人（物蒙堂礼、狂名 盪 雨盛）と同一人とし、併せて、北斎作、『竈将軍勘略之巻』（寛政十二年：1800刊）の跋文に『初而之儀ニ御座候得ば（云々）』（筆者注：黄表紙の著作は初めてなので）とあることから、天明年間の北斎自身の黄表紙著作はないとする」（棚橋正博『黄表紙総覧 中編』日本書誌学大系48〈昭和61年〉の説を、WEB「浮世絵文献資料館」天明六年の項で紹介）。

すなわち寛政12年の『竈将軍勘略之巻』を以て黄表紙の初作としている。また、安田剛蔵「北斎の黄表紙 その四」季刊『浮世絵芸術』43号）も同様に白山人＝北斎を否定している（『年譜』による）。

曲亭馬琴『近世物之江戸作者部類』（岩波文庫版）に「可候 文化中の臭（マ）草紙に、この作者名見えたが、久しからずして身まかりしといふ。何人なるをしらず。没年月は『墓所一覽』に見えたり」（p72）とある。馬琴が可候を知らないはずはないので、白山人可候は、北斎ではないと思われる。

●役者絵「団十郎と菊之丞」（正月。細判錦絵。春朗画。奈良県立美術館蔵）

※画中に「かげきよ市川団十郎 女ぼうあこや瀬川菊之丞」とある。五代団十郎は天明6年、景清役で大当たりをとったという。

●役者絵「四代目松本幸四郎 よどや手代新七」（9月頃。細判錦絵。春朗画。松村弥兵衛版か。29.5×13.6 すみだ北斎美術館・ピーター・モーリス・コレクション蔵）

※9月9日より桐座で上演「室町婦文章」の二番目大話、浄瑠璃「高麗菊浮名色入」に取材。松本幸四郎（1737～1802）は四代目。屋号は高麗屋。

25 四代目松本幸四郎 まつもとこうしろう よどや手代新七 てだいしんしち (すみだ北斎美術館)

※9月9日より桐座で上演「室町婦文章」の二番目大話、浄瑠璃

「高麗菊浮名色入」に取材。松本幸四郎 (1737~1802) は四代目。

屋号は高麗屋。
●役者絵「市川八百蔵 いちかわやちやうざう つか元ぎつね」(細判錦絵。春朗画。ホノルル美術館蔵)

※腕組みをして見栄を切る八百蔵。

●錦絵「天神図」(この頃か。幅広細判。勝春朗画。島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※礼拝用に表具装にして販売された図。図は、梅と松の木を背後にして、杓を持って座る正装した菅原道真を描く。

●錦絵「両国の水茶屋」(細判。春朗改群馬亭画。島根県立美術館蔵)



天明7(1787) 丁巳 28歳 春朗、勝春朗：きみ(20歳)、富之助(1歳)

【第三期春朗期】

※天明7年(1787)~寛政4年(1792)までを第三期春朗期とする。勝川風を残しつつ、春朗自身の特徴が出る時期。

◇天明の大飢饉。全国打ちこわし始まる。

◇相撲興行(5月、浅草八幡宮(米価高騰のため中止)、11月、浅草八幡宮)

◇4月15日、徳川家斉、第11代将軍となる。

◇5月20日、深川、四谷、青山辺で米屋が襲われる。深川では六間堀(現東京都江東区常盤辺)の者たちが森下町の米屋を襲う。5月21日、本芝、高輪、新橋、京橋に広がり、夕方には神田、日本橋、本郷にも広がる。5月24日に鎮静化。

◇6月19日、松平定信(陸奥白河藩第三代藩主)、老中に就任。

◇松平定信による寛政の改革(寛政5年：1793まで)。緊縮財政。重商主義。思想統制。庶民の儉約。幕府批判の禁止。厳しい統制に対し、狂歌に「白河の清きに魚も住みかねて元の濁りの田沼恋しき」と、以前の田沼時代が恋しいとさえ詠まれた。白河は、定信が陸奥白河藩の養子であったことからこう呼ばれた。

◇11月9日、新吉原角町仲之町より出火。吉原全焼。

○森島中良(宝暦6年~文化7年(1756?~181))『紅毛雑話』(オランダについての知識を書いたもの。第4巻にはオランダの画法が述べられているので、北斎の幾何学的描法を示す『略画早指南』(文化9年：1812)に影響を与えたとする見方がある(リチャード・レイン『伝記画集 北斎』)。

【長男誕生】

★北斎の結婚2年目なので、この頃長男富之助生まれると推定。『画狂北斎』(安田剛蔵)

では天明7年(1787)～寛政元年(1789)の間としている(p31)。

★この頃、日本橋小伝馬町に住むか(現東京都中央区日本橋小伝馬町)。(大久保純一『北斎の富嶽百景』p67による)。

●芝居絵本『大銀杏根元曾我』(1月頃。二冊。春朗画。沢村庄五郎版。ボストン美術館蔵)。※1月15日より上演の中村座「大銀杏根元曾我」に取材。

【絵暦・摺物を描く】

●絵暦「五代目市川團十郎の暫」(1月。色紙判色摺。春朗画。独ケルン東洋美術館蔵)
※前年の冬、桐座の顔見世に団十郎が三浦荒次郎役で演じたものに取材。隈取りした団十郎の上半身の絵は春朗が描く。他、勝川春英、歌川豊国、歌川国政らが担当。

図の右に「焉馬相生町松寿読」(相生町に住んだ烏亭焉馬：号松寿庵の詞書)とある。焉馬は団十郎の後援会「三升連」(団十郎の紋「みます」から命名)を主催していて、団十郎に関わる絵入りの暦を毎年制作した。図左の丸枠に大小月が描かれる。

※「絵暦」(当時は「大小」と呼んだ)は、月齢により毎年の大小月が変わることから、当該年の大小月を示す暦をいう。絵入りで描かれるものであるが、後年は判じ絵風の描き方が主流となる。⇒明和2年(1765)「絵暦・錦絵誕生」の項参照。

※「摺物」は、商業的販売と異なり、金銭的余裕のある個人や狂歌グループなどからの注文により制作する画図等をいう。



26 五代目市川團十郎暫 (ケルン東洋美術館：『2005 北斎展図録』より転載)

●役者絵「五代目市川團十郎 大星由良之助」(8月頃。細判錦絵。春朗画。太田記念美術館蔵)。

※8月1日より上演の桐座「仮名手本忠臣蔵・九段目」に取材。天明3年(1783)に同画題の絵(討ち入りの姿)がある。

●役者絵「二代目市川門之助 すけつね」(1月頃。細判錦絵。春朗画。蔦屋重三郎版)。
※1月15日より上演の桐座「雪齋幸曾我」に取材。

●役者絵「嵐村治郎 せうく(少将)」「嵐村治郎 国行むすめ おれん」(1月頃。細判錦絵。春朗画。57.0×46.0 中右コレクション蔵)。

※1月15日より上演の中村座「大銀杏 根元曾我」に取材。

●役者絵「岩井半四郎 戸無頼」(8月頃。細判錦絵。春朗画。ボストン美術館蔵)。

※8月1日より上演の桐座「仮名手本忠臣蔵」に取材。

●役者絵「顔見世新狂言絵尽」(11月頃。細判錦絵。落款不明。中村座上演に取材)があるという(井上和雄『浮世絵標準画集 北斎』に〈天明七年十一月、中村座に出演せる

「顔見世新狂言絵景」と題する細版役者絵を描く（p25）とある。

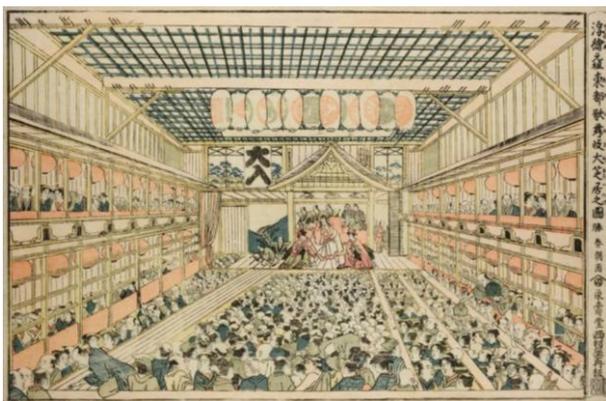
●役者絵「三代目佐野川市松 けいせい大よど」（細判錦絵。春朗画。29.7×13.8 版元未詳。島根県立美術館：永田コレクション）4月中村座「けいせい井堤箭（ㇿあり）」より。

【浮絵を描く】

●錦絵「浮絵元祖東都歌舞岐（ママ）大芝居之図」（11月。横大判。勝春朗画。西村屋与八版。26.3×38.5 大英博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/ケルン東洋美術館/太田記念美術館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※舞台上の演目や提灯に書かれた役者の定紋から、11月1日よりの桐座（市村座の控櫓注2）の顔見世「三庄陸花姫」に取材したもの（『秘蔵浮世絵大観別巻』解説）

とされるが、一方で、葺屋町（現東京都中央区日本橋堀留1丁目）にあった市村座の場内風景（『北斎クローズアップⅢ』p84）ともいわれる。



27 浮絵元祖東都歌舞岐大芝居之図（大英博物館蔵）

注1）「浮絵」：西洋画の遠近法を取り入れ、浮き出して見える画法で、奥村

政信（1686～1764）が「近江八景」「吉原大門図」などの浮世絵に採り入れられたのが初めという。その後、歌川派の祖・歌川豊春（1735～1814）や北尾重政（1739～1820）がより正確に透視画法を取得した。歌川派のみならず北斎の師・勝川春章なども取り入れた。

注2）控櫓：興行権のある江戸三座（中村座・市村座・森田座）が負債その他の事情で興業が出来なくなったときに代わって興行する権利を持つこと。仮櫓ともいう。中村座は都座、森田座は河原崎座と控櫓は決められていた。

※当時の芝居は二本立てで、明六つ（朝5時～7時頃）から始まり夕七つ（夕方3時～5時頃）まで及ぶ。夏季・冬季により時間のずれがある。

天明8(1788) 戊申 29歳。（群馬亭）、春朗：きみ（21歳）、富之助（2歳）

◇相撲興行（4月、本所回向院、11月、本所回向院）。

◇7月24日、田沼意次没（70歳）。

○喜多川歌麿、絵本『虫撰』（昆虫の写実絵）。

●黄表紙『人間万事二一天作五』（通笑門人道笑作。群馬亭画。松村屋兵衛門版。天明6年：1786の『二一天作二進一十』の改題再摺本。落款は天明6年のまま）

●役者絵「三代目瀬川菊之丞おそめ」（細判錦絵。春朗画。30.5×13.3 北斎館蔵）

※2月、桐座「おそめ久松浮名の初霞」に取材。黒の蛇の目傘を広げて肩にし、黒の御高祖頭巾を被り、岸边に立つおそめ役の菊之丞。久松との道行きの場面。

●役者絵「三代目瀬川菊之丞 久米之助」（1月頃。細判錦絵。春朗画）

※1月15日より上演された桐座「けいせい^{なとりぞう}優曾我」に取材。

●役者絵「五代目市川団十郎^{いちかわだんじゅうじゅう} 松王丸^{まつおうまる}・市川門之助^{いちかわもんすけ} 桜丸^{さくらまる}」（春朗画。細版錦絵。版元未詳。27.2×12.2 島根県立美術館：永田コレクション）7月桐座「菅原伝授手習鑑^{すがはらでんじゆてならいかみ}」より。

●錦絵『俳諧秀逸^{はいかいしゅういつ}』（この頃か。縦中判揃物。春朗画。西村屋与八^{にしむらやよはち}〈永寿堂^{えいじゆうどう}）版）

※全何図かは不明。『北斎美術館3 美人画』（集英社）では版元不明としている。

☆〈かつこ鳥^{かつこどり}〉（22.5×15.6 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※臼の穀物を杵で突きながら郭公^{かつこう}の声を聞いている女と、隣で機織りをする手拭を被った女が描かれる。

☆〈秋の風^{あきのかぜ}〉（東京国立博物館蔵）※栈橋で、杖を突き「生」の字のある提灯を持って立っている女と、舟の中の芸者風の女とが何かを話している。「物いゑバロびるさむし秋の風」の句が記される。舟に置かれたたばこ盆に「●村屋」と版元を思わせる書込みがある。

28 秋の風（東京国立博物館）



☆〈日に濡れて^{ひにぬれて}〉（21.8×16.1 すみだ北斎美術館/江戸東京博物館蔵）



※黒塗りの傘を小脇に抱える女と、団扇と虫籠のようなものを持つ女房が橋を渡る。二人の着物は背後からの風で前に靡いている。「日に濡れて月にミをさす涼みかな」とある。

29 日に濡れて（すみだ北斎美術館）

☆〈つきの友^{つきのとも}〉（18.7×15.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※川を行く舟が見える座敷で、座って顔を上げている女と、立って右手で襟を触っている女。「川かみとこの川しもやつきの友」とある。

☆〈水うてや^{みずうてや}〉（21.8×16.3 すみだ北斎美術館蔵）

※桶の水を撒いている若衆を見ている美人。宝井其角の俳句「水うてやせみも雀も濡れるほど」が添えられる。

●錦絵『中山王来朝図^{ちゅうざんおうらいちようず}』（間判。「琉球使節来朝図^{りゅうきゅうしせつらいちようず}」とも。この頃か。2点確認されている。春朗画。はりまや^{はりまや}（播磨屋^{はりまや}）新七版）

※この頃の琉球使節来朝（江戸上り・江戸立ち）は明和元年（1764）の将軍家治襲職の祝いのための使節（慶賀使）、寛政2年（1790）の将軍家斉の襲職祝いの使節（慶賀使）が記録されているが、明和元年（1764）時の北斎は5歳であるので、あるいは寛政2年（1790）、31歳頃の作品か。または、来朝使を描いた従来多くの絵などを見て描いたものか。

☆〈楽童子 虎旗 跟伴〉 (32.3×21.8 太田記念美術館：長瀬武郎コレクション蔵)

※楽童子 (琉球語で「やつとんつう」と発音する) は、琉球来朝使節の中で、音楽や舞踊を担当する15歳から18歳の少年たちをいう。江戸に上った際に、座って演奏する室内楽「御座楽」(「おざがく」とも) を演奏した。きらびやかな綸子や縮緬の琉球衣装や、びらびら簪をつけた美少年たちが評判であったという。

図は、二人の少年が、虎を描いた幟旗(虎旗)の下、一人は馬に乗り、一人はその後ろにつき、琉球風の衣装の男たちに囲まれて進んでいる。跟伴は、役人の従者で、漢名で言う。

☆〈中山王親雲上 衣家 跟伴〉 (32.3×21.8 本図はフォッグ美術館注にあるという。『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』 p113 より)

注) フォッグ美術館：アメリカ・ハーバード大学附属美術館。

※中山王は、中山(琉球)の王の意味。中国から中山王の冊封(古く中国で、天子が臣下や諸侯に冊という詔をもって爵位を授けた)を受けるのを慣わしとしていた。親雲上は、最上位の位階。

【以下、天明年間】

勝春朗、春朗、勝川春朗、印：春朗、(花押)

●錦絵「浮絵 源氏十二段之図」(天明5年～寛政2年〈1785～90〉)。横大判。勝春朗画。西村屋与八版。25.8×38.0 ポストン美術館/太田記念美術館：長瀬コレクション/東京国立博物館/オランダ国立民族学博物館蔵)

※牛若丸と三河国矢矧宿の長者の娘浄瑠璃姫との恋を語った御伽草子『浄瑠璃十二段草子』四段目「外の管弦」を主題にしたもの。

遠近法で描く。図は、庭先で牛若丸が吹く横笛の音を、座敷の奥で浄瑠璃姫が聴いている場面。



30 浮絵 源氏十二段之図 (ポストン美術館蔵)



31 パブリックメイン美術館 (『名品揃物浮世絵9 北斎II』より)

【春朗期の最も早い肉筆画(版下絵)】

●墨絵『風流東都方角』(天明5年～天明7年〈1785～1787〉)。10図。墨摺。西村屋与八版。ヴァイクトリア・アンド・アルバート美術館蔵)

※扇形枠やハート形枠に描き、周りに画題が大きく記されている。この図案は、鳥居清長

(1752～1815)「江戸八景」(細版錦絵。安永(1772～81)後期)で既に試みられている版下絵ではあるが、春朗期の肉筆画として20代の直筆で、最も早い時期の絵。江戸の名所シリーズを企画したもの。「東都方角」は、「江戸の名所あちこち」くらいの意味と思われる。

☆〈柳島法性寺妙見堂の図〉(春朗画。18.9×25.7)

※妙見堂の松の側の休み所で若衆とくつろぐ女二人。妙見堂(現東京都墨田区業平5-7-7)は、柳島妙見山法性寺といい、「柳島の妙見さま」と親しまれている寺。隣には料亭「はしもと」があり、日本橋方面から屋形船や猪牙舟で参詣に来て、その後料亭で遊興する客が多かったという。

図左の影向松に本尊が降臨し、白蛇が住んでいたといわれる。白蛇を描いた絵馬が柵に掛けられている。



32 柳島法性寺妙見堂の図 (グイットリア&アルパート美術館)

【印号・辰政と雷震の由来】

北斎はこの寺の「開運北辰妙見大菩薩」(北斗七星を祀る菩薩)を信仰していた。後に勝川門を離れた北斎は生活に窮し、筆を折ろうとまで考えたが、妙見様へ21日間参詣し、満願の日の帰り道、落雷に遭って失神。そこから雷震注の号を得たという。また、寛政8年(1796)頃から使い始めた印号「辰政」は「北辰」(北極星)から得たものともいわれる(『葛飾北斎伝』p54)。

「雷震」の「震」も「辰」(北辰)のもじりで、雷に震えたことに掛けていると思われる。

☆〈吉原〉(春朗画。17.7×25.1)

※花魁三人の側に立つ男。それを見ている二人の男の図。吉原は「遊女三千」といわれた(大正2年成光館出版部『趣味研究 大江戸 全』所収、佐々醒雪「江戸の俗謡と上方」より)。

☆〈隅田川木母寺注の図〉(春朗画。18.2×25.0)

※煙管を吸う女と傍にいる男。男に手を差し伸べる女。遠景には侍と女の二人連れ。注)木母寺:現東京都墨田区堤通2-16-1。天台宗の寺で、能「隅田川」の梅若山王権現の舞台であるところから古くは梅若寺ともいわれた。木母寺は「梅」の字を二つに分けてつけられたものという。

能楽では、吉田少将惟房の子、梅若丸は5歳の時に父を失い、7歳の時に比叡山で修行していたが、山僧の争いから逃れて大津に行ったところ、信夫藤太という人買いに欺かれて隅田川まで来た。ここで病に倒れ「尋ね来て問はば応えよ都鳥 隅田川原の露と消えぬと」の歌を詠み、3月15日、12歳で亡くなった。たまたま天台の僧、忠円がこの地

を訪れ、梅若のために塚を築き、一株の柳を植えた。翌年の命日に里人が弔っているときに、梅若を探し、悲しみ狂いながらたどり着いた母親が里人と共に供養していると、その夜、塚の中に我が子の姿が現れたというもの。

☆〈無題〉（無款。17.7×25.3）

※二頭の獅子像の前の三人の女と三人の男が参詣する図。背後に石燈籠の図。

☆〈神田明神注〉（春朗画。18.1×25.0）

※鳥居の脇の休憩所で休む男の子。鳥居の所に立つ二人の女。下の階段から上ってくる男の図。

注) 神田明神：現東京都千代田区外神田2-16-2。江戸三大祭の一、神田祭で知られる神社。神田・日本橋・秋葉原・大手町・丸の内・旧神田市場・築地魚市場など108町会の総氏神である（Wikipediaより）。

☆〈無題〉（無款）

※寺の前の広場に立つ二人の女に向き合う坊主。女の後ろに侍と供の男。寺の正面入り口に二人の人。

☆〈貴船明神社注〉（無款。17.8×24.5）

※頭巾の端を口にくわえる女。侍が二人。右側に参詣する男女。絵の中に筒井筒と竹が描かれる。

注) 貴船明神社：現東京都品川区西品川3-16-31。品川(旧三ツ木村)の産土神(その土地の鎮守神)。この頃は目黒川の南側にあったといわれるが、現在は川の北側に建っている。

☆〈根津権現注の図〉（春朗画。17.5×24.7）

※図は、権現社の脇の小川に手を入れる女と、その脇に立つ若侍と揚帽子(角隠し)を被った二人の女。その前で跪く伴侍を描く。

注) 根津権現：現東京都文京区根津1-28-9。根津神社と呼ばれる。江戸期には「権現」と称していたが、明治期に神仏分離政策で「権現」が禁止となった。社殿は5代将軍綱吉による造営。門前に根津遊郭があったが、東京大学が近くに移転したことに伴い深川の洲崎に移転した。

☆〈目黒不動注〉（無款。17.1×25.1）

注) 目黒不動：現東京都目黒区下目黒3-20-26。瀧泉寺の通称名で関東最古の不動霊場。大同3年(808年)、この地に立ち寄った慈覚大師・円仁の夢に顔面が青黒く、右手に剣を持ち、左手に魔を縛る縄を持った恐ろしい形相の神人が現れたので、その姿を彫刻して安置したのに始まると縁起にある。大師が敷地を定めるにあたり、持っていた仏具の独鈷(筆者注：密教の法具。両端が尖った短い棒状のもの)を投げた所から流れ出た滝が「独鈷の滝」と呼ばれ、枯れることなく流れ、また、五色不動(目黒・目白・目赤・目黄・目青)の一として江戸名所となったという。

※図は、独鈷の滝に打たれる二人の男や、同じく禊ぎのために裸でいる男二人と、その様子を見ている女。滝の脇の部屋で刺青をした裸の男と話す女等を描く。

☆〈無題〉（無款。17.6×24.7）

※屋敷門前の二人の女と一人の男。女の一人は扇子を持つ。側に供の女。後ろの垣根の側には女が歩く姿。左上にかけて川が描かれる。

●錦絵『東都方角』（天明7年～9年〈1787～89〉）。横中判。春朗画。西村屋与八版。扇面図の体裁を採る。各平均19.0×25.6）

※『風流東都方角』（天明5年～7年〈1785～87〉）。ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館蔵）と題された版下絵（10図）の着色版。現在4図確認されているという。

☆〈東叡山之図〉（東京国立博物館蔵）

33 東叡山之図（東京国立博物館）

※「両大師」と書かれた立札の側で、女たちが宴を楽しんでいる図。一人は敷いた莫座もくざに座り、二人の女は立って、頭巾を被った男と話をしている。「両大師」は、東叡山輪王寺とうがいざんりんおうじ（別称：開山堂かいざんどう。現東京都台東区上野公園14-5）の通称。東叡山の開祖天海てんかい（慈眼大師）と、天海の崇敬する良源りょうげん（慈恵大師）の二人の大師を祀ることに由来する。



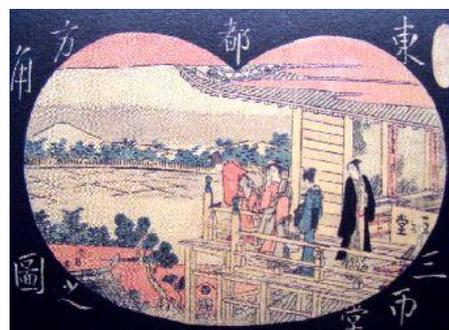
☆〈梅屋舗之図〉（すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※梅屋敷に観梅に来た人々。娘二人と煙管を持つ男、その後に風呂敷の荷物を背負った小奴が立つ。垣根の側には若衆が扇子をかざして梅を見て居る。

☆〈忍か丘之図〉（東京国立博物館蔵）

☆〈三匠堂之図〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※三匠堂は、天恩山五百羅漢寺てんおんざんごひやくらかんじ（現東京都江東区大島3-1）の3階にあった展望台。さざみ堂。明治41年（1918）に目黒区に移転した。



34 三匠堂之図（島根県立美術館）

【春朗期唯一の大型美人画】

●錦絵「花くらべ弥生の雛形」（天明3年～5年〈1783～85〉）。大判。無款。37.5×22.9 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※磯田湖龍齋の「雛形若菜の初模様」に影響を受けたものとされる。吉原の丁子屋庄蔵抱えの遊女錦戸にしきどと扇屋宇右衛門抱えの夕栄ゆきえ、それに振袖新造が、筆と硯を入れた箱を持っている。桜の花咲く木の枝にぶら下げる短冊に句などの文字を書きつけようと筆を持つ遊女の図。現存する春朗期唯一の大判美人画とされる。

35 花くらべ弥生の雛形（島根県立美術館）



●錦絵『風流男達八景』（天明年間〈1781～89〉中判揃物。春朗画。西村屋与八版）。芝居によく登場する男伊達八人に景色を結びつけた揃物。6図のみ確認されている。

☆〈荒五郎の暮雪〉（21.5×15.5 太田記念美術館：長瀬武郎コレクション蔵）

※荒五郎茂兵衛は、江戸木挽町に生まれ、堺町の奴の治兵衛と争った侠客。芸子風の女と対岸の待乳山を望む雪の大川端を道行する荒五郎は、裸足で裾を端折り、長どす（長い刀）の落とし差しの粋な姿。女は傘を閉じ左手に持って立っている、裾から高下駄を履いた右足が覗いている。

図の背景は全体に下絵風に簡略化された描き方になっている。

☆〈文七の落雁〉（22.0×16.2 シカゴ美術館蔵）

※恋人の遊女清水が舶来物のガラスの手鏡を持つ文七の髪を梳かす図。窓の外には雁の群れが描かれ、文七の渾名「かりがね」を暗示している。元禄5年（1692）に獄門に処せられた大坂のならず者「雁金五人男」の一人「雁金文七」に取材。五人男の他の四人は、庵の平兵衛、布袋の市右衛門、極印千右衛門、神鳴庄九郎。

36 文七の落雁（シカゴ美術館）



☆〈綱五郎の帰帆〉（22.8×15.9）

※二人の女を乗せ、船縁に右足をかけ手拭いを被り、竿を突き立て舟を操る綱五郎。

☆〈弥左衛門の晩鐘〉

※頭に手拭を四角に畳んで乗せ、着物の左足の裾を引き上げ、下駄を履いて鯨背に見栄を切る弥左衛門を、手拭の端を口にくわえて片膝を折って見つめる女。

☆〈伝吉の晴嵐〉（22.8×15.9 すみだ北斎美術館/大英博物館蔵）

※垣の前で袖を口にあてる女に話しかける伝吉。その足元に片膝をついて煙管を使う男がいる。

37 伝吉の晴嵐（すみだ北斎美術館）



☆〈濡髪放駒の夕照〉（22.3×15.9 すみだ北斎美術館蔵）

※歌舞伎「双蝶々曲輪日記」二段目「堀江相撲小屋の場」から取材。濡髪長五郎と放駒長吉の二人の力士が茶屋で睨み合う図。側に茶屋の娘が茶を持って立っている。

●錦絵「新板浮絵化物屋舗百物語の図」（天明年間〈1781～89〉。横大判。春朗画。西村屋与八（永寿堂）版。23.6×35.4 ポストン美術館/奈良県立美術館蔵）

※百物語は、怪談話遊びで、最後の一人が怪談を語り終えると幽霊が出現するという遊び。

図は、最後の話が終わり、部屋中に奇怪な化け物が現れ、頭を抱えて俯したり、手を合わせて拜んでいる様子が描かれる。



38 新板浮絵化物屋敷百物語の図（ポストン美術館）

※鳥山石燕（安永 5～天明 4 年〈1776～84〉の妖怪画集『画図百鬼夜行』（安永 5 年〈1776〉3 卷）を参考にしたか。また、後年、歌川国芳が「百物語化物屋敷の図 林家正蔵工夫の怪談」（天保 10 年～12

年〈1839～41〉頃。横大判錦絵。山口県立萩美術館・浦上記念館蔵）で、同様の絵を描いている。

39 歌川国芳：百物語化物屋敷の図 林家正蔵工夫の怪談（山口県立萩美術館浦上記念館）

●錦絵『江戸近郊八景』（仮題。天明年間〈1781～89〉。中判揃物。シリーズ名は不明。春朗画）



※他の絵は不明。歌川広重に同題の揃物がある。

☆〈江戸見坂夜雨〉（島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館/東京国立博物館蔵）

※蛇の目傘をさした男女二人連れ。男は手拭いを被り、荷物を背負い、着物の裾を端折り、左手に草履を持ち、裸足のまま。芸者風の女は男に寄り添い、これからの行く先を眺めているのか、来た道を振り返っているのか。道行きの場面。「月の下の屋根からさきの夜の雨 ぬれじとさすやひとつ松かさ」が左から右に記される。

40 江戸見坂夜雨（島根県立美術館）



☆〈飛鳥山注暮雪〉（21.8×15.4

東京国立博物館蔵）

※図の右上に狂歌「あすかやま 狐の尾久の王子まで 花や見にこん 雪や見にこん」が記される。雪景色の中で母親と娘がふり返っている。

41 飛鳥山暮雪（東京国立博物館）

注) 飛鳥山：徳川吉宗が享保の改革の一環として整備し、上野寛永寺の桜に次ぐ桜の名所とした。現在でも飛鳥山公園（東京都北区王子1-1-3）として桜の名所になっている。この図では



雪景色が描かれる。

☆〈両国夕照〉 (20.6×15.6 東京国立博物館/日本浮世絵博物館蔵)



※矢場の床几に左足を折って腰掛け、雪駄を下に投げ出し、刀を腰から引き出して粹に煙管をくわえている男。その脇で髪櫛に手をやり、団扇を手にした女が立っている。図の上には「弓」の字と的が描かれた吊り看板がある。富士帆波の狂歌「玉をふたつにたちわりし みせの西瓜の色も夕照」が記される。

42 両国夕照 (日本浮世絵美術館)

●錦絵「風流宇治の道の記 平等院」(天明7年～9年〈1787～1789〉。中判。春朗画。21.6×15.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※振袖の娘と女の二人が平等院の前の、川岸の道をそぞろ歩いている。

●錦絵「新板浮絵両国橋夕涼花火見物之図」

(天明2年～9年〈1782～89〉。大判。勝春朗画。西村屋与八版。24.4×37.3 島根県立美術館：永田コレクション/太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館/神戸市立美術館/日本浮世絵博物館蔵)

※色版を変えた後摺再版の「江都 両国橋夕涼花火之図」(天保中期。萬屋吉兵衛版)がある。

西村屋版の花火は、打ち上がる軌跡の上に花のように開いているが、萬屋版は、星のように10個の火の玉が開き、西村屋与八版にあった火の上の跡と右上の月が削られている。



43 新板浮絵両国橋(橋)夕涼花火見物之図 (島根県立美術館) 44 江都両国橋夕涼花火之図 (島根県立美術館)

●錦絵「浅草金龍山観世音境内之図」(天明2年～7年〈1782～87〉。横大判。勝春朗画。西村屋与八再版。24.7×37.1 ベルリン東洋美術館/太田記念美術館/島根県立美術館：新庄コレクション/日本浮世絵博物館/ホノルル美術館蔵)

45 浅草金龍山観世音境内之図 (ベルリン東洋美術館)

※浅草寺の正面にある観音堂を、垂直・水平の細かい線で正確に描いている。「浮絵」の表



記はないが、浮絵の描法で描かれる。境内には大勢の参詣客、観音堂の左側には屋根に掛かる梯子、観音堂の右奥には水茶屋が描かれる。

●錦絵「**新板浮絵金龍山二王門之図**」(天明 2 年～9 年〈1782～89〉)。横大判。勝春朗画。西村屋与八版。25.2×38.0 奈良県立美術館/島根県立美術館：永田コレクション/太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※浅草寺の山門を進むと二王門があり、その門前と門後に賑わう人々を描く。左に地主稲荷の石の鳥居が描かれ、右奥には五重の塔が見える。門の両脇に二王を描く。好評のため玉川舟調(一筆斎文調門下で寛政から享和にかけて錦絵と黄表紙挿絵を手掛ける。生没年不詳)と二代喜多川歌麿(文化 3 年〈1806〉、初代歌麿没後、その妻の夫となり二代目を称する。生没年不詳)が同構図の作品を発表している。

●錦絵『**湯治場八景**』(天明 3 年～5 年〈1783～85〉)。あるいは天明 3 年(1783)頃か。揃物と思われる。中判。印春朗。鳶屋重三郎版。すみだ北斎美術館蔵)

☆〈しゅぜんじのぼんせふ〉(「**修善寺の晩照**」) 25.0×

18.6) 46 湯治場八景 しゅぜんじのぼんせふ(すみだ北斎美術館)

※女がしゃがみ込んで上がり框から手を伸ばして三和土の下駄を揃えている。隣で上半身はだけた女が団扇を立膝で煽いでいる。着流しの男が部屋の開き窓の棧に肘を掛けてしゃがみ込んだ女を見ている。



●錦絵『**風流四季の月**』(天明 3 年～5 年〈1783～85〉)。春朗画。小判。)

※「あき」「ふゆ」を含めた 4 図の揃物と思われる。

☆〈はる〉(慶応大学メディアセンター 22.0×15.5)

※籬に囲まれた梅の木の前で、若衆と娘が立っている図。

47 風流四季の月 はる(慶応大学デジタルコレクション)

☆〈なつ〉(アレンモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション蔵)

※柳の下で涼をとる二人の女性の図。

●肉筆画「**青面金剛図**」(天明 4 年～9 年〈1784～89〉)。幅広細判着色。勝川春朗謹図之(花押)。40.6×14.1 太田記念美術館：長瀬コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/ホノルル美術館/日本浮世絵博物館蔵)

※庚申待注で祀られるため表具装にして販売された図。青色の金剛童子は病魔を除く力を持つという。足元に見ざる、聞かざる、言わざるの三猿を配し、鬼を踏みつけて立つ六手の青面金剛。猿の前には鶏の親子が描かれる。その前に番の鶏と二匹のひよこもいる。

注) 庚申待：庚申の日、仏家では青面金剛、または帝釈天神道では猿田彦の神を祭り、徹夜をする行事。この夜眠ると、そのすきに三戸(道教で、人の体内にすんでいるという三匹の虫)が体内から抜けだして天帝にその悪事を告げるといい、またその虫が人の命を短





くするともいわれる。村人や縁者が集まり、江戸時代以来、次第に社交的なものとなった。庚申会。（「デジタル大辞泉」より）。

48 青面金剛図（太田記念美術館）

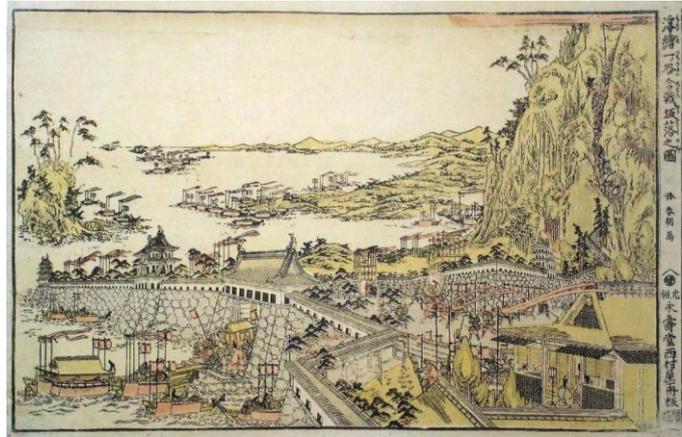
●錦絵「不動明王図」（「不動明王と二童子」とも。天明4年～9年〈1784～89〉。幅広細版。勝川春朗画謹図之（花押）。礼拝用に表具装にして販売された図。35.6×14.9 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※蓮の花や棒を持った守護神を足元に配し、右手に剣を持ち、火炎を背にして立つ不動明王の図。秋田の旧家に伝わったもの。

●錦絵「浮絵一ノ谷合戦坂落之図」（天明8年～9年〈1788～89〉。横大判。勝春朗画。西村屋与八版。24.3×37.5 日本浮世絵博物館/島根県立美術館：永田コレクション/バウアー財団東洋コレクション/ジェノヴァ（キョッサーネ）

東洋美術館蔵）

※治承8年（1184）2月、図の右に、一ノ谷の城に陣を構えた平氏の軍勢に源義経の軍が、一ノ谷の裏の断崖絶壁である鴨越を、麓の城まで逆さ落としに下る場面を小さく描く。城の外には船団が無数に描かれる。



49 浮絵一ノ谷合戦坂落之図（ボストン美術館）

●錦絵「浮絵東叡山中堂之図」（天明8年～9年〈1788～89〉。横大判。勝春朗画。西村屋与八版。24.5×37.1 太田記念美術館：長瀬コレクション/ホノルル美術館/島根県立美術館：永田コレクション/日本浮世絵博物館蔵）

※中堂の入り口の上の、緩い太鼓橋風の渡り廊下と屋根を中心に、左右対称に中堂全体を描く構図。渡り廊下の入り口から奥の中堂まで遠近法で建物と人々を描く。中堂は、根本中堂のことで、元禄11年（1698）に、現在のの上野公園大噴水の所に建立されたが、慶応4年（1868）の彰義隊の戦で焼失、その後、現在の境内である東京都台東区上野桜木1-14-11に移された。

50 浮絵東叡山中堂之図（ホノルル美術館）



●錦絵「見立忠臣蔵 七段目」（天明年間〈1781～89〉。表装仕立。春朗画。59.0×11.5 太田記念美術館：長瀬コレクション/島根県立

美術館蔵)

※祇園一方の場。大星由良之助は、敵を欺くため、京都の茶屋一方で遊興の日々を送る。ある日、長男力弥からの師直方を偵察した手紙を読んでいると、二階にいたお軽が鏡で写し読みをし、縁の下で師直側の斧九太夫が下に垂れた巻き手紙の部分を読んでしまう。

図は、縁の下に師直側の斧九太夫がおり、縁側に力弥が立っていて、二階にはお軽が下を見ている場面。

●錦絵「忠臣蔵討入」(「忠臣蔵義士夜討」とも。天明年間〈1781~89〉。大判三枚続。春朗画。西村屋与八版。右 38.0×25.6 中 38.0×25.3 左 38.0×25.1 太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館/二階堂浮世絵文庫/江戸東京博物館蔵)

※「仮名手本忠臣蔵」十一段目に取材。右一枚目の討入りから左三枚目の高師直までの連続した図。春朗時代の三枚続の大判。

【右図】屋敷の門に梯子を掛け、門の屋根の上から槍を構えたり、弓を射ったりしている。奥では師直方と浪士が刀を合わせている。その前を提灯を持ち、上半身裸の女が逃げている。

【中図】屋敷の屋根にいる禪姿の男に槍を下から向けている赤穂浪士。その側で禪姿の男が四つん這いになって逃げようとしている。手前では裏木戸から逃げる禪の男に槍向ける浪士。図左上には、師直方に使える女が槍を持って縁側に立っている姿が描かれる。

【左図】炭俵小屋にいた高師直(吉良上野介)を槍で突き討ち取る場面。小屋の屋根には、弓を構える浪士たちがいる。桶を被って裸で逃げる男が描かれる。

※春朗時代の三枚続きの絵は、本図と「西王母」(寛政6年：1794頃)のみ確認されている(2005『北斎展図録』解説)。但し、「西王母」(春朗期の作品)は墨摺である。



51 忠臣蔵討入 (すみだ北斎美術館)

●錦絵「浮絵忠臣蔵夜討之図」(天明2年~9年〈1782~89〉。横大判。勝春朗画。西村屋与八版。24.1×37.6 ベルギー王立美術歴史博物館/ミネアポリス美術館/日本浮世

絵博物館蔵)

※遠近法を使った浮絵で、吉良邸（現東京都墨田区両国3-13-9 本所松坂町公園）内での戦いを描く。前面に描かれた、天井の梁に下帯（禪）のみ身につけた侍がしがみついて難を遁れている姿がユーモラスに描かれる。

52 浮絵忠臣蔵夜討之図（日本浮世絵博物館）



●錦絵『子ども遊び揃物』（仮題。天明年間〈1781～89〉。中判。春朗画。揃物。何図出版されたかは不明という）

☆〈釣り竿を持つ子と亀を持つ子〉（カナダ・オンタリオ美術館/すみだ北斎美術館蔵）

※釣り竿を肩にかけ魚籠をつけて座る芥子坊頭の子と、頭を剃った子が亀を持って寄り添っている図。



53 釣り竿を持つ子と亀を持つ子（すみだ北斎美術館）

☆〈水出し遊び〉（「水出し」とも。22.0×16.3 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※二人の子どもが噴水の玩具で遊んでいる。一人は団扇で口元を隠している。

●柱絵「女礼」（天明2年～9年〈1782～89〉。柱絵注判色摺。勝春朗画。花押。版元不明。65.4×11.4 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）。

※絵部分と表装部分を分けて摺り込みにした図。女礼は、正月四日以降の女性の年始回りをいう。梅の花咲く雪道を高下駄を履いて、新年に年賀の挨拶に向かう武家の奥方の図。書き入れに「見かへりぬ梅が笑顔の女礼」とある。

注) 柱絵：柱に飾るための細長い判。柱隠し、柱掛けともいう。時代により異なるが、この頃は77.0 cm×13.0 cm前後のサイズ。

●柱絵「富士見西行図」（天明4年～5年〈1784～85〉。柱絵色摺一枚。勝春朗画。島根県立美術館/ホノルル美術館/太田記念美術館蔵）

※笠を持ち、墨染の衣をまとい、杖を突いている西行注の背後に、裾野に雲がかかった富士山が描かれる。文化11年～15年（1811～15）にもほとんど同構図の柱絵「富士見西行図」がある。但し、西行の向きが反転し、富士は全容が描かれている。

54 富士見西行図（2012年ホノルル美術館所蔵北斎展より）

注) 西行：元永元年～文治6年（1118～1190）。平安時代末期から鎌倉時代初期の人。北面の武士（警護の武士）で、俗名は佐藤義清であったが、出家し法名を西行と称す。歌人として全国を旅する。21代勅撰集に265



首入撰。私家集に『山家集』がある。晩年に「願はくは花の下にて春しなん そのきさらきの望月のころ」と詠み、願いどおり陰暦2月16日の釈迦涅槃の日に入寂したといわれる。

●柱絵「宝船の七福神」（天明年間〈1781～89〉）。柱絵色摺一枚。春朗画。秩父屋庄左衛門版。69.7×12.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※縦長に、船上の七福神を描き収めたもの。当初は掛幅の表装であったらしい。図の上から、祝いの文字を書きかけた白い長布を持つ大黒天。筆を持って、その長布に字を書きかける弁財天。長布の端から顔を覗かせる恵比寿。怖い顔で酒を飲む毘沙門天。烏帽子を被る福祿寿。軍配団扇を頭にかざす寿老人。一番下の布袋は船から手を出して海中の瑞亀を捕まえている。大黒天の頭上には鶴が舞っている。

●錦絵「金太郎に熊」（天明年間〈1781～89〉）。細判。春朗画。版元不明。29.8×13.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※滝の前で、鉞を担いだ金太郎と立った熊が手をつないでいる。熊は法被のようなものを着ている。

●錦絵「熊に団子をやる金太郎」（天明年間〈1781～89〉大判一枚。春朗画。西村屋与八版。38.2×25.3 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※鶴の絵柄の着物を着た金太郎が、櫛に刺した団子を小熊に与えている。足元には、籠の中に正月遊びの玩具がある。その側には二匹の小熊が伏せている。三頭の小熊は法被のようなものを着ている。

●錦絵「豆まきをする金太郎」（天明年間〈1781～89〉）。細判。春朗画。32.0×14.2 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※烏帽子を被り、刀を腰に挿し袴を履いた金太郎が、着物の右肌を脱ぎ、左手に豆を入れた升を持って豆を撒いて、足元の三匹の鬼を退治している図。北斎の描く金太郎図は鳥居派の影響を受けているという（『ピーター・モース・コレクション北斎図録』による）。

55 豆まきをする金太郎（すみだ北斎美術館）

●錦絵「二人若衆」（天明年間〈1781～89〉）。春朗。30.8×13.2 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※隅田川沿いの、塀の中に松の木がある家の前で立ち話をしている若衆が二人。一人は羽織を着て懐手をしている。一人は羽織なしの着流しの男。川の向こう岸には材木が林立しているので本所の豎川の辺りだろうか。

●錦絵「当世宮戸川十景」（天明4年～9年〈1784～89〉）。細判。揃物。版元未詳。春朗画）

☆〈こまかた〉（「駒形」30.0×13.6 島根県立美術館：永田コレクション蔵）※槍持ちの毛槍の先に子どもの尻糸が絡まっている図。



☆〈しゅひの松〉（「首尾の松」28.7×13.8 島根県立美術館：永田コレクション蔵）※対岸の首尾の松が見える座敷に立つ朱色の帯を締めた女が、髷に差した櫛に簪を当てている図。

首尾の松は、隅田川の西岸にあり（現東京都台東区蔵前1-3）、吉原へ行く男が、この松を見ながら吉原で首尾よくいくようにと祈ったとか。

56 しゅひの松（島根県立美術館）



天明9/寛政1 (1/25~) (1789)	己酉	30 歳	春朗、勝春朗、
(たけ光さや南利) : きみ (22 歳)、富之助 (3 歳)、阿美与 (1 歳)			

◇7月14日（太陽暦）、フランス革命起る（1795年8月まで）。

◇相撲興行（3月、浅草八幡宮、11月、深川八幡境内）。

◇11月19日、二代目谷風梶之助（1750~95）が小野川喜三郎（1758~1806）とともに横綱となる。

◇棄捐令（俸禄米〈切り米〉を現金化する札差への武家等の借金を棒引きにする）発布。

◇恋川春町、黄表紙『鸚鵡返文武二道』（北尾政美画〈鍬形蕙斎〉）で寛政改革の文武奨励を風刺。松平定信の著作『鸚鵡詞』（「鸚鵡言」とも）をもじった題名であり、作中で「九官鳥のこぼ」としたことで幕府の忌諱に触れ、召還されたが出頭せぬまま7月7日に没す（45）。自殺説あり。

◇石部琴好、寛政元年（1789）佐野政言が田沼意知を殿中で刺した事件を風刺した黄表紙『黒白水鏡』により、手鎖・江戸追放。画工北尾政演（山東京伝）は科料となる。

○喜多川歌麿、「潮干のつと」（魚介の写実画）。

【長女・阿美与誕生】

※この年阿美与誕生か。

【戯作の草紙を描く】

★北斎は「初年、専通笑注、および京伝、馬琴等戯作の草紙を画く」（飯島虚心『葛飾北斎伝』p48）。

注）通笑：市場通笑（1737~1812）。京伝：山東京伝。馬琴：曲亭馬琴。

【日千両・市村座の芝居絵本を描く】

★本年より寛政5年（1793）2月まで市村座の芝居絵本を描いたとされる（『年譜』による）。美人画・武者絵も開拓する。

※市村座は江戸三座の一つで、江戸日本橋葺屋町（現東京都中央区日本橋人形町3丁目2~7番地辺）にあった。座紋（ロゴマーク）は丸に橘を描くので、俗に「橘」と呼ばれた。

三座は他に、日本橋境町の中村座（現東京都中央区日本橋人形町3丁目2~7番地辺）。座紋は角切角に銀杏を描くので、俗に「銀杏」と呼ばれた。地下鉄人形町駅の北側の人形

町通りの歩道に両座の由来を書いた案内板がある。木挽町五丁目の森田座（現東京都銀座6丁目の昭和通り西側に案内板がある）を入れて三座という。『誹風柳多留』の川柳に「橋と銀杏で分る日千両注」と詠まれた（小池章太郎『考証江戸歌舞伎』p24）。

天保の改革により、天保13年（1842）から14年（1843）にかけて猿若1丁目～3丁目（現東京都台東区浅草6丁目辺）に移された。

注）日千両：魚河岸（朝千両）・芝居小屋（昼千両）・吉原（夜千両）の三箇所は一日千両の金が動くといわれるほど繁盛した。

●芝居絵本『花御江戸将門祭 市村座』（11月頃。墨摺。無款。松本屋万吉版。国立国会図書館蔵）

※増山金八他8名による画。芝居で演ずる役者群を描き紹介する。11月1日に上演の市村座「花御江戸将門祭」に取材。どの役者を描いたのか明確でない。江戸神田明神の将門祭は、5月の神田祭りでの神輿渡御や、9月の三の宮の将門塚例祭として現在も催される。

●黄表紙『福来留笑顔門松』（1月。小本二冊。市場通笑作。勝春朗画。伊勢屋治助版。画題篆（印章）に「酉春」とある。東京都立中央図書館加賀文庫/大東急記念文庫五島美術館蔵）

※最終丁図左隅に「通笑作 勝春朗画」とある。

57『福来留笑顔門松』最終丁（新日本古典籍総合データベースより）



●黄表紙『六歌仙虚実添削』（1月。二冊。たけ光さや南利作。春朗画。秩父屋庄右衛門版。東京都立中央図書館加賀文庫/大東急記念文庫五島美術館蔵）



※棚橋正博（『日本書誌学大系 48（2）黄表紙総覧 中編』）によれば作者名は春朗の仮の名の可能性があるという（『年譜』による）。

最終丁図左隅に「春朗画」とある。

58『六歌仙虚実添削』最終丁（新日本古典籍総合データベースより）

作中、お町となり平が東下りをする場面で、富士を背に松並木を行く後景は河村岷雪の『百富士』（明和4：1767）の「程ヶ谷」にヒントをえたものという（大久保純一『葛飾北斎一浮世絵風景画の大成者』p008 2023 山川出版）。

●黄表紙『流行謡混雑唱舞』（1月。二冊。美足齋象睡作。春朗画。秩父屋庄右衛門版。序文に「酉の春」とあり。国立国会図書館蔵）

●黄表紙『平治太平記』（1月。三冊。市場通笑作。西村屋与八版。春朗画）

●黄表紙『臭気靡方屁倉栄』（1月。二冊。錦林堂軒東戯作。春朗画。西村屋与八版。国立国会図書館蔵）

●役者絵「二代目小佐川常世 月小夜」（1月頃。細判錦絵。春朗画）。

※1月より上演の中村座「江戸富士陽曾我」に取材。

●役者絵「五代目市川團十郎 男達荒五郎茂兵衛」（1月頃。細判錦絵。春朗画）。

※1月15日より上演の市村座「恋便仮名書曾我」に取材。

●役者絵「三代目瀬川菊之丞 鬼王女ほう月さよ」（1月頃。細判錦絵。春朗画。27.5×12.0 すみだ北斎美術館：ヒーター・モース・コレクション蔵）

※1月15日より上演の市村座「恋便仮名書曾我」に取材。鬼王の女房月さよの役。

●役者絵「五代目市川團十郎かげきよ」（細版錦絵。春朗画。版元未詳。30.9×14.3 島根県立美術館：永田コレクション）※松ノ木の前で、刀を抜きかけている図。市村座「恋便仮名書曾我」より。

●役者絵「三代目大谷広次 濡髪ぬれがみの長五郎」（細判錦絵。春朗画。版元未詳。28.0×12.9 島根県立美術館：永田コレクション蔵）5月中村座「江戸富士陽曾我」より。

※丸に十字の紋のある着物の前をはだけ、米俵こめたねに右足を掛けて見栄を切る大谷広次。

●絵暦「すごろくの子供」（「十六むさしむさしで遊ぶ子ども」とも。1月。色摺。春朗画 12.8×9.0）※「津和野藩伝来摺物」にあり（島根県立美術館：永田コレクション蔵）。

●絵暦「鶏にわとりに餌えさをやる母子」（1月。色摺。春朗画。『年譜』による）

【以下、天明末～寛政初期】

勝春朗、春朗

●役者絵「中むら里好なかむらりこうの女だてしまのおかん」（天明7年～寛政4年〈1787～92〉細判錦絵。勝春朗画。北九州市立美術館蔵）

●役者絵「三代目市川高麗蔵 宗盛むねもり」（天明7年～寛政4年〈1787～92〉細判錦絵。落款不明：春朗または勝春朗か）

●錦絵「宝船たからぶね」（天明7年～寛政4年〈1787～92〉。1月。大判。春朗画。永寿堂〈西村屋与八〉版。東京国立博物館蔵）

※龍頭の宝船に所狭しと乗りあう七福神。図の上から、槍を持つ毘沙門天、飛んでいる鶴を指差す弁財天、巻物を持つ寿老人、団扇をかざす福祿寿、烏帽子を被り釣竿を持って鯛を釣る恵比寿、船べりから手を差し出す布袋、同じく船べりから手を差し出し、吊り上げられた鯛を網で救い上げようとする大黒天。大黒天に向かって船べりをよじ登ろうとしている亀がいる。回文の狂歌「ながきよのトヲノネフリノミなめさめ なミのりふねの をとのよきかな」（永き世の遠の眠りの皆目覚め 波乗り船の音のよきかな）が記される。



59 宝船（東京国立博物館）

●錦絵『風流子供遊五節句ふうりゅうこどもあそびごせつく』（間判。揃物。天明7年～寛政4年〈1787～92〉。無款。近江屋与兵衛版。各平均34.2×22.9 東京国立博物館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※五節句は、人日の節句（1月7日。七草の節句）、上巳じょうしの節句（3月3日。桃の節句。ひなまつり）、端午たんごの節句（5月5日。菖蒲しょうぶの節句）、七夕しちせきの節句（7月7日。笹の節句）。

たなばた)、重陽の節句(9月9日。菊の節句)をいう。

☆〈風流子供遊五節句 無題〉

※人日の節句の祝い事の絵か。鼻の上に棒を立て、その先に鞆を乗せて笛を吹く子供。その前で小太鼓を叩いて拍子をとる子どもたち。家の窓から曲芸を見ている二人の子供。

60 無題(島根県立美術館)



☆〈風流子供遊五節句 ひなまつり〉

☆〈風流子供遊五節句 さつき〉



※端午の節句の日、長刀を持つ子ども、刀を抜く子ども、鞆に挿した刀を脇に構える子たちが、勇ましい姿勢をとっている。五月幟と鯉のぼりが立てられている。地面には菖蒲刀が置かれている。

61 さつき(東京国立博物館)

☆〈風流子供遊五節句 ふみ月〉

☆〈風流子供遊五節句 きく月〉

※赤子を背負って、菊に水をやる子ども二人を見ている母親の図。

62 きく月(東京国立博物館)



寛政2(1790)	庚戌	31歳	春朗、勝春朗	きみ(23歳)、富之助(4歳)、阿美与(2歳)
-----------	----	-----	--------	-------------------------

◇相撲興業(3月、深川八幡境内。11月、本所回向院境内)。

◇御免関東上酒製造始まる。従来、江戸での酒は下り酒(関西からの酒)がほとんどで、関東の地廻り酒は安酒でまずいとされていたが、幕府の監督のもとに江戸でも上質な酒の製造を始めた。

◇この年よりオランダ商館の江戸参府は、毎年春一回から、4年に一度となる。小倉の大坂屋、下関の伊藤屋、大坂の長崎屋、京の海老屋、江戸・日本橋本石町三丁目(現東京都中央区日本橋室町4-3と室町3丁目交差点辺。日本銀行近く)にあった長崎屋(長崎屋源衛門の宿)が宿泊所となっていた。これらの宿を阿蘭陀宿と総称した。通常20日の宿舍滞在であったが文政9年(1826)頃、シーボルトらの画策で33日の滞在、旅程日程を3カ月から5カ月にし、日本での見分期間を延ばしたという。

◇寛政異学の禁。蘭学の否定。朱子学を公認学問とし、聖堂学問所(現湯島聖堂。東京都文京区湯島1-4-25)を昌平坂学問所と改める。陽明学・古学の講義を禁止。

◇旧里帰農令(地方で没落した農民が多く江戸に流入したことを受けて、定職を持たない地方の農民を農村に帰す奨励策)。

◇奢侈禁止令。好色本禁止令。

◇江戸三座の一つ、森田座(木挽町。現東京都中央区銀座4-12-15の歌舞伎座周辺)が経営破綻で天明8年以来休座であったが、控櫓の河原崎座に興行権を譲る。

【出版統制令により極印制度等が始まる】

◇9月、出版統制令。10月以降、改印注制度となる。出版物は町奉行の管轄下になり、時代によりそのあり方が変わっていった。

製版前に版下を提出し許可印(「極」印)を画中に受け、更に、地本問屋が当番制で検閲を行ない改印注を捺す形を取る。



63「極」印「WEB浮世絵ギャラリー」より

注) 改印注: 時期による印章や検閲者の違いはあるが、この年より明治4年(1871)まで続いた。以下、参考のためにその変遷を見る。

【第1期】「極」印が使用された時代。

①寛政2年(1790): 寛政3年説あり～文化2年(1804): 文化元年説あり(極印単独使用時代): 地本問屋による当番制の「行事」が検閲し、変形字「極」を○で囲んだ印を絵の隅に捺した。

②文化2年(1805): 文化3年説あり～文化7年(1810)(極印と年月印併用時代): 「極」印と「年月」印(干支と許可した月を上下にデザインした印)の二つ捺す。

③文化8年(1810)～文化11年(1814)(極印と行司印併用時代): 「極」印と、版元から選ばれた地本問屋による「仲間」(交代制)の名を刻した行司印の二つが捺される。

④文化12年(1815)～天保13年(1842)(極印単独使用時代): 「極」印の一つが捺される。①に同じ。

【第2期】

⑤天保14年(1843)～弘化4年(1847)(名主印単独使用時代): 「仲間」の廃止。地本問屋以外の、町年寄配下の町名主による改掛印(行事印)が一つ捺される。

【第3期】

⑥弘化4年1月(1847)～嘉永5年(1852)2月(名主印双印時代): 二人の名主による印が捺される。

【第4期】

⑦嘉永5年2月(1852)～嘉永6年11月(1853)(「年月」印と「改」印の組み合わせ時代): 二つの名主印と年月がデザイン化された印(当該年の干支と次を組み合わせた印)の三つが捺される。

【第5期】

⑧嘉永6年12月(1857)～安政4年(1857)(「改」印と「年月」時代): 「名主」印

はなくなり、「改」印と「年月」印に二つを捺す。

【第6期】

⑨安政5年1月(1858)～安政5年12月(1858)（「年月」印単独使用時代）：「改」がなくなり、「年月」印のみになる。

【第7期】

⑩安政6年1月(1859)～明治4年12月(1872)（「年月」印と「改」印の3文字一印時代）：「年月」印と「改」印を一つの班に刻印した印を一つ捺す。

【第8期】

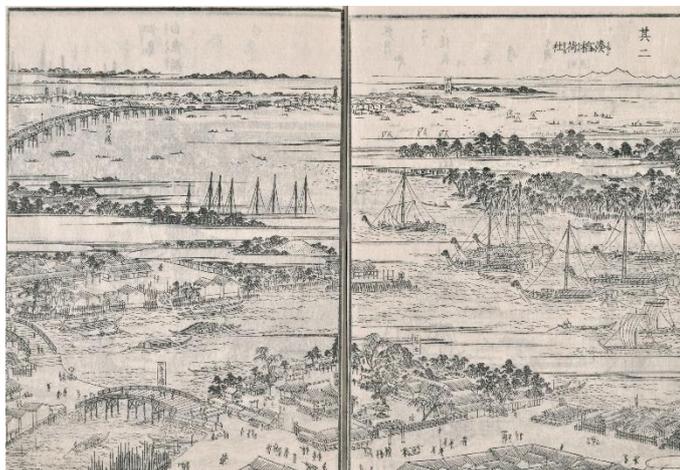
⑪明治5年(1873)1月～明治8年(1875)（「年月」印単独使用時代）：「年月」印のみを捺す。

以上、石井研堂『錦絵の改印の考証』（芸艸堂。初版は昭和7年、伊勢辰商店版）及び、高橋克彦『浮世絵鑑賞事典』（平成28年 角川ソフィア文庫）及び酒井好古堂「浮世絵学」（極改印ほか一覧表）及び小林忠・大久保純一『浮世絵鑑賞基礎知識』（至文堂 平成6年）を参照した。

※その他、出版統制令では、政治的内容を一枚絵にすることを禁止。好色本の禁止。体制に批判的な書物及び間接的に風刺する内容の禁止。風評を題材にしたかな書き本の禁止。本の奥書に著者名と版元名の記載を義務づけるなどが科せられた。

◇人足寄場設置。※松平定信が火付盗賊改方、長谷川平蔵注に命じ隅田川河口の石川島（現東京都中央区佃2丁目付近）に設置した、軽い犯罪人や虞犯者の自立支援施設。敷地1万6千坪（約52,896平米）。入所3年。赦免時に仕事道具や労働の手当の一部を積立金として支給した。職業技術の習得、心学者の講和の教育も行った。後に「ドラ孫」と呼ばれる北斎の放蕩孫がここに送られる。

注）長谷川平蔵は、旗本親子三代の通称で、火付盗賊改方の平蔵は長谷川宣以(1745～1795)。池波正太郎の小説『鬼平犯科帳』の主人公のモデル。



64 人足寄場：斎藤長秋編『江戸名所図会』

佃島 其二（国立国会図書館）右中央のやや右上の島

◇曲亭馬琴（24歳）、山東京伝（30歳）に弟子入り志願するも許されず。但し、親しく出入りすることは許される。

○山東京伝（北尾政演）、洒落本『教訓読本』。滑稽本『小紋雅話』（着物生地・小紋の面白デザイン集。余白に滑稽な短い説明を書き込んで読物の体裁をとっている。戯画風デザインは北斎に影響したか）。

○大田南畝、『浮世絵考証』（『浮世絵類考』の原題）。

○本居宣長、『古事記伝』刊行始まる。

★この頃、葛飾に住むか(翌年の絵暦「弓に的」落款より)。※この頃の「葛飾」は本所・向島地区もこのように呼称されていた。居住地の詳細は不明。

●将棋本『駒組童観抄』（『将棋童観抄』とも。一冊。高久隆作。春朗画。小本。鶴屋喜右衛門（仙鶴堂）版。北斎は、見返しに「孟子と母」（孟母断機）の一図を描く。島根県立美術館：永田コレクション/東京国立博物館/立命館大学 ARC 蔵）

65『駒組童観抄』（島根県立美術館）

※寛政2年の序文がある、安永8年（1779）刊行された同本に北斎の絵を加えたもの。孟母断機とは、孟母が織布を裂いて、学問を途中で辞めるとは、このようなことだと孟子を諫めた故事。図は、機織りをする孟母の脇で書物を読む幼い孟子を描く。寛政9年（1797）



正月の再訂版（鶴屋喜右衛門版。国立国会図書館蔵）では、北斎の画は削られる（奥付に〈寛政九歳丁巳正月再訂〉とある）。

●浄瑠璃富本『恋癖仮妻菊』（11月頃。瀬川如臯述。春朗画。蔦屋重三郎版）

※11月1日に市村座で初演の『恋癖仮妻菊』（瀬川如臯・曾根正吉・河竹文次・玉巻蕙助作）に取材。

注）富本：浄瑠璃の一派、富本節のこと。

●黄表紙『新作徳ばなし』（勝春朗）

※漆山天童（又四郎）「葛飾北斎改名考（其二）」〈書物展望2ノ6〉による（『年譜』所収）。

●役者絵「三代目瀬川菊之丞 大とうの宮れいこん」（細判錦絵。春朗画。28.9×13.5 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※11月1日からの市村座顔見世公演「岩磐花峰桶」の浄瑠璃「恋癖仮妻菊」から取材。沢村宗十郎が大塔宮の亡霊・巫女お弓を演じた。図は、大塔宮の亡霊が巫女お弓に乗り移り、大塔宮の最後の場面を描く。

●役者絵「初代尾上松助のすもふとり牛か瀬」（1月頃。細判錦絵。春朗画。30.5×14.0 太田記念美術館：長瀬コレクション/ボストン美術館蔵）

※1月15日より上演の中村座「春錦伊達染曾我」に取材）

●役者絵「市川男女蔵 男達日出の五郎」（1月頃。細版錦絵。春朗画。蔦屋重三郎版。シカゴ美術館蔵）

※1月15日より上演の中村座「春錦伊達染曾我」に取材した錦絵といわれるが所在不明。この絵がそれに相当するか不明。シカゴ美術館蔵では「Women with disheveled」（乱れ髪

の女)としている。

66 市川男女蔵 男達日出の五郎(シカゴ美術館)

●役者絵「四代目岩井半四郎 やまぶきひめ」(「やまぶき御せん」とも。1月頃。細版錦絵。春朗画)

※1月15日より上演の市村座「卯しく存曾我」に取材。

●役者絵「五代目市川団十郎 ともへ御せん」(1月頃。細版錦絵。春朗画。蔦屋重三郎版 29.0×13.3 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※1月15日より上演の市村座「卯しく存曾我」に取材(『津和野葛飾北斎所蔵品撰』平成12年 津和野葛飾北斎美術館〈2015：平成27年に閉館〉では、寛政4年正月の市村座「若紫江戸子曾我」に取材としている)。

●役者絵「五代目市川団十郎 鳴カミ上人」(2月頃。細版錦絵。春朗画)

※2月15日より市村座(『歌舞伎年表』伊原敏郎、岩波書店)の、大坂の中山座上演の四代目市川団十郎十三回忌追善「鳴神雲絶間」に取材。「鳴カミ上人」は歌舞伎の演目。世継ぎができるよう天皇から依頼された上人は、寺院建立の約束と引き換えに願いを実現させたが、天皇が寺院建立の約束を果たさないことに怒り、雨の龍神を滝壺に封印し、干ばつの災害をもたらした。天皇の策略で美女・雲の絶間姫を上人に使わし、色仕掛けに負けた上人の隙に姫が竜神の封印を解き、雨を降らせることに成功したというもの。

●役者絵「五代目市川団十郎 近江八幡之介」(細判錦絵。春朗画)

●役者絵「五代目市川団十郎 加古川本蔵」(細判錦絵。勝川春朗画)

●役者絵「初代中山富三郎のせき女」(7月。細版錦絵。春朗画。版元未詳。30.5×13.4 島根県立美術館：永田コレクション蔵) ※9月市村座「仮名手本忠臣蔵腰越状」に取材。

●役者絵「三代目坂田半五郎 廻国修行者実ハ藤辺伊賀守」(細版錦絵。11月頃。春朗画) ※11月、市村座「岩磐花峰楠」に取材。

●役者絵「三代目大谷廣次 新がた二郎」(細判錦絵。春朗画。蔦屋重三郎版。24.8×12.8 北斎館蔵)

※1月、市村座「卯しく存曾我」に取材。新潟二郎は曾我兄弟の敵・工藤祐経方の武士。図は、右脇に鉄砲を抱え、丸に十字紋の羽織を着て、左手を刀の柄に置いて、右方向を睨み付けている様子を描いている。

●錦絵『壬生狂言注』(この頃か。春朗画。小型中判。揃物。13図が確認されているという(『2019 新北斎展図録』p312による)。各図に狂歌が添えられる。各平均 21.4×15.6 蔦屋重三郎版)

注) 壬生狂言：壬生大念仏狂言とも呼ばれる。現在でも京都壬生寺(京都市中京区坊城仏光寺北入ル)で4月と10月に演じられている。全30演目ある。仮面を付けた壬生



の郷氏が鰐口（神社の堂前に吊された大きな鈴）、締太鼓、横笛だけで無言で仏の教えを説く演劇。

☆〈女夫酒〉（「みょうとざけ」とも。日本浮世絵博物館蔵）

※「壬生狂言 女夫酒」と書いた扇子を左手に、「大念仏」と書いた扇子を右手に手に持って踊る芸者と、「壬生絵」と書いた扇子を右手に持って踊る男の図。



☆〈節分〉（日本浮世絵博物館/ミネアポリス美術館蔵）

67 節分（日本浮世絵博物館）

※節分の豆を入れた箱を持つ女の腰にしがみついた鬼の図。「みの笠の雨とうち出す●よきにぬれかかりたる鬼も十七」とある（『大揃北斎図録』日本浮世絵博物館刊 p 99 による）

☆〈座頭川渡〉

☆〈釣狐〉

☆〈花折〉

☆〈湯立〉（日本浮世絵博物館蔵）

※湯立は神前に釜をすえ湯をわかし、巫女が笹の葉束にこの熱湯をつけ、参拝者にふりかけて清める神事。注連飾りの下で大釜に湯を沸かし、その脇で烏帽子の男が、座っている女に葉束をかざしている。女は両手に鉦を持って鳴らしている。二人の後から頭巾を被った年寄りが覗いている。



☆〈桶取〉（島根県立美術館：永田コレクション/ミネアポリス美術館蔵）

68 桶取（島根県立美術館）

※唐傘をさして腰をかがめて片足を上げて女に近づく大尽と、笠を被って立つ女。



つ女。

☆〈棒振り〉（ミネアポリス美術館蔵）

※赤い被り物で口を布で塞ぎ、棒を背中に回して踊る姿。

69 棒振り（ミネアポリス美術館）



☆〈猿回〉

※座っている猿回しの膝に猿が乗って抱かれている。猿を見ながらその臭いを気にして袖で鼻を覆う女は傍らの男と手を繋いでいる。

70 猿廻（Yajifun 貼交帳より転載）

☆〈鶴〉

※烏帽子の二人の武士が仰向けの鶴にまたがり刀を突刺そうと

している。後の武士は松明を左手に掲げている。

71 鶴 (Yajifun 貼交帳より転載)

☆〈愛宕詣〉(日本浮世絵博物館蔵)



※丸頭巾を被る一本差しの男の袖を引いているお多福顔の女。狂歌師の浅草市人名が画題の下に書き入れてある。

72 愛宕詣 (Yajifun 貼交帳より転載)

☆〈性悪坊主〉※箒を逆さに持って、赤子を背負った坊主を取り押えている鉢巻姿の男。側で丸頭巾を被った二本差しの侍が見ている。

73 性悪坊主 (Yajifun 貼交帳より転載)



☆〈花盗人〉(ミネアポリス美術館蔵)

※山岡頭巾注に鉢巻をして頭に被った花盗人を、丸頭巾を被った二本差しの武士の姿をした男が捕え、その傍らで下男らしい男が盗人を縛る縄を編んでいる。田原船積「盗人を見てなふ縄の長き日の はれにハあかぬみぶの狂言」の書込みがある。



注) 山岡頭巾：長方形の布を二つ折りにしてかぶり、後頭部のところを縫い合わせ、肩にかかるところにあきを作った頭巾(「デジタル大辞典」より)。

74 花盗人 (ミネアポリス美術館)



●錦絵「新板おどりづくし」(縦細判一枚。春朗画。蔦屋重三郎版。31.7×15.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※一枚を 16 分割して、女たちがそれぞれの役柄に扮した姿で踊る所作を 16 図描く。一般に「つくし絵」と呼ばれるもので、北斎には他に「武田二十四将絵尽新板」(寛政 2 年～4 年：1790～92)がある。

75 新板おどりづくし (島根県立美術館)

●絵本番付『うれしく存曾我』(市村座。正月。無款だが春朗画と見られる。「浮世絵文献資料館」による)。

※絵本番付とは「芝居番付の小冊子。表紙に座名と狂言の外題(げだい)を、裏表紙に作者名を載せる。内容は序幕から大切まで一幕一幕の場面を絵で表わし、人物のかたわらに役名、および役者名、しぐさなどを記入したもの。芝居茶屋から発行する」(『精選版 日本国語大辞典』による)と説明される。狂言絵



本とも。

※芝居番付（歌舞伎、人形浄瑠璃で、興行の内容を書いた印刷物の総称。興行の宣伝、狂言や出演者などの案内のため、上演狂言名、初日、座名、狂言の場面、配役などを書く：同出典）の一種。

●絵本番付『岩磐花峯桶』（11月。寛政3年説あり⇒p72。市村座。無款だが春朗画と見られる。「浮世絵文献資料館」による）。

●絵本番付『大侯勅進帳』（11月。河原崎座。寛政1年、3年説あり。無款だが春朗画と見られる。「浮世絵文献資料館」による）。

●錦絵『唐子遊び』（縦大判揃物。春朗画。西村屋与八版。以下3点は揃物か）

☆〈唐子の花車ひき〉（「花車を引く唐子」とも。二枚続き。37.9×24.7 ホノルル美術館/東京国立博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/アレンメモリアル美術館：マリ・エイズ・ワース・コレクション蔵）

※天蓋を持つ子、春駒（馬の玩具）に跨る子、旗を持つ子、花車の綱を引く三人の子の図。花車は図中に描かれない。

77 唐子の花車引き（東京国立博物館）

☆〈唐子の囲碁〉（「碁盤の周りの六人の唐子」とも。34.3×24.1 ベルギー王立美術館蔵）

※唐子が数人囲碁盤の周りで大騒ぎをしている図。勝負のいざこざでもめているか。

☆〈唐子書画〉（36.6×25.2 東京国立博物館/太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※唐の子どもが六人、座り机で文字を書いたり、書き上がった巻紙を披露したり、立って本を広げたりしている。東京国立博物館では画題を「唐子遊び」（『東京国立博物館図版目録 浮世絵版画篇下』による）としているが、同画題の「唐子遊び」と混同するので、一般的には「唐子書画」とする。

78 唐子書画（東京国立博物館）

※この絵の校合摺（彫刻用に墨で縁取りした下絵）はシカゴ美術館蔵。

●錦絵『風流見立狂言』（この頃か。寛政元年頃説あり。中判揃物。7図確認されているという。春朗画。蔦屋重三郎版）

※狂言の各場面を子どもの遊びに見立てたもの。

☆〈すゑ広〉（21.8×15.4 島根県立美術館：永田コレクション/クラ



クフ美術館蔵)

※紐に掛けた布を幕にして、芝居のまねごとをする子どもたち。一人は下半身が裸で踊る。太鼓や団扇や玩具等が部屋に散らばっている。幕の向こう側からもう一人の子どもが覗いている。

79 すゑ広 (島根県立美術館)

☆〈入間ことば〉 (22.5×16.4 クラクフ国立美術館/太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※二人の子どもが座って向かい合い入間言葉遊びをしている。入間言葉は、言葉の順序を逆に言ったり、反対の意味の言葉と言ったりすること。「花の雲」を「雲の花」、「深し」を「浅し」というなど(「デジタル大辞泉」による)。間に立って行事をしている子どもは日の丸の絵柄の扇子を持っている。



☆〈しゅうろん〉 (22.5×16.8 日本浮世絵博物館/クラクフ国立美術館/太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※二人の子どもが相撲をとっている。行司役の子どももいる。狂言「宗論」の、二人の宗派の違う僧が互いの宗派の優位を言い争う内容から、二人の子どもの争いを相撲に見立てたもの。

☆〈うちさま〉 (22.5×16.0 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※縁側にいる二人の子どもと、縁側の下にいる子どもが楽しげに話している。小さな玩具の馬が踏み石の脇に置かれている。

☆〈三本柱〉 (クラクフ国立美術館/アレンメモリアル美術館：マリ-エイズワース・コレクション蔵)

※狂言からの取材。金蔵を建てるに当たり、三本の柱を一人が二本ずつ運ぶよう知恵を試された太郎・次郎・三郎冠者たちの話。三本の棒を三角形に組み合わせ、その中に顔を入れて遊んでいる図。

☆〈しどう方角〉 (「しどう方角」とも。ドレスデン国立版画館蔵)

※三人の子どもが、張り子の馬(春駒)や玩具の刀で、狂言「しどう方角」遊びをしている図という。狂言では、伯父に借りた馬が咳払いをすると暴れ出す癖があり、日頃からの鬱憤を晴らすつもりで太郎冠者が咳払いをすると、主人は落馬してしまう話からの図。

80 しどう方角 (ドレスデン版画館)

☆〈蚊すまふ〉 (日本浮世絵博物館蔵)

※太郎冠者が連れてきた者が、実は蚊の精であり、大名がその者と相撲をとり、針に刺されて失神する話からの図。軍配を持つ行事役の子ども、その前で相撲をとる子どもが描かれる。



☆〈柿山伏〉 (20.4×15.6 北斎館蔵)

※狂言「柿山伏」からの取材。出羽羽黒山の山伏が、修行の帰りに柿を盗み食いしたところ、柿の木の持ち主に見つかり、細い木の陰に隠れて猿や鳥の真似をする。見破られているとの知らず「鶯だ」と言われ、鳴き真似をしながら木から飛び降り怪我をするというもの。図は、踏み台を木に見立て、それ乗って手足を上げている子どもと、その前に座って見ている二人の子どもを描く。

●錦絵「新版(ママ)浮絵浦島龍宮入之図」(この頃か。天明年間説あり。横大判。勝春朗画。佐野屋喜兵衛版、岩戸屋喜三郎版(東京国立博物館蔵)の2種あり。26.2×38.7 太記念美術館:長瀬コレクション/すみだ北斎美術館/東京国立博物館/出羽桜美術館/ホノルル美術館蔵)



※遠近法を強調した格子模様の天井の下の所から龍宮に入る浦島太郎を、亀を頭に乗せた老人(亀の化身)が案内し、奥で乙姫様が迎えている。奥の海が建物より浮き上がって描かれているが、龍宮城が海の中であることを象徴した描き方。

81 新版浮絵浦島龍宮入之図(東京国立博物館)

【春朗時代唯一の中国歴史画】

●錦絵「新版浮絵樊噲鴻門之会ノ図」(この頃か。横大判。勝春朗画。24.6×37.0 佐野屋喜兵衛版。ボストン美術館/ホノルル美術館/大英博物館/本間美術館/日本浮世絵博物館蔵)

※楚の王項羽と漢の高祖劉邦が鴻門で会見した際、項羽は范増の進言により劉邦を殺そうとしたが、劉邦は張良の策により逃げる事が出来たという『史記』に記された故事に取材したもの。

遠近法によって描かれた屋敷を中心にした構図で、庭から屋敷に掛けられた小階段に足を掛けた武人を描く。春朗時代唯一の中国歴史を題材にした作品。



82 新版浮絵樊噲鴻門之会ノ図(ボストン美術館)

寛政3(1791) 辛亥 32歳 春朗、葛飾住春朗(津和野藩伝来摺物より):きみ(24歳)、富之助(5歳)、阿美与(3歳)、阿鉄(1歳)

- ◇1月25日、男女入込湯(混浴)禁止令。
- ◇相撲興業(4月、本所回向院、11月、本所回向院)。

- ◇この頃、更科蕎麦(細切りの白蕎麦)の布屋万吉、芝増上寺に開業する。
- ◇出版取締令。3月、北尾政演(山東京伝)の洒落本『教訓読本』『仕懸文庫』『娼妓絹籠』『錦之裏』等により、山東京伝は手鎖50日、出版元の蔦屋重三郎は財産半分没収(身上半減)の罰を受ける。
- ◇喜多川歌麿、この頃より大首絵注を発表。
- 注)大首絵：役者や女性などの上半身を画面に大きく描いたもの。
- ◇初代・歌川豊国(1769~1825)、この頃和泉屋市兵衛より美人画を出しデビューする。
- ◇8月9日及び9月4日暴風。曲亭馬琴、講釈師や占い師になって神奈川宿辺を遍歴中、洪水で深川の家を失い、約半年山東京伝の食客となる。
- ◇12月5日、モーツァルト没(35)。
- 正月、曲亭馬琴、山東京伝門人として、大栄山人名で処女作、黄表紙『廿日余四十両尽用而二分狂言』を刊行。

【次女誕生】

★次女阿鉄注誕生。

※飯島虚心『葛飾北斎伝』(p308)では「次女注、名は、詳ならず。一説に、阿鉄、画をよくし、他へ嫁せしが、天死す。一説に、幕府の用達某に嫁せし」とあり、その根拠として鈴木重三の脚注では「他へ嫁ス 画工ニアラズ 早世 御鏡御用ノ家ニ嫁ス」とある『続浮世絵類考』(溪斎英泉増補)の文を紹介している。但し、鏡師の家に嫁いだかは不明。

注)次女名は、あるいは「阿鉄」を「おかね」と呼ぶか。また「阿辰」ともいわれる(井上和雄『北斎』p31)。

●黄表紙『芋蛸の由来』(1月。角書注「龍宮洗濯断」。二冊墨摺。作者不明。自作か。

春朗画。西村屋与八版。国立国会図書館蔵)

※表紙見返しに「春朗画作」とあり、最終丁に「春朗画」とある。

注)角書：浄瑠璃の名題、歌舞伎の外題、書物の題名などの上に、その主題や内容を示す文字を2行または数行に割って書いたもの(「デジタル大事典」より)。

同書は春朗の挿絵かどうか疑問視されている。下巻最終丁裏に「画ハ凌雲斎」とあるという(棚橋正博『日本書誌学大系 48(2)黄表紙総覧 中篇』：

『年譜』により紹介)。 83『芋蛸の由来』(国立国会図書館)

●黄表紙『名代振袖心中』(角書「壬生里声」。二冊。内新好注作。画工名無し。『日本小説年表』では春朗画。西宮新六版。国立国会図書館蔵)

注)内新好：生没年不詳。俳諧宗匠。通称は内田屋新太郎。別号に魚堂など。



●浄瑠璃富本注₁『百千鳥蝶羽根書』(1月。瀬川如皐注₂述、内新好作。春朗画。鳶屋重三郎版。ポストン美術館蔵)。

※正月15日、市村座で上演。歌詞を版木印刷にした正本(筆者注:歌舞伎等の脚本)。

注1) 浄瑠璃富本: 浄瑠璃の一流派。富本節とも。常盤津小文字太夫(1716~64)が寛延元年(1748)に富本豊志太夫(翌年に富本豊前掾を受領)と改名して創始した。

注2) 瀬川如皐: 1739-94。役者の三代目瀬川菊之丞の兄。役者から作者に転身し、長唄や常盤津の作詞も手がけた。

●浄瑠璃富本『棲裏撞振袖』(2月。瀬川如皐述、春朗画か不明。下巻最終丁裏に、「画(凌雲閣)」とあるとされるが不明。鳶屋重三郎版)。

●浄瑠璃富本『道行桂川連理柵』(3月。瀬川如皐述、春朗画。鳶屋重三郎版)

※3月、市村座で上演。

●浄瑠璃富本『女夫合愛相鉄槌』上・下(半紙本二冊。11月。富本豊前太夫直伝。瀬川如皐述。春朗画。鳶屋重三郎版。21.5×29.5 島根県立美術館: 永田コレクション蔵)

※富本節正本。正本とは、音曲の詞を木版摺にして2・3丁に閉じたもの(脚本)。11月1日、市村座で上演。上巻は、中山盾蔵の多田蔵人と瀬川菊之丞の針売りが万歳をする様子を描く。下巻には、盾蔵と菊之丞と嵐龍三の舎人の仕丁が立回りをする様子を描く。

●絵本番付『市村座絵本番付 岩磐花峯桶』(寛政2年説あり⇒p68と同一本か。中本一冊、一部色摺。無款。17.4×12.7 松本屋万吉版。島根県立美術館: 永田コレクション蔵)

※市村座の顔見世を描いた絵本番付(歌舞伎のあらすじを絵と文字で表した本)。見開き2ページ(ロ丁表とイ丁裏)に所狭しと歌舞伎役者が描かれる。

●役者絵「初代中山富三郎 団三郎女ぼう十六夜」(細版錦絵。春朗画 鳶屋重三郎版 すみだ北斎美術館蔵) ※正月、中村座「春世界艶麗曾我」に取材。

●役者絵「市川八百蔵そがの五郎ときむね 岩井半四郎の春駒手越の芸者お蝶」(1月頃。細判錦絵。春朗画。29.3×13.4 日本浮世絵博物館蔵)

※市川八百蔵は3代目。岩井半四郎は4代目。

※1月25日より上演の中村座「春世界艶(花)麗曾我」(桜田治助作。二番浄瑠璃・百千鳥子日初恋)に取材。図は、春駒で遊ぶ芸者お蝶を見下ろすように左袖を托しあげて見る五郎ときむねが描かれる。

●役者絵「二代目市川門之助 そがの五郎ときむね 三代目沢村宗十郎 そがの十郎すけなり」(1月。細判錦絵。春朗画。1月15日より上演された中村座「七種粧曾我」(桜田治助作)に取材したもの。28.9×13.8 日本浮世絵博物館/ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※寛政3年(1791)1月15日より市村座で上演された「春色江戸絵曾我」を描いたものともいわれるが(『2007 北斎展図録』東京新聞他)、『歌舞伎年表』(伊原敏郎)によれば、寛政3年1月15日の演目では、門之助は鹿原軍兵衛実は赤沢十内を演じ、宗十郎は十郎を演じていて、本図の画題と役名が合わない。要検討。

※歌舞伎の「曾我物」は関東で広く根付いていた曾我兄弟の御霊信仰を基にして、仇討のめでたさを正月の出し物として、様々な筋立てにした「曾我物」を興行するのが習慣となっていた。宝永年間(1704~11)頃から縁起物として行われ、享保期(1716~36)以後は、正月の定例の狂言となった。

図は、巻き上げられた簾のある部屋で、三升紋の袴を着けた市川門之助が、閉じた扇を右手で持って見栄を切り、その足元で〇に「い」の字の定紋が染められた袴を着た沢村宗十郎が片膝をついて同じく見栄を切っている。鴨居の上には三羽の鳥の絵が掛けられている。

84 二代目市川門之助 そがの五郎とき宗 三代目沢村宗十郎 そがの十郎すけなり
(早稲田大学絵演劇博物館)



●役者絵「二代目市川門之助 そがの五郎ときむね」(1月頃。細版錦絵。春朗画。29.1×13.9 オランダ国立民族学博物館蔵) 上記役者絵と同取材・同画材。

※寛政元年(1789)中村座「江戸富士陽曾我」からの取材説あり。

●役者絵「三代目市川高麗蔵の大日坊 二代目小佐川常世あこや」(3月頃。細判錦絵。春朗画。すみだ北斎美術館蔵) ※3月、河原崎座「初緑幸曾我」二番目に取材。高麗蔵が腕まくりをし、常世がその側に立っている図。

●役者絵「市川門之助の冠者太郎と嵐龍蔵のゆりの八郎」(3月頃。細判錦絵。春朗画。ホノルル美術館蔵)

※3月3日よりの市村座「筆萋萋壺碑」に取材。

85 市川門之助の冠者太郎と嵐龍蔵のゆりの八郎 (ホノルル美術館)

●役者絵「三代目市川門之助 奴たて平実は義経」(3月頃。細判錦絵。春朗画。蔦屋重三郎版)

※3月3日よりの市村座「筆萋萋壺碑」に取材。

●役者絵「三代目沢村宗十郎しけたゞ」(3月頃。細版錦絵。春朗画。太田記念美術館蔵)

※3月3日より上演の市村座「筆萋萋壺碑」に取材。天明元年6月に同題の画がある。



●役者絵「岩井半四郎 傾城あげまき」(3月。細判錦絵。春朗画。千葉市美術館/オーバリン大学アレク・メリアル美術館蔵)

※3月11日より中村座「助六縁牡丹」に取材。

●役者絵「三代目森田勘弥の白井貞光」(7月頃。細判錦絵。春朗画。島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※7月中村座「二代源氏押強弓」に取材。長袴を履き、右手に巻物を持ち、左手で刀に手をやる森田勘弥。

●役者絵「市川団十郎と坂田半五郎の鳥羽恋塚」（細版錦絵。春朗画。蔦屋重三郎版。東京国立博物館蔵）

●役者絵「市川団十郎と坂田半五郎の金目貫源家角罎」（細判錦絵。春朗画。蔦屋重三郎版）

※11月1日よりの市村座「金目貫源家角罎」に取材。

●役者絵「市川男女蔵 奴たゞ平」（11月頃。春朗画。蔦屋重三郎版。立命館大学蔵）

※11月1日よりの市村座「金目貫源家角罎」に取材。

●役者絵「市川蝦蔵の山賊実は文覚上人
三代目坂田半五郎の旅僧実は鎮西八郎為朝」（11月頃。細版錦絵。二枚続。春朗画。蔦屋重三郎版 各30.2×13.9 東京国立博物館蔵）

86 市川蝦蔵実は文覚上人 三代目坂田半五郎の旅僧実は鎮西八郎為朝（東京国立博物館）



※11月1日より市村座上演「金目貫源家角罎」に取材。春朗落款の作で代表作といわれる。

左図は、市川蝦蔵が鉞の端に左足を掛け、左手で鉞の柄を持って見栄をきる。右図は、三代目坂田半五郎が、髑髏を持って見栄をきる。

●役者絵「三代目市川高麗蔵 平井権八 松本幸四郎 幡随長兵衛」（11月頃。細判2枚続き。錦絵。春朗画。蔦屋重三郎版。ボストン美術館蔵）

※11月1日よりの中村座「二代源氏押強弓」に取材。右図は、三代目市川高麗蔵が、横笛を持って眺めながら、抜き身の刀を持っている平井権八を演じる。着物の三升紋に「高」の字が書かれている。左図は、四代目松本幸四郎が尻端折して、刀の柄に手を掛けている幡随長兵衛の図。

●役者絵「三代目沢村宗十郎 から木まさ右衛門」（細判錦絵。春朗画。ホノルル美術館蔵）

●玩具絵「新板七へんげ 三階伊達の姿見 三代目沢村宗十郎」（細版色摺。春朗画。西村屋与八・伊勢屋利兵衛版。日本浮世絵博物館/東京国立博物館/ベルリン東洋美術館蔵）

87 新板七へんげ 三階伊達の姿見 三代目沢村宗十郎（日本浮世絵博物館）

※春朗時代の数少ないおもちゃ絵。顔のない六種の芝居姿を切り取り、絵の右上の枠内に描かれた宗十郎の絵に乗せて遊ぶもの。一種の着せ替え遊びの趣向。「三階」は、立役者注の部屋が芝居小屋の三階にあったことによる。宗十郎は、9月に大坂



に上ったとされるので、この歳の正月の刊か（2019『新北斎展図録』 p 311）。

注) 立役者：芝居の一座で中心となる役者。

●玩具絵「**新板七へんげ 三階伊達の姿見 三代目市川八百蔵**」（この頃か。細判色摺。春朗画。蔦屋重三郎版。32.5×14.5 名古屋テレビ放送蔵）

※沢村宗十郎の「三階伊達の姿見」と同様の玩具絵。小栗判官の衣装を描いている。八百蔵は寛政 2 年（1790）11 月に大坂から下っていて、それ以後の作と考えられて。沢村宗十郎の江戸にいた時期と合わせ考えて、寛政 3 年の正月の刊とされる（2019『新北斎展図録』 p 311）。

●絵暦「**弓の的**」（1 月。句と弓の握り部分が紅で色摺。葛飾住注春朗画 16.1×12.0 「津和野藩伝来摺物」として島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※〈寛政三弓始〉とあり。霞的（白と黒の縞が交互に丸く描かれた弓の的）の端がめくれ、その上に弓が置かれている。一手（二本）の矢がその側に置かれている。「大的を亥の年なれば七つ掛」の句が添えられる。⇒ p 161

注) 画中に「葛飾住」とあるが、この頃は本所・向島なども葛飾（南葛飾郡）と称されていた。「葛飾住」がどこかは不明。この年「葛飾住春朗画」の落款のある絵暦（大小）が 2 点あるという（『年譜』による）。

寛政4(1792)	壬子	33 歳	春朗、勝川春朗、勝春朗、鉄棒ぬらぬら（偽名）	：きみ
(25 歳)	富之助 (6 歳)	阿美与 (4 歳)	阿鉄 (2 歳)	

◇ヘイスベルト・ヘンミー (Gijsbert Hemmij)、長崎商館長に赴任（寛政 10 年：1798 まで）。

◇相撲興行（3 月、神田明神、11 月、浅草八幡宮）

◇3 月、蔦屋重三郎が山東京伝を訪ね、京伝の食客であった曲亭馬琴を番頭にしたいと申し出、日本橋油町の蔦屋重三郎の手代になる。ここで馬琴は通称瑠吉、諱を解にする。

◇9 月 30 日、江戸日本橋横山町辺より出火。40 町（約 4 平方キロ）ほど 3 日間燃え続け、当時人形町付近にあった吉原まで延焼する。

◇10 月 20 日（陽暦）、ロシアのラクスマン (Adam Laxman) が根室に来て通商を求める。乗組員は翌年 6 月 15 日迄、根室に家を建て滞在する。同行の大黒屋光太夫、ロシアより帰国。

【北斎の師・勝川春章没】

◇勝川春章、12 月 8 日没（50 歳。通説では 67 歳とされていた）。辞世「枯ゆくや今ぞいふことよしあしも」。別句「風を画にかく時ならば柳かな」。（墓は『浮世絵類考 別本』では浅草西福寺〈現東京都台東区蔵前4-16-6〉）。飯島虚心『葛飾北斎伝』では 12 月 11 日没、浅草本願寺葬とあるが誤り（p 38）。

※絵師・観嵩月（1755～1830）の『画師冠字類考』に字形と俳号を改めた年齢が 45 歳であり、享年が 50 歳と記されていることから没年年齢が証明された（神谷勝広同志社大学教授（近世小説研究家）の調査による。2016/02/11「読売新聞」記事）。

従来は関根只誠の『名人忌辰録』（明治27年：1894）に記された没年齢67歳を通説とし、そこから生年を享保11年（1726）としてきた。新説に従えば生年は寛保3年（1743）となる。

○林子平、『海国兵談』『三国通覧図説』（地理誌）が発禁となる。

【世界一の画工を志すも春好の悪意のおかげ】

※「（略）一説に、（本文割注）露木氏注の話。春朗、春章の高弟春好と善からず」（『葛飾北斎伝』p40）とある。北斎は同門の兄弟子春好と仲が悪かったというのである。

注）露木：露木為一（孔彰）のこと。生年未詳～1893。北斎門。

※両国の絵草紙問屋某の招牌（筆者注：看板）を書くも勝川春好が引裂いたというエピソードがある。

前出『葛飾北斎伝』の引用文に続き、次のように記される。

「春朗嘗両国辺の絵草紙問屋某の招牌を画く。問屋の主人喜びて、これを店さきに掲げんとす。時に春好来りて、大に其の画注の拙を笑ひ、これを掲ぐるは、即師の恥を掲ぐるなりとて、春朗の面前におきて、引き裂き打ちすてたり。春朗憤怒堪へがたかりしが、おのれ後学（筆者注：後輩）のことなれば、止むを得ず。此の時、春朗の心中に、他日世界第一（筆者注：日本一をいう）の画工となりて、この恥辱を雪がんと、勉強忍耐の真意、始めて此に発し、遂に狩野某に就き、窃に画法を学びたるなり。北斎晩年人に語りて曰く『我が画法の発達せしは、実に春好が我をはづかしめたるに基せり』と」（『葛飾北斎伝』p40～41。句読点・ルビは筆者による）。

注）画：この字は、当時は「が」と読むこともあるが、単独の場合は、本稿では以下「え」と読むこととする。

※春好に招牌を破られたエピソードは、高橋省三（大華）『少年雅賞』（明治26年）所収「葛飾北斎」にも記される（国立国会図書館デジタルコレクション：コマ番号46～74）。

※北斎が兄弟子にいじめられた理由を、安田剛蔵は「春朗は入門して日が浅いにもかかわらず、役者絵にあまり意欲を燃やさず、ひそかに清長（筆者注：鳥居清長）の画風に追従してその風を描いたり、絵の方はまだまだというのに、戯作に筆を染める、浄瑠璃には凝る、吉原遊び注はつもの、という行状では、自らは絵修業に熱心のつもりであっても、兄弟子の目からみれば心よく思われる筈はない」（『画狂北斎』p39）としている。

注）吉原遊び：北斎が吉原遊びをしていたという根拠は不明。但し、社楽斎万里という幫間とは親しかったらしい（本稿安永9年〈1780〉の項参照）。織田一磨『北斎』（大正15年 アルス）では、「官能生活に就ては全く小説的に創作したものである」（序）としつつも、この頃の北斎を一貫して吉原に遊ぶ遊蕩の者扱いをしている。

【勝川派に固執せず。狩野融川に入門したか】

★この年から寛政6年（1794）頃の間、江戸、浜町の狩野派の当主狩野融川（1778～1815。奥御用。若年寄支配。侍待遇。五世寛信。号：法眼）に入門したとされているが、

寛政4年時の融川の年齢（14歳）から考えて疑問視されている。また、高名な春章の弟子と知りながら、融川が入門を許す事に疑問視するむきもある（織田一磨『北斎』p20）。

【春章による破門はなし】

「後、窃に狩野某に就き、画法を学びしが、春章これを聞き、他家の画法を学ぶを憤り、遂に春朗を破門せり。これより春朗勝川を称するを得ず、改めて叢春朗といふ」（『葛飾北斎伝』p40 句読点・ルビは筆者による）。

但し、飯島虚心の記事は疑問視される。勝川春章はむしろ北斎の才能を買っていて、異例の早さで勝川春朗を名乗らせたことから勘案すると、勝川派から離れたのは春好の嫌がらせによるもので、春章の死を機会に勝川派を離れたとするのが妥当であろう。

※狩野派では、同派の「永字八法」を学んだか（本稿筆者の憶測）。

※永字八法とは、漢字の「永」には、書に必要な技法八種がすべて含まれていることをいう。点、横、縦、縦線のはね、右斜め上に向かうはね、左はらい、左下に向かうはらい、右斜め下に向かうはらいを指し、狩野派特有の、筆の腰を使わず、筆圧がほとんどない筆法。手首の力を抜いて肘を基点とするような滑らかな動きで自由に楽々と線を引く描き方という（『芸術新潮』2001年2月号より）。

●黄表紙『女莊子胡蝶夢魂』（1月。二冊。黒木作（伊藤蘭洲説あり）。春朗画。坂本屋版。早稲田大学図書館蔵）

※山東京伝の序文末尾に「本屋の応需て明（朋）友馬琴子の筆をかり」とある。末尾には、文机に寄りかかり胡蝶の夢を見ている女を描き、脇に「春朗画」とある。袋には「山東京伝識 女莊子胡蝶夢魂 板元（商標）東叡山坂町坂本屋」とある。

88 女莊子胡蝶夢魂（早稲田大学図書館）



●黄表紙『鶴頼政名歌芝』（1月。中本二冊（合一冊）。南柚笑楚満人作。勝川春朗画。村田屋次郎兵衛版。東京都立中央図書館蔵）

●黄表紙『昔々桃太郎発端説話』（中本三冊。合一冊。山東京伝作。春朗画。蔦屋重三郎版。17.0×12.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※第三冊末尾に図に「春朗画」とある。

●黄表紙『実語教幼稚講釈』（春。中本二冊。山東京伝作。勝春朗画。蔦屋重三郎版。早稲田大学図書館蔵）

※見返しに「壬子春」とあり、最終丁に「春朗画」とある。実際には曲亭馬琴の代作。

89 実語教幼稚講釈：最終丁（早稲田大学図書館）



【曲亭馬琴と幻の初提携か】

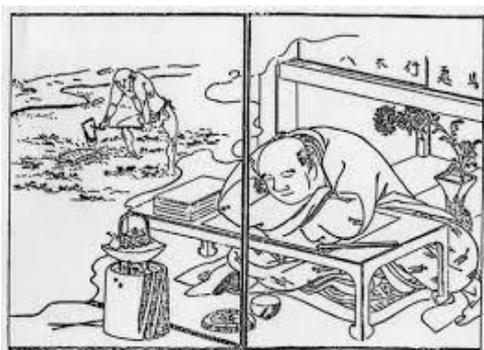
●黄表紙『花春風道行』（中本二冊。京伝門人馬琴作。勝春朗画。蔦屋重三郎版。曲亭馬琴と提携した初作）。

※山東京伝の随筆『蜘蛛の糸巻』(弘化3年:1846)および『日本小説年表』(朝倉無声)に書名が見えるが、実在しない著作とする説あり(WEB「浮世絵文献資料館」)。

●黄表紙『塩焼文太都物語』(この頃か。寛政9年頃:1797 説もある。三冊。勝川春朗画。桜川慈悲成注写。西村屋与八版。すみだ北斎美術館:ピーター・モース・コレクション蔵)
注) 桜川慈悲成:1762~1833or1839。戯作者・落語家)

●笑本『間女畑』(正月。小本。一冊。勝川春朗画。序文に「鉄棒ぬらぬら筆」(北斎の偽名)とある。序文の次の見開きに、文机にうつ伏して、男が農作業をしている夢を見ている北斎の自画像を収める。

全27話の艶笑小咄と11図の春画で構成(『芸術新潮』1989年(平成元年)3月号「北斎」特集号所収、林美一「北斎 艶本への挑戦」p42)。同書では寛政4年(1792)頃としている。天明元年(1781)説(尾崎久弥「北斎肖像の研究」。1932年『浮世絵研究』第6号所収。及び『年譜』より)もある。また、『噺本大系 第12巻』(昭和52年、東京堂出版)では天明頃の作としている。中に「湯屋」(混浴での色事)の絵があり、松平定信により、寛政3年(1791)正月27日に混浴禁止令が出ているので、その直前の刊行と思われ、寛政3年正月の作とする説もある。



90 間女畑 (口絵見返し: 自画像)

※「吸もの」の題の一丁(2ページ)が落丁で、実際は26話(『好色江戸小咄集』による)。

※『艶本年表』には見えず。『俗談 今歳花時』(内題には『落咄 今歳咄』とある。安永2年:1773 書苑武子編)の中の艶色咄を基にしているが、一部自作もある)。

※咄本に分類されることもあるが内容は笑本。

「御乳母」「御利生」「人まね」「ねぼけ」「ひとりげい」「田舎娘」「針医」「湯屋」「馬鹿娘」「夫婦けんくわ」「けつ」「大地震」「額文字」「女郎」「くらべ」「一ツきよく」「地口しなん」「虫ぼし」「松茸」「赤がい」「ちん」「猪」「ふられ」「風」「御びく尼」「行谷」「吸もの」(欠落)の27話。

☆「馬鹿娘」(『噺本大系 第12巻』より)

くうつくしいが、とんだばかな娘を、隣の鉄ぼう、いろくだまして、とふくあらばちをわつた。年ごろなれば、いたみもせず、気のゆく事覚、とんだ嬉しがつて二親の前へ行、モシエ、私ハとなりのてつさんに、よい事をしてもらひやした。アノ御こう箱へね、アノてつさんの大きな物入てね、モウくくとんだ面白事しなさるよ。かゝさん。御まへもおしへてもらいなさへといふ。お袋、にがく敷顔で、お主もトウくきづが附たハエ。√むすめ いへ。疵がつけバ、ちが出るはづだが、ナゼカしろひ物が出やした(ルビは筆者による)

●絵暦「教え子と先生」(1月。「子字教示の図」とも。春朗画。小判色摺。国立国会図書館蔵)

※袴姿の若侍に、畳に広げた縦長紙に上から一列に書かれた12の「子」の字を指し

示して謎解きを教える武士の図。部屋の襖に、先生と若侍のやり取りの台詞が書かれ、先生が「ねこの子の子猫、ししの子の獅子」と読んで、「子」の字の大小で月の大小を表すことを説いている。1月は大文字で小の月、2月は大文字で大の月を表す。平安時代の小野篁が12の「子」の字を読み解いたという伝説に基づくものといわれる。



91 教え子と先生（国立国会図書館）

●役者絵「三代目瀬川菊之丞 大いそのとら」（1月頃。細判錦絵。春朗画。29.0×12.5 北斎館蔵）

※1月23日よりの市村座「若紫江戸子曾我」に取材。曾我兄弟の仇討ちを題材にした正月興行の定番「曾我物」。曾我十郎を慕う虎御前は大磯の遊女。千鳥模様の打掛を両手を通さずに羽織って工藤祐経の屋敷の部屋に立つ姿。背景の長押しに、曾我十郎・五郎の仇である工藤祐経の紋所「菴木工」が五つ描かれている。源頼朝の富士の巻狩の総奉行となった工藤の屋敷に虎御前などが祝いに駆けつけた場面を描く。

●役者絵「市川門之助 そがの十郎」（細版錦絵。春朗画）

※1月23日より市村座「若紫江戸子曾我」に取材（『年譜』による）。

●役者絵「市川男女蔵 そがの五郎ときむね」（細版錦絵。春朗画。蔦屋重三郎版）

※1月23日より市村座「若紫江戸子曾我」に取材（『年譜』による）。

●役者絵「市川ゑび蔵かけきよ」（1月頃。細版錦絵。春朗画。版元未詳。28.9×12.6 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※1月23日、市村座「若紫江戸子曾我」に取材。笹紋の描かれた二つの提灯の前で、抜き身の刀を立てて持ち見栄をきる蝦蔵。前年に五代目団十郎を改名。

●役者絵「三代目瀬川菊之丞 女講釈師岸柳文栄」（細版錦絵。春朗画。伊勢金版 29.2×14.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵）※4月、市村座「花揚榎白髪岸柳」に取材。

●役者絵「二代目小佐川常世 なるかみびく」（4月頃。細判錦絵。春朗画）

※4月、河原崎座「常磐浄瑠璃 恋衣縁り初桜」に取材（『年譜』による）。

●役者絵「二代目瀬川富三郎 十内いもうと 片貝」（5月。細判錦絵。春朗画）

※5月（4月か）6日よりの市村座「四十七士染井鉢植」に取材（『年譜』による）。『北斎世界を魅了する浮世絵師と弟子たち』（芸艸社）では天明8年桐座「けいせい優曾我」に取材とする。

●役者絵「二代目市川門之助 穴生村の桃太郎」（8月頃。細判錦絵。春朗画。版元不明）

※8月5日よりの市村座「むかしく掌白猿」に取材（『年譜』による）。

●役者絵「三代目瀬川菊之丞 宇賀の阿玉の神霊」（8月頃。細版錦絵。春朗画）

※8月16日、市村座「七瀬川最中桂女」に取材（『年譜』による）。

●役者絵「三代目瀬川菊之丞 さだか」（9月頃。細判錦絵。春朗画）

※9月15日よりの市村座「妹背山女庭訓」に取材（『年譜』による）。

●役者絵「三代目瀬川菊之丞 おいぬ御方」（細判錦絵。春朗画）

寛政5(1793)	癸丑	34歳	春朗、叢春朗、(白山人可候)、(時太郎可候)、印・
花押：きみ(26歳) 富之助(7歳)、阿美与(5歳)、阿鉄(3歳)			

【第四期春朗期】

※この頃より春朗独自の画風といわれる。

◇相撲興行(3月、浅草八幡宮、10月、本所回向院)。

◇6月21日、林子平没(56)。

◇7月23日、松平定信、老中解任され寛政の改革終わるも、改革は文化14年(1817)まで続く。

◇7月下旬、曲亭馬琴、元飯田町中坂(現東京都千代田区九段北一丁目)世継稲荷(現、筑土神社下)の会田家・下駄商伊勢屋の未亡人お百(30歳)に入婿。瑣吉清右衛門と称す。京橋の豪商小林勘助が持つ元飯田町の長屋の家守注となる。

注)家守：いわゆる大家のこと。

◇11月から、江戸三座が控櫓の芝居小屋での興行となった。中村座(堺町)は地代滞納請求の訴訟により休座となり、控櫓の都座の代興行となる。市村座(葺屋町)も経営破綻で休座となり、控櫓の桐座の代興行となる。森田座(木挽町)も控櫓の河原崎座の代興行となる。

◇一枚絵中の一般の女の名前を記載することの禁止令。この類の禁止令は寛政8年(1796)にも出される(遊女と吉原芸者は例外)。

○山東京伝、草双紙『堪忍袋緒ゞ善玉』(京伝と元遊女菊園で妻のお菊に蔦屋重三郎が執筆依頼に来ている図あり。東京都中央図書館加賀文庫蔵)。

【長男富之助を中島伊勢の養子に出すか】

★長男富之助を中島伊勢の養子に出す(7歳か。但し年代不明)。『葛飾北斎伝』では、この長男は放蕩であるとの関根只誠の説を紹介しているが不明。あるいは放蕩の孫(長女阿美与の子)と混同しているか。

「長男は、其の名詳ならず。一説に、名は、富之助、中島氏を継ぎ、用達の鏡師たりと。又一説に、(割注：関根氏。)長男は、放蕩無頼にして、家にあらず。終りを詳にせず。翁は、常に此の長男の為に、心を痛め、屢負債を償ひしことありと」(『葛飾北斎伝』p306 ルビは筆者による)。

★この頃の評価は、美人画では喜多川歌麿、鳥文斎栄之、窪俊満、勝川春潮、栄松斎長喜など、役者絵では勝川春英、歌川豊国、東洲斎写楽、勝川春章、勝川春好など排出し、春朗の一枚絵は影の薄いものであったという(安田剛蔵『画狂北斎』p48)。

【狩野融川の怒りを買う】

★「同(寛政)五六年頃、日光神廟(徳川家康公の廟)の再修ありて、狩野融川其の門

人および町絵師数名を随え、廟中の絵事に従事せり。宗理又随ひ行き、宇都宮に到りしが、旅亭の主人画を融川に請ふ。融川即筆を採りて、一童の竿を持ちて柿をおとすの図を画く。宗理これを見て、窃に評して曰く、『何ぞ画理に疎きや。竿の端、既に遙かに柿の所を過ぐ。然るに童子猶足をつまだつ。果して何の意ぞ。』同行これを融川に告ぐ。融川怒りて曰く、『此の図はもと童子の智あどけなきを示せるなり。彼の知る所にあらず。然るにこれを詈る。甚だ憎むべし』とて直に宗理を追ひ出だせり。宗理独江戸に帰る」（『葛飾北斎伝』 p 49。ルビは筆者による）

同書では『浮世絵類考 別本』および『絵画叢志』によるとしているが、鈴木重三の校注では『東洋絵画叢誌』（明治18年刊）の誤りかとしている。

※『浮世絵年表』（漆山天童著、昭和9年刊）によれば寛政6年（1794）のこととする。
 ※この工事は寛政8年（1796）正月から10年（1798）5月まで（日光東照宮の『修築加番日記』等による）であること、また、寛政5・6年（1793・4）の狩野融川はまだ16歳であるので、この記事に疑問視する旨あり（瀬木慎一『瀬木慎一の浮世絵談義』）。

※北斎は狩野融川の弟子としてではなく、画工として付き添ったという見方もある（田崎暘之助『浮世絵の謎』 p 174）。

※由良哲次「北斎と狩野融川」（「日本浮世絵協会会報 36」）によれば、北斎は融川に入門していないし、融川も日光には行っていないという（『年譜』による）。

●黄表紙『智恵次第箱根詰』（1月。中本三冊。春朗画。春道草樹作。坂本屋版。18.0×12.7 北斎館/国立国会図書館蔵）

※渡舟則の序文に「うしの初春」とある。最終丁に、文机に臂を突いて窓の外に海に浮かぶ舟を眺めている作者と思われる男の絵の右に「春道草樹作」、左に「春朗画」とある。

92 智恵次第箱根詰（国立国会図書館）



●黄表紙『貧福両道中之記』（1月。中本三冊。合一冊。山東京伝作。春朗画。蔦屋重三郎版。18.3×18.1 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/国立国会図書館/島根県立美術館：永田コレクション/東洋文庫/早稲田大学図書館蔵）



※序文に「癸丑の年 はつ春」とある。最終丁に、「寿」と書いた紙と筆を持った大黒帽子の男の前には、小判が乗せられた三方が置かれている。背後には榎立てが二つある棚がある。図の右に「春朗画」、図左に「京伝作」とある。隣の同日に生まれた子が、貧家の子は金持ちになり、金持ちの子は貧乏になるという話。

93 貧福両道中之記（国立国会図書館）

●黄表紙『東大仏楓名所』（版元不明。三冊。天明6年の黄表紙『大仏左捨』の改刻改題再摺本と言われるが真偽不明）

※画工名がないが、『大仏左掬』の作者とされる白山人可候の作か。但し、天明 6 年 (1786) は群馬亭の時期であるので、白山人可候は北斎ではないとする見方が有力である。Web「浮世絵文献資料館 (浮世絵事典)」では「棚橋氏は白山人可候を北斎一時の戯号とする説を否定し、石山人 (物蒙堂礼、狂名 盪雨盛) と同人とする」と紹介している。

※『浮世絵派画集・第 5 冊』(p 77 大村西崖)には「全交注作、時太郎可候即ち北斎画」とある (『日本浮世絵博物館所蔵 大揃い北斎』(北斎資料 757 p 172 所収)が疑問視される。

注) 全交: 芝全交。1750~93。本名: 山本藤十郎。戯作者。能楽狂言師

※同本は数種の異本が存在し、作者及び画工を決定することができない。

※『日本小説年表』(朝倉無声)によれば、品川海晏寺開帳に際し、境内に高さ 16 丈 (約 40 尺) の合羽大仏 (雨合羽を着せた大仏) を作ったという。

※安田剛蔵「北斎の黄表紙-4-白山人可候と合羽大仏の研究」(1975『浮世絵藝術』43)によれば、斎藤月岑『武江年表』や大久保芭雪『増補青本年表』の説等から合羽大仏が作られたのは寛政 4 年としている。

Web「浮世絵文献資料館」(みせもの)が紹介している『きよのまにく』(未刊随筆。喜多村信節記)によれば、寛政 10 年 (筆者注: 誤りか) 2 月のこととして、海晏寺境内の銀杏の大木を中にして、色々の桐油紙で覆い、白毫 (白い巻毛) は大胴の盪、螺髪 (右巻きのらせん状の頭髪) は蜜柑籠を並べ、指爪は菅笠で作ったという。対岸の洲崎からも遠眼鏡で見えたという。

●浄瑠璃本「花見雪品物」(半紙本、富本節正本。無款。11 月都座)

●芝居絵本『桐座芝居絵本 (表題不明)』(秋上演。1991: 永田生慈『北斎 世界を魅了した絵手本展』p 117 による)

●芝居絵本『市村座芝居絵本 (表題不明)』(秋上演。1991: 永田生慈『北斎 世界を魅了した絵手本展』p 117 による)

●役者絵「岩井半四郎 下女のはつ」(1 月頃。細判錦絵。春朗画。版元不明。ホノルル美術館蔵)

※鳥居の前で女装して立つ半四郎 (四代)。1 月 13 日 (あるいは 15 日) よりの河原崎座「御前掛相撲曾我」に取材 (『年譜』による)。

●役者絵「岩井半四郎 八百屋お七」(5 月頃。細判錦絵。春朗画)

※5 月 1 日よりの河原崎座「潤色八百屋お七」に取材 (『年譜』による)。

●役者絵「三代目瀬川菊之丞 となせ」(5 月頃。細判錦絵。春朗画)

※5 月 13 日よりの市村座「仮名手本忠臣蔵」に取材 (『年譜』による)。

【叢号を用いる】

★「叢」号を用いる。「叢」は叢豊丸 (後に春朗の門人になり、寛政 6 年 (1794) に春朗号を譲り受け二世春朗となる。?~文化 14 年: 1817) や国麿、貫露、条春が既に用いていた号で、「そう」と読んでいたので、あるいは春朗も「そう」と読むか。但し、

「Weblio 英和英辞典」での読み方は「KUSAMURA SYUNNROU」となっている。

式亭三馬の『浮世絵類考 補記』（文政元年～4年頃〈1818～1821〉著）に「後年破門セラレテヨリ叢春朗ト云、其後俵屋宗理ガ跡ヲ続テ二代目宗理トナル」とあり「くさむら」と読んでいる（岡畏三郎「総説葛飾北斎」、『浮世絵大系8北斎』所収）。本稿でも「くさむら」と読む。この時点ですでに勝川派から離脱していたのでは、という見方がある。

【落款「春朗」を記した唯一の肉筆画】

●肉筆画「鍾馗図」（この頃か。絹本一幅。叢春朗画。花押。朱書の疱瘡除の図。53.6×26.7 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※全身朱色の鍾馗が剣を魔鬼の口に突き刺す図。「春朗」の落款のある唯一の肉筆画。弘化3年（1846）など「朱鍾馗図」を何図か描いている。

94 鍾馗図（島根県立美術館）



【「鍾馗図」が貧窮を救い画業に精進する】

「(略) 時に人あり。五月幟の画を請ふ、(邦俗五月五日ハ男児の祝日にして、此の日幟太刀など飾るを例とす)、宗理直に朱をととき、鐘(ママ) 馗の図を画き与えしに、其の人大大に喜び、謝礼として金二両注1を贈る、此の二両の金は、貧困せる宗理の身にありては、実に無上の宝貨にして、他日画名を一世にならすも、此の贈金あるによりてなり。さて、宗理は日々生計に苦しみ、此の金を得しより、忍志(たがまちこころざし)を一転し、妙見注2を祈り、生涯画工をもて世を終らんことを誓ひたり。これより日々朝まだきより筆を採り、小夜ふけて人の寝静まる頃に至り、夫より更に己が志す所を学び、腕萎へ眼疲れて、漸く筆を止め、蕎麦二椀を喫して臥す。或は曰く、北斎死に至るまで、寝に就く前には、かならず蕎麦を喫するを例とせしとぞ。三世豊国の妻の話」（『葛飾北斎伝』p 47～48 ルビは筆者による）。

注1 金二両：約20万円～26万円位か（2017年現在）。

注2) 妙見：柳島妙見菩薩（現東京都墨田区業平5-7-7にある日蓮宗：妙見山法性寺の菩薩）。北斎が信仰していた寺。北斗七星を主神とする。

※永田生慈によれば、飯島虚心はこのエピソードを宗理時代（寛政7年～享和4年：1795～1804）のことと混同しているとする（「北斎の画業と研究課題」：2005『北斎展図録』所収）。『浮世絵画人伝』（関根黙庵著。明治32年）にも同様の記事あり（p108）。この金により画業に精進することを柳島妙見菩薩に祈願したという。

【絵暦以外の最初の摺物】

●摺物「冷水売り」（「白玉売図」とも。この頃か。横長版：半切り色摺。絵暦以外の初の摺物。叢春朗画。18.2×49.4 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※同名の歌舞伎の所作事を絵にしたもの。上半分が確認されているが、ゴンクール『北斎』によれば、奉書全紙判の下半分に口上書きがあり、常盤津文字太夫（二世か）の襲名披露会の案内状であったという（安田剛蔵『画狂北斎』p46）。

披露会は7月4日、巳の刻（午前10時頃）、両国京屋で催されたという。

図は、冷や水売りの若い男が、老木の下で商売の荷を下ろし、二つの桶に渡した天秤棒に腰掛け、手拭で脇の下の汗を拭いながら休んでいる様子を描く。

摺物は、文化期より色紙判が主流となる。

95 冷水売 (島根県立美術館)

注) 冷水売り: 「水屋」とも呼ばれた商売で、夏に冷水に白玉と砂糖を入れて



売る行商人をいう。また、良質の井戸に恵まれない所に神田・玉川の余剰水を飲み水として売る人もいた。一荷(天秤棒の前後の二つの桶)を四文(筆者注: 約 100 円。一文=25 円で換算)程度で売ったという(「資料館ノート」第 113 号 江東区深川江戸資料館)。

【摺物の名手北斎 生涯に 949 点】

※摺物は、版元を通さず個人的に絵師に依頼して制作してもらうもので、絵暦(大小)・狂歌摺物・催物案内(引札)など多様な形態をとる。

久保田一洋が海外のものも含めて調査したところによると、全 4,000 点弱の摺物中、北斎のものは 949 点あり、その内訳は、春朗期 21 点、宗理期 197 点、北斎期 610 点、戴斗期 6 点、為一期 111 点、卍期 4 点あるという(2011 年 11 月現在の資料。島田賢太郎「台東区生涯学習浮世絵講座『葛飾北斎』第二回: 知られざる北斎壮年期の活動と摺物作品」による)。

北斎は、現存する全摺物の約 23.7% (4 分の 1 近く) を描いているという(以上の資料の詳細については未見なので、紹介に留めたい)。

●摺物「手毬と羽子板図」(正月。春朗画。花押。色摺。朱楽菅江らの狂歌あり。2005 年『北斎展』図録所収: 永田生慈「北斎の画業と研究課題」p12 による)

●摺物「菊籬」(この頃か。叢春朗画 横長判色摺)

※菊籬一杯に乱れ咲く図(安田剛蔵『画狂北斎』p48 による)。

●摺物「大川端夕涼」(「隅田川納涼」とも。この頃か。春朗画。花押。横長判。色摺。21.0×51.1 日本浮世絵美術館蔵では「花火」と題している)

※花火見物の舟が多く浮かぶ大川端で、団扇を持って床几に座る女と花火を指さす赤子。その脇に団扇を持って立っている女。もう一台の床几にも女が座り、袖を口に当てて花火を見ている。二台の床几の間に前帯の女と赤子を抱いた女がいる。図左には花火の打ち上げ軌跡が糸のように赤く描かれる。川に浮かぶ舟、川面、対岸の風景はシルエットのように薄く描かれる。全紙判の半切りの図か。

現在の隅田川の下流、特に吾妻橋から新大橋までを大川端と呼んでいた。

●絵暦「牛車図」(あるいは「ぎゅうしゃ」「ぎっしゃ」と読むか。正月。丑年にちなむ。叢春朗画)

※永田生慈「北斎の画業と研究課題」(日本経済新聞社『2005 北斎展 図録』所収 p12 による)。「春朗」の落款があるものもあるという。

寛政6 (1794) 甲寅 35 歳 春朗、叢春朗、勝川春朗、君馬亭春朗、紫色鷹高 (隠号)、宗理 (年末より) : (きみ: 27 歳)、(富之助: 8 歳)、阿美与 (6 歳)、阿鉄 (4 歳)

【この年までを春朗期とする。年末より宗理と号す】。

◇1月10日、麴町平河町より出火(桜田火事)。

◇相撲興行(3月、深川八幡宮、11月、本所回向院)。

◇4月2日、夜の12時頃、吉原江戸町二丁目(大門口左側の地区)より出火、廓内が焼失し仮住まいとなる。仮宅場所: 浅草田町・聖天町・瓦町・山の宿・今戸・山谷: 一書には山谷・鳥越・今戸・聖天町・田町・金龍山山下・瓦町・深川(『よし原』浅野与吉編 明治二十三年刊: 国立国会図書館デジタルコレクション)

【写楽登場】

◇5月、東洲齋写楽、役者大首絵(雲母摺大判28枚)を刊行(蔦屋重三郎版)。寛政6年5月(1794)～寛政7年(1795)1月まで閏11月を含めた10ヶ月程度で「江戸三座役者似顔絵」など蔦屋重三郎から145点(肉筆画2点及び相撲絵を含む)を刊行したという。

※「写楽はまた歌舞伎役者の似顔を写せしか、あまりに真を書んとてあらぬさまに書きなせしかは、長く世に行はれず。一兩年にして止む。(以下、式亭三馬による補記) 三馬按、写楽号東洲齋、江戸八丁堀二住ス。僅ニ半年余行ハルノミ」(『浮世絵類考』大曲駒村による校訂底本。昭和16年: 1941)と記録されている(ルビは筆者による)。

注) 岩波文庫版『浮世絵類考』(仲田勝之助編校 p118)では、「これは歌舞伎役者の似顔をうつせしが、あまり真を画かんとてあらぬさまにかきなせし故、長く世に行はれず一兩年に而止む」と記事に大差ない(ルビは筆者による)。

※写楽は、八丁堀地蔵橋辺に住むか。瀬川富三郎『諸家人 江戸方角分』注の八丁堀に住む人名一覧に、×印(死亡の印)として「号写楽齋 地蔵橋」と記載されている(国立国会図書館デジタルコレクション)。『新增補浮世絵類考』(龍田舎秋錦)には「俗称齋藤藤十郎兵衛、八丁堀に住す。阿州候の能役者也」とある(岩波本『浮世絵類考』(p118)。

注) 同本は、寛政期～文化期までの江戸の文人の住所録。

◇オランダ商館江戸参府。

◇十返舎一九、大坂にいたが秋に再び江戸に戻り、蔦屋重三郎の食客となる(31)。

◇6月12日、一筆斎文調没(寛政3年～4年<1791～92>年とも。実際は生没年不明)。

○歌川豊国、『役者舞台之姿絵』刊行開始(東洲齋写楽を追い越す人気)。

○式亭三馬、黄表紙『天道浮世出星操』(式亭三馬の黄表紙初作)。

【春朗期の作品数と挿絵数】

★「春朗期」の作品数(1984年『浮世絵八華5 北齋』所収、永田生慈「北齋の生涯」より)。柱絵7点、縦大判16点、横大判13点、縦間判4点、縦中判45点、細判約120点、幅広細判1点、他掛物絵・小判・中判の絵暦数点。うち最多は細判の役者絵(約120点)、次いで縦中判の美人画(約30点)。

※「春朗期」の挿絵(1984年『浮世絵八華5 北齋』所収、永田生慈「北齋の生涯」より)。

黄表紙 46 種全 110 冊(図数約 660 図)。芝居絵本 4 種以上。洒落本 3 種 3 冊(図数 3 図)。
噺本 2 種 2 冊。談義本(教訓本) 1 種 5 冊(図数 10 図)。他(知られるもの 1 種 1 図)。

【妻きみ没す】

★妻きみ没(27)。

★この年、有坂五郎八(御家人。後の蹄齋北馬)が入門する。その時の様子が記されている。

「(略)その入門せし頃は、恰も北齋が妻を喪ひて、一人娘(長女阿美与)と暮し居りたる頃なれば、北馬は北齋の家へ書生のやうに入込みて、画法を学び、傍ら家事の手伝ひなどもしてありしが(略)」(香雨楼主人「北馬と文晁と北齋」(前田香雪翁の談話に拠りて記す)の文を田崎暘之助『浮世絵の謎』(p180)で紹介)

これによれば、北齋は妻の死後、6 歳の阿美与と二人暮らしをしている。阿鉄については夭逝とされているが、いつかは不明。

★この頃、勝川派の大首絵、喜多川歌麿、歌川豊国の大首絵の登場や蔦屋重三郎による写楽の絵等が評判で、春朗の役者絵は見いだされなかったという。

★堤等琳(生没年不詳)と親交する。後、娘お栄は等琳の門人南沢等明に嫁している。

【勝川門から離れ、年末に宗理と号し、俵屋一門の頭領となる】

★年末に俵屋宗理(二代目)を襲名。春朗号を門人の叢豊丸(生年不詳～文化 14 年(1817)前豊丸春朗・二世勝川春朗)に譲る。

※「俵屋」は俵屋宗達や本阿弥光悦らによって開かれた琳派の様式を目指した俵屋と称した一門の頭領が用いたもの。俵屋一門は俳諧との繋がりが深い。雪門の大島完来(雪中庵三世、1748～1818)や岩波午心(葎雪庵?～1817)などと提携した俳諧摺物が多くある。俵屋風は酒井抱一(1761～1822)に影響したといわれる(永田生慈『もっと知りたい葛飾北齋』p11)。

※安田剛蔵は『画狂北齋』で「宗理時代に描いたものをみると、琳派の没骨法注をとりいれ或はその効果を打出していることに注意させられる」と述べている(p60)。

注)没骨法:輪郭を描かず、初めから画面に形と色を同時にあらわすという技法(「ウキペディア」による)。

※式亭三馬の『浮世絵類考補記』(文政元～4 年頃)に「後年破門セラレテヨリ勝川ヲ改メ叢春朗ト云。其後俵屋宗理ガ跡ヲ続テ二代目宗理トナル(略)」とある(岩波文庫『浮世絵類考』仲田勝之助編校 p142。ルビは筆者による)。

※永田生慈は「(北齋は)4 年近くその(江戸琳派)の棟梁になる」(『北齋美術館 2 風景画』所収・加山又造×永田生慈対談より p142)と述べている。勝川一門から離れ、俵屋一門の頭領となったのである。

【菱川宗理は門人宗二】

※『増補浮世絵類考』(斎藤月岑)には「(略)古俵屋宗理の跡を継ぎ、二代目菱川宗理となりたる比、画風をかへたれど(宗理の頃は狂歌の摺物多し錦画はかゝらず)未だ一派をなさず(堤等琳を慕ふ)」(岩波文庫『浮世絵類考』仲田勝之助編校 p143。ルビは筆

者による) とある。

一方、式亭三馬の『浮世絵類考補記』には「三馬 按 三代目宗理ハ初メニ宗二ト呼ベリ、後年菱川宗理ト名ノル」(岩波文庫『浮世絵類考』仲田勝之助編校 p 143。ルビは筆者による) とあり、「菱川宗理」は北斎の弟子の「宗二改菱川宗理」を指している。『葛飾北斎伝』には「菱川宗理、割注：此の名、門人俵屋宗理の後孫、宗二に譲る」とある (p 29)。

以上のことから、菱川宗理は、弟子の宗二としているのが一般的である。⇒寛政 9 年【菱川宗理は北斎にあらず】の項参照。

【曲亭馬琴と初の共作か】

●黄表紙『福寿海无量品玉』(1 月。中本三冊。合本一冊 馬琴戯作。画工名なし。蔦屋重三郎版。17.0×12.7 国立国会図書館蔵)

※画風から春朗と認められている。馬琴の序文に「とら初春」とある。春朗の挿絵とすれば、初の馬琴作の挿絵制作となる。馬琴と北斎(勝川春朗)の共作は、寛政 4 年(1792)の黄表紙『花春 風道行』があるが、実在しない著作ともされ、通説では、享和 4 年(1804)正月の『小説比翼文』が馬琴との共作の初めとされる。



96 福寿海无量品玉 (立命館 ARC より)

●黄表紙『視見喩節穴』(1 月。二冊。本膳亭坪平(坪比良とも。生没年不詳。戯作者)戯著。画工名なし。榎本屋吉兵衛版。国立国会図書館蔵)

※画風から春朗と認められている(『年譜』による)。

●黄表紙『七々里富貴』(1 月。角書「小人じま」。二冊。作者名、画工名なし。村田屋治郎兵衛版。早稲田大学図書館蔵)

※安田剛蔵「北斎の黄表紙-4-白山人可候と合羽大仏の研究」(1975『浮世絵芸術』43)では画工は春朗とし、『年譜』でも追認している。北斎による自画作か。

WEB「見世物興行年表」によると、寛政 4 年～寛政 6 年条の「参考文献」に「『小人じま・七々里富貴』黄表紙・勝川春朗(北斎)画・寛政六年刊。〈ネット〉早稲田大学図書館古典籍総合データベース」とある。

【初の狂歌本を手がける】

●狂歌本『狂歌聯合女品定』(4 月。角書「回向院奉納」一冊。三陀羅法師(赤松正恒)撰。細工叢春朗、同立川船朝、板木屋鉄次郎版。九州大学附属図書館蔵)

※回向院(現東京都墨田区両国2-8-10)開帳奉納の千穂連注狂歌集。「聯」とは、書や絵を描いて柱や壁などに掛ける細長い板をいう。狂歌グループの千穂連の狂歌をまとめたものである。「聯合」と呼ぶ。板による聯に見立てて北斎が短冊状の枠内に人物を描き、狂歌が添えられる画趣となっている。奥付に細工立川船朝(詳細不明)の名があるので、北斎が全図を描いたのではない。

また、細工とは、一般に彫刻を指すが、時に版下画工をいうこともあるという(檜崎宗重『北斎論』p 65 アトリエ社)。一方で、同書では細工を彫刻の意味と取れば、「幼時

ならつた板木師の業を復活してみたことになるであらう」とも記述している。

注) 千鶴連：三陀羅法師 (1731~1814) が主宰する狂歌グループ。

※北斎の初の狂歌本。天保 2 年 (1831) まで狂歌本に関わり、^{きょうしほん}狂詩本・^{きょうくほん}狂句本・^{はいしょ}俳書・^{はつ}発句集などの関連ジャンルを含めると 45 点以上があるという (八木書店『江戸の絵本 画像とテキストの綾なせる世界』所収、マティ・フォラー「葛飾北斎と初期門人たち一享和・文化・文政期に焦点を絞って」 p 266)。

※狂歌隆盛の頃を反映し、狂歌本は私的出版物の狂歌集として流布した。有名絵師による景物等の絵に、自作やグループの狂歌を添えて同好の者に披露したりした。印刷、紙、^{まうてい}装丁等に^こ懲り高価なものも少なくなかった。

●浄瑠璃正本「^{にじろく}鶏鐘篋衣々」 (富本節正本。半紙本。7 月都座公演)。葛屋重三郎版。

●浄瑠璃正本「^{はまぢりいろのさくらもよう}浜衛色菊蝶」 (富本節正本。半紙本。無款 2 月都座公演)

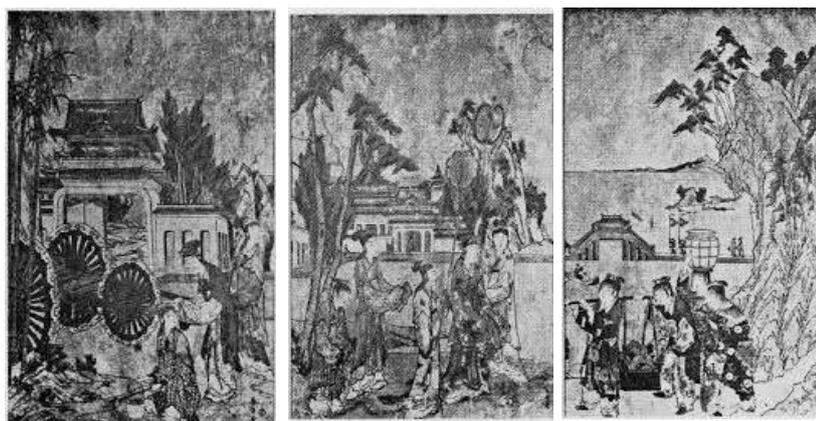
●長唄正本「^{にほんまつみちのくのみだち}二本松陸奥生長」 (富本節正本。半紙本。無款)。小川半助版。

●墨絵「^{せいおうぼ}西王母」 (この頃か。大判板絵墨摺三枚続き。各 37.9×74.9 立命館大学蔵)

〈右図〉桃を入れた籠を天秤棒で担ぐ二人の子。甕を頭に乘せた男。その後ろにも男がいる図。

〈中図〉長い柄の扇を立てている女二人と、その間にいる西王母。お付きの女と子どもも描かれる。

〈左図〉荷車に手をかけ右の方を見る女。柄杓で小川の水を掬おうとしている女の図。



97 西王母 (立命館大学)

●艶本『^{ほんまつうち}會本松の内』 (この頃か。墨摺半紙本。三冊。但し、中巻一冊だけが確認されている。紫色鴈高 (北斎の隠号) の落款。

※リチャード・レイン『伝記画集 北斎』 p 337、及び白倉敬彦『絵入り春画艶本目録』平凡社より)

【役者絵から離れる】

この年以後、役者絵から離れる。但し、享和 3 年 (1803) 正月、曆絵摺物「^{しよだいなかやまとみ}初代中山富三郎と^{しよだいいわいくみさぶろう}初代岩井兼三郎」、文化 4 年 (1807) 3 月に「^{さわむらげんのすけ}沢村源之助 ^{うめ}梅のよし兵衛」と「^{せがみちのすけ}瀬川路之助の女房こむめ」の対、文政 7 年 (1824) 正月に摺物「^{しきしばんごまいそらいやくしや}色紙判五枚揃役者絵」〈^{さんだいまいちらかもん}三代目市川門之助と^{しちだいまいちかわだんじゅうろう}七代目市川團十郎〉などを例外的に描いている。

●役者絵「^{よんたいめいわい}四代目岩井半四郎 ^{つき}月さよ」 (1 月頃。細判錦絵。春朗画。版元未詳 29.0×12.8 島根県立美術館蔵)

※1 月 3 日よりの河原崎座「^{ごひいきあいきょうそが}御曳花愛敬曾我」に取材。

●役者絵「^{さんだいまい}三代目瀬川菊之丞の^{こぎく}げいしゃ小菊」 (細判錦絵。春朗画。松村屋弥兵衛版)

※2月1日よりの都座「初曙観曾我」に取材か。天明5年1月15日よりの桐座「重々々詞曾我」に取材したものとする説あり（伊澤慶治「勝川春朗の役者絵考証（未定稿）について」：『浮世絵芸術』79号）〈『年譜』所収資料〉。

図は、窓から石燈籠の見える部屋に立つ菊之丞演じる小菊。屏風の前には盆に乗せた食物碗と湯差しが置かれている。

●役者絵「浅尾為十郎と五世市川団十郎」（細判錦絵。春朗画。版元不明。30.4×13.7 ミネアポリス美術館蔵）

●役者絵「三代目市川高麗蔵 かんざしの甚五郎」（細判錦絵。無款）

●役者絵「中村のしほ」（細判錦絵。春朗画。版元：山に善）

※「中村のしほ」は、歌舞伎役者の二代目中村野塩（1759～1800）のこと。戸口のある板塀の前で、打掛を着て、刀を背に挿し、両手で尺八を持つ姿を描く。

98 中村のしほ

●摺物「拈図」（8月。「拈打図」とも。寅南呂注。色摺。君馬亭春朗画）

注）寅南呂：南呂は8月の異名。寅年の8月を示す。

※「君馬亭春朗画」とあり、「羊」を削除して「君」のみとしたのは、妻の死を悲しんだ付則的なもので「春朗」が正式な号とされる。

「群馬亭」は天明5～6年(1785～86)にのみ用いられた。

●絵暦「拳相撲」（1月。色摺。叢春朗画。「絵師叢春朗」の落款もあるという）

※拳相撲は、小さな土俵を作り、行事を置き、東西に分れて拳を争う遊び。「狐拳」「藤八拳」とも。両手を前に出して狐の真似をする「狐」は、膝に手を置く「庄屋」に勝ち、「庄屋」は、鉄砲をかまえる「獵師」に勝ち、「獵師」は「狐」に勝つ。お互いにそれぞれの手真似をして勝敗を表す。図は、櫓仕立ての土俵上に座り拳相撲をする二人の女を描く。



寛政7 (1795) 乙卯 36 歳	勝川春朗 (黄表紙のみ)	宗理、北斎宗理	印：完知、完
(津和野藩伝来摺物より) : (富之助：9 歳)、阿美与 (7 歳)、阿鉄 (5 歳)			

【浮世絵一枚十六文～十八文】

◇「番ひ絵」（「笑絵」とも。春画のこと）禁止令。浮世絵一枚絵の値を 16 文（約 400 円）から 18 文（約 450 円）の間に制限（1 文=250 円で換算）。

◇相撲興行（3 月、本所回向院、11 月、浅草八幡宮）。

◇江戸の女髪結を禁止。贅沢禁止の一環。

◇富士講禁止町触。安永 4 年（1775）の講禁止令に続くもの。「近年富士講と唱え」と講名を明確にして禁止した（『大江戸万華鏡 ひとつくり風土記 13 48』より）

◇4 月 29 日、曲亭馬琴の義母没。以後、馬琴は婿先の履物屋を辞め文筆に専念する。

◇7 月 17 日、丸山応挙没（63）。

○本居宣長、随筆『玉勝間』刊。

【宗理期始まる】

★この頃、浅草大六天榊脇町注に住む。『浮世絵類考』（岩波文庫版 p141）に「(割注：二代目宗理元春朗 上手) 狂哥はいかみ等の摺物画に名高く、浅草大六天榊の脇町に住」とある。注) 大六天榊神社（現東京都台東区蔵前1-4-3）が近くにある。

★正月、「大筒射図」で宗理の落款を初めて使用(前年 8 月以降に宗理を襲名したか。寛政 10 年 (1798) 8 月頃まで使用)。但し、黄表紙にはしばらく「春朗」が用いられる。

※初世宗理は大和絵の住吉派より出る。この一門は、江戸で琳派様式を広めた画派で、俳諧との繋がりが深い。北斎も俳諧や狂歌に親しんだところから「宗理」（二代）を襲名したか。

●黄表紙『しわみうせ葉』（1 月。角書「才布の紐」。中本三冊。本膳亭坪比良（平）戯作。画工名なし。榎本屋吉兵衛版。国立国会図書館蔵）

※画風により宗理と認められている。『世界を魅了した鬼才絵師葛飾北斎』（河出書房新社 2016 年）では「勝川春朗画」としている（p49）。 99 しわみうせ葉（国立国会図書館）



●黄表紙『マ平（手）前漬赤穂塩辛』（1 月。

角書「无世界忠臣蔵」。『手前漬赤穂乃魚腐』とも。「塩辛」は辛+塩の合成文字一字となっている。二冊。本膳亭坪平述。画工名なし。榎本屋吉兵衛版。西尾市立図書館蔵）

※画風により宗理と認められている。

【この年より狂歌絵本に意欲】

※寛政 7 年～享和年間まで狂歌絵本に携わる。狂歌は、江戸初期は上方で流行したが、江戸では明和 6 年 (1769)、唐衣橋洲 (1743～1802) が江戸の自宅で開いた狂歌会から流行し、四方赤良 (太田南畝：1749～1823) により更に隆盛した。天明 3 年 (1783) 以降は、唐衣橋洲の四谷連より、滑稽諧謔風の四方赤良の四方連と朱楽菅江の朱楽連の山手側と呼ばれるグループが主流となり、天明ぶりとして、俳諧での摺物が狂歌界でも狂歌絵本として刊行されるようになった。詠まれた狂歌の内容に添った画を絵師に依頼し、帖仕立てにしたものが一般的である。

注) 側：狂歌グループで大きな集団を「側」、小さな集団を「連」という。

●狂歌絵本『狂歌歳旦 江戸紫』（1 月。中本 墨摺摺物。万亀亭花江戸住〈江戸花住〉（筆者注：？～1805）撰。宗理画。印完。松山堂版。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

☆〈年礼の図〉一図を描く (18.2×13.2)。

※河井物梁〈ゆつたりと春の日あしも長袴 田雀（田鶴）のあゆみと見ゆる年礼〉の狂歌に添えて、年始挨拶の長袴に袴姿の侍の後姿を描く。

他に、鹿都部真顔（四方歌垣）、森羅万象注（万象亭）、喜多川歌曆、歌川豊国、

鳥文斎英之、溪斎英泉、篠原女等が描く。

注) 森羅万象：1754～1810。狂歌名。他に、竹杖為輕。本名：森島中良。通称：万蔵。

※ここで前年の末に改号した宗理号が「大筒射図」などと同様に用いられた。

100 年礼の図（島根県立美術館）

●狂歌絵本『桜杜鵑狂歌集（仮題）』（この頃か〈1990 講談社『秘蔵浮世絵アルバム・コレクション』による〉。色摺絵入り狂歌本一冊。摺物。宗理画。後補題簽には「狂歌摺物本 宗理」とある。南海堂（伝不詳）の私家版。全 14 丁半。22.0×15.8）



※桜を画材にした 36 人 36 首と、杜鵑を画材にした 36 人 36 首を集めた狂歌集。

●狂歌絵本『四方の巴流』（1 月。『四方の春』とも。折本一帖。四方側狂歌本。鹿都部（狂歌堂）真顔（四方歌垣）編。北斎宗理画。鳥文斎栄之、溪斎英泉、山東京伝等も描く。葛屋重三郎版。21.4×15.8 島根県立美術館：永田コレクション/立命館大学図書館蔵）

※宗理の狂歌がある。「霞ひく筆のちからのふニ筑波 かくも長閑きけふの書初 完智宗理」（『年譜』による）。

図は、柳のある岸辺から出る渡し舟に、馬・駕籠・漫才師・娘や男たちなどが乗って、船頭が力一杯棹を差している「初春の渡し舟図」一図が描かれる。

※『年譜』では、この年と寛政 8 年（1796）にも『『四方の巴流』』の記載がある。文政 11 年（1828）正月刊の狂歌絵本『四方の巴流』（北斎は描かず）とは別本。

●絵暦「大筒射図」（「鉄砲（大筒）を担ぐ武士」とも。1 月。色摺。宗理写。印完知。10.4×13.8 島根県立美術館：永田コレクション/日本浮世絵博物館蔵）

※図に「大筒正目三百八十一貫九百●（六か）十二文目 寛政七乙卯年正月吉辰」「稲葉喜三郎承休」の書き込みがある。「大筒」の「大：で、大の月を表し、「正目」（筆者注：目方）の「正」が正月を示す。以下、三・八・十一・九・六・十二が大の月で、それ以外が小の月を示している。稲葉喜三郎・印承休という人物がこの摺物を配ったものと考えられている。袴姿の侍が左膝を立てて大筒を構えている図。

101 大筒射図（日本浮世絵博物館蔵）

同図は、「津和野藩伝来摺物」として島根県立美術館：永田コレクションにも所蔵されている。⇒ p 161

※明和 5 年（1768）、北尾重政『絵本吾妻の花』（『日本風俗図会 11 講』所収。国立国会図書館デジタルコレクション）の浅草寺図の左上に、稲葉六郎太夫として同図柄に似た絵馬が描かれている。



●絵暦「ざしき万ざいの大小」（「座敷万歳図」とも。正月。横長判摺物。色摺。宗理画。印完。11.0×28.8 島根県立美術館：永田コレクション/アムステルダム国立美術館蔵）

※同図は「津和野藩伝来摺物」の一図として、島根県立美術館：永田コレクションにも所蔵されている。落穂庵小金厚丸の文の後に「寛政七 乙卯のはる」とある。⇒ p 161

寛政8 (1796) 丙辰 37 歳 百淋宗理、俵屋宗理、北斎宗理、宗理、百林 印：百林、
完、知、先知 (津和野藩伝来摺物より)、辰政、辰、政：こと (26 歳)、(富之助：10 歳)、阿美与 (8 歳) 阿鉄 (6 歳)

◇相撲興行 (3 月、本所回向院。10 月、本所回向院)。

◇11 月、市川海老蔵 (五代市川団十郎)、都座の公演で引退。

◇稲村三伯ら、フランス人フランソワ・ハルマ (François Halma) の『蘭仏辞書』から初の和蘭辞書『波留麻和解』を完成。

◇寛政 5 年 (1793) の禁止令に続き、一枚絵の中に、評判の水茶屋の女や芸者などの名前を判じ物にして書き入れることを禁ず。

◇琉球使節来朝。寛政 7 年 (1795) 即位した尚温王の謝恩使 (琉球王に即位した報告)。

【曲亭馬琴の読本第一作】

○曲亭馬琴 (30 歳)、読本第一作『高尾船字文』

○烏亭焉馬、『喜美談語』 (主催する「噺の会」による小咄)

○桑楊庵 (俗称：頭光)、春興狂歌本『百さへつり』

○司馬江漢、「相州鎌倉七里浜図」 (「寛政 丙辰夏六月二十四日」「西洋画士 東都 江漢司馬峻注 描写」の書込みあり。

注) 江漢司馬峻：「峻」は、司馬江漢の本名：安藤峻によるもので、西洋式に名前・姓の順にしたものか。

102 相州鎌倉七里浜図 (神戸市立博物館)

※洋風画のこの絵から北斎は寛政 10 年～13 年頃の洋画風「江の島図」(「江の島風景」とも。ほくさゐらうつす) を着想したといわれる



【「こと」と再婚】

★後妻こと女 (小兎?) と結婚 (前年に結婚とも)。

※北斎の墓のある誓教寺の過去帳、文政 11 年 (1828) 6 月 5 日条に「性善院法屋妙授信女 文政十一年戌子歳 六月五日」とあるという。「妙」の字が名を表すものであり、「信女」は女性の戒名の通例であるので、「信」を「こと」と読んで名とする従来の呼び方を否定して、名は「たえ」であるとする説がある (1993『大揃い 北斎 日本浮世絵博物館所蔵』 (p 139) 読売新聞社)。

【住吉広行に土佐派を学ぶか】

★この頃、狩野派、土佐派およびその江戸の分派である住吉行広 (1755～1811 通称：

内記)の住吉派(土佐派注)などを学び、その後にも、司馬江漢の洋画風、南画(文人画)、京都の若沖・蕭白などに関心を持ったことは指摘されている(リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p22)。

但し、司馬江漢につき西洋画・油絵画法を学んだとされるが、実際についたのではなく、私的に江漢の絵を学んだということか。それは他の画家についてもいえよう。

注)土佐派:平安時代以来の大和絵の伝統を受け継いだ画派。室町前期、宮廷の絵所預であった藤原行光が祖とされ、行広が土佐を名乗って成立。室町後期の土佐光信によって隆盛をみた。漢画の狩野派と並ぶ画派として江戸末期まで続いた(「デジタル大辞泉」より)。大和絵の伝統を継承して、もっとも長くその主流を占めた画派(小学館『日本大百科全書』より)。

【摺物にも意欲】

★宗理期には役者絵などの錦絵を描かず、主に狂歌、俳諧の摺物、絵暦の分野に活躍。

『浮世絵類考』(大曲駒村の校訂底本。岩波文庫版p144)では「(二代目宗理)これまた狂歌、摺物の画に名高し。浅草に住。すべて摺物の絵は錦絵に似ざるを貴ぶとぞ注」と評している。

注)錦絵に似ざるを貴ぶとぞ:錦絵のように売り物を主眼としないということか。それとも錦絵のように派手な絵柄や色彩を用いないということか、本意不明の文。

※天明3年(1783)には狂歌師は350名~360名程いたらしい(1984平凡社『浮世絵八華5北斎』所収、永田生慈「北斎の生涯」p127)。天明以降の狂歌の隆盛にともない、北斎に狂歌師による狂歌本摺物注の依頼が増えていった。

注)「摺物」とは、狂歌や俳諧の作品発表、襲名披露、開店案内、年賀挨拶、長唄・浄瑠璃の開催案内(プログラム)などのための私的出版物(私家版の入銀本)で、浮世絵などを添えて出すもの。特に新作狂歌を添えた年賀用(歳旦摺物)が多い。

●咄本「喜美談語」(「貴身談語」か。中本1冊。宗理画 17.9×12.9)

●黄表紙『朝比奈御髭の塵』(二冊。桜川慈悲成(芝楽亭)注作。画工名なし。西村屋よ八版。国立国会図書館蔵)

注)桜川慈悲成:1762~1833または1839。戯作者・落語家。

※宗理の挿絵かどうか不明とされる。

●狂歌絵本『絵馬合女仮名手本』(4月。墨摺半紙本一冊。三陀羅法師(千秋連)撰。画工名なし。松山堂版。20.8×15.0 東京国立博物館/初瀬川文庫蔵)

※人形浄瑠璃や歌舞伎の「仮名手本忠臣蔵」全十一段を、狂歌と女性の姿で見立てて描く。初段~十一段まで、いろは順に各一丁に4首、最後に「十一丁切」として3首を載せ、忠臣蔵四十七士にあやかり計47首で纏めている。各丁の上または下半分に北斎の画が載せられる。寛政8年の芝泉岳寺の開帳に合わせて制作されたとされる。北斎は、百琳宗理名で「つ」の段の狂歌「つれもなき恋の山路のかへるさに 跡より声をかけてとどかん」を詠んでいる。

※第二版が寛政11年(1799)に刊行され、宗理・百林画、江戸松山堂とある(檜崎宗重

『北斎論』 p146)。

●狂歌絵本『春の曙』(折本色摺一帖。摺物。芍薬亭長根撰。百淋宗理画。北斎館/東洋文庫ミュージアム蔵)

※芍薬亭長根らの菅原連による歳旦狂歌集。「枕草子」の冒頭文「春はあけぼの」を意識したもの。喜多川歌麿と一図ずつ描いている。この本、現存3例のみという)

☆〈春の曙を見る貴婦人〉(色摺。17.1×38.3)

※開け放した部屋から外を眺める二人の娘と禿髪の子ども。図の右の文箱に「春曙抄」と書かれて、北村季吟の「枕草子」注釈本を意識したものと思われる。喜多川歌麿も〈やつし枕草子〉で御簾を巻き上げる女と、外を見る娘を描いている。



103 春の曙を見る貴婦人 (東洋文庫ミュージアム)

●狂歌絵本『帰化種』(春。半紙本墨摺一冊。9 図全図描く。清涼亭菅伎撰。百淋宗理画。東洋文庫ミュージアム/シカゴ美術館蔵)

※万象亭(森羅万象)の序文に「寛政たつの春」とある。想像上の異国風俗を描く。

〈崑崙国〉〈小人国〉〈女国〉〈長脚国〉(文化3年:p305「摺物」の〈長脚国〉〈手臂国〉参照)〈聳耳国〉〈穿胸国〉〈手臂国〉〈擔汲国〉〈羅刹鬼国〉(この図のみ見開きの墨摺)

【副号としての北斎現る】

※宗理号に付けられた「北斎」が登場した。この号は、「前」「改」などを付したヴァリエーションはありながらも、なんらかの形でほぼ生涯にわたって用いられる。

※この年正月版の数種の摺物に「北斎」の署名が初めて用いられる(『もっと知りたい葛飾北斎』永田生慈監修)。

●肉筆画「梅樹図」(この頃か。紙本墨絵着色一幅。北斎宗理画。印完知。116.5×34.0 大英博物館蔵)



※掛幅仕立ての図。縦長の画面の右下から図の中央に向けて枝が左に伸び、幹から垂直に上に向けて枝が伸びている。薄墨で描いた梅の木に白梅が蕾を付けたり咲いたりしている。四方歌垣真顔の賛には「うくいすのはつ音は親の異見より きけハ身にしむ 春の朝起」とある。

【この年より画風一変、宗理型美人も登場】

★宗理期では、宗理型美人図(瓜実顔〈瓜の種のように白くて面長の顔〉、小さな目、おちょぼ口、細身で背が高く不自然なほど首を傾ける)が特徴。宗理様式は宗理号を離れても文化初期にまで続く。

●肉筆画「遊女図」(この頃か。北斎宗理戯画。印完知。紙本着色一幅。70.9××24.0 フリーア美術館蔵)

104 遊女図 (フリーア美術館)

※床入れ後の遊女の姿。襟や裾が乱れ、急いで着物を着た様子。浴衣の上

に着た黒地の仕掛注の襟の一部を口にくわえて放心した表情で立っている。裾が乱れ白い足が覗いている。だらりと下げた右手には手紙らしきものが握られている。

注) 仕掛：着物の打掛のこと。着物の上に更に羽織るもので、裾に綿が入る。遊郭では仕掛という。

●肉筆画「花魁立姿図」(紙本着色一幅。北斎宗理画。印)完知。94.3×27.6 ミネアポリス美術館蔵)

※誰哉行燈(吉原で妓楼の戸前にかかげ往来を照らした木製の行燈)を背にして立つ遊女。森羅亭(森羅万象)の賛あり。

※寛政10年～12年(1798～80)の「花魁図」同様に、横向きの花魁図は北斎の得意とするところ。享和元年～文化2年(1801～05)にも横座りの「花魁図」(紙本淡彩一幅)がある。

105 花魁立姿図(ミネアポリス美術館)



●肉筆画「夜鷹図」(寛政9年～10年(1797～1798)説あり。紙本着色一幅。北斎宗理画。印辰政。99.7×28.0 細見美術館蔵)

※古くは「柳下辻君」と称された図。垂れた柳は川辺の木陰を暗示し、二羽の蝙蝠は夜を象徴するという(『原色浮世絵大百科事典』第八巻)。傘を持ち、吹き流しに被った手拭の端を噛み、髷に結んだ紅裂を見せて後ろ向きに立つ夜鷹の図。

※夜鷹は一転び24文(約600円)。蕎麦一杯16文なので、二転びで蕎麦三杯分といわれた)。一日10人(240文=約6000円)といわれる(1文=25円で換算)。



「夜鷹番屋の事、駒止橋の際に草鞋を売つて居た番屋があつたが、妙な習慣で本所の吉田町から稼ぎに来る辻君即ち夜鷹連は此番屋の空地へ集まって、各自にお化粧をして夫から稼ぎ場所へ出掛けたのである、乃で夜鷹番屋と異名を取つたとやら」(大正2年成光館出版部『趣味研究 大江戸 全』所収、元晋一「両国の面影」)。

※夜鷹番屋が本所の吉田町(現東京都墨田区石原4丁目一带)にあり、そこで筵、衣装、傘などを借り、両国薬研堀注辺りに出かけた。四谷鮫河橋にも番屋があり、ここからも四谷堀橋、牛込桜ノ馬場、愛宕辺りに出かけたという。縞模様の綿の着物、後帯・前垂姿という。

注) 両国薬研堀：両国及び両国橋西側の薬研堀(現東京都中央区東日本橋2丁目辺を指すか)。

106 夜鷹図(細見美術館)

●扇面画「布袋図」(北斎宗理画。朱文手書「百林」(寛政8年～9年(1796～97)に使用)の落款があるので、この頃か。紙本扇面着色一

面 16.7×47.8 島根県立美術館蔵)

※布袋が「寿」の字を書き終えた図。「寿」の紙中に落款がある。

●肉筆画「中国武人図」(「漢武人一人立図」とも。絹本着色一幅。北斎宗理画。印完知。52.4×20.6 東京国立博物館蔵)



※この武人は『三国志演義』に登場する趙雲とみられている。趙雲は、中国後漢末から三国時代の蜀漢にかけての将軍。口髭を生やした恰幅のよい武人が兜を被り武装して、上下に刃のついた槍を左の小脇に抱え持ち、右手を胸の前に置き、左前方を見据えている。兜や体に巻く装着は赤い色で描いている。

107 中国武人図 (東京国立博物館)

●肉筆画「涼をとる美人図」(絹本着色一幅。北斎宗理画。印完知。95.2×31.2。個人蔵)

※蚊帳から出て、暑さをしのぐため、団扇を持って涼む女は、浴衣の胸をはだけ、帯も締めずに立っている。藍色の模様の浴衣の裾からは右足の脛が覗いていて、典型的な宗理様式の美人図といわれる。



108 涼をとる美人図 (m. blog. daum. net より転載)

●肉筆画「黄石公と張良図」(紙本着色一幅。栄齋宗州応需 北斎宗理画。印辰政。114.5×47.0 日本浮世絵博物館蔵)



※謡曲等の「黄石公と張良」の話からの取材。張良が土橋の上で黄石公から太公望の兵書を受けられている場面。この兵書により張良は漢の軍師となった。

109 黄石公と張良図 (日本浮世絵博物館)

●肉筆画「馬上農夫図」(「帰農図」とも。紙本着色一幅。北斎宗理画。印辰政。83.3×26.1 日本浮世絵博物館蔵 110 馬上農夫図 (日本浮世絵博物館)

※農夫が仕事を終え、馬に乗って家に帰る図。手綱を取らず、両手を鞍の背に回して身体を反らせて馬に乗っている。杭の挿し並べてある道筋は右に大きく弧を描いている。図上部には稲葉華溪(1745~99)の賛「清風一襟邨前夕 長流萬里濯馬蹄 華溪老人」



(訓下し及び筆者意識：清らかな風が襟をなでる村里の夕べ、遙かな川の流りに馬の蹄を洗う)の句が記される。

●摺物「花鳥図」(1月。横大判色摺。北斎宗理画。ホノルル美術館：クラブ・ホーン・コレクション蔵)
※右半分に二羽の鳥と梅の木に咲く花。左半分に二代目北斎、丙子、高長、斗石、戴雅堂、戴財、斗田、戴斗の狂歌あり。

●摺物「猩猩舞の図」(1月。宗理画。『年譜』による)

●摺物「子供雪遊びの図」(1月。印完・印知。図中に「辰のとし」とある。〈『年譜』による〉)。

【初の俳諧摺物】

●摺物「花卉図」(春。横長判色摺。北斎宗理画。20.4×37.2 島根県立美術館蔵)。

※現在のところ、北斎初の俳諧摺物とされる(2018年『永田生慈 北斎コレクション 100選』展図録p202)。

※花卉とは、鑑賞するための美しい花をつける植物の総称。図右に葉を多くつけた茎と小さな花を描き、図左に、雪中空華(完来)と清霞樓馬町の句を記され、更に「寛政辰年春」とある。

●摺物「庭掃除の三美人」(「新春の庭先の三美人」とも。半切横長判。色摺。宗理画)

※図中に「寛政八丙辰春」とある。しゃがんで松の葉を掃き集める女。桶を持つ女など。

●摺物「茶人手前図」(10月。北斎宗理画)

※図中に「辰かみな月」(辰の年の神無月)とある(『年譜』による)。

●絵暦「玉とりの図」(1月。宗理画。『年譜』による)

●絵暦「豆まき図」(1月。法橋宗達図俵屋宗理写。『年譜』による)

※法橋宗達は俵屋宗達。琳派の祖。法橋は、僧位の第三位。正四位の官位に相当し、僧以外の仏師・絵師などにも与えられた。依然、琳派の様式の画風と言われる。

※他に、この年の宗理落款の絵暦は13図あるという(檜崎宗重「絵暦雑感(一)」：『浮世絵界』六の六)(『年譜』所収)。

●絵暦「龍の玩具を持つ子と母娘」(1月。宗理画。『年譜』による)

●絵暦「鳥居下の娘と子供」(1月。色摺。宗理画)

※娘の着物に大小月が示される(『年譜』による)。川辺に立つ鳥居の前に座り、小さな子供を抱いている娘。川には、鳥帽子を被った男を乗せた艫こぎの船が行く。

※同図は「津和野藩伝来摺物」の一図として島根県立美術館：永田コレクションに所蔵されている。本稿「寛政年間」項を参照のこと。

●絵暦「七福神図」(1月。宗理画)

※画中に「辰春 竹田口上」とある(『年譜』による)。

●絵暦「懐通辰己楼」(1月。色摺。横九つ切判摺物。百淋宗理画。印百林。小金厚丸作。13.4×17.8。すみだ北斎美術館・ピーター・モース・コレクション/ベルリン東洋美術館蔵)

※蓮の花に立っている菩薩が傘を広げて担いでいる。開いた傘を光背に見立て大小月が示される。すみだ北斎美術館のツイッターでは、厚丸の蜃気楼についての文を「永代島遊船に乗ったときに蜃気楼をみた。蛤町の口もとから（蜃気楼が）出て、洲崎の沖にとまった。その輝きは阿弥陀の光のようで、人の目を悦ませた…」と意識している。

「辰巳」は深川の別称で「しんき」と読んで「蜃気楼」と掛けている。図左下の扇子の後の蛤焼きの鍋から蜃気楼のような気が立ち上っている。

右枠の表題が書かれた紙が表紙になり、折って懐中物とした絵暦と思われる。印の「百林」は、北斎の号「百琳」をこのように刻印している。



111 懐通辰巳楼 (すみだ北斎美術館)

●絵暦「碁盤人形」(1月。色摺。宗理画。12.8×8.8 すみだ北斎美術館：ピーターモースコレクション/島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※碁盤の上で花笠をまとった人形を袴姿で操っている図。操る男の袴に「辰」、袖に「松」とあり、江戸中期の辰松八郎兵衛という人形遣いを表しているという。人形の帯に小の月が示される。

※本図は「津和野藩伝来摺物」の一図として島根県立美術館：永田コレクションとしても所蔵されている。本稿「寛政年間」条を参照。

●摺物「瑞亀図」(この頃か。紙本色摺一幅。北斎宗理。印辰・印政。34.9×49.4 奈良県立美術館蔵)

※湧き出た醴水から亀が現れ、老夫婦が長命のしるしと喜んで瑞亀(尾が房のように広がっている亀)に酒を飲ませている図。

金箔を付した豪華な摺物。華溪老人注の賛「醴泉湧出 亀銜玉杯 福鐘有兆 寿門了開」。

注) 華溪老人：稲葉貞隆。号：華溪。書家。寛政12年(1800)没(51)。



112 瑞亀図 (奈良県立美術館)

●摺物「元結い造り図」(春。色紙版色摺絵暦。宗理画。18.9×18.0。島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※元結は、髪もといの髻もどりを結び束ねる紐をいう。江戸時代には糊でかためたこよりを用いた。江戸言葉では「もっとい」と発音した。図中に「たつの春」とある。図は、元結いの紐を

繰る手回しの道具の前で作業する女が描かれる。狂歌は春興と題して、友垣増人・鳴滝音人・銭屋金埒が詠む。

●摺物「縁側の婦人」(7月。北斎宗理画。印不明)

※「たつはつ秋」とある(『年譜』による)。

●摺物「梅樹と円窓の文机」(色摺。宗理画 「津和野藩伝来摺物」にあり)

寛政9 (1797) 丁巳 38 歳 北斎宗理、宗理、百琳宗理 (津和野藩伝来摺物より) 印辰、政、宗理、北斎、完知、「完、知、百林」(津和野藩伝来摺物より) : こと (27 歳)、(富之助 : 11 歳)、阿美与 (9 歳)、阿鉄 (7 歳)

◇相撲興行 (3 月、浅草八幡宮、10 月、芝神明宮)

◇湯島聖堂(孔子廟 : 現東京都文京区湯島1-4-25)が昌平坂学問所(昌平黌)と改称、幕府直臣だけでなく他藩士にも門戸を広げた官学校となる。

◇1 月 1 日、歌川一勇齋国芳生 (~文久元 : 1861)。

◇5 月 6 日、初代蔦屋重三郎没 (48 歳。幽玄院義山日盛信士。墓 : 正法寺 : 東京都台東区東浅草1-1-15)。以後の蔦屋重三郎は二代目となる。

◇歌川一立齋広重、定火消同心安藤源衛門の長男として江戸八代洲河岸 (現東京都千代田区丸の内 2 丁目辺) に生まれる。幼名 : 徳太郎 (生年月日不明~1858)。

○烏亭焉馬、「詞葉の花」(晰の会)。

○鋏形蕙斎、『鳥獣略画式』(北斎に影響したか)

●黄表紙『塩焼文太都物語』(正月か。三冊。桜川慈悲成作。画工名なし。すみだ北斎美術館 : ヒーターモース・コレクション) 西村屋与八版。

※現在のところ、宗理かどうか不明。

●狂歌絵本『柳の絲』(歳旦集。全 5 函。折本一帖。浅草市人<浅草庵市人>撰。堤等琳、鈴木鄰松、細田栄之(鳥文斎)、花藍(北尾政演)とともに、北斎宗理が洋画風に「江島春望」一函を描く。蔦屋重三郎版。大英博物館/島根県立美術館 : 永田コレクション/慶応義塾大学/日本浮世絵博物館/東洋文庫 : 岩崎文庫蔵)

※「北斎他に抜きんず」と評せられる(『画狂人北斎の実像』小林忠 p 220)。

☆〈江島春望〉(色摺。北斎宗理画。印北斎 印宗理 見開き 24.7×37.7)

※江ノ島まで続く干潟に打寄せる波。浜辺で天秤の荷物に棒を立てて支え、横棒に腕を掛けて休み、笠を持ちあげ側にいる女たちを見ている男。参詣に来たらしい二人の女の一人は赤子を背負った女の子に何か話しかけている。側にはその妹が姉の後ろに隠れている。遠くの干潟には 4 名の人物がいる。左の背景には富士山が描かれる。 113 江島展望 (東京国立博物館)



画趣は、前年 6 月に描かれ、芝の愛宕神社に掲げられた司馬江漢の「相州鎌倉七里浜図」(油彩画)を参考にしたともいわれる。

※江の島（神奈川県藤沢市片瀬地区にある陸続きの島）には江の島弁天（江の島神社。現藤沢市江の島 2-3-8）があり、大山参りとセットで参詣することが多く、江戸からは往復約7日間かけた、遊山を兼ねた旅であつたらしい。

●狂歌絵本『春のミヤび』（『春のみやび』）とも。色摺折本一帖。芍薬亭長根編。北斎宗理画。菅原連版。すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵

※浅草庵市人や三陀羅法師など151首を収める。北斎は2図を描く。

☆〈舟のおんなたち〉船で櫓を漕ぐ女。その後ろに乗る二人の女の図。

☆〈川辺を行く一行〉揚帽子（角隠し）を被った武家の女房に供をする二人の女と男、風呂敷堤を担ぐ小僧の一行が、春の川辺を歩く図。

●狂歌絵本『さんたら霞』（春。色摺一帖。三陀羅法師撰。北斎宗理画。大英博物館蔵）

※歳旦集。北尾重政らと描く。寛政10年『さんたらかすみ』の豪華本に引き継ぐ。

●狂歌絵本『百さへずり』（色摺一帖。北斎宗理画）

※文化2年（1805）、同名の『百囀』が刊行されているが、内容は別物。未詳。

●詠句集『白・萩・雀』（大奉書全紙判。北斎宗理画。印辰・印政。シカゴ美術館蔵）

※俳人雪中庵完来（1748～1817）社中による月を主題にした詠句集。上下折りで、句は逆さに記載。上部の図は、大きな石の引き臼が二つ、横と縦に置かれ、横に置かれた臼に二羽、萩の木に立てかけられた臼に一羽の雀がとまっている。萩を支える竹柵には白い衣が掛けられている。

【菱川宗理は北斎にあらず】

●花道書『遠州流挿花四季詠』（墨摺4巻4冊。森一訓編。菱川宗理写。大田蜀山人序。早稲田大学図書館/お茶の水女子大学図書館蔵）

※北斎は寛政10年（1798）に門人宗二に宗理号を譲っていることと、宗理期に「菱川」を用いた号は無いという説がある。門人宗二は菱川宗理を名のっているので、この花道書の刊行年と画工名については考証の余地がある。寛政6年（1794）の「菱川宗理は門人宗二」の項参照。

※梅本塵山『浮世絵備考』（明治31年）「北斎辰政」（P59）の項に「北斎辰政 通称、橋本庄兵衛、為一の最初の門弟にて、初名、宗二、後に宗理の名を譲られ、菱川宗理（三世）となりぬ。『浮世絵類考』に、為一が、はじめ菱川宗理と名乗りしとあれども、全く此の三世宗理と混じて誤れるものなり。為一は菱川と呼ばず、俵屋宗理といへり。三世宗理、のち再び師の号を譲り受けて、二代目北斎辰政となる。浅草山谷に住みて、狂歌摺物の絵を多く画けりと云ふ」とある（「国立国会図書館デジタルコレクション」より。ルビは筆者による）。

花道の遠州流は小堀遠州を祖とし、その美意識を花道に継承したもので、この時期江戸で流行した。文化13年（1816）に『新遠州流挿花四季詠』、文政元年（1818）に『遠州流挿花四季詠』、嘉永4年（1851）に『遠州流挿花四季詠』としても出版された。図は、江戸の遠州流各門人名と挿花が描かれる。

●肉筆画「梅樹図」(絹本着色一幅。百琳宗理画。印完知。81.8×31.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※金色の無地の背景。図の右下から左上に梅樹が伸び、図中央で右上に向かってくの字に伸びる幹。枝には白梅の蕾が点苔のようについている。画面中央には枝の向こうに薄く満月が描かれる。図上部には、朱楽菅江他二人の狂歌が記される。114 梅樹図(島根県立美術館)



●錦絵「紀ノ名虎と大伴義雄」(この年に成稿。前北斎為一筆。21.4×18.8 フリーア美術館：プルヴェラー・コレクション)

※二人の武将が組み合う図。落款の「為一」は文政3年(1820)頃から用いているので、プルヴェラー・コレクションの作品はそれ以降に刊行されたものと思われる。

●絵暦「琵琶を弾く弁天」(紙本色摺。宗理画。四ツ切。秋長堂(物築)版 11.5×16.7 北斎館蔵)

※水辺の岩に腰掛け琵琶を弾く弁天。弁天は水の神でもある。岩に月の大小を示す漢数字が書かれている。この年は丁巳の蛇の年で、弁天の使いの蛇に因んでの摺物。115 琵琶を弾く弁天(北斎館)



図の左に「佐保姫は霞王女は琵琶の曲 いずれひくともひけはとらまじ 古梅亭難波華住」、「春霞今朝ひく琵琶にあわせてや うた出しけん初鶴の声 蓬萊亭宝篋亀」、「此神のつかへるへびにのまれつゝ よめぬ蛙の哥袋から東都 万亀亭花江戸住」の三種の狂歌が記される。

●絵暦「美人小松引の図」(1月。宗理画。『年譜』による)

●絵暦「帆柱に日の出」(1月。宗理画。『年譜』による)

※佐野行道の狂歌あり。

●絵暦「乙福面の図」(1月。宗理画。『年譜』による)

※この年、宗理の絵暦は 19 図あるという(長谷部言人『大小暦』による。『年譜』に所収)

●絵暦「醤油屋店頭」(1月。色摺。中判。宗理画。17.8×25.4 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵)

※醤油屋の店内にはいくつもの樽が積まれ、主人は帳場の火鉢の前で算盤を立てて、肘掛けにしながら煙草を吸っている。背後に「改 年徳 亥子の間 金神 とら卯 いぬ亥」と書かれ、末尾に「丁巳年」とある。大小月と節季が詳しく記されている。

「鶯の大極上ハ醤油ほど きゝし初音を賞翫する 常陽下館 荒川亭貴達」、「醤油見せはるたつ四方の山うろこ 味よく霞む今朝の長閑さ 末広庵長清」、「春立と醤油の割り

のきゝもよく けさ呑口をひらく鶯 浅草庵
市人」、「三丁のミつの朝よりはしまりて
山中ハミな霞なりけり 先大家裏住」の狂歌
が記される。 116 醤油屋の店頭（すみだ北斎美術館）

●絵暦「年始の武士」（1月。色摺。宗理画。
10.1×8.3 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレ
クション蔵）

※手あぶりに肘をかけながら書物を読む老翁

に、袴の武士が刀を右脇に置き、年始の挨拶をしている図。老翁は脇に置いた書物の方
に顔を向けている。四角志面人の狂歌「巳のとし春」に続けて「新玉の盃事のしけゝれ
ハ 自然とかたの春をしりけり」が記される。老翁の背後の壁面の扇の図に、大の月を示
す行事や、月にふさわしい植物の文字が書かれている。



●絵暦「年礼」（1月。色摺。宗理画。9.6×11.7 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレ
クション蔵）

※麻袴を着て脇差を差した主人が、大きな門松のある家に新年の挨拶に行く。荷物を持
った小僧が後に着いて行く。門松の根元に大小月が記される。小松亭家住の狂歌の前書き
に「丁巳 立春」とある。「佐保姫の霞の衣縫ひのハし けさゆつたりと春ハ来にけり
小松亭家住」、「浪たゝぬひたひの皺も若水に うつり替らぬ春は来にけり 唯我堂川面」
の狂歌が記される。

●絵暦「羽子板遊びをする二人の禿」（1月。宗理画）

※禿の帯に大小月あり。琴興舎角道の狂歌あり（『年譜』による）。

●絵暦「正月餅と娘図」（1月。宗理画）

※図中の浪面成考の戯文中に大小月あり（『年譜』による）。

●絵暦「蛇の玩具使いと子ども」（12,6×8.1 すみだ北斎美術館蔵）

●絵暦「三番叟」（狂歌摺物。色摺。宗理画）

●絵暦「巳の字を書く娘」（大小色摺。狂歌摺物。宗理画）

●摺物「結納」（この頃か。色摺。菱川宗理画。東京国立博物館蔵）

※「結納 品々 甲子屋忠兵衛」と書かれた大看板がある店先に袴姿の侍と供の男が来
ている。上がり座敷で二人と応対している店の女。奥にはするめが干してあり、その他の
結納品が置かれている（『東京国立博物館所蔵目録』による）。北斎に菱川宗理の落款使
用はないとされるので門人宗二の作か。

●摺物「白馬節会」（1月。色摺。宗理画。13.8×12.7 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コ
レクション）

※正月七日に行なわれる朝廷の行事で、白馬の引きはじめを描いたもの。たてがみを飾
った白馬の手綱を引く男の図。狂歌に「三味線のうたにひとしく春駒の けふひきそめを
夢にミのとし 藤蔓人」とあり、「夢にミのとし」でこの年を洒落ている。また「巳春」

ともある。

注) 白馬節会：正月7日、天皇が豊楽殿（のちに紫宸殿）に出御して邪気を祓うとされる白馬を庭に引き出し、群臣らと宴を催す（「ウキペテイ」による）。この日に白馬を見ると邪気を避けるという中国の風習に因んだもの。

●摺物「新春の渡し船」（1月。色摺。宗理画。12.9×17.6 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション）

※浅草川の新春の渡し船に、三河万歳の二人や梅の小枝を持つ揚帽子（角隠し）の女、長い棒の先に輪をつけた物を立てた大道芸の男たちが乗っている。狂歌の次に「巳のとし」と記される。「海苔さらす浅草川の川かせに すきて色よき青柳の髪 上毛貢梭磨」、
「初夢に見たや茄子の駿河より またそのさきの三河万歳 同萌黄浦人」、
「いてつきてこてもゆかぬ氷さへ うこき出したる春ののどけさ 呉藍蘇丸」、
「たをや女のつくるかいこのまゆよりは くり出すらん青柳の糸 潜亭裏成」の狂歌が記される。

●摺物「栈橋の芸妓」（1月。色摺。宗理画。12.4×17.0 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション）

※柳のある栈橋から屋形船に乗ろうとする芸妓の図。狂歌「鶯のうたにあわせて風の手も ひく三味線の糸柳かな 色気内子」、
「三味線をひくや霞の高調子 梅見の船に鶯のうた 競馬行」、
「是もまたしつけの谷のふところに おとなし山の鶯の声 少々道頼」とあるように、これから客を相手に梅見で三味線を弾くか。「巳孟春」とある。

●摺物「梅と官女」（1月。中判色摺。宗理画。東京国立博物館蔵）

※柵の中の梅が咲いて、その前の床机に座って首を傾げる垂髪の官女と、床机の脇に座っている垂髪の官女。

●摺物「花魁と禿」（1月。中判色摺。宗理画。東京国立博物館蔵）

※横兵庫の髻の花魁と羽子板を持つ禿の図。図中に「丁巳はつ春」とある。

●摺物「三美人の図」（1月。中判色摺。北斎宗理画。東京国立博物館蔵）

※右から横兵庫の花魁、振袖の娘、芸者風の女の図。「丁巳はつ春」とある。

●摺物「若菜摘みの三美人」（1月。北斎宗理画）

※「丁巳はつ春」とある。足利桐生連の狂歌七首あり（『年譜』による）。

●摺物「日の出の図」（1月。色摺。北斎宗理画。図中に「寛政九丁巳」とある。『年譜』による）

●摺物「日の出を見る貴人」（1月。色摺。北斎宗理画）

※「丁巳初春」とある。海辺で昇りつつある日の出を見る立烏帽子の貴人。後ろでは小姓が控えている。貴人の側には折烏帽子を被った男が座って控え、更に白衣の仕丁が二人控えている。朝日の前を掠めるように三羽の白鷺が飛んでいる。分銅重記、浅草庵市人の狂歌あり。

●摺物「梅下外出の二婦人図」（1月。宗理画）

※「丁巳初春」とある。花月友成、浅草庵の狂歌あり（『年譜』による）。

●摺物「鳥さし」(1月。宗理画。印百林。『年譜』による)

●摺物「梅樹」(1月。色摺。宗理画。13.3×18.2 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※額取りされた図の右半分に、太い梅の老木の幹が墨絵風に描かれる。左半分に狂歌が記される。「梅か香の匂ひくるまを風の手におしてゆくとも袖にとめてし 安喜人亭堅儀」、「鶯の一夜もとまれはつこへに ねかへりさせし床の梅かへ 毛呂利館客人」、「名ふたほと柳の糸ハよりそへて 紅白に咲むめかかとゝれ 大亭可成」などの狂歌がある。

●摺物「新春の日本堤」(1月。「初春の日本堤」とも。色摺。宗理画。13.4×18.4 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※日本堤から吉原の家並みを俯瞰した図。堤には鋤を担いだ農夫が歩き、遠くの家並み前には、六人の人が小さく描かれる。空には雁の群れ。野辺亭廣道の狂歌あり。また、「丁巳の春 東書堂主人書」の賛あり。

●摺物「木馬に乗る童子」(1月。宗理画)「寛政九巳春」とある。雪中庵ほか三名の句(五句)あり(『年譜』による)。

●摺物「神馬曳初図」(1月。宗理画)「己春」とある。藤蔓人の狂歌あり(『年譜』による)。

●摺物「巳待」(色摺。宗理画。13.5×19.0 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※旧暦で60日に一度おとずれる己巳の日の弁財天の祭りに、「巳巳待御祈禱御礼 別当福寿覚」の文字を書いた札をかざしている御殿女中の大首絵。前髪に簪を差している。

不忍弁財天・深川八幡弁財天・深川冬木弁財天・深川洲崎弁財天・本所石原弁財天などに前日より籠もる。「不忍の池ハ恵方のかたはつし 霞のおくの女かみなる 小柄高彫」、「まつとしの封しをきつて ミよの春 あら玉筥の文の書初 末程吉」、「代参にたつや霞のおく女中 春に向ひか岡の曙 競馬行」の狂歌が記される。「津和野藩伝来摺物」にも同図がある。⇒ p 168



117 巳待 (すみだ北斎美術館)

●摺物「渡しの茶屋」(色摺。北斎宗理画。18.0×24.2 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※渡し場のある丘の茶屋の床几に置かれた人形に興味を示し、床几に上ろうとする男の子。その帯をひっぱって止めようとする女の子。その様子をほほえましく見ている揚帽子(角隠し)の母親。桜が咲く丘の下では客を乗せた渡し舟が出て行く。

●摺物「上野花見帰り」(この頃か。色摺。北斎宗理画。20.4×58.3 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※「両大師 執事」とかかれた札が立っている、桜咲く寺社境内で花見をする人々。竈に薬缶をかけ、火吹きで火をおこして茶を沸かす男の側で三人の男が休んでいる。「両大師」とは、上野・東叡山寛永寺（東京都台東区上野公園 14-5）の開山堂（慈眼堂とも）。創建者慈眼大師（天海）と、天台宗中興の祖慈恵大師（良源）の像も祀っているので「両大師堂」とも呼ばれた。

●摺物「飛鶴を見る貴人」（北斎宗理画。紙本色摺。19.1×52.1 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※衣冠束帯姿の貴人が岸辺で遠く海上に舞飛ぶ三羽の鶴を眺めている。貴人の側には三人の供人が座して控えている。「寛政九丁巳」とある。

●摺物「座敷狂言春駒」（この頃か。色摺。半切り。応需北斎宗理席上画。29.6×56.0 太田記念美術館：長瀬コレクション/北斎館〈間判：19.7×33.8〉蔵）

※全体に素描に淡彩の雰囲気の画。遊郭の座敷で春駒の踊り注を見ている多くの遊女や禿たち。奥の柱の側には袴を着た男と幫間と思われる男が座って見ている。四方連の狂歌が添えられる。北斎館蔵では、左約三分の一が切り取られ、春駒の所作事が見られない。四方連の生網屋生網の狂歌が記される（北斎館蔵にはない）。



118 座敷狂言（部分：北斎館）

注) 春駒の踊り：正月の祝いに、玩具の春駒を操りながら踊る。

●摺物「舟上水汲み」（色摺。北斎宗理画。印北斎 印宗理。22.0×56.0 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/北斎館蔵）

※隅田川の夜景で、屋形船では男が客の炊事のためか、舟端から身を乗り出し桶で水を汲んでいる。

●摺物「新春の外出」（九つ切判。色摺。宗理画。12.9×17.3 フリーア美術館：ブルーエラー・コレクション蔵）

※遊女らしき女と、包みを抱えたお付きの女。正面左に「丁巳はつ春」とある。

●摺物「太夫の鶏合わせ」（「太夫闘鶏」「太夫相撲」とも。横長判。色摺。北斎宗理画。21.7×56.2 東京国立博物館蔵）



119 太夫の鶏合わせ（東京国立博物館）

※部屋の中で遊女が二人、それぞれ鶏を脇に抱え、闘鶏の準備をしている。中に立って軍配を持って

いる行司役の遊女。部屋の右には折り屏風に「瀧川画」と書かれた滝の絵が描かれる。図左には、楽山亭嵐長の狂歌が書かれている。

- 摺物「江戸城大手門」（横長摺物。色摺。北斎宗理画 17.8×36.1）
 - 摺物「講釈」（宗理画。『年譜』による）
 - 摺物「弁天に座頭図」（北斎宗理画。印完知）「丁巳のとし」とあり（『年譜』による）。
 - 摺物「福祿寿と弁天」（北斎宗理画）「丁巳のとし」とあり（『年譜』による）。
 - 摺物「夜の梅」（色摺。宗理画。9.7×13.9 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）
- ※狂歌師らしき男が文机に頬杖をついて、障子を開け放した窓辺から梅花を眺めている図。「春の夜の闇ハあやしく白壁と たとれハ高く匂ふ梅か香 丁巳のとし 嵯峨道改竹真蔭」とある。同図は津和野藩伝来摺物（島根県立美術館：永田コレクション）にもある。本稿「寛政年間」項を参照。

- 摺物「見立七福神図」（色摺。応儒北斎宗理席上画）
- ※「夷曲注 四方壇本」と書かれた掛福のある部屋で、七福神に見立てた七人が、皿に乗った鯛や亀型の酒入れ等を置いて、楽しげに正月の宴を開いている。図の左には鶴と松が描かれた衝立があり、その前では扮装のための眉と目が描かれたあて物を目にあて、三味線を持っている。その姿を頭巾を被った男が二人、面白そうに見ている。

注) 夷曲：ひなぶり。狂歌を指す。

- 摺物「寿老人と遊女」（この頃。狂歌摺物。色摺。無款）寿老人に寄り添う遊女。

寛政10 (1798) 戊午 39 歳 北斎辰政、北斎宗理、宗理改北斎、完宗理、宗理改北斎辰政、時太郎可候、可候、宗理、完知、北斎完知、かつしかの北斎宗理、二世宗理、北斎、
印：三徑、師造化、完、知、完知、北斎、北、斎、百林、かつしか、北斎宗理、(花
押)：こと (28 歳)、(富之助：12 歳)、阿美与 (10 歳)、阿鉄 (8 歳)、阿栄 (1 歳)

◇ナポレオン、エジプト遠征。

◇相撲興行 (3 月、芝神明宮、10 月、本所回向院)。

◇この年、宝暦暦から西洋天文学を踏まえた寛政暦 (天保 14 年：1843 まで) に改める。

◇オランダ商館江戸参府。

◇5 月 2 日、俳人高桑蘭更没 (73)。

◇7 月 27 日、近藤重蔵、択捉島に「大日本恵土呂府」の標柱を立てる。

◇朱楽菅江没 (60)。生没年については明確でなく、元文 3 年 (1738) 又は元文 5 年 (1740) 12 月 24 日に生まれ、寛政 10 年 (1798) 或いは寛政 11 年 (1799) 又は寛政 12 年 (1800) 12 月 12 日 (又は 1 月 17 日) に没したとされる。本稿では元文 5 年生～寛政 10 年没とした)。

○本居宣長、『鈴屋集』『古事記伝』(全 44 巻完成)。

○鳥亭焉馬、落咄『無事志有意』(寛政の改革により最後の噺の会となる)。

○式亭三馬、江戸の遊里、深川古石場を舞台に描いた洒落本『辰巳婦言』(角書

「石場妓談」。喜多川歌麿画が絶版を命じられる。宮武外骨『舌禍史』（p91）に「其地に於ける妓女の痴態を写せるものにして、所謂蒟蒻本注なり、此書亦風教に害ありとして絶版の命を受けたりといふ、されど著者には何等の累を及ぼさざりしが如し」（ルビは筆者による）とある。

注) 蒟蒻本：半紙四つ折りの小型本で、形と色が蒟蒻に似ているので、洒落本をこう呼んだ。

【娘・阿栄誕生の謎】

★この年、阿栄生れたか。北斎は寛政8年（1796）に後妻「こと」と結婚しているので、2年後の本年には阿栄が誕生していると推測する。また、応為（阿栄）の結婚時期や北斎の創作への協力（特に艶本）等の年齢を勘案し、本稿では寛政10年（1798）の誕生が妥当とした。但し、こととの結婚が寛政7年とするとお栄の誕生は寛政9年頃となるか。

キャサリン・ゴビエ『北斎と応為』（彩流社2014刊）では北斎40歳（寛政11年：1799年）の子とする。また、鈴木由紀子『浮世絵の女たち』（幻冬舎2016刊・p188）では寛政12年（1800）頃とする。また、『葛飾北斎伝』（p312）の「一説に、阿栄、加瀬氏の家を出で、加州金沢に赴きて死す。年六十七」の記事から類推して、寛政13年（1801）前後の生まれとする見方もある。

※『葛飾北斎伝』では、四方梅彦談として、次のように記している。

「余が初めて北斎翁の所に到り、一面せしは、実に二十歳の時にして、其の頃、阿栄は、四十歳前後なりし」（p313）。

梅彦の生没年は文政5年（1822）～明治29年（1896）であるので、天保12年（1841）が梅彦の20歳の歳となる。このとき阿栄が40歳（前後）と仮定すると、その生年は寛政12年（1800）前後となる。お栄は辰女（「朝顔美人図」等）と号しているので「辰」の年である寛政8年（1796）生まれと推測する説もある。

阿栄の生年時期については謎が多いが、今後の検証を待ちたい。

★この頃、本所林町三丁目家主甚兵衛店に住むか（嘉永4年、浅岡興禎編『古画備考』による）。両国駅から地下鉄都営新宿線森下駅の間辺か。

【カピタンからの注文に北斎の心意気】

★北斎と阿蘭陀のカピタン注1のエピソードが隣家の鍼医某による話として『古画備考』注2(三十一「浮世絵師伝」の「北斎」の項(天保十年六月十八日針医某話)朝岡興禎編)に記された内容を、飯島虚心も『葛飾北斎伝』で記している。

「此の頃(割注：年月詳ならず。北斎本所林町三丁目家主甚兵衛店に住せし頃なり)江戸に來りし和蘭の加比丹某、我国町人の小兒出産の体(様子)を始として、年々成長の体、筆算稽古(勉強や稽古)の体、又年たけて遊里などへ通ふ体、又年老ひて死去し、葬礼を行ふの体を図し、男子女子と一卷づづ、二卷に画かんことを北斎に依頼し、金百五十円注3の謝礼にて、約定せり。加比丹附属(ついて来た)の医師注4某も、亦同図二卷を画かんを乞ふ。北斎諾して、数日間にこれを画き、さて四卷の図を携へて、旅館(カピタンの定宿の長崎屋)

に到りしに、加比丹は、約のごとく百五十金を出だし、二巻を受納せり。夫より医師の許に到りしに、医師の曰く、予は加比丹と異なり薄給の身なれば、同等の謝礼はなし難し、半減即七十五金にて、二巻を与へ給ふべし。北斎少しく憤りて曰く、何故に最初に、其の事を明し給はざるや。画は同じくても、彩色其の他を略すれば、七十五金にても画かるるなり。既に画きたる上は、今更なすべきなし。又これを七十五金にて進ずるときは、加比丹に対し余り高価を貪りたることに当たり、心苦しき限りなり。医師の曰く、されば二巻の中、男子の図一卷を七十五金にて与へ給へと。此の時尋常の画工ならば、諾して一卷を与ふべきに、赤貧洗ふがごとき北斎、其の約に背きたるを憤り、二巻共に懐にして、直に家に持ちかへれり。家婦其の故を聞き、諫めて曰く、日夜丹精を凝らし画き給へる画巻なれど、此の図我邦にては珍しからぬものなれば、売らんとするも、買う者なかるべし。時間と費用を算すれば、損失なれども七十五金にて、医師に与へ給ふが、得策なるべし。今七十五金を得ざれば、貧苦の上に、貧苦をかさぬるの道理ならずや。北斎黙して辞なく、暫ありて曰く、予も亦其の貧苦の日に迫るを知らざるにあらざるなり。されど外国人の約に背きしを、其の通りになしおく時は、自分の損失は、免るゝとも、我邦人は、人によりて掛直をいふとの嘲は、蓋し免るゝ能はざるなり。故に予は深く其の所を考へて、持ち帰りしなりと。後に訳官某此の事を聞き、加比丹に語りければ、加比丹も深く感じて、直に百五十金を出だし、かの二巻をも請ひ得て、本国に持ち帰りしとぞ。(割注：此の一条は、『古画備考』にも出づ)其の後和蘭より画を請ふ者多く、毎年数百葉を画きて、長崎に送り、海外に輸出せしが、後に幕府国内の秘事を漏すをおそれ、これを禁止せり注5」(p 62~65。ルビ・句読点・()内の書き込みは筆者による)。

※「ハーグの博物館(王立骨董陳列室)を調査した(ルイス・)ゴンス氏によれば、これらの絵巻はハーグの博物館には収蔵されていないということである(ルイス・ゴンスは、たしかに日本コレクションを見るために、当時ハーグとライデンを訪れている(略))」(『2017 北斎展図録』所収。マティ・フォラー「葛飾北斎とシーボルトの出会い」p 16)。

【北斎の大和魂】

※『古画備考』では「サスガ俗画ニ致セ、都下ニ雷鳴致程ノ画師ハ、気性格別ノ事也。ト、某深感候。其後、カピタン聞之、以ノ外ノコト也トテ、自分ヨリ金子ヲ出シ、定価ニテ調、国ニ持参候由、末世ト申セドモ、我邦ノ人気、大和魂侍リ候事、予モ又深クコレヲ感称シテ記置了」と結んでいる(ルビは筆者による)。

注1) このときのオランダ商館長はゲイスベルト・ヘンミー(Gijsbert Hemmij 寛政4年:1792年11月13日から赴任)で、江戸から長崎に帰る途中の掛川で「渴病」(筆者注:のどの乾き。流動食を欲し、尿が通じない病気)にかかって急死した。

※マティ・フォラー「葛飾北斎とシーボルトの出会い」『2007年北斎展図録』東京新聞社所収では「1822年、ブロムホフから北斎に絵画の発注があったことは確かである。そして、1826年にその支払いをめぐる問題が起こったとき、北斎とヘンミーではなく

デ・ステューレル商館長が医師シーボルトとともに居合わせたことも確かといえよう」としている (p18)。

※『葛飾北斎伝』割注(p66)には「明治二十三年八月三十日の『朝野新聞』に、寛政十年四月廿四日、阿蘭陀の船将以思別尔辺米 (イースベルヘンメル=ゲイスベルト・ヘンミー) といふ者、幕府へ伺候の途、渴病に罹り、遠州掛川の客旅に死亡し、翌廿五日同所天然寺に葬ると、寺記に見えたり云々。此の人或はかの画を北斎に依頼せし加比丹か猶考ふべし」とある (ルビ・書込みは筆者による)。天然寺過去帳の4月24日項に「通達法善居士 阿蘭陀かびたん七旅人」とあるという (永田生慈「北斎とカピタン 遠州掛川天然寺を訪ねて」：『北斎研究』5号)。

注2) 『古画備考』は、朝岡興禎による画人伝 (弘化2年~嘉永3年 (1845~:1850) 頃の執筆)。

注3) 織田一磨『北斎』では、150金を150両としているので一両10万円として約1500万円となる (p61)。

安田剛蔵『画狂北斎』では、『葛飾北斎伝』の150金ではなく「揮毫料三百金と伝えられている」とし、「無造作に金三百両と解することは当を得ていない」ので、「単位を金壹歩とみて三百金が金七十五両となるから、まずこの辺を最高と解するのが妥当ではあるまいか」としている (p57~58)。

75両であれば約750万円となり、これまた途方もない高額となる。江戸貨幣の換算は一樣ではなく、この換算が妥当かどうかは碩学の士の判断を待ちたい。本稿ではこの頃1両約10万~12万円で換算している。ただし、江戸中期と後期では一両の換算は変化している。

注4) 「医官某」はレツケか。

注5) 其の後和蘭より画を請ふ者多く、毎年数百葉を画きて、長崎に送り、海外に輸出せしが、後に幕府国内の秘事を漏すをおそれ、これを禁止せり：『新增補浮世絵類考』(竜田舎秋錦編。慶応4年 (1868) 刊) に以下の記事があるが、この頃のものか。

「香具師の看板絵より芝居操の看板、油絵蘭画に至迄、往々新規の工夫を画き、刻本の細密定規引の奇巧、類すべきものなし、紅毛よりも需に应じて、二三年間数百枚を (オランダへ) 送りしかは蘭人も大いに珍重す、後是を禁せられたり」(檜崎宗重『在外秘宝 葛飾北斎』p10。ルビは筆者による)

※看板絵や西洋画風の油絵や、定規を引いたりした幾何学的な絵などに優れているので、オランダ人の求めに应じて2、3年のうちに数百枚を渡したが、絵を国外に持ち出すおそれから、後に売り渡しが禁じられたというのである。このことで北斎も役人からの嫌疑を恐れたともいわれる。

★寛政8・9年の宗理の摺物はかなり人気があった (安田剛蔵『画狂北斎』p59) のでカピタンも北斎に注目したと思われる。

【歌麿、北斎らの所業を非難する】

オランダ人に絵を大量に売る北斎らに対して、浮世絵界の大御所喜多川歌麿は「錦織歌麿形新模様」（大判。寛政 8 年～10 年〈1796～98〉の「文読み」図の左に非難の文字を記し、自分の美人画により、木っ端絵師に絵師の有りようを示そうとしている。

120 喜多川歌麿「錦織歌麿形新模様」（文読み：大英博物館蔵）

「夫レ吾妻錦絵ハ江都の名産なり、然ルを近世この葉絵師専ら蟻のごとくに出生し只紅藍の光沢をたのしみ、怪敷形を写して、異国迄も其恥を伝る事の嘆かはしく、美人画の写意を書て世のこの葉どもに与えることしかり」（ルビ・句読点は筆者による）



【宗理号を譲り北斎辰政と号し俵屋から独立】

★8 月頃、「宗理」号を門人宗二（淋齋）に譲り北斎辰政を名乗る。俵屋宗理を家元に返す。但し、文化 3・4 年頃までは「宗理風」「宗理型」の絵様式時代とされる。副号「北斎」は文政 2 年まで使用。

「辰政」は、妙見（北斗星=北辰星）信仰より名づける。妙見堂は本所柳島（現東京都墨田区業平5-7-7）にあり（先述、天明 8 年〈1788〉項を参照）。

※「一説に、北斎翁名を門人に譲りて、若干の報酬を得るを常とす。故に貧困極まれば即名を譲る。門人窃かにこれを厭ひしとぞ」（『葛飾北斎伝』 p 55。ルビは筆者による）。

【北斎流確立 明画の筆法を以て、浮世絵をなす】

★寛政 10 年（1798）『新增補浮世絵類考』（竜田舎秋錦編）記事では、「北斎流と号し、明画の筆法を以て、浮世絵をなす、古今唐画の筆意を以て浮世絵を工夫せしは、此翁を以て開祖とす」「其頃は東都に明画の風大いに行われ、画心有ものは唐画を学ぶ事専ら流行す、俗に従ひて画風を立しは世に出るの時なり」とある（「国立国会図書館デジタルコレクション」より。句読点・ルビは筆者）。

※「北斎」を使い始める。北極星の化身である妙見菩薩（本所柳島の妙見山法性寺）を信仰しているところからつけた号。

※この期の「北斎宗理」の「北斎」は副号とみなす説がある（『在外秘宝 葛飾北斎』所収「北斎改名考」 p 21 学習研究社）。

●狂歌絵本『さんたらかすみ』（『左武多良加寸見』とも。1 月。狂歌歳旦集。半紙本折本一帖。色摺。千穂菴三陀羅法師撰。北尾紅翠齋（北尾重政）・巖岳齋（長谷川）雪旦等とともに北斎宗理が「峠の茶屋」一図を描く。千穂連版。すみだ北斎美術館・ピーター・モース・コレクション/大英博物館/ベレス・コレクション/日本浮世絵博物館蔵）

※北斎の絵は好評で、翌年一枚摺にされる。千穂庵の序文に「午初春」とある。唐衣橘洲、浅草庵市人、十返舎一九、式亭三馬など狂歌師や戯作者など 280 首の狂歌を集めている。

☆〈峠の茶屋〉（色摺。各 21.5×15.7 の二枚続き）

※初春の峠の茶屋の風景。図の左には富士山が見える。茶屋で轆轤鉤を回して挽物作業



をする男女。側で手伝う姉さん被りの女。立って茶を出す女と腰を折って煙草盆から煙管に火をつけようとする旅人。

121 峠の茶屋（日本浮世絵博物館）

●屏風絵「玉卮弾琴図」（この頃か。寛政 8 年：1796 説あり。紙本着色双幅。北斎宗理画。）

印師造化。各 125.0×54.8 雲龍寺〈長野県上水内郡信濃町柏原1320〉蔵。2017 年『北斎富士を超えて展図録』では「個人蔵、ニューヨーク」としている

122 玉卮弾琴図（「2005 北斎展図録」より転載

※太真王の夫人玉卮（西王母の三女）が琴を弾ずると百羽の鳥が飛来し、また白龍に乗って四海を廻ったという話に取材。当初は二曲屏風で、その裏書の林忠正注の書に「寛政十年戊午春筆于時北斎三十八歳也」とあるという（『北斎美術館 5 物語絵』P49）。



右図は唐女が立っている図。左図は龍が天空で琴に巻きつく図。

注）林忠正：1853～1906。越中・高岡出身。明治時代の美術商。明治 11 年（1878）にパリ万国博覧会に参加する起立工商会社の通訳として渡仏。そのまま滞在し、美術商となり多くの浮世絵などを売りさばく。ジャポニズムの高まりもあり、印象派の画家たちとも親交を結んだ。

●狂歌絵本『男踏歌』（1 月。大本彩色。折本一帖。浅草庵市人注撰。北斎は一図のみ描く。他に、北尾紅翠斎（北尾重政）、堤等琳、喜多川歌麿、鳥文斎（細田）栄之、白峯易祇（「えきし」とも）が描く。薦屋重三郎版。メトロポリタン美術館/すみだ北斎美術館/大英博物館/東京国立博物館/千葉市美術館蔵）

注）浅草庵市人：「せんそうあんいちんど」と読む解説書あり。1755～1820。浅草田原町で質屋を営む傍ら、浅草側や壺連と呼ばれる狂歌グループを率いて、狂歌摺物を多く北斎に依頼した。

☆〈田園行楽〉（「田舎道の往来」とも。北斎宗理画。25.5×18.8：見開き 25.5×37.6）

123 田園行楽（メトロポリタン美術館）

※薫ぶき屋根の茶店を囲むように小川が流れ、橋が掛かっている。橋の下では男が川に入っ



て箆で魚を捕ろうとしている。橋の上では男が鯿を持って、手をかざしてどこかを見ている。小奴が欄干に手を掛けて向こうむきに川の流れを見ている。その脇で荷物を背負った女が訳ありげに小奴の横顔を見ている。橋の手前では、簪を挿した後ろ帯の女が欄干に寄りかかって小奴と荷物の紐を引き合っている。その側で灰色の手拭を被った年増と、赤子を背負った女が小奴を見ている。

●狂歌絵本『深山鶯』（1月。折本一帖。流霞窓広住撰。朱楽連版。大英博物館蔵）

☆「梅樹図」（色摺。法橋光琳之図北斎宗理写。花押 19.2×13.2）の一図を描く。

法橋は第三位の僧位。正四位相当の官位。僧侶だけでなく絵師などにも与えられた。光琳は（1658～1716）は、尾形光琳のこと。

淡墨一色で図の左下から右上に梅の枝を描き、「法橋光琳之図」を写したものとする。また、この宗理は二世北斎または三世ともいわれる。見開き 13 か所中 2 図があり、北尾紅翠斎（北尾重政）がもう 1 図を描いている。流霞窓の序文に「寛政十年むま睦月」とある。

124 梅樹図（大英博物館）



●狂歌絵本『春興帖』（1月。寛政 8 年〈1796〉に続く第 2 冊目。大本一冊色摺。26.5×18.5 森羅亭万象編。北尾紅翠斎〈北尾重政〉、北斎宗理画。北斎は「母と子供の機織図」の一図を描く。他、芝蘭斎、北尾紅翠斎も描く。森羅亭万象版。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

☆〈母と子供の機織図〉

※図は、小さな祠がある戸外で、手拭を被った母親が座って小さな機織機を操り、子どもが縦糸を整えている様子。湖面の向こうに薄く雪を被った富士山が薄く描かれる。四方歌垣の序文に「歌番匠注寛政十年午の春」とある。

注) 番匠：大工を指す言葉だが、歌の作り手くらいの意味か。

※寛政 8 年（1796）版や、喜多川歌麿、歌川豊広とともに描いた寛政年間末の版の同題のものや、更に宗理と山東京伝が挿絵を描いた同題のものもあるという。（リチャード・レイン『伝記画集 北斎』 p 327）

125 母と子の機織図（島根県立美術館）



●狂歌絵本『狂歌初若菜』（1月。中本折本一帖。宗理改北斎画。印三径。一椀庵笛成らによる出版。他の絵師も描く。島根県立美術館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※北斎は「母と子の若菜摘の図」一図のみ描く。

☆〈母と子の若菜摘の図〉

※遠く初日の出を指差す子ども。手をかざして日の出を見ながら手拭を被って初若菜を摘

む母親。^{おえなり}笛成の序文に「午のむつミ月」とある。

126 母と子の若菜摘の図 (すみだ北斎美術館)

【黄表紙『化物和本草』で号・可候を用いる】

※「^{そろべく}可候」の号は「^{そろふ}候^べ可^く」（そうありたい）という北斎の願望から付けたものという（リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p24）。

※「^{そろべく}可候」は、「時太郎可候」の形で、文化3年（1806）頃まで用いられたと思われる。
※飯島虚心『葛飾北斎伝』には、画号について「同（寛政）十三年、時太郎可候画作とあり。『青色年表』に、〈文軒翁云く、^{ぶんけんおにいわ}竈^{かまど}将^{しょう}軍^{ぐん}注は北斎の画作なり。可候は、仮に設けたる名なり。これより二三年続き出て出る〉」（『青本年表』より。『葛飾北斎伝』p302 所収）とあるが、12年の誤り。

注) 竈将軍：寛政12年（1800）黄表紙『^{かまどしょうぐんかんりやくのみき}竈将軍勘略之巻』（時太郎可候画）を指す。

「可候」は、寛政13年（1801）の『^{おごもんじゆおさなきょうくん}児童文殊稚教訓』の本文中に「風雅でも洒落でもなく、せうことなしの山下へんに、借家住まひの世間知らず。自ら、そろべく（筆者注：可候）となのり、何一つ、とりえのなき坊主ありてふと、草紙の戯作を綴りしが（略）」とあるので、可候は「そろべく」と読むか。但し、一般的には「かこう」と読むことが多い。

●黄表紙『^{ぼけものやまとほんぞう}化物和本草』（1月。中本三冊。山東京伝戯作。画工可候〈宗理時代唯一の署名〉。山東京伝と組んだ四作目。山口屋^{やまぐちや}注（江戸馬喰町^{ばくろうちょう}）版。16.5×12.6 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ヒーター・モース・コレクション/国立国会図書館蔵）

注) 「西尾市岩瀬文庫古典籍書誌データベース」によれば、馬喰町^{ばくろうちょう}山口屋版となっている。馬喰町二丁目の山口屋忠右衛門を指す。

※この作で始めて可候を用い、最終丁に「画工 可候」と記す。山東京伝の序文に「^{かんせい}寛政十歳 戊午孟春」とある。平家蟹をもじった平気蟹や、煙管と煙草入れを持ち、口から煙を吐きながら

空を飛ぶ人頭の怪鳥に向かって、漁師が鉄砲を向けているなど、妖怪の図などが描かれる。



127 『化物和本草』 平気蟹最終丁：早稲田大学図書館)

●俳句絵本『^{らくりゅういけはなぞう}楽流活花図』（墨摺。「北斎宗理画。印完印知」の落款のある生け花の画が『北斎大全 第二巻 宗理期』（Kindle 版）に紹介されている。画には「^{しょうふうこりゅう}正風古流

花道の自在軒宗匠より別号を譲り受けて 大サガミ三代目用捨庵 一楽図」の書き込みがある。

●錦絵「お染久松 春花」（『道行八景』（享和年間）の一だが制作年に開きあり。中判色摺。可候画。版元不明。23.4×17.4 ウースター美術館蔵）

※風呂敷包みを背負い、前髪の若衆姿の久松と、扇を顔に当てながら久松を見るお染が、桜咲く木の側に行く図。

128 お染久松 春花（『名品揃物浮世絵 9』北斎Ⅱより：web パブリック・ドメイン美術館転載）



【忠臣蔵シリーズの開始】

●錦絵『新版浮世絵忠臣蔵』（この頃か〈北斎館『北斎・東西の架け橋 1998』による）。享和元年（1801）説。享和3年（1803）～文化2年（1805）説あり。横間判揃物。11枚1組〈初段鶴ヶ岡～第十一段目まで〉。可候画。伊勢屋利兵衛（江戸・下谷池の端仲町）版。太田記念美術館：長瀬コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館・ピーターモース・コレクション/江戸東京博物館/大英博物館/神戸市立美術館/江戸東京博物館蔵）

※遠近法による画法(透視画法)で描く。寸法は所蔵館により異同あり。

☆〈初段 鶴（鶴）ヶ岡〉（22.8×31.8）

※足利直義の饗応役の大名若狭之助が高師直（吉良上野介）から殿中で凌辱を受ける場面。

☆〈第貳段目〉（23.2×31.6）

※若狭之助が師直に対する殺意を家老の加古川本蔵に明かす。主人の意を汲み本蔵は松の枝を切り落として賛同の意を示す「松切りの場面」。

☆〈第参段目〉（23.5×31.8）

※本蔵は師直に進物を送り、主人と師直の仲を取り持つ。師直は代わりに同じ饗応役の伯耆国藩主・塩治判官高定（浅野内匠頭）を凌辱する。ついに判官が師直に刃傷に及んだが、加古川本蔵に止められる。このとき判官の供侍の星野勘平は、腰元お軽と密会していて、主人の大事な時にいなかったことを恥じて切腹しようとするも、結局は女の里に隠れる。図は、お軽と勘平が城の石垣の側に立って、これから逃げようとしている場面。

☆〈第四段目〉（22.7×31.8）

※判官に切腹が申しつけられ、腹を切る直前まで「由良之助は」と繰り返し、家老の大星由良之助（大石内蔵助）に会うことを願ったが、由良之助の息子方弥は「未だ参上つかまつりませぬ」を繰り返す。急ぎ駆けつけた由良之助は、主人の仇をとることを決意しながらも屋敷を明け渡す。図は、座敷で判官が切腹する場面。

☆〈第五段目〉（22.9×35.3）

※勘兵は、お軽の里で猟師になっていた。お軽の父与市兵衛は、娘の身売りで得た金を持ち帰る途中、山崎街道で悪党斧定九郎に殺され金を奪われる。その定九郎は、勘兵が猪を撃った弾に当たり死亡し、金は勘平の手元に戻る。

図は、与市兵衛が定九郎に殺される場面と、千崎弥五郎と早野勘平が出会う二場面を同時に描く方法は、寛政中期の北尾重政「浮絵仮名手本忠臣蔵」からの影響があるとされる（『ピーターモース・コレクション北斎図録』作品解説より）。

129 新板浮絵忠臣蔵五段目（島根県立美術館）



☆〈第六段目〉(22.9×31.6)

※身売りしたお軽が家を出ようとしたとき勘平が戻り、舅の与市兵衛を自分が殺したと思いき切腹する。絶命の直前に与市兵衛の傷が鉄砲の弾によるものでないことが分り、敵討の仲間の連判に加わる。図は、お軽が身売りで家を出ようとした時、勘平が戻ってきた場面。

☆〈第七段目〉(22.9×32.5)

※大星由良之助は、敵を欺くため、京都の茶屋で遊興の日々を送る。ある日、長男力弥からの師直方を偵察した手紙を読んでいると、二階にいたお軽が鏡で写し読みをし、縁の下で師直側の斧九太夫がそれを読んでしまう。由良之助はお軽に九太夫を殺させ、折りしも訪ねてきたお軽の兄で塩治家に仕える足軽の寺岡平右衛門を仲間に入れる。図は、縁の下に師直側の斧九太夫がおり、そこに寺岡平右衛門が訪ねて来た場面。

☆〈第八段目〉(22.7×31.8)

※加古川本蔵の妻戸無瀬が、娘小浪を大星力弥に嫁入りさせるために山科へ向かう二人の道行の場。

130 八段目（島根県立美術館）



☆〈第九段目〉(22.8×32.5)

※山科の大星邸について戸無瀬親子は、来意を由良之助の妻お石に告げるが、本蔵が師直に進物を送り主人との仲を取り持ったことを理由に二人を受け付けない。そこに本蔵が現れ、わざと由良之助を罵り、怒った力弥に槍で刺される。このとき本蔵は本心を告げ、師直邸の図面を渡して娘を託す。図は、戸無瀬親子と由良之助の妻お石が会う場面。

☆〈第十段目〉(22.8×32.6)

※堺の回船問屋天川屋義平は、由良之助から依頼された武具の調達と輸送引き受け、その心意気を示す。図は、天川屋の座敷で義平が見栄を切っている名場面を、子どもが真似をしている。

☆〈第十一回目〉(22.8×32.3)

※師直邸に討入った義士たちは、中庭で戦い、ついに炭小屋に隠れていた師直を討ちとる。図は、義士たちが屋敷に討ち入った場面。



131 十一回目 (島根県立美術館)

※「忠臣蔵」は天明年間に一枚絵「浮絵忠臣蔵夜討之図」や三枚続き絵「忠臣蔵討入」や「見立忠臣蔵 七回目」があるが、他には、享和元年(1801)洒落本『仇手本』(忠臣蔵をもとにした話で挿絵を描く)、享和2年(1802)『画本忠臣蔵』(狂歌本。享和2年:1802)、享和元年~3年『仮名手本忠臣蔵』、文化3年(1806)『仮名手本忠臣蔵』などがある。

※他に、享和元年~3年(1801~03)作と思われる横小判の『仮名手本忠臣蔵』(全揃12図)がギメ美術館に所蔵されているという(根岸美佐『北斎研究』56号)。

【落款と印の使い分け】

●生花教本『抛入花の二見』(冊子中に記載されている『楽門瓶花譜』とも。墨摺半紙本一冊。十楽坊鬼丸編。十楽坊社中版。他に完斎知道などが描く。島根県立美術館:永田コレクション蔵)

※天明・寛政の序文があり、この頃から企画があったと思われる(『年譜』による)。

67 図中、北斎は14 図描く。それぞれに落款を使い分けている。「完知画 印完・印知」「北斎完知画 印完・印知」「北斎宗理 印完・印知」「完宗理画 印完・印知」「北斎宗理画 印完・印知」「完知画 印北・印斎」「北斎画 印完・印知」「印百林」など。

落款については、伊藤めぐみ「宗理研究の再検討(一)(二)に詳しい(『北斎研究』23号・24号所収・葛飾北斎美術館編 東洋書院)

●肉筆画「猿図」(この頃か。絹本着色一幅。かつしかの北斎宗理ならひにつゝす。印かつしか印北斎宗理。個人蔵)

※図の右には猿という言葉にことよせた北斎の文が記される。猿が身をかがめて前を見ている図。

●肉筆画「三美人図」(絹本着色一幅。宗理改北斎画。印三径。164・5×46.0 エドアルド・キオッツオーネ記念ジェノヴァ東洋美術館蔵)

※立っている娘・袖を顔に当てる婦人・立膝でのけぞる花魁の三人を描く。

天龍王瑾注(天龍道人)の賛「紅粉写成画入真却疑巫峡浚 降神長留雲雨可憐色暮々朝々
思殺人 嬌態如花々不及今都春色欲 競妍秃紅李白薔薇紫那箇枝 頭不可憐 白暫容光花



鬪妍含情殊態媚 床前可憐雙手千人枕春色不 知落執辺 八十叟天龍
王瑾題書 [印] [印]

注) 天龍王瑾：?～1810。日本画家。

132 三美人図 (ジェノヴァ東洋美術館)

●肉筆「風俗三美人図」(絹本着色掛幅。三幅対。各北斎画。[印]辰政。
各 93.0×24.9 太田記念美術館蔵)

133 風俗三美人図 (太田記念美術館)

※右図は左を向く高位の花魁図に、朱楽菅江の狂歌、中図は正面を向く芝居物の御殿女中の図に、淮南堂(朱楽)菅江の漢詩、左図は右を向いて、浴衣を持って風呂へ行く(あるいは風呂帰りの)町家の女図に、朱楽菅江の狂歌の書き入れがある。

図の左にある朱楽菅江の狂歌は「ふりむけば浴衣のままの夕化粧 雪をあざむくはだ(肌)涼しき」と左から右に書かれている。



●肉筆画「張良図」(絹本着色一幅。寛政十戌午歳中秋丹斎辰路応需 北斎辰政画。82.0×31.1)

※霞む月の下、赤い衣服を着て峨々たる山中で笙を吹く張良。麓には軍勢の赤い幟旗がはためいている。

●肉筆画「柳に牛図」(この頃か。紙本着色一幅。北斎画。[印]辰政。117.6×28.1 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※もと三幅対で左右二幅にはそれぞれ大原女が描かれていた。図は、黒牛が鞍を乗せてこちらを向き、赤牛が向こうの柳の方を向いている。柳も含め水墨画風の描き方となっている。太田南畝の賛「非桃 非牡丹」がある。

134 柳に牛図 (島根県立美術館)

●肉筆画「大原女図」(この頃か。紙本着色一幅。北斎画。[印]辰政。118.1×28.4)

※元「柳に牛図」と三幅対。大原女は黒木売りとも呼ばれ、京都の八瀬(比叡山の山麓)辺から薪の黒木や木工品などを頭に載せて売り歩いた。



図は、大原女が黒木の束の上に腰を下ろし、履き物の紐を直している。朱楽菅江の賛がある。文政 2 年 (1819) の『画本早引』後編にも「京」と題して、二人の大原女が黒木に腰掛けて休んでいる様子を描いている。

●肉筆画「大原女図」(この頃か。紙本着色一幅。北斎画。印辰政。

118.1×27.5 ウェストン・コレクション蔵)

※元「柳に牛図」と三幅対。手拭を被った大原女が、黒木の束を脇に置いて、立って煙管を吹かしながら休んでいる。左手には煙草入れを持っている。唐衣橘洲の賛。

135 大原女図 (部分:シゴ・ウェストン・コレクション)

●摺物「極印千右衛門大坂侠客五人の内」(宗理改北斎画。色摺)

※袖の長い着流しを着て、頭巾を被り刀を落し差しにして、尺八を帯の



背に差し、下駄を履いている千右衛門。その隣には芸者風な女が「染松」と読める赤い提灯を持っている女が寄り添って歩いている。

極印千右衛門は、雁金五人男と呼ばれた大坂の無頼者五人の一人。元禄 15 年 (1702) 8 月 27 日に 23 歳で刑死。



136 極印千右衛門大坂侠客五人の内 (nail.aflo.com より)

●錦絵「月見の座敷」(「遊女の月見」「扇屋抱楼月見」とも。宗理改北斎画。横長判。

河出書房新社『図説浮世絵に見る江戸の一日』による。クリーヴランド美術館蔵)

※花魁や禿や新造たちが七人、大川を臨む座敷に集まっている。一人は窓辺から川を見ているが、月は見ていない。部屋の左隅に立てられた屏風に狂歌が書かれている。

【北斎辰政改名通知の亀】

●摺物「亀図」(「三匹の亀」とも。角判色摺。北斎辰政画。印師造化 18.5×15.3 島根県立美術館:永田コレクション/すみだ北斎美術館蔵)

※宗理号を俵屋に返上し北斎辰政になったことを知らせるために、6 月までに自費で刊行し知人に配布した摺物。

三匹の亀が折り重なるようにしている。二匹は首を伸ばし、一匹は背中にもう一匹の亀を乗せて首を引っ込めている。

稲葉華溪の図中の賛に「宗理ぬしの改名に北辰の光りいよいよましなん事を 蒼む花こや衆生のもてはやし友人華溪題」とある。

137 亀図 (島根県立美術館)

※「玉扨弾琴図」(寛政 10 年頃)を屏風装にしたときの林忠正 (1853~1909) の裏書には、「寛政十年戊午

春筆于時北斎三十八歳(筆者注:満年齢か。数え年では三十九歳)也。是ヨリ先ハ単ニ宗理トノミ書スモノ多シ。此年門人宗ニ俵屋宗理ノ名ヲ譲リ、庚申 (1800)、先ノ宗理北斎又



ハ、己未（1799）、宗理改北斎ト記ス。享和元辛酉（1801）之春ヨリ画狂人北斎ト落款ス。明治二十三年四月十一日、林忠正識ス」とある（句読点・ルビは筆者による）。

※この年、古宗理（注：先代宗理）の17回忌（事項の摺物〈茶花図〉参照）が営まれたのを機に俵屋宗理名を離脱して北斎辰政と改名する決意を固めていたとする説がある（『国文学研究資料館学術情報リポジトリ紀要』文学研究編 37号所収「稲葉華溪筆譜」鈴木淳）。

●摺物「茶花図」（この頃か。二世宗理。古宗理十七回忌追善摺物）

※図の右に「華溪老漁写」とあり、図左には「古宗理ことし十まり七めくりの忌にあたり侍るを懐旧して 夢と過し年やねふれる花につけ 二世宗理」とある。華溪（稲葉）は北斎と親しい書家。古宗理は、初代宗理で明和・安永年間に活躍し、安永末～天明初年（天明2年前後とも）に没したといわれる。

この図は、二世宗理の絵と文を華溪が写したものか、絵は華溪が描き、二世宗理の文を華溪が写したものか不明。さらに、二世宗理が北斎宗理であるのか、寛政12年に宗理号を譲った門人宗二が名乗った菱川宗理なのか不明。また、二世宗理が誰なのかも諸論あるが、現在では二世宗理は北斎とされている（以上、伊藤めぐみ「宗理研究の再検討（一）」『北斎研究 23号』葛飾北斎美術館編 p7～27）

●摺物「舟に橋」（紙本色摺。宗理画。13.3×17.6 北斎館蔵）

※川辺の村の数軒の屋根、太鼓橋、一艘の舟などが山水画のように描かれる。狂歌の後に「戊午とし」とある（寛政10年）。「ゆきどけにあらひ上げてはひとしほに 水ぎハの たつきしの若草 所二雪成」、「うたをよむ蛙注のつらへかけてみん 野沢の水をくみ題にして 流霞窓（山家広住）」の狂歌が記される。

注）うたをよむ蛙：『古今和歌集』序で紀貫之が「花に鳴く鶯、水にすむ蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける」と記した一節を踏まえる。蛙ではないが、その面に野沢の水を汲んでかけてみよう（狂歌のグループ「連」を「つら」と読んで、「野沢の水」を組題にして出そうか）と詠んでいる。

●摺物「霧景色図」（「霧にかすむ村風景」「霞む吉原」とも。紙本墨色摺。北斎宗理画。13.0×18.0 北斎館蔵）

※湾曲した街道沿いの家並みが続く図。手前の日本堤に駕籠かきが空の駕籠を独りでかついで歩いている。吉原の家並みが遠景で描かれる。堀川亭石丸「春風のくるは通ひのおもしろや 梅か禿か袖にしたふて」、源氏巻文「風の手も有てふ春のよし原に 梅か隙々通ふ夕暮」、浅草庵市人「いかのぼり揚屋の子らが手くだにも 巻糸筋のはりのつよさよ」の狂歌が記される。あるいは狂歌本の一図が独立した絵か。

●絵暦「唐美人の水あび」（1月。宗理画 15.6×17.1）

※画中の金盥に干支と大小月あり。画面右の枠中に「御あらひこ（御洗粉）」とある。『年譜』による）。

●絵暦「炬燵の二美人」（狂歌。色摺。1月。宗理画。10.7×16.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵）※炬燵に入っている二人の婦人が、格子障子を開けて雪景色を見ている図。

「^{うまのしゅんきう}午春興」とあり。寛政11年の大小に転用したものあり。

●絵暦「^{だいたうげいにん}大道芸人」（1月。宗理画）画中の団扇に「寛政十^{つちのえうま}戊午」とあり（『年譜』による）。

●絵暦「^{にんぎょう あそぶ ふたり の とうし}あやつり人形で遊ぶ二人の童子」（1月。宗理画）子どもの着物に大小月あり（『年譜』による）。

●絵暦「^{がんぐ せんら ぼし}玩具を選ぶ母子」（色摺。宗理画。9.8×13.2 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※大の月を表す馬（本年を示す）、狐（2月・^{はつうま}初午）桜（3月）、刀（5月・^{たんご}端午の節句）、^{さんろう}山王（現：日枝神社）の祭礼の^{だし}山車を表した^{まんどう}万灯（8月）、^{しばらく}暫（11月の顔見世で演じられる）、^{ゆきだま}雪玉（2月）などの月を表す玩具を二人の女性と子どもが選ぶ図。

●摺物「^{うまのり}馬乗り初め」（この頃か。宗理画。色摺。24.6×20.5 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※武家の若君が木の^{はつこま}初駒に乗り、左手をかざして背後の屏風の富士の絵を眺める様子を描く。木馬の後ろには刀を捧げ持つ女たち。脇には男が立ち、木馬の前には母親らしき女が立っている。「春もけふ江戸入すゝめ若駒に ^{かすみ}霞の絵府（符）をあてゝ見ゆるハ ^{ますもとみうどんぎ}増本楼呑義」、
「二ツなきものとおもひし梅か香ハ ^{こちらの}こちらの袖にもこちらの袖にも ^{よものうたがき}四方歌壇」などの狂歌が記される。在原業平の^{あしおらのなりひら}東下りの見立てという推測もある（『ピーターモース・コレクション北斎図録』解説 p115）。

●摺物「^{いし}石なご遊び図」（小判狂歌色摺。琳斎宗二画。北斎宗理校合。10.0×12.1 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※門人^{そうじ}宗二の作画で北斎が修正した体裁をとるが、実際には北斎が^{そうじ}宗二のために描いたとされる（『新北斎展図録』p315）。

石なご遊びは、石をばらまき、その内の一つを放り上げ、落ちて来る間にばら撒かれた石を多く拾うという遊び。図は、二人の女が向き合って遊んでいる様子を描く。図に「^{つちのえうま}戊午」とある。^{かんにん}堪忍吾綾の狂歌が添えられる。

●摺物「^{てんびんぼう}天秤棒の荷」（摺物。色摺。無款 24.1×11.5）

●絵暦「^{あてん}露店」（色摺。宗理画。10.5×18.2 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※広げた^こ莫座の上に小さな玩具人形等を並べて商売をする男と、それを見る男二人と子ども一人の図。商売の男の持つ団扇に「寛政十^{かんせいじゅうつちのえうま}戊午」の書き込みがある。

※「^{このひと}此人に^{いっしゆ}一首よませてこまら小 ^{しやう}ナニ獅子ヲ大ニしてか ^{だい}ヤツハリ^{さんすけ}三助でヨマツセイ ^{さんすけ}三助日一三か三助を見て三人か ^{いっしゆ}一首をよめと^{さんく}三九の歌 ^ろ露庵月曆」の書き込みで月の大小を示している（ルビは筆者）。

●絵暦「^い活け花」（1月。九つ切判。宗理画。13.7×18.5。フリーア美術館：プルヴェーネ・コレクション蔵）

※正面左に^{うま}「午のはつ春」、床の間の掛け軸には馬の文字絵が描かれ、落款に「寛政十年」とある。娘が^{あさくさあんいちひと}紅梅と福寿草の盆栽に水をやる図。浅草庵市人の狂歌が添えられる。

【見立とやつし】

※「見立」と「やつし」については、以下の定義がなされているので、これに従う（新藤茂「『見立』と『やつし』の定義」。『図説「見立」と「やつし」日本文化の表現法』p112所収。国文学研究資料館編。八木書店。2008年3月）。

「見立」：異なるものを連想で結びつけた絵。

「やつし」：古典的な題材を当世風に姿を変えた絵。

同本の「はじめに」では次のようにも述べている。〈「見立」「やつし」を一言で定義することは難しいが、あえて言えば、「見立」はあるものを別のものになぞらえること、「やつし」は昔の権威あるものを現代風に卑近にして表すことと言えよう。わかりやすい例をあげれば、落語家が扇子をくわえてキセルにするのが「見立」、平安朝の小野小町が江戸の娘になって登場するのが「やつし」である（略）〉

●肉筆画「見立六歌仙」（1月。絹本着色一幅。宗理画。印完知。73.3×50.7 板橋区立美術館蔵）

※菱川宗理の作か。あるいは落款や印章から偽作とも考えられている。

138 見立六歌仙（板橋区立美術館）

※六種の階層の女性を六歌仙に見立てる。右図から時計回り、僧正遍昭は御殿女中に、在原業平には矢場の女に、喜撰法師は下女に、大伴黒主は商家の妻に、文屋康秀は禿に、小野小町は花魁にして描く。



●絵暦「見立近江のおかね」（十八切判注。色摺。無款。14.6×9.3 東京国立博物館蔵）



注) 十八切判：大判を縦に三等分し、さらにそれを横にして三等分した大きさ。大奉書を十八に切った大きさ。

※荒馬の手綱を下駄で踏み押さえた近江の女おかねの「見立図」。柳の下で、湯桶に手ぬぐいを入れて持つ女が、高下駄で馬の絵のある風の紐を踏んでいる図。同趣の絵は『北斎漫画』9編などにもある。

139 見立近江のおかね（東京国立博物館）

●絵暦「小栗どのの馬を誉めることば」（摺物色摺。宗理画）

●絵暦「庭を眺める娘」（大小摺物。色摺。宗理画）

●摺物「朝比奈三郎の鏡割り」（1月。十二切判。色摺。宗理画。

10.4×18.6 フリーア美術館：プルヴェアー・コレクション蔵。『美術品所蔵レファレンス事典』より）

※朝比奈三郎は、木曾義仲の子息・朝日奈三郎義秀。母は巴御前だという伝説がある。大力であった。浅草庵の狂歌の後に「午はつ春」とある。

図は、朝比奈三郎が、鶴の模様のある着物を上半身脱ぎ、毛深い両腕をひびの入った大きな鏡餅に手をかけ、口に扇子を銜えて割ろうとしている。背には長刀があり、背後の天上か

らは薫やウラジロが下げられている。朝日奈三郎は「朝日奈三郎平義秀」（寛政3年～5年）でも描いている。

●摺物「母と児」（1月。宗理画）

※図中に百林の印と、「午のはつ春」とあるという（『年譜』による）。

●摺物「二見が浦」（1月。「二見ヶ浦と旅人」とも。横大奉書半切判。色摺。北斎宗理画。40.6×55.2 フランス国立図書館蔵）

※馬に乗り旅する女、馬の背に振り分けに掛けた両脇の籠に乗る二人の子ども。馬の後ろで鉄み箱の荷物を担ぐ男の図。図の右に注連縄で結ばれた夫婦岩と朝日が描かれる。海は空色の空摺り。添えられた狂歌の末尾に「午はつ春」と記されている。 140 二見ヶ浦（フランス国立図書館）



●摺物「方歳図」（狂歌。1月。宗理画。島根県立美術館：永田コレクション。12.5×19.0）「午初春」とある。立つ太夫とかがむ才藏。玉川里人、浅草庵市人の狂歌が記される。

●摺物「初春の女蛤売り」（1月。宗理画）「午はつ春」とある（『年譜』による）。

●摺物「駒牽き」（1月。九つ切判。宗理画。14.0×18.7 フリーア美術館：プルヴェーヌ・コレクション蔵）

※若衆風の馬子が千両箱を積んだ荷馬を牽く。歳旦の摺物で、浅草庵市人のグループが配ったものといわれる。細かい毛描きが特徴。「午はつ春」とある。

●摺物「舟上の二人の漁師」（1月。宗理画）「午はつ春」とある（『年譜』による）。

●摺物「檜扇を持つ官女」（1月。宗理画）「午はつ春」とある（『年譜』による）。

●摺物「神馬と神楽巫女」（1月。宗理画）「午初春」とある（『年譜』による）。

●摺物「宮大工」（春。宗理画）。「寛政十年午春」とある。『年譜』による）。

●摺物「杓子と水引」（狂歌。春。宗理画。10.8×19.0）「午のはる」とある（『年譜』による）。

●摺物「群馬図」（春。宗理画）「戌午春」とある（『年譜』による）。

●摺物「娘と子供と花鉢」（色摺。宗理画）

※縁側に置かれた盆栽の花に興味を示し掴み取ろうとする子供を、部屋の中から両肩を掴んでとめようとしている娘。部屋には、小さな馬の玩具が置かれている。

●摺物「高砂島台」（この頃か。紙本色摺。九つ切判。宗理画。12.6×16.1 北斎館蔵）

※婚礼などのめでたい飾り物を置く島台（島の形に切り取った板を組み合わせた台）に、三つ重ねの盃、松竹梅、能「高砂」に登場する翁と姫の人形などが置かれている。三方には熨斗の上に銀色の馬が置かれているので「午年」の作品と思われる。

●摺物「里芋ときりぎりす」（8月頃。宗理改北斎画。『年譜』による）

※画中に「うまの葉月」とあり。これにより秋の8月までに宗理を改名したと思われる。

●摺物「時計の図」（宗理改北斎画）。寛政十年の記があるという。『年譜』による）

●摺物「女淡島」(この頃か。ホノルル美術館蔵)

●摺物「首尾の松」(色摺。宗理改北斎画)

※隅田川の首尾の松の所で屋形船を停めてくつろぐ二人の男と芸者。芸者は船端から身を乗り出して布を川面に晒している。船尾では船頭が煙草入れを腰に挿し、艀を操っている。紫色庵蔓人、貢庵則次などの狂歌が記される。

●摺物「舞納め」(この頃か。色摺角判。宗理改北斎画。日本浮世絵博物館蔵)

※小面風の女面と怪士風の鬼神の能面が描かれる。雪斎辰盧の賛「せわしなき去年ハ昨日に舞納め のうのうとする今朝の初春 小原女の心づかしや●の梅」と書入れがある(日本浮世絵博物館所蔵『大揃え北斎展図録』p101 読売新聞社による)。

●絵暦「娘と鏡磨職人」(この頃か。色摺。無款。小判。

9.4×9.0 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※職人が磨いている手鏡を覗いている娘の図。背景にウラジロ等の注連縄の正月飾りが張られている。二人の間に置かれた荷物の風呂敷にこの年の小の月が記され、一、六、七、九と判読できるので、該当する寛政10年の絵暦であるという(『ピーター・モース・コレクション北斎図録』解説による)



141 娘と鏡磨職人 (すみだ北斎美術館)

●摺物「午の風と奴風」(この頃。狂歌摺物。色摺。宗理画 11.8×15.8)

●摺物「初午詣 王子土産」(全紙判色摺。北斎宗理画 38.6×52.5)

寛政11 (1799)	己未	40 歳	北 斎、宗理改北斎、俵屋宗理、宗理、不染居北斎、前宗理
北斎、北斎辰政、北辰辰政、先ノ宗理北斎、先宗理北斎、北斎、  北斗一星高、辰、政、			
辰政、完知、画狂人：こと (29 歳)、(富之助：13 歳)、阿美与 (11 歳)、阿鉄 (9 歳)、			
阿栄 (2 歳)			

◇正月 5 日、式亭三馬の黄表紙『狭太平記向鉢巻』で御用火消しを誹謗したとして、よ組の火消しが三馬宅と版元西宮新六宅の打ち壊しをする。その騒動を起こしたとして、人足は出牢赦免。三馬は手鎖 50 日、版元は過料の罪を受ける(曲亭馬琴『近世物之本 江戸作者部類』「式亭三馬条」による)。

◇相撲興行 (2 月、本所回向院、11 月、本所回向院)。

◇5 月 13 日、六代目市川団十郎没 (22)。

◇6 月 8 日、円山派の絵師長沢盧雪没 (45)。

◇高田屋嘉兵衛、択捉航路を開く。

◇大小暦の取締強化令。

◇華美、好色、実名入りの錦絵は全て没収・絶版にする命令がでる。

【江戸読本登場】

○山東京伝、読本『忠臣水滸伝』(11 月。前編五卷五冊。薦屋重三郎版。後編は享和元

年：1802刊。後期読本注の初めとされる）。

注) 後期読本：一般的には読本は『忠臣水滸伝』から始まるとされるが、文学史的には寛延2年(1749)に都賀庭鐘が中国白話小説の翻訳を中心にした『英草紙』や、安永5年(1776)の上田秋成『雨月物語』の上方中心のものを前期読本とし、山東京伝以降の江戸読本を、後期読本と呼ぶ。

○本居宣長、『源氏物語玉の小櫛』。

○司馬江漢、『西洋画談』。

○正月、蹄齋北馬(北齋門人、1770～1844)、読本『席上怪話 雨錦』(七話四冊。流霞窓広住撰)

○鋏形蕙齋、『人物略画式』

【北齋期・不染居北齋と号す】

★この頃、不染居北齋と号す。この号について『江戸の画家たち』(小林忠 ペリカン社)は「北齋にとってみれば、世間が押しつけてくるとかく固定した評価がわずらわしく、それになずみがちな己れを叱咤し励ます自覚的な行為(筆者注：多く改号、転居を指す)だったのであろう。そうした多くの号の一つに不染居という、いかにもこの人にふさわしい号がある。『居ることに染まらず』、レットルはがしの自己変革に終生つとめた北齋であった」と述べている。

※この号は文政5年(1822)にも使われている。

【三田神社の箱提灯と扁額を見事に描く】

★2月17日、三田稲荷(現東京都墨田区向島2-5-7)の開帳に12張の箱提灯と扁額(「白雨雷鳴の図」)を描く(現存せず)。箱提灯は12カ月を題材にした絵柄だったという。扁額は、蚊帳の中で雷鳴に怯える数人の女性が描かれていたという。ボストン美術館に提灯絵の実物が残されているという(安村敏信「北齋の生涯と画業」。2019年『北齋 視覚のマジック』展図録、p7)。

※『武江年表』では2月15日の開帳とする。「(略)開帳の飾物に美をつくすの始なり。参詣人群衆することおびただし」とある。

※『天明紀聞・寛政紀聞』(吉田重房の随筆。三田村鳶魚校訂本。天明元年：1781～寛政11年：1799までの記事。臨川書房：昭和44年(1969))の〈三田稲荷開帳〉寛政11年4月1日参詣記事には次の記載があるという(「WEB 浮世絵師総覧」による)。

(前略) 提灯十、絵絹にてはり、色々之浮世絵をかく、北齋之筆にて、其巧ミに見殊なる譬ふべき物なし、台ハ皆黒びろうどにて縫ぐるみ、金物は金糸にて縫出せり、此外に提灯壺対、北齋之筆にて、極綵色之画なり。其他色々様々の提ちん、思ひぐの行燈数不知駿河町三井店よりとして米式百俵、又諸方より奉納の青銅五十貫ツ、積立し処、三十箇所程もあり、白狐式疋、丈三尺余、毛ハ白絹糸にて植、眼ハ是も水晶なり、此壺対手際といへ格好といへ誠に靈狐之姿備はり尊く、身ノ毛も動く計り也、狂哥或ハ俳諧連中之額数々有り、ふちハ多分雲形又は唐草、金之高ぼり、口絵色々有ル内、夫人之驚きしに蚊帳を釣りし体至て

おかしく、また見殊なり、此分都て北斎の画、（以下略）」（句読点・ルビは筆者による）。

文中に「白狐」とあるのは、同神社を僧源慶が改築した折、土中から白狐に跨る老翁の像が出てきて、その周りをどこからともなく現れた白狐が三度回って消えたところから神社名がつけられたという由来に因んだもの。

【全図北斎号による最初の狂歌本】

●狂歌絵本『東遊』（角書「狂歌」。正月。大本墨摺一冊 29 図。浅草庵市人撰。奥付に画工注北斎 筆工六蔵亭 彫刻安藤円紫とあり。蔦屋重三郎版。平均 26.2×18.0 国文学研究資料館/東京芸術大学附属図書館/立命館 ARC/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/江戸東京博物館/国立国会図書館/早稲田大学図書館/日本浮世絵博物館/フリーア美術館：ブルヴァー・コレクション/オランダ国立民族学博物館蔵）。

注) 画工：「浮世絵師」の呼称はこの頃は余り用いられず、一般的にはもっぱら「画工」と称された。幕府お抱え絵師以外の絵師は、画工の呼称が示すように、単に絵を描く職人として認識されていた。なお「浮世絵」の語の初出は延宝 9 年（天和元年：1681）の俳諧書『それぞれ草』に出る「浮世絵や下にはえたる思ひ草」とされる（赤城治績『完全版 広重の富士』集英社新書 p 31）

※俵屋宗理の号を返却し、全図北斎号による最初の狂歌本。全 67 丁 29 図を描く。狂歌は全国的に 471 首収める。ちなみに寛政 10 年（1798）狂歌絵本『初若菜』に北斎号で「母子の若菜摘み」一図のみ描いている。

※巻末に「王維か山水ハ見ぬもろこしの京ものかたりになんありける こゝに北斎は四里四方の毫細をふるへば、居ながら名ところをしることもくぜん（目前）たり」とあり「うつし絵のすみからすみへ江戸雀 とひあるき見る花心地すれ 千種庵霜解」の狂歌が記される。

※享和 2 年（1802）に狂歌を削除し、絵のみの『画本東都遊』（三冊）として改題色摺で刊行される。

☆〈芝神明宮春景〉

※神明宮境内を俯瞰し、背景に芝浜の海を描く。芝神明宮は現在では芝大神宮（東京都港区芝大門1-12-7）と呼ばれ、伊勢神宮の内外宮を祀る。芝増上寺の近く。

☆〈三圃神社〉

※広い田圃を前にした三圃神社（現東京都墨田区向島2-5-17。当時は現在地より北の田圃の中にあつた）を中央に描き、図の右端に、神社に続く湾曲した道を行く参詣の人を配している。三圃神社は、近江の僧源慶が改築したとき、土中から白狐にまたがる老翁の像を発見、その像の周りをどこからともなく現れた白狐が三度回って消えたところから名づけられた神社だという（「三圃神社」由来より）。



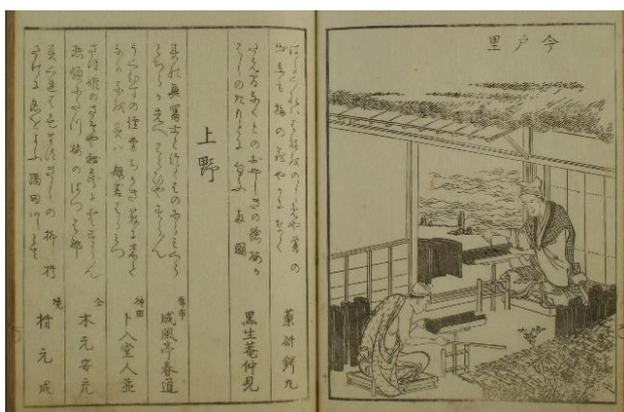
142 三圃神社（国文学研究資料館）

※図左に隅田川堤より下にある二門の鳥居が描かれる。左上に「芸者集 鳥居半出大川端 遥指三圃稻荷檀 葦葉刈来盛洗鯉 蒲烧食尽割長鰻 葛西号掛太郎鼻 晋子句翻百姓肝 向晚船頭呼不起 屋根舟裏只聞鼾」の七言律詩が記される。

☆〈隅田川春雪〉

※隅田川を行く二艘の船。手前の船には大傘を広げた人が乗っている。手前の家の屋根や対岸は春の雪を被っている。

☆〈今戸里〉

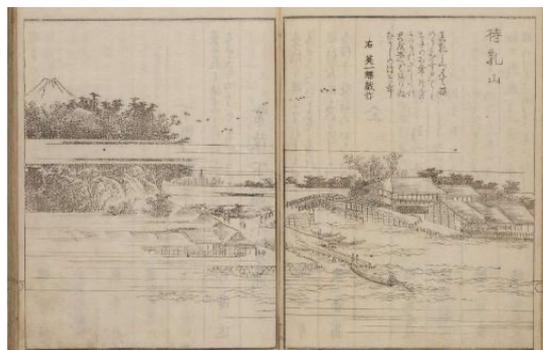


143 今戸里 (国文学研究資料館)

※焼物作りが盛んな今戸の職人が、川辺の作業場で棟瓦のようなものを作っている。今戸は、東京都台東区北東部に位置し、南部は浅草に接し、隅田川の西側に沿った地（現在の東京都台東区今戸1丁目～2丁目辺り）。今戸焼という焼物作りが盛んで、特に招き猫が名物となっていた。

☆〈待乳山〉

※待乳山聖天（正式には待乳山本龍院。浅草寺の子院。現東京都台東区浅草7-4-1）があり、小高い場所は風光明媚を楽しむ人でにぎわった。図は、院前の隅田川支流に掛かる橋を渡って桜見物に行く人々を描く。図左に待乳山、図右に今戸橋（現在は無い）、図左上に富士山を配置。英一蝶の書入れあり。



144 待乳山 (東京芸術大学附属図書館)

☆〈請地松師〉

※盆栽の松の枝を、口にくわえた糸でゆわえている男。請地は、南葛飾請地にあった地名（現東京都墨田区押上付近）。鎮火の神を祀り、紅葉で有名な秋葉大権現社が近くにある（現東京都墨田区向島4-9-13）。

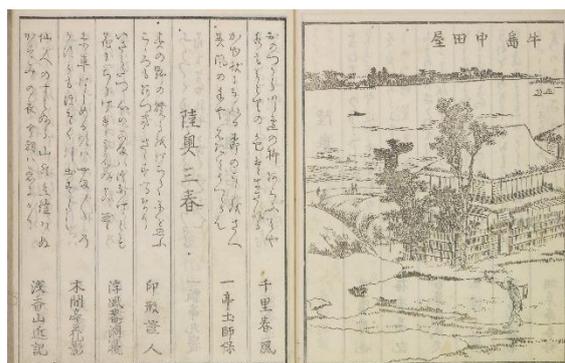
☆〈牛島中田屋〉

※隅田川沿いの牛島の仲田屋注の前の道を、鋏を担いだ農夫歩いていく。牛島は牛島神社（当時は牛御前と呼ばれた。現東京都墨田区向島1-4-5）で有名な所。貞観年間（859～79）に慈覚大師の建立といわれる。現在地より少し北にあった。社名は、慈覚大師が須佐之男命の化身である老翁に出会い、「自分の為に神社を建てよ、そして、もし国土に騒乱があれば首に牛頭を戴き、悪魔が降伏する形相を現して天下安全の守護となれ」と託宣を述べたことに由来するという。社名に因んだ恐ろしい形相の牛像が置かれている。他に自分の具合の悪

い箇所を撫でると治るという「撫牛」も置かれ親しまれている。

注) 仲田屋：飯島虚心『葛飾北斎伝』（p73）の脚注に「隅田堤下、現牛島神社（旧牛の御前）の旧地（墨田区向島五丁目）の前にあった川魚料理の中田屋。鯉調理で有名」とある。葛西太郎とも称された料理屋。

145 牛島中田屋（立命館 ARC）



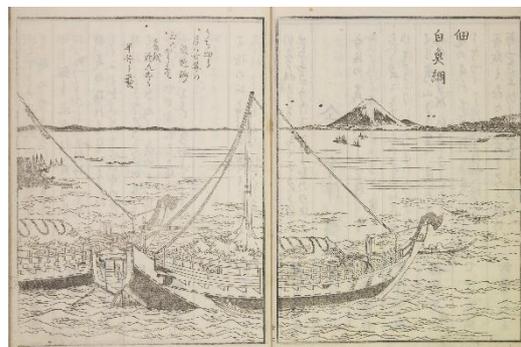
☆〈梅屋舗〉

※斜めに降りつける雨に、傘をすぼめて顔を隠す女、笠を被り天秤棒を担いで急ぎ足の農夫と、雨の向こうに霞む梅屋舗（梅屋敷とも）を描く。梅屋敷は、呉服商の伊勢屋喜右衛門別荘「清香庵」の梅が見事で、江戸中から観梅の人々がやってきたところから、亀戸梅屋舗と呼ばれるようになった。歌川広重の『名所江戸百景』にも描かれ、フィンセント・ファン・ゴッホがそれを模写したことで有名になった。数十丈（約150m）にわたり枝が地中に入ったり地上に出たりする一本の梅の木が評判で、評判を聞いて訪れた水戸光國が、龍が伏せているようだと言われ「臥龍梅」と名づけたという。八代将軍徳川吉宗も鷹狩の帰りにこの地を訪れたという。安政六年の須原屋茂兵衛版地図には、亀戸天満宮の東北（現東京都墨田区亀戸3-40、50～53 辺）にあり、「名木臥龍梅」と記されている。明治43年（1910）の大雨で隅田川沿岸の亀戸・大島・砂村の全域が浸水し廃園となった。現在、東京都江東区亀戸4-18-8に観光イベント施設「梅屋敷」があるが、場所も往時のものではない。

☆〈佃白魚網（網か）〉

※佃島で獲れた白魚は將軍家に献上されていた。図は、佃島沖に五大力船が浮かび、その周辺に白魚獲りの舟が数隻浮かんでいる。背景に富士山が描かれる。

146 佃白魚網（立命館 ARC）

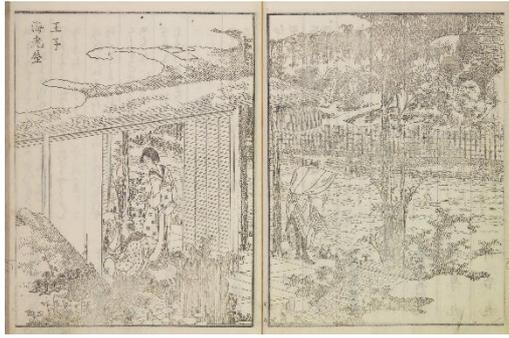


☆〈王子稻荷社〉

※赤堀に囲まれた王子稻荷の参道の階段を上り下りする人、門前の往来を行き来する人々。境内には「正一位」と書かれた多数の幟が見える。王子稻荷神社（現東京都北区岸町1-12-26）は、毎年大晦日の夜、あちこちから社地にある古い榎の辺りに集まり、装束を改めるといわれ、狐火で有名であった。狐火は晩に現れたり明け方に現れたり年ごとに違い、一時（2時間程）程現れるという。

☆〈王子海老屋〉

※有名な茶屋「海老屋」でくつろいで酒を飲む客と立ち姿の女。外には尻はしよりした男としゃがんだ男が店の前の川に流れる玩具の紙舟を眺めている。海老屋は王子に流れている石神井川（音無川）沿いに扇屋と並んで立てられた有名な料理屋。



147 王子海老屋（立命館 ARC）



147 享和2年〈画本東都遊〉（すみだ北斎美術館）

☆〈鎧匠〉

※店先で鎧や甲冑などの武具を売る主人と客の姿。主人の後ろでは木槌を振るって鎧を作っている職人を描いている。

☆〈日本橋〉

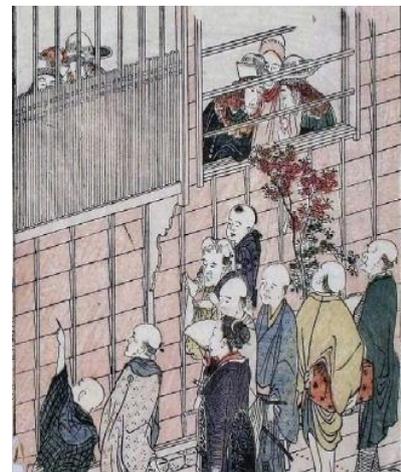
※人々の日本橋での雑踏。図右の背景には江戸城が描かれる。日本橋は、文化3年（1806）の記録では、長さ28間（約51m）、幅4間2尺（約8m）であった（『大江戸万華鏡』人づくり風土記¹³¹⁴ 農文協）。

☆〈駿河町越後屋〉

※日本橋駿河町の道を挟んで両側に店舗を構える呉服商越後屋と、その間の道を往来する人々。越後屋の瓦屋根を修理している職人たちもいる。

☆〈無題（長崎屋）〉

※カピタンの江戸参府の際に宿泊する日本橋の長崎屋にオランダ人を見に来た人々と、窓の格子から見物人を見るオランダ人の様子を描く。長崎屋は日本橋本石町（現東京都中央区室町4-2）にあった。この絵は、見開きの右ページに描かれた〈鎧匠〉と並んで左ページに描かれた図。無題だが、仮に〈長崎屋〉と題した。



148『狂歌東遊』より長崎屋：墨摺（立命館 ARC）

149 享和2年〈画本東都遊〉（早稲田大学図書館）

☆〈十軒店雑市〉

十軒店（現東京都日本橋室町3-2-15に跡碑がある。2丁目と3丁目の間辺の地名）は人形市場で有名。3月の雑市で雛人形を買い求める人々の混雑を、側から描く。店の階段後ろでは人形を入れる箱を作る職人がいる。5月には端午の節句の前の兜市、12月には歳暮市が建ち、破魔矢や羽子板などが売られた。

☆〈無題（神田紺屋）〉 藍染屋（紺屋）の職人が藍で布を染め、その布を物干しから垂らし

て干している男。それを見上げる犬がいる。神田は染物屋が多く、ここで染められた手拭や浴衣は特別なものとして扱われたという。J R神田駅近くに紺屋町という地名が残る。画題は仮題である。

☆〈新吉原〉吉原は、日本橋葺屋町の東京都中央区日本橋人形町2・3丁目から日本橋富沢町にかかる辺りにあったが、江戸市中拡張にともない明暦2年(1656)に日本堤への移転を命じられ、翌年の明暦の大火(振袖火事。明暦3年1月18日から3日間続いた大火)後に、浅草寺裏の日本堤に移転した。新吉原と呼ばれ、日本橋にあった遊郭は元吉原と呼ばれた。図は、桜の花咲く仲見世の往来に、大勢の人々が行き来して賑わっている様子を描く。

☆〈品川汐干〉品川海岸の干潟に打ち上げた船と錨。その傍で遊ぶ三人の子ども。干潟では貝などを漁る人々が小さく描かれる。

☆〈元結匠〉元結は、髪を結び束ねるための紐や糸をいう。江戸では「もっとい」という。外で二人の男が元結の紐を道具を使って擦っている。

☆〈絵草紙店〉日本橋の地本問屋蔦屋重三郎(耕書堂)の店頭風景。客の側で判切の職人や棚に摘まれた摺紙が描かれる。店頭の箱着板に「通油丁 紅画注問屋 蔦屋重三郎」と書かれ、格子に架けられた縦看板には「東都名所一覽」などの出版物の宣伝が記されている。



注)「紅画」は、多色摺の錦絵以前の、紅を主色にした筆彩版画をいうが、ここでは紅・緑・黄程度を版彩する安価な色摺版画の紅摺絵を指しているか。あるいは錦絵を指すか。

150 絵草紙店：墨摺(国文学研究資料館)

☆〈佃住吉社〉佃島の住吉神社の石燈籠や石碑のある境内の背景には、帆かけ船が浮かぶ。住吉神社(東京都中央区

佃1-1-14)は、徳川家康が関東に入る際、大坂の住吉社の分霊を漁夫とともにこの地に移したもの。佃島が江戸湊注の入口に位置しているところから海上安全の守護神として信仰を集めている。

注)江戸湊：亀島川が隅田川と合流する地点。江戸時代にはここが隅田川の河口であり、そこに江戸湊が開かれた。現在の東京都中央区湊1丁目近くの河口。

☆〈飛鳥山〉桜の花咲く飛鳥山の様子を描く。徳川吉宗が享保の改革の一環として整備し、上野寛永寺の桜に次ぐ桜の名所とした。現在でも飛鳥山公園(東京都北区王子1-1-3)として桜の名所になっている。図の左には吉宗を顕彰する「飛鳥山碑」が描かれている。

☆〈日暮里〉日暮里の丘の間の坂道を往来する人々。全体に日暮里の鄙びた風景を鳥瞰的に描く。日暮里は武蔵の国豊島郡日暮里村(現東京都荒川区日暮里)で、武蔵野台地と荒川沿岸の低地に挟まれ、起伏の激しい地域。

☆〈上野〉寛永寺の舞台から遠望する人々。その先に不忍池が広がり、池畔には桜が咲いている。

☆〈浅草海苔〉人屋根（△の形）の下に「平」の字を記した商標を染め抜いた暖簾が掛けられた海苔屋の店先を描く。縦看板には「御膳御海苔所 浅草小田原町三丁目 中烏屋平右衛門製」と書かれている。

☆〈浅草祭〉この頃の浅草祭は、3月19日に隔年で行なわれていた。手前の護岸の茶屋の前には「三社」と書いた幟が二本立てられている。隅田川には祭りを祝う舟が多数浮かんでいる。

☆〈無題（小町桜）〉「小町桜」と書かれた石塔の脇に桜の老木が花を咲かせている。この老木が、歌舞伎「重重人重小町桜」の顔見世狂言の大詰めの所作事として上演された「積恋雪関扉」（天明4年〈1784〉11月、桐座で上演）に登場する小町桜の精を意識したのか、あるいは老いた小町を桜の老木に譬えたものかは不明。歌舞伎では小町桜の精は、小野小町の化身として登場する。

☆〈浅草蓑市〉蓑市見物で浅草寺の雷門を出入りする人の雑踏を描く。旧暦3月19日（浅草祭が行われない年は3月18日）と12月19日に開かれた市。近郊の農家が蓑や笠・臼・杵などを持ちより商売にした。

●狂歌絵本『今日歌白猿一首』（11月。立川（烏亭）焉馬編。俵屋宗理画。三陀羅法師の賛あり。北斎は挿絵〈中村座櫓図〉を描く。上総屋利兵衛版。国立国会図書館蔵）

※11月、中村座の顔見世興業で21歳の六代目団十郎が初めて座頭を務めた時、寛政8年（1796）に引退し成田屋七左衛門と称していた五代目が復帰して市川白猿の名で口上を述べた。これを歓迎した人々が狂歌を詠んで祝意を表した。これらの狂歌や白猿の口上、白猿自身の狂歌などで編集したもの。

宗理（北斎）は「白猿はとしのこうより亀の甲 竜宮までの嘶つたへに」と詠んだ。狂歌と画を寄せた浮世絵師は、勝川春英、勝川春好、歌川国政など。

151 『今日歌白猿一首』櫓図（国立国会図書館デジタルコレクション）



●狂歌絵本『狂歌梢の雪』（『こずゑの雪』とも。角書「菅江追善」12月。一冊。朱楽菅江一周忌追善集。不染居北斎画。印辰印政。口絵に「牛島図」を一図描く。二世菅江〈菅江門人〉編。淮南堂版）〈『日本古典籍総合目録』、『江戸の絵本』所収マティ・フォラー「葛飾北斎と初期門人たち」p289による）

※朱楽菅江は寛政10年（1798）12月12日没。落款「不染居」で。何事にも染まらぬ北斎独流の気概が示される。

●狂歌絵本『花の兄』（中本。2点描く）

☆「岸辺の散歩：仮題」（色摺。前宗理北斎画。ボストン美術館蔵）。



152 花の兄：岸辺の散歩（ボストン美術館）

※他の花に先駆けて咲くので梅を「花の兄」と呼ぶという。美しく飾った簪を挿した娘二人と、日傘を抱えた御高祖頭巾の女が川の岸辺を散歩している。娘の一人は繭玉などをつけた正月飾りを肩にしている。女たちの後ろからは主人らしい男が長羽織姿でついて行く。その後ろに風呂敷包を担ぐ小奴がいる。遠景には牛込御門と堰の落水が小さく描かれ、手前には凧が三本上がっている。正月の風景。

☆「梅樹：仮題」（北辰辰政画。師造化。19.7×26.8 島根県立美術館：永田コレクション蔵）。

●錦絵『略十二段図』（正月。横大判。宗理改北斎画。江崎屋辰蔵版？。東京国立博物館蔵）

※「浮絵源氏十二段之図」（天明5年～寛政元年〈1785～89〉）の主題である「浄瑠璃十二段草子」と同じ場面を描くが、浄瑠璃姫の御殿から聞こえる管弦の音色に義経が屋外で笛を合わせる場面を「やつし」（古典的な題材を当世風に姿を変えた絵。寛政十年「見立てとやつし」項参照）て、義経を女性にし、籬のある庭先で笛を胡弓にして立っている。その横では、犬の親子が三匹描かれる。三味線を手にした女が縁先に立ち、屏風のある部屋では、横兵庫髷の花魁が琴を弾いている。後世の手直しが入っているとの見方もある。



153 略十二段図（東京国立博物館）

●肉筆画「加藤清正公図」（紙本着色一幅。不染居北斎画。印北斗一星高。個人蔵）

※床几に座り、厳しい顔つきで赤鞘から刀を引き抜く様子。「北斗一星高」の印号が珍しい。

154 加藤清正公図（「刀剣ワールド浮世絵」より転載）

●扇面図「見立文殊図」（「獅子に乗った遊女図」とも。この頃か。雲母紙淡彩扇面。不染居北斎。

印辰。印政。18.2×49.0 すみだ北斎美術館蔵）

※獅子に乗る遊女。伏せた獅子に乗った女は文殊菩薩の見立となる。白像に乗った遊女の図「江口の君図」（文化5年：1808）もある。

●絵暦「髪結いの武士」（13,7×17.5 すみだ北斎美術館蔵）

●絵暦「炬燵の美人」（色摺。無款。8.0×13.1 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※炬燵に入ろうと、左手で掛け布団を上げる女性の図。炬燵は置炬燵で、火鉢を檜で囲ん



で布団を掛けたもの。奥の襖に「正小 五六 八 十 十一 寛政 十一歳」「^{つちのえひつじ}己未」とこの年の月の大小が書かれる。

●絵暦「^{ふうりょうが}風呂上りの^{ぼし}母子」（狂歌。色摺。無款。12.4×10.0 島根県立美術館/永田コレクション蔵）

※全裸の母親が風呂上がりの赤子を布に^{くる}包んで他の女に渡している。後方の荷物入れの箱に「巳」「未」とあるので寛政11年の絵暦と分る。

●絵暦「^{にようぼうもち}女房餅やき^ず図」（1月。宗理改北斎画 『年譜』による）

※「北斎宗理」と「北斎画」^印政の落款を持つ絵暦があるという（『年譜』でこのことが記された長谷部言人『大小暦』昭和18年・宝雲社、及び檜崎宗重『北斎論』昭和19年・アトリエ社を紹介している）。

●絵暦「^{いちかわだんじゅうろう}市川團十郎 ^{ろくじゅうろくぶ}六十六部」（1月。宗理改北斎画。図中に「^{かんせいじゅういちつちのえひつじ}寛政十一巳未年」とある。『年譜』による）

※六十六部とは、法華経を66部写したものを全国六十六ヶ所の霊場に収める修行者をいう。略して六部ともいう。

●絵暦「^{ねんらいず}年礼図」（1月。宗理画。「己のとし春」とある。四角志面人の狂歌がある（『年譜』による）。

寛政9年（1797）にも絵暦「^{ねんらい}年礼」がある。落款の宗理は昨年末までの制作なのでそのまま使用している。

●絵暦「^{ななくさず}七草図」（1月。色摺。北斎画。「^{ひつじしゅんきやう}未春興」とある。^{しんらてい}森羅亭などの狂歌がある。狂歌中に大小あり（『年譜』による）。

●絵暦「^{だいしゅうこれき}大小暦をとり合う^{ぢや}茶屋の^{だんじょ}男女」（1月。宗理改北斎画。画中の大小暦に大小月が示される。霞春網の狂歌がある（『年譜』による）。

●絵暦「^{さんびじん}三美人の^{がっそう}合奏」（横細判。色摺。13.4×27.0 ベルギー王立美術館蔵）

※左に胡弓を持つ女、中央に琴を立てて持つ女、右に三味線を抱える女の図。

●絵暦「^{うぐいす}鶯と^{きんたろう}金太郎」（色摺。宗理改北斎画。13.8×16.8 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※「金」の字のある前かけをした金太郎がすり鉢で鳥籠の^{うぐいす}鶯の餌を搗っている。金太郎の後ろには、鳥籠があり、中に鶯がいる。狂歌「^{うぐいす}鶯の歌の徳にハやはらくや ^{おに}鬼をもひしく力瘤まで ^{さんせい}三星亭 ^{みやち}都千賀江」が添えられる。鶯の鳴き声に鬼のような力瘤まで和らぐようだの意。斧の根元に「小」とあり、刃に「正、五、六、八、十、十一」とある。

●絵暦「^{たからぶね}宝船」（色摺摺物。宗理改北斎画。14.0×19.0 すみだ北斎美術館蔵）

※図下半分に「宝」の字のある帆が描かれ、左上に朝日が半分描かれる。新羅亭の「なにかき代をはな相似たる花の春 我身なからもこゝちよきかな」が記される。

●絵暦「^{こよみ}暦をくわえる^{いぬ}犬」（狂歌摺物。色摺。宗理改北斎画 8.5×13.0）

●摺物「^{わか菜}若菜つみの^{びじん}美人」（この頃か。紙本色摺。先ノ宗理北斎画。12.8×18.6 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※川辺で若菜を摘み、根を小刀で切ろうとしている姉さん被りの女の図。月澄改紀若人「うす化粧ほどのつらにもきえのこる 雪まに目たつきハすみれ草」、日新舎「ちゝはゝの目にはいかにも小さくて 孫嬢などもつミはやすからん」の狂歌が記される。

●摺物「舟宿図」（色摺。先ノ宗理北斎画。18.6×51.2 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※「八幡宮」の額の掛かる鳥居の下を通る女の前には松林の境内があり、鳥居の内側の広小路には、板塀一杯に錨の模様を描いた小屋や、「大叶」の箱看板がある舟宿が俯瞰して描かれる。鳥居前には天秤を担いだ男や、行商の男たち、供を連れた侍など、多くの人が往来している。図の右端の太鼓橋には男女が渡っている。

●摺物「垣の内」（「家の中を覗く女」とも。角判色摺。宗理改北斎画。18.7×20.0 北斎館蔵）

※「寿運」と書かれた額のある萱門の先のこけら葺きの部屋で、扇を持った師匠の男が文机を前にして座り、脇に女が右袖を口元に当てながら近づいている。門の前では、だらりの帯をした娘が芝垣の所に立っている。

紀満々人「湯のたぎる外にこそあれ待合に 春をしらせのうぐひすの声」、杉柰女「初鶏の声にうれしく門の戸をひらけばひらく庭の梅がえ」、和泉水清女「冬の日のみじかき枝も此頃は 次第にのびる春の青柳」などの狂歌が連記される。

155 垣の内（北斎館）



●摺物「鶴と福祿寿」（春。色摺。宗理改北斎画。13.2×18.2 すみだ北斎美術館・ピーターモース・コレクション蔵）

※子どもが大きな盆に入れた餌を鶴が嘴で突いている。それを福祿寿が笑顔で見ている。その後ろの垣根には松の木と梅の木が描かれる。

「未立春」と題して鶴を詠んだ狂歌と福祿寿を詠んだ狂歌が添えられる。「千年も替らで立や春かすみ つるも羽をのす山のこし帯 小松亭家住」、「福祿寿揃ふや春の三つの朝 つるも千とせの餌飼のとけき 唯我堂川面」

●摺物「梅と二美人」（「庭先の二美人」とも。九つ切判。色摺。宗理改北斎画。13.2×17.6 北斎館蔵）

※垣根の梅が咲いている。振袖の女性が留袖の女に寄り添うようにして、秘密めかした手紙を渡そうとしているように見える。図左に、「文好む梅がかしくのみそがごと 垣の袖から袖へうつせり 機音高」、「女ならあだめくものよ植木屋が かついできたる庭の青柳 浅草庵市人」の狂歌に続き、「未初春」とある。

156 梅と二美人（北斎館）



●摺物「伊勢曆を見る娘」（「本読む女」とも。色摺。宗理改北斎画。13.3×18.5 北斎

館蔵)

※従来「本読む女」と題されていた。伊勢暦を見ている娘の図。畳の上に糸切り鋏が置いてある。娘の右にはたと紙に包まれた着物が置いてある。正月の晴れ着か。娘が手にする暦の題簽に「寛政十一年」と読める。狂歌「佐保姫もかすみの衣たちそめて のどけき春のはれ着にやせん 太平庵尾佐丸」が記される。

157 伊勢暦を見る娘 (北斎館)



伊勢暦とは、江戸時代に伊勢神宮の門前である宇治および山田の暦師が製作し頒布していた暦であり、今日の神宮暦の前身である(「ウヘ・デイ」より)。

●摺物「大黒酒宴図」(色摺。宗理改北斎画。14.7×18.1 すみだ北斎美術館・ピーターモース・コレクション 蔵)

※大黒天が遊女にやる纏頭(心付け)の紙を差し出し、受け取る男は紙をさしあげている。男の隣では、やり手の年増が手を差し出している。大黒の側には花魁二人と禿がいる。千歳松成の狂歌「福神ハすかせたまへるかミはなを わけてひつしの春やまくらん」が記される。

158 大黒酒宴図(すみだ北斎美術館)



●摺物「遊郭の芸妓」(色摺。二枚続き。宗理改北斎画。21.4×53.2 北斎館蔵)

※料亭の座敷の窓辺から隅田川と思われる風景を眺めている。図の左には禿がいる。

●摺物「社前の綱引き」(色摺。図左の幟旗に「寛政十一 巳 未年 北斎」とある。17.8×52.9 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵)

※小さな鳥居のある社前で、太い綱を両方で引き合う男たち。左右の組みの横では、扇子を広げて応援する男が描かれる。

●摺物「舟から降りる芸妓」(「二美人 舟から棧橋」「舟から降りる深川芸者」とも。色紙判。色摺。宗理改北斎画。19.8×18.2 北斎館/日本浮世絵博物館蔵)

※棧橋で舟から棧橋に降りた芸妓が、これから降りる芸妓の手をとって手助けをしている。船頭が芸妓の荷物を渡そうとしている。二人の芸妓は、狂歌に記された深川の富岡八幡宮の二軒茶屋に行くようである。二軒茶屋は八幡宮鳥居の内側にあった「いせや」と「松本」の二軒の料理屋。そのほかにも料理屋が並んでいたが、この二軒が特に賑わった。あるいは門前仲町にあった料理屋「梅本」に行くのか。

「千金の春はのどけき富が岡 まづ船つけよ二軒茶屋まで 閑々斎春曆」、「是からは狂歌よませんうぐいすの 忽は梅本をすりものにして 便々館湖鯉鮒」の狂歌が記される。



159 舟から降りる深川芸妓(北斎館)

●摺物「新年屠蘇図」（1月。「元日屠蘇図」「元旦屠蘇図」とも。色摺。宗理改北斎画。19.4×25.8 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※床の間を前にして刀を腰に挿し、袴を付けて座る武士が盃で屠蘇を飲む。妻と子がその脇に控え、正月用の重箱が置かれている。床の間には海老やウラジロや松の正月飾りが置かれている。浅草菴の狂歌の次に「未初春」とある。

●摺物「己未美人合之内」（揃物。1月。色摺。宗理改北斎画。図中に「未初春」とある）

※大首絵半身像の揃物。狂歌グループ（浅草連）の依頼で刊行。

☆〈屠蘇持つ官女〉（「屠蘇を運ぶ婦人」とも。13.4×18.0 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）。

※富士額で瓜実顔、宮廷官女風の天上眉注、髷の後ろ髪を垂らした宗理型美人が、三方に乗せた屠蘇を運んでいる。大首絵風の図。「さほ姫のさけ髪なれや青柳の延たる裾ハしよみん（書院）まで引 雲龍亭」、「こね墨のねすミ柳のまゆつくる 野辺に霞のうすけしやう（化粧）して 千代喜飛乗」、「色めきてめたつ柳の髪かたち ひまなくなでる門の春風 万歳逢義」などの狂歌が記される。

注）天上眉：眉を擦り落とし、額に近い所に眉墨で点または楕円に塗る眉。高眉とも。

☆〈若菜摘みの美人〉（「若菜の籠を負う美人」「梅の籠を負う美人」「つみ草」とも。

狂歌の脇に「未初春」とある。13.6×18.2 すみだ北斎美術館蔵）

※図は、籠の柄に手拭を結わえ肩に担ぐ娘。籠には若菜と梅と思われる小枝が入っている。

以下の図は、ピーターモース・コレクション図録の永田生慈解説（p 116、図録番号 319）による。

☆〈布を噛む美人〉（パリ国立美術館蔵）

☆〈羽子板を持つ美人〉（パリ国立美術館蔵）

☆〈本を持つ美人〉（「浄瑠璃本を読む美人」とも。13.9×15.4 ボストン美術館/大英博物館蔵）

※浄瑠璃（常磐津）本を持って、顔をかしげて読む女。小川清志ほかの1名の狂歌が記される。

☆〈柳下の平安風美人〉（13.4×17.6 ボストン美術館蔵）

●摺物「三囲土手の男女」（1月。色摺。宗理改北斎画。「未のはつまつ」とある。

※三陀羅法師他の狂歌が記される（『年譜』による）。

●摺物「座敷万歳図」（1月。宗理改北斎画）

※画中の衝立に、この年を表す未の絵がある。紀更利他2名の狂歌がある（『年譜』による）。但し、『永田生慈北斎コレクション展』（2019）図録の年譜では、寛政7年（1795）に絵暦「座敷万歳図」（宗理画）の記載がある。

●摺物「山水図」（1月。宗理改北斎画）

※「未初春」とある。浅草庵他2名の狂歌が記される（『年譜』による）。

●摺物「隅田川」（1月。横大奉書半切判。色摺。狂歌歳旦物。宗理改北斎画。39.0×53.0 フランス国立図書館蔵）

※長い羽織を着た男が右手で何かを指差し、その脇には羽織を脱いで肩に掛けた男と鼈甲の簪を着けた二人の芸者、その供と思われる下男が堤重（行楽等の外出用重箱）を背負って立っている図。下男の足元には、堤の下にある三囲神社の鳥居の笠木が描かれる。対岸には木立の中に浅草寺の五重塔と、遠くに富士山を描く。この年の元旦の景と思われる。絵の下半分には 21 首の狂歌が添えられる。

160 隅田川（フランス国立図書館）



●摺物「江ノ島の海辺」

（「江之島図」「海浜の図」とも。1 月。色摺。宗理改北斎画。「歳旦」「寛政己未（寛政 11 年）元旦試筆」の書き込みがある。19.9×27.3 ハーバード大学サッケー美術館蔵）

※江の島に渡る人々。遠近画法。光琳波（尾形光琳が描いた波）のような干潟に打寄せる波のうねりが北斎風で、寛政 9 年（1797）の「江島春望」にも描かれた。右の浜辺から江の島までの干潟を人々が行く。葎雪菴午心「日ハ草にあそひてとしの野面かな」などの句が記される。

●摺物「面と箱」（春。宗理改北斎画）

※図中に「ひつしの春むかへ」とある（『年譜』による）。

●摺物「文机脇の娘」（春。宗理改北斎画）

※「未春」とある。浅草庵、芳春亭の狂歌が記される（『年譜』による）。

●摺物「ほととぎすを見る縁側の娘」（春。宗理改北斎画。「未春」とある）

※外山花盛、浅草庵の狂歌が記される（『年譜』による）。

●摺物「雁金五人男注 安の平兵衛」（色摺。宗理改北斎画。13.8×18.3 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

注）雁金五人男：元禄年間、大坂での五人のならず者。雁金文七、極印千右衛門、布袋市右衛門、安（庵）の平兵衛、神鳴庄九郎の五人。いずれも刑死となった。雁金文七は、天明年間の「風流男達八景」で描いている。

※座っている男が脇に尺八を置いている。着物に「安」と読める字があるので安の平兵衛であろう。そこに女が背で寄り添うように立って、首を回して平兵衛をいとおしげに見ている。「霞より外にあやなきものをまた すめぬ顔なる春の夜の月 山手仲住」、「明ぬれハ安にたかハす春かすみ たて引のある男山の端 大平楽住」の狂歌が記される。

●摺物「雪景山水」（この頃か。色摺。宗理改北斎画。印辰政。19.5×35.9 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※一面雪景色の中、雪を被った民家と、遠くの橋を渡る人が漢画風に描かれる。背景の山の上には、雁が数珠つなぎになって飛んでいる。

●摺物「砧打ち図」（8 月。色摺。宗理画。印完知。東京国立博物館蔵）

※図中には「未初春」とある。『年譜』では、「羊仲秋」としている。北斎は宗理を改名

しているので門人宗二の作と思われる。

●摺物「**貴人髪結**」（色摺。横八切り判。花巻市美術館「浮世絵に見る青の変遷展」2011/7 及び岐阜市歴史博物館 2012/10 展覧会出品リストによる）

●摺物「**合わせ鏡**」（色摺。宗理改北斎画。13.8×18.8 すみだ北斎美術館蔵）

※座って合わせ鏡をする娘と、立ってそれを見る年増。花瓶の梅の枝に紙を括りつけている。

●摺物「**蛸籠と団扇**」（6月頃。宗理改北斎画。印画狂人）

※「巳未とし」とある。三朝ほかの句がある。寛政10年6月19日没の、振付師吾妻藤蔵の一周忌追善摺物という（『年譜』による）。

●摺物「**千石船を見る母子**」（この頃か。紙本色摺。宗理改北斎画。13.9×18.6 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※沖に浮かぶ千石船や小舟を手をかざして眺める女と男の子。その脇にしゃがんで赤子を背負う母親も沖を見ている。小舟の上では万歳をした両手に扇を持ちあげている男がいる。「はるの夜のあたへのしれぬ江戸の海や 千石ふねの二三万艘 松風台●」の狂歌が添えられる。

●摺物「**雪かきをする美人**」（色摺。宗理改北斎画。13.2×13.6 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※高下駄を履き、鋤を持ち、腰をかがめて雪かきをする女の図。睦月若持の狂歌「うすほとにまろめし雪も（以下不明）」が記される。

●摺物「**朝日の佃島**」（この頃か。色摺。先ノ宗理北斎画。18.9×51.9 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※遠くに佃島が望める橋の上には、天秤を担ぐ魚屋や鉢植えを売る男、小奴を連れた女などが往来する。欄干に手をかけて、額に右手を翳して何やら島と反対方向を見ている、上半身裸の男もいる。海には荷を満載した千石船や艇の小舟が停泊している。他にも猪牙舟や屋根舟、帆を下ろした舟等が停泊している。水平線には巨大な朝日が上り始めている。

●摺物「**橋のある山水画**」（色摺。宗理改北斎画）

※玉川亭友呼や浅草庵らの狂歌が記される。図は、手前に、水辺に掛かる石造りの太鼓橋と、森に囲まれた家並み、その前の広場数名の人物が小さく描かれる。橋の上には横にすやり霞が引かれ、遠景に薄く山容が描かれ、麓から山に沿って糸の様に無数の雁が連なって飛び、山の向こう側に飛んでいく。

●摺物「**官女と娘**」（色摺。無款）

※簾のある部屋で、二人の官女と娘が草花や船や木が書かれた紙を持って、お互いに見比べている図。背後の板襖には細い線で人物と山羊のような動物が描かれている。

●摺物「**二人の娘と梅樹**」（色摺。北斎画）

※梅樹の側で、振袖の娘と縦縞模様の着物の女が寄り添っている。縦縞模様の女は年増風。図の左半分には数種の狂歌が記される。

●摺物「**菊籬**」(全紙判色摺。先ノ宗理北斎画)

※籬の中に育てられた菊が飾られ、女三人と小奴が鑑賞している。図の下半分に、逆さに「千種萬歳」「催主 繁太夫改 松邑繁八」とあり、繁太夫改名披露として、深川芸者衆による種蒔三番叟などの披露案内であることが分る。

●摺物「**洗張り**」(「**染物乾し**」とも。全紙判色摺。宗理改北斎画。41.5×55.7 北斎館蔵)

※薄黄に染めた布を伸子張りにして、柳に紐を張って乾す。その下には大きな盥に布が入れてある。燕が飛び黄色の梅花が咲く屋外の風景。下半分は、深川芸者の長唄の会の番組表であり、末尾に「二月」とある。



161 洗い張り (北斎館)

●摺物「**歌を詠む遊女**」(狂歌摺物。色摺。無款 13.5×18.6)

●摺物「**浜辺の錨**」(狂歌摺物。色摺。宗理改北斎画 14.1×19.0)

●摺物「**方歳の見立行平松風**」(狂歌摺物。色摺。宗理改北斎画 19.4×9.4)

●短冊「**猿橋**」(この頃。明治期の複製のみで確認される。大短冊・長大判。宗理改北斎画)〈リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p 308による〉

●摺物か「**風流倭二色**」(この頃。1点のみ確認される。小判。先宗理北斎画)〈リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p 308による〉

寛政12 (1800)	庚申	41 歳	時太郎可候、(群馬亭)、北斎辰政、北斎、(助兵衛山人)、(雁高庵)、宗理改北斎辰政、宗理改北斎、先ノ宗理北斎、画狂人北斎、東陽北斎、 三径 、辰、政、: こと (30 歳)、(富之助: 14 歳)、阿美与 (12 歳)、阿鉄 (10 歳)、阿采 (3 歳)
-------------	----	------	---

◇庚申(こうしん)の年に限り、6月1日の山開きから9月30日まで女性の登山が許可された。

◇相撲興行(4月、浅草八幡宮、11月、本所回向院)

◇4月、伊能忠敬、蝦夷地測量に出発(56)。以後、3400日(約9年半)の測量後「大日本沿海輿地全図」(伊能図)を文政4年(1821)に完成。

◇9月10日、伊藤若冲没(85)。

◇12月12日、朱楽菅江没(寛政12年説による)(61)⇒寛政10年の項参照。

◇稲葉華溪没(月日不明。51)。

◇「女大絵」「面体を大造に画」く絵が禁じられる。

○大田南畝『浮世絵類考』完成。

○曲亭馬琴、黄表紙『備前播盆一代記』、黄表紙『胴人形肢體機関』、滑稽本『化競丑満鐘』。

○正月、曲亭馬琴、唯一の艶本『艶本多歌羅久良』(喜多川歌麿画。色刷り半紙本三冊。二

代目 蔦屋重三郎版。曲亭馬琴は序文と上巻の主文を書く。

○鍬形蕙斎『山水略画式』

※「略画」の語は、溪斎以前にはないと溪斎自身の話として紹介されている（八木書店『江戸の絵本 画像とテキストの綾なせる世界』鈴木淳・浅野秀剛編・所収「葛飾北斎の絵手本にみる『略画』—北斎の絵画教育者としての一側面」日野原健司。p 245）。

★この頃、西洋画法が伝えられ遠近法、色彩、陰影の扱い、構図など北斎らに影響。

★この頃、山の手（小石川伝通院前か。東京都文京区小石川2-14-6 辺）（「葛飾北斎の隅田」及び『葛飾北斎伝』p 30 より）に住むか。

【宗理様式美人の評価】

★「宗理」号は既に寛政 10 年に門人宗二に譲っているが、文化年間前期までを「宗理様式」の時代として考えられている。その宗理様式について、寛政 12 年に刊行された笹浦鈴成の『大通契語』（国文学研究資料館デジタル判）32 丁目には「（略）一躰きりやうもよくたおやかにして宗理もこれが為に筆をたち、かの京橋注がたくミもこれが為に筆をなげ（略）」とある。

注) 京橋：京橋に住んでいる山東京伝のこと。

新宿岡場所の遊女梅歌の美貌を描写したもので、宗理（北斎）も山東京伝も描ききれない美人だという。逆に、当時美人画の代表が宗理、文筆の代表が山東京伝だとしているのである。いわゆる宗理風美人は、細身で長身、瓜実顔の富士額、首を曲げ、柳腰の体を少しよじったたおやかな姿とされている。

★戯画「文鳳画」（河村文鳳？～1843）の画風（漫画風のコマ絵の集成）を北斎も見たか。

●黄表紙『人間万事二一天作五』（1月。二冊。通笑門人道笑作。群馬亭画注。山口屋版）

※天明 6 年（1786）の『二一天作二進一十』の改題再摺本。題簽に「庚申新板」とある。

注）「群馬亭」号が使われているが、天明 6 年（1786）に使用したものをそのまま継続したもので、この年まで使用したものではない。天明 8 年版（1788）版もある。

●黄表紙『鼈將軍勘略之巻』（正月。儉約と古兵法書『三略の巻』注のもじり。中本三冊。時太郎可候自画作。北斎の自画作。曲亭馬琴の手直しあるか。蔦屋重三郎版。慶応義塾図書館/国立国会図書館蔵）

注）三略：中国の兵法書「武経七書」一つ。『黄石公記』『黄石公三略』とも。

※巻末の北斎の二代蔦屋重三郎宛ての舌代（口上書きのこと）には、曲亭馬琴を頼りにしている文言がみられる。

「舌代 不調法なる戯作 仕 差上申候。是にて御間に合候はゞ、何卒御覧の上、御出板可被下候。初而之儀に御座候得ば、あしき所は、曲亭馬琴先生へ御直し被下候様、此段よろしく奉願候。又々当年評判すこしもよろしく御座候へば、来春より出精仕、御覧に入れ可申候。右申上度、早々不具。十月十日 蔦屋重三郎（筆者注：婿養子勇助が継いだ二代目）様参らせ候」（句読点・ルビは筆者による）

棚橋正博は上記舌代に「初而之儀」とあることから「鼈將軍勘略之巻」が北斎の黄表紙挿

絵の初めであり、天明年間(1811-1828)に使用された戯作名の「是和齋」「魚仏」「白雪紅」は北齋ではなく(筆者注:「白山人可候」も含むか)、従って天明年間での北齋作の黄表紙はないとする(『黄表紙総覧 中編』・『日本書誌学大系 48』に所収:WEB「浮世絵文献資料館」より)。

北齋が黄表紙に関わったのは安永9年(1790)『驪比翼塚』からである。従って、天明年間では北齋の黄表紙挿絵はないと主張しているものと思われる。このことについて、飯島虚心は「按ずるに『初而之儀云々』、戯作をなすは、初めてにあらず。現に是和齋といへる頃の戯作注あり。蓋し蔦屋の注文にて出板するは、初めてなれば、謙遜してかくいへるなるべし」と述べている(p60)。

注) 戯作あり:天明元年の黄表紙『本性銘暑 有難通一字』を指している。

安田剛蔵「北齋の黄表紙(一)是和齋、魚佛の研究」(1971『浮世絵芸術』29巻 p17-26)では、是和齋と魚佛は同人異名で、北齋の別号としている。

【北齋の最も早い時期の自画像】

※下巻最終に、巻紙などを乗せた机の前で、羽織を着て両手を突いた坊主頭の人物が描かれている。この頃の自画像といわれる。 162 竜將軍勘略之巻 自画像(竜將軍勘略之巻 国立国会図書館)



●狂歌絵本『東都名所一覽』(1月。大本色摺。乾・坤の二冊。浅草庵市人撰。全21図。画工北齋辰政。蔦屋重三郎版。乾巻各冊25.0×17.8 坤巻各冊26.0×17.5 国立国会図書館/大英博物館/すみだ北齋美術館/日本浮世絵博物館/フリーア美術館:プルヴェラー・コレクション/メトロポリタン美術館蔵)春夏秋冬に配列して、各図の上部に数名の狂歌が記される。

※『東都名所一覽』出版直後に『東都勝景一覽』に改題。上下二冊。奥付に、画工北齋辰政彫工安藤田紫 寛政十二庚申年正月開版とある。25.7×17.3 大英博物館/ボストン美術館/フリーア美術館:プルヴェラー・コレクション蔵)題で、文化12年(1815)に、蔦屋重三郎から版を譲り受け、菱屋金兵衛版(須原屋伊八合梓)として改題再摺される。天保11年(1840)9月に須原屋茂兵衛版でも改題再摺される。出版事情には考証の余地がある。

浅草庵その他の狂歌が全ページに記される。

乾巻(見開き2ページの図)

☆〈品川〉

※海辺で「千種」と大書きした凧を頭上に上げる子ども。袴姿の侍に袴を履かせようとしている女。その前で腰をおろして煙管で一服している男の図。

☆〈梅屋舗〉

163 梅屋敷(日本浮世絵博物館)



※亀戸・梅屋敷の景。梅の木の側の休み処で腰掛けて煙管で一服している男。揚帽子（角隠）を被った武家の女房と女中、お供の男が二人の図。一人は荷物を担いでいる。

☆〈三囲〉

※雪を被った大傘をかざして何かを話す男と女の足元に三囲神社の雪を被った石の鳥居が見える。鳥居は隅田川の堤より下にあったことで有名。遠景に待乳山が描かれる。

☆〈王子〉

※右側に「西ヶ原」左に「左おうじみち」と書かれた道標のある分かれ道で、荷物を持ち合う旅姿の二人武士。大小二本の刀を差している。その前を行く御高祖頭巾の女と連れれの男が振り返っている。腰をおろして草鞋を履こうとしている百姓。その傍らに籠と鍬が置かれている。

☆〈飛鳥山〉

※桜咲く木と緑の松の間に敷いた毛氈の上でくつろいで花見をする男女。大きな碑文注の文字を読む三人の男。桜の木の前の水売りから買おうとしている男。肩に箱を担いだ寿司売りの男等が描かれる。注）碑文：元文2年（1737）、飛鳥山の桜を名所とした将軍吉宗を顕彰するために立てられた石碑。幕府儒臣の成島道筑（錦江）の詩文を刻したもの。



164 飛鳥山（日本浮世絵博物館）



☆〈日本橋〉

※前景に、魚河岸からの魚を両手で支え挙げて運ぶ男など、日本橋を渡る人々の一部を描く。日本橋は擬宝珠のある部分のみ描く。近景から遠景の江戸橋にかけて、隅田川の流れと川岸に並ぶ蔵を配置した図。

165 日本橋（日本浮世絵博物館）

☆〈亀井戸天神〉

※藤棚のある天神の中庭の落葉を掃き集める男と、何かを指示する烏帽子を被った神官の図。

☆〈隅田川〉

※隅田川べりに突き出した舟乗り場で、女将と芸者が舟に乗った客を見送っている。芸者の着物の胸がはだけ、二人の着物の袖と裾が風に靡いている。

166 隅田川（日本浮世絵博物館）

☆〈両国〉

※橋桁の間を行き交う舟。飛沫除けの傘を開いて



舟に乗っている男女と艪を操る船頭。女の袖が船べりにかかっている図。屋根舟と大きな船の舳先も見える。

167 両国（日本浮世絵博物館）



☆〈山王祭〉

※唐装束で馬に乗り、天秤量を操る男と、旗をかかげている男たち。右手前には「御祭礼」と書いた幟の半分が描かれている図。山王祭は、江戸城鎮守の山王社（日枝神社：現東京都千代田区

永田町2-10-5）で6月15日に行われる大祭。神幸行列は将軍の上覧のため城内渡御が行われた。

坤巻（〈湯島天満宮〉を除き見開き2ページの図）

☆〈湯島天満宮〉

※天満宮と書かれた額を掲げる鳥居の下にいる男、鳥居に向かう石段を上る僧侶たち。右に本社の一部が描かれる図。湯島天神（現東京都文京区湯島3-30-1）とも称され、学問の神様菅原道真を祀る。1ページの図。

☆〈不忍池〉

※池に舟を浮かべ、蓮を取る親子。それを弁天堂の欄干から眺める男女の図。

☆〈新吉原八朔〉

※旧暦8月1日、三人の花魁が純白の着物で遊郭内を道中している。格子際に立つ按摩や、そぞろ歩く男たちの図。白装束なのは、徳川家康を偉勲を祀る際、大名、御家人、旗本たちが城内で白装束を着たことに困んでいる。

168 新吉原八朔（日本浮世絵博物館）



☆〈芝神明〉

※「神明宮」と大書きした横断幕を掲げた門前の群衆を鳥瞰画法で描いた図。門の両脇には武官の像がある。

☆〈深川八幡祭礼〉

※「祭礼 仲町 氏子中」が左右反転して描かれた幟を括りつけた柱の脇から蔵出しされた神輿と、それを担ぐ男たち。それを見る芸者衆の図。深川八幡宮（東京都江東区富岡1-20-3）は、富岡八幡宮と称され、寛永4年（1627）に創建。例祭は8月15日に行なわれ、3年ごとに本祭となる。日枝神社の山王祭、神田明神の神田祭と共に江戸三大祭りといわれる。

169 深川八幡祭礼（日本浮世絵博物館）



☆〈目黒〉

※目黒不動尊（現東京都目黒区下目黒3-20-26）境内に参詣する人々、石段を上る二人の男。寺社の屋根上からの視点で描かれる。

☆〈堀之内雑司ヶ谷会式詣〉

※干し柿の吊るされた休み処前を行き交う人々。左には馬が桶から水を飲んでゐる図。会式は一般に御会式と呼ばれ、日蓮上人の忌日 10 月 13 日を中心に雑司ヶ谷法明寺（東京都豊島区南池袋3-18-18）や堀之内妙法寺（東京都杉並区堀ノ内3-48-8）で行われる法要儀式。図中の狂歌に「雑司ヶ谷」とあるので雑司ヶ谷の茶店の風景か。

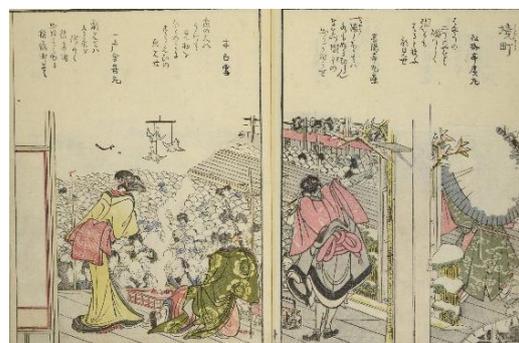
☆〈愛宕山〉

※左ページに急な男段を上る四人の男、右ページに女段を降りる女二人と、風呂敷包みを背負う男の図。

☆〈堺町〉

※堺町の芝居小屋で演じる歌舞伎役者たちの背中が描かれ、役者の前では立錐の余地なく見物している観客の頭が描かれた図。堺町は、現在の東京都中央区日本橋人形町3丁目付近。中村・森田・市村座が天保13年（1842）まであった。

170 堺町（日本浮世絵博物館）



☆〈神田明神〉

※神田明神の石段を上り、鳥居の下に上半身を現わした赤子を背負う母親。着飾った娘たちが七歳の帯締めのため鳥居の脇に立っている。左側の休み処では三歳の祝い用に子供に袴を着せている母親と娘。狛犬がこちらを覗んでいる図。

171 神田明神（日本浮世絵博物館）



☆〈浅草年市〉浅草寺境内の年の市の賑わい。だるまや年始飾りを買った人々や、寺から群衆を眺める男たちの図。

●狂歌絵本『春帖』（大本1巻。画狂人北斎画。「梅」「聖堂」の2図。鸚鵡斎貢撰。桂林堂序。淮南堂行澄編。朱楽連狂歌。26.8×17.8 東北大学附属図書館狩野文庫蔵）

●狂歌絵本『あなた四方の春』（この頃か。撰者不明。北斎、鳥文斎栄之等画。版元不明）（八木書店『江戸の絵本』所収・マティ・フォラー「葛飾北斎と初期門人たち」p 289より）

●狂歌絵本『狂歌三十六歌仙』（色摺36図大本一冊。画工名なし。宗理様式の特徴を有しているところから北斎と認められる。千穂庵三陀羅法師〈赤松正恒〉編。西村屋与八版。蔦屋重三郎版、西村新六版説あり。すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/国立国会図書館

蔵)

※序文末尾に「はつ春」とある。千穂連の狂歌作者の仮装した像を描く。刊行は、寛政9年(1797)、10(1798)年の説(安田剛蔵『画狂北斎』p242)や文化元年(1804)説あり(『年譜』)。

●絵本『屋万田の穂並』(一冊。漆山又四郎(天童)『木版挿絵本音順目録』坤の部には「北斎 榎本珍盈編 寛政十二」とある。「早稲田大学図書館古典籍データベース」より)

●艶本『好色堂中』(色摺六ツ切判 12枚組一冊。助兵衛山人。国際日本文化研究センター蔵)

※画師については、礪川亭永理(鳥橋斎永理)説がある(浅野秀剛『絵入春画艶本目録』p137)。

※序「それ陰陽和合の事は、千早振神代のいにしへ、天の浮橋のころび寝に、男女女神のちよんの間より、貴きもすき、賤しきも好む事とはなりけらし。御れば春にひらく花よりも、秋に清き月よりも、この道ほど楽しきはあらしかし。茲に、或好人が、筆をふるひし、四季おりおりの、絵すさみの一卷の、冊子となしぬ。見る人涎を流して、閨の睦言の種にし給へと、助兵衛山人、股くらをむしつかえて、好色堂中に序す。かのへさるのむつまし月ひつ書く」(跋「雁高庵題」ルビは筆者)。

跋文の「雁高庵」は、北斎が後に艶本に使用した隠号「紫色鴈(雁)高」を思わせる。

●俳諧本『俳諧四時句草紙』(一冊。宗理改北斎辰政画)「北斎版本リスト(下)溝口康麿(「日本浮世絵協会会報」39号)北斎は一図のみ描くという。『年譜』所収)。

●不明『初笑い』(一冊。宗理改北斎画)北斎は一図のみ描くという(「北斎版本リスト(下)溝口康麿(「日本浮世絵協会会報」39号)『年譜』所収)。

●不明『花の上』(一冊。宗理改北斎画および北斎辰政画)北斎は二図描くという(「北斎版本リスト(下)溝口康麿(「日本浮世絵協会会報」39号)『年譜』所収)。

●肉筆画「白梅図」(着色一幅。北斎筆。印辰印政)

※横判の画面の左下から右上に梅の木が伸び、小枝に白梅が咲いている。漢画の趣。

【画狂人北斎号登場か】

●扇面画「富士図」(夏頃。紙本墨絵扇面。画狂人北斎。印辰印政。太田記念美術館：鴻池コレクション蔵)

※太田葦(蜀山人)の賛に庚申夏日とある。鋭角的な白い富士山の手前に松と思われる墨の書き込みがある。

※『年譜』では「この頃、画狂人北斎を号すという見解あり」として、「北斎肉筆画における〔亀毛蛇足〕印時代」浅野秀剛『肉筆浮世絵大観 東京国立博物館Ⅱ』所収 講談社：平成7年」の記事を参照している。そのうえで「ただし、作画は(蜀山人の)賛よりも後年になされたものとみられ、更に検討を要する」としている。

寛政11年(1799)の摺物「蛸籠と団扇」では印影で「画狂人」を使用している。

●絵曆「三美人図」（北斎画）

※黒い三味線箱の横にある風呂敷の冊子に「庚申」（寛政十二年）の干支が描かれる。寛政10年（1798）の「三美人図」とは別画。

●絵曆「土農工商」（小判墨摺4図。北斎。リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p308による）

☆〈銀を計る婦人図〉（無款。色摺 9.3×12.3）

※図右上に「商」と書かれている。帳場で天秤を使って銀を計っている女。「定 小判六十目 時之相場」と書かれた看板がある。「津和野藩伝来摺物」にもある。

※明治26年に鎌田善次郎版「土農工商」（北斎）もある。

※他に年代不詳の「土農工商」（4図。無款）がある（「土」と題された画は、烏帽子姿の侍が座って書を読む図。「農」と題された画は、刈り取った草の束の上に腰をおろした農夫が書を読んでいる図。「工」と題された画は、版木を彫っている彫師の図。「商」と題された画は、店の帳場で算盤を使って計算している二人の男の図）。

●絵曆「楊枝屋店先」（色摺。先ノ宗理北斎画。13.2×18.2 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※木の台の上で房楊枝の先を木槌で叩き柔らかくしている女。製品の楊枝が立てて並べある棚の後ろでは、大きな楊枝を持つ座っている猿の人形が置いてある。盃の中に浮かぶ桜の花弁と数字が大の月（一、三、四、五、七、九、十一）を表している。「あさくさの餅ハ喰すと侍の高楊枝から春の買初め 羽金鉄人」、「楊枝屋の猿丸太夫奥山にもみち袋も妹か縫ひそめ 岩井有常」、「名物に自慢の髭を撫ながら かみそりつかふ 浅草の海苔 四方歌壇」の狂歌が添えられる。浅草寺境内には楊枝屋が多くあった。

●絵曆「猿廻し」（十八切判。無款。12.7×8.2 東京国立博物館蔵）

※猿廻しの女が肩に猿を乗せ、布を頭から被っている。手には猿を操る棒状の道具を持っている。側で子どもが右手を上げてはしゃいでいる。

●絵曆「猿の鹿島の事触」（北斎画。6.8×9.4 すみだ北斎美術館）

※二匹の猿が鹿島神宮の事触をしている。後には正月に門付けなどをした。1匹は扇を持ち1匹は御幣に八咫鳥の3本足ならぬ2本足の鳥を「大」の字にしたものを担ぐ。2匹の猿の白衣や扇に大の月が書き込まれている。

●絵曆「蓋物と猿の人形」（大小摺物。色摺。北斎画 9.4×13.3）

●絵曆「子供に猿面かぶせ」（十八切判。無款。13.0×8.6 東京国立博物館蔵）

※母親が子どもに猿の面をかぶせ、頭の後ろで紐を結んでいる。梅の木に登った猿が娘を見下している。猿の着た半纏に大の月、娘の帯に小の月が示される。

●摺物「源氏三ヶ伝/ねのこの餅」（小判色摺。宗理画。日本浮世絵博物館蔵）

※梅の木が描かれた屏風を背にして小上がりの畳に座る男と遊女。その前で男が指差して話しかけている。「姫小松けふの子の日にひかる君 千代もつきせず ちぎる若餅 洒落人」「●初の蒲団も三つが一つ夜着 ねのこのもち注と明る春の宵 四方真顔」の狂歌

が記される。

注) ねのこの餅：子の子の餅。

『源氏物語』(葵)に子の子餅に関わる場面がある。陰暦10月最初の亥の日に食べる「亥の子餅」は、万病を防ぎ子孫繁栄が叶うと言われる。光源氏と紫の上が一夜を過ごし、翌日の亥の日に「亥の子餅」が振る舞われたが、翌日は一夜を過ごしてから三日目で、三日通うと「三日の餅」を食べて初めて結婚が成立する習慣を念頭に入れた源氏は「この餅は明日の餅に残してほしい」と惟光に命じる。惟光は、明日は「子の日」なので、「子の子餅」で、源氏が三日目の結婚を意識していることを察したという内容からの着想した絵。遊女との親密な関係を正月の日に設定した絵にしている。

●摺物「狂言鞆猿」(色摺。画狂人北斎画)

※狂言「鞆猿」からの着想。矢を入れる筒に動物の皮を巻いた鞆を作るため、大名が猿引きに小猿を求めるが、小猿の無心さに心を許す。猿引きはお礼に小猿の舞を披露するという筋書き。図は、立烏帽子を被った大名の前で、小猿に棒を持たせて躍らせる袷姿の猿引きがいる。浅草庵音芳の賛が記される。

●摺物「帰農図」(「馬を牽く農夫」「草刈りの帰途」とも。半切判色摺。先ノ宗理北斎画。21.4×57.3 島根県立美術館：永田コレクション/東京国立博物館蔵)

※親子だろうか。農夫の男が馬を牽き、子どもが馬に乗って、小さな板橋を渡っている。農作業の後にのんびりと帰る様子。図右の遠景に描かれた山と、塔



及び大きな笠のようなものが何かは不明。

172 帰農図 (東京国立博物館)

●摺物「坪庭の鶯」(この頃か。色摺。先ノ宗理北斎画。14.0×20.3 北斎館蔵)

※開け放した座敷の柱によりかかり、簪に手をやりながら外を見ている娘。畳には三味線と撥と教本らしきものが重ねて置かれている。庭には梅の枝に鶯がとまっている。縁側に片足を掛けて上ろうとしている芥子坊主頭の子どもが凧を手にして鶯の方を指さして見ている。「我耳へたこの入ほど聞まほし つぼのうちへもきなく鶯 八筭舎兼一」の狂歌にある「耳にたこ」に凧をかけている。

●摺物「官女の宮詣」(「宮詣の官女図」とも。1月。狂歌。色摺。先ノ宗理北斎画。林季亭面吉の狂歌に「甲孟春」とある。20.0×13.3 島根県立美術館蔵)

※長い髪を垂らした官女が供の女を連れ、鳥居をくぐろうとしている。黒々とした松の幹の陰に石燈籠が描かれる。

●摺物「雪中二美人」(この頃か。四切。色摺。先ノ宗理北斎画。12.4×16.2 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/東京国立博物館蔵)。

※雪が止み、大きな傘を広げて立つ女と、その脇で着物の裾を片手で引き上げ、左手を上げている女。「梅かゝをやりすこすともうし
る髪 ひきかへしてよさそふ春風 楽聖庵光
丸」、「定紋のかたはミ草も傘に うけた
る雪の下に生ふらん 芍薬亭」の狂歌が記さ
れる。



173 雪中二美人 (すみだ北斎美術館：@HokusaiMuseum より)

※本図は三枚続きの中央の図。左図は縁側の男女を描き、右図に傘をたたむ男を描いているという（『ピーターモース・コレクション北斎図録』による）。

●摺物「佃住吉の図」（色摺。先ノ宗理北斎画）

※図中に「申の春」とある。「●時之相場」と書かれた札が下がっている。

●摺物「門前の往来」（大奉書全紙の半切判。色摺。先ノ宗理北斎画。東京国立博物館蔵）

※長唄の秋の発表会の案内。図は、松の木のある寺社の門前で、揚帽子を被り傘を持つ女と、子どもの両手を持ってあやしている母親と目を合わせている。側には「富士」と染め抜いた風呂敷包を首から掛け、閉じた傘と土産物らしいものを持っている男がいる。



174 門前の往来 (東京国立博物館)

●摺物「絵馬堂」（3月。大奉書全紙の半切判。色摺。先ノ宗理北斎画。38.3×51.5 エドアルド・キオッツオーネ記念ジェノヴァ東洋美術館蔵）

※深川八幡宮か。錦屋喜三郎主催の、深川芸者を中心とした長唄の会の案内状。上半分に、松の老木のある絵間堂見物の男二人、女二人と子ども一人を描く。子どもは女の後ろにすがりついている。堂の上には大黒点の絵馬、梅の木の絵馬、牛車の絵馬などが掲げられている。



175 絵馬堂 (ジェノヴァ東洋美術館)

下半分に、錦屋喜三郎主催、三番叟の番組が逆さに記される。

●摺物「松風台七賢之内」（1月。〈杯を持つ女〉の前掛けに「庚申」（寛政12年）を示す書き入れがある。小判縦色摺。北斎画。21.5×8.5 すみだ北斎美術館ピーターモース・コレ

シヨン蔵)

※朱楽菅江側の判者鶴立亭々(松風台亭々)一門による歳旦物。七人の美人を竹林の七賢人に見立てる。『原色浮世絵大事典』8巻(大修館書店)では、『北斎漫画』十編に竹林の七賢人があるので、それとの近似により誰に見立てたか推定できているとしている。

『伝記画集 北斎』(リチャード・レイン)では全8図とする(p305)。

図右より、

☆〈杯を持つ女〉(阮咸)杯を持って立っている女。前掛けに「庚申」と描かれている。

☆〈文を隠す女〉(阮籍)揚げ帽子を被った娘が手紙を背に隠して立っている。

☆〈本を頭に立てる女〉(山濤)振袖の娘が右手で本を頭の上に持ち上げて立っている。

☆〈文を読む女〉(向秀)手拭いを被り、端を銜えて巻紙の手紙を立ちながら読んでいる。

☆〈羽織を畳む女〉(不明)立兵庫のような髷に櫛と簪を一本挿した女が、白地に模様のある羽織の襟を銜え、両手を広げて立ちながら畳もうとしている(立命館大学蔵)。

☆〈本を持つ女〉(嵇康)

☆〈箒を持つ女〉(不明)箒を持って、左手を簪に手をやりながら、少し前屈みに立っている。

●摺物「遊亀図」(春。「亀の図」「遊亀と水に映す梅」とも。大奉書色摺。半切判。東陽北斎画。印三徑。画部分 19.1×51.2 全体 38.2×51.2 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※四匹の亀が重なって甲羅干しをしている。右にはこれから陸に上がろうとしている一匹



の亀。水面には梅の花が咲く木が映っている。下半分は折り返す仕様で、狂歌が逆書きとなっている。狂歌部分の末尾に「庚申春」とある。

176 遊亀図(太田記念美術館：blog.goo.net.jpより転載)

●摺物「扇屋店先」(狂歌。色摺。先ノ宗理北斎画。14.1×28.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※鹿津部真顔率いる四方側の春興摺物。巻頭の狂歌の中に「さるのとし玉」(寛政12年)とある。図は、扇屋の店先で店の女が、骨に挿す前の折った扇の地紙を持っている。その脇には、折る前の地紙を入れる黒い扇型の箱が置いてある。客の女が小上がりに腰を下ろして、それを見ている様子を描く。店先の神棚の下にある大きな看板には、狂歌の四方側の紋である「扇巴」が描かれている。

●摺物「海辺の社前」(大奉書全紙の半切判。色摺。先ノ宗理北斎。19.2×52.4 東京国立博物館蔵)

※享和元年～文化2年に再摺される。再摺版では「先ノ宗理」が削られ、男が担ぐ風呂敷

包の模様が、桐から桜草に変えられて、^{とみもとぶし}富本節の演奏会案内となっている（日本経済新聞社 2005『北斎展図録』より）。

※深川芸者の舞踏上演番組を記したもの。図は、海辺の社前で煙管を使いながら歩く二人の芸者と、風呂敷の荷物を棒に結んで担ぐ男がいる。その前には釣



竿を持った二人の子どもが描かれる。

177 海辺の社前（東京国立博物館）

●摺物「^め目かくし」（すみだ北斎美術館蔵）

●摺物「^{しんしゅん}新春の手習い」（13.5×18.6 宗理画 摺物色摺 すみだ北斎美術館蔵）

●摺物「^{はりしごと}針仕事」（1月。「^{にんぎょう}人形を縫う美人」とも。十二切判色摺。先ノ宗理北斎画。18.7×10.0 日本浮世絵博物館蔵）

※正月を迎え、面長の女が、何かの玩具を縫う様子。右手に持った針に髪油をつけようとしている。「^{あけ}明ぬれハ ^ははや縫そめの ^{はりしごと}針仕事 ^さても手まめに ^{さる}申の初春 ^{りゅうちどう}龍致堂 ^{はかまのうらなり}袴裏成」の狂歌が記される。

●摺物「^{さんぼう}三方と^{とら}屠蘇を持つ二人の^{かみむすめ}官女」（狂歌。先ノ宗理北斎画。13.7×18.6 島根県立美術館：永田コレクション蔵）※「^{さる}申ノ春」とある。千穂亭の狂歌が記される。

●摺物「^{おんなかたな}女刀鍛冶」（狂歌。先ノ宗理北斎画。12.8×17.4 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※「^{さる}申のとし」とある。水亭行也ほかの狂歌が記される。

【以下寛政年間】

<p>勝川春朗、^{ししき}紫色鴈高（^{いんごう}隠号）、春朗、勝春朗、宗理、北斎宗理、^{むらさき}叢春朗、不染居北斎、^{とうりやう}東陽北斎、北斎、^{かこう}可候、百林宗理、俵屋宗理、宗理改北斎、^{がきやうじん}画狂人北斎、^{ほくさ}ほくさみうつす、先ノ宗理北斎、宗理改北斎辰政、^{いん}辰、政、完知、完、知、師造化、北斎、宗理、^{ひばくりん}百林、^{がきやうじん}画狂人、^{さんけい}三径、辰政、花押、</p>

●艶本『^{えほん}絵本 ^{はる}春の色』（寛政4年～6年〈1792～94〉。勝川春朗画）〈リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p 337による〉

※『絵入春画艶本目録』（白倉敬彦著、平凡社 平成11年：2007）には記載なし。

●艶本『^{えほん}會本 ^{いろ}色の嫩』（寛政5年～9年〈1793～97〉。^{ししき}紫色鴈高^{ちゆう}注画）〈リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p 337による〉

注) ^{ししき}紫色鴈高：北斎の隠号。

※『絵入春画艶本目録』（白倉敬彦著、平凡社 平成11年：2007）には記載なし。

●狂歌絵本『^{かけあい}掛合狂歌問答』（寛政4年～6年〈1792～94〉。小本。勝川春朗画。版元不明）

※一首の狂歌の中で江戸と京都が争い、そこに風俗画を添えるというもの（2010/1/23～3/8 西尾市：岩瀬文庫平成悉皆調査中間報告展7『こんな本があった7』特別講座「今年度の調査から分かったこと」塩村耕氏：名古屋大学大学院教授/岩瀬文庫資料調査会会長による）。

●錦絵「風流江戸百日の出」（寛政元年～2年〈1789～90〉。縦中判。揃物か。春朗画。57.0×46.0 中右コレクション/ベルギー王立美術館蔵）



※「百」と題しているが〈愛宕〉1点のみ確認されている。

178「江戸百日の出」愛宕（ベルギー王立美術館）

●狂歌絵本『題名不明』（寛政9年～10年〈1797～98〉。宗理画）享和3年（1803）正月、三代宗理の作とも）



☆〈太郎月〉のみ確認。着色。折烏帽子を被り扇子を持ち、長袴の衣裳を着て踊る男と、蛇の目傘をかざし、足を上げて踊る男の万歳図（『リチャード・レイン伝記画集 北斎』による）。

●画帖「逢見八契画帖」（寛政5～7〈1793～95〉。絹本着色1帖。13.1×19.5 無款）

●相撲絵「高根山与一右エ門 千田川吉五郎」（寛政2年～5年〈1790～93〉。細版。春朗画。版元未詳。メトロポリタン美術館蔵）

179 高根山与一右エ門 千田川吉五郎（メトロポリタン美術館）

図は、高根山が千田川の右肩から腕を回し、左手で千田川の右手首を握り、千田川は左上手を取っている。

●相撲絵「花頂山五郎吉 和田ヶ原甚四郎」（寛政2年～5年〈1790～93〉。細判。『在外秘宝 葛飾北斎』所収「葛飾北斎作品目録」ピーター・モース編による。制作年は筆者の推測）

●相撲絵「雷電為右衛門 盤井川逸八」（寛政2年～6年〈1790～94〉。細判。『在外秘宝 葛飾北斎』所収「葛飾北斎作品目録」ピーター・モース編による。制作年は筆者の推測）

●錦絵「武田二十四将画尽新版」（寛政2年～4年〈1790～92〉。間版。春朗画。葛谷重三郎版。32.2×21.2 エト・アルト・キオツォーネ記念ジェノヴァ東洋美術館蔵）

※一枚絵を分割して24将を収める。

〈秋山伯耆守〉 〈穴山梅雪〉 〈真田源太左エ門〉 〈曾根下野〉 〈原隼人〉 〈法性院信玄〉
 〈武田勝頼〉 〈武田道遠軒〉 〈高坂弾正〉 〈穴山梅雪〉 〈馬場美濃守〉 〈土屋右衛門〉
 〈山縣三郎兵衛〉 〈三坂勘解由〉 〈内藤修理〉 〈多田淡路守〉 〈武藤喜兵衛〉 〈甘利左衛門〉
 〈真田兵部〉 〈小山田兵部尉〉 〈横田備中守〉 〈原美濃守〉 〈小畑山城入道〉
 〈山本勘助入道〉（順不同）

●錦絵『仁和嘉狂言注』（寛政2年～4年〈1790～92〉。「吉原仁和嘉」とも。縦中判揃物。16図が確認されている。春朗画。葛谷重三郎版。各約21.5×15.3

注) 俄狂言は、吉原の廓内で八月に九郎助稲荷の祭礼として、芸者や遊妓などが様々な狂言を披露しながら練り歩く。この日は花代を割増にする。

☆〈正月 禿万歳〉(すみだ北斎美術館/ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※烏帽子を被って踊る二人。禿は片足を上げて鼓を打っている。

180 正月 禿万歳(すみだ北斎美術館)



☆〈二月 ゑま売の所作〉(すみだ北斎美術館:ピーターモースコレクション/ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※三人の若衆が扇子を持って踊るような所作をしている。

181 二月 ゑま売の所作(すみだ北斎美術館)



☆〈三月 赤坂やつこぎやうれつ〉

(島根県立美術館:永田コレクション/ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※刀を差した奴と小奴が、人形の男が担いでいる花飾りをした駕籠を手で支えて行列している。それに付き添うように揚帽子(角隠し)を被った女が二人歩いている。

182 三月 赤坂やつこぎやうれつ(すみだ北斎美術館)



☆〈三月 万度 ひな道具〉(島根県立美術館/ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※万度祓注の祓串を立てて支える頬かむりの男と四人の男たちが揃って立っている。

注) 万度祓:中臣の祓の詞を神前で何度も読み、汚れを祓い清める神事。祓をした串を神職などが家々に配り歩いた。

☆〈三月 花すまふ うつくしきしゅこう〉(すみだ北斎美術館/島根県立美術館:永田コレクション/ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※三人の芸者が花の枝を持って、足を上げて踊っている。

183 三月花すまふ(島根県立美術館)



☆〈四月 しゃかたんじやう〉(すみだ北斎美術館/ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※釈迦の誕生。

☆〈五月の部 三番叟の所作立て〉

(島根県立美術館蔵:永田コレクション/ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※三番叟を踊る三人の男。三番叟の日の丸の付いた烏帽子を被る中央の男が、立って見栄を切っている。

184 五月の部 三番叟の所作立て(島根県立美術館)



☆〈五月 花笠踊〉(島根県立美術館:永田コレクション蔵)

☆〈五月の部 すゞめおどり〉（島根県立美術館：永田コレクション/ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※三人の芸者が長い花束を肩に担ぎ、花笠を被って踊っている。〈五月 花笠踊〉と同一作品とする見方もある（『ピーター・モース・コレクション北斎図録』による）。

☆〈六月 御こしあらひ〉（ボストン美術館蔵）

※丸杵に三の字が書かれた荷物箱を支える天秤棒に両腕を掛けて顎を乗せている男、天秤の左の桶に手を掛け、傘を閉じて持っている男、その後ろで天秤棒を担いでいる男、更に手拭を下げて持っている男などが描かれる。

☆〈七月 盆おどり きれいなり〉（島根県立美術館/ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※四人が鈴輪を持って踊っている。

☆〈八月 びくに〉（島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※一文字笠を被った比丘尼の女二人と三味線を弾く女。その間に柄杓を持つ寄進集めの子ども。



☆〈八月 しゝのきやり 大いさミ〉（すみだ北斎美術館/ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※獅子頭を扱う五人の遊女。半天の背には「俄」の文字が染められている。

185 八月 しゝのきやり 大いさミ（すみだ北斎美術館）

☆〈九月 じどうのおどりやたい〉（島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館/ベルギー王立美術歴史博物館蔵）



※菊の花が飾られている舞台で、袴をつけた若衆姿の男が蠟燭を立てた燭台を持ち、その前で足を挙げて踊る子ども。菊慈童を描く。おどり「慈童の やたい きれいきれい 長うた、萩江藤四郎、藤八」の書込みがある。長唄の案内となっている

186 九月 じどうのおどりやたい（島根県立美術館）

☆〈同 秋のこま〉（すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※遊女五人が秋の農作業姿で働いている。二人は麦や大豆などを脱穀する唐棹を操っている。側に馬が繋がれ顔を覗かせている。

☆〈十二月 もちつき〉（ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

●錦絵「俳諧おた巻」（寛政元～2年〈1789～90〉。縦中判着色。春朗画。蔦屋重三郎版）

※題名は、元禄4年(1691)『俳諧をだまき綱目大成』（溝口竹亭著。俳諧連句の解説書。早稲田大学図書館蔵）からのものという。

☆〈植物の部〉（21.3×15.2 すみだ北斎美術館蔵）

※片膝をついて長い髪を梳る女。その側に立って着物を着ようとして紐を持っている女。朝の身支度をする二人の女。

☆〈生類の部〉（21.3×15.8 島根県立美術館：永田コレクション蔵）※洗濯ものを干す婦人と、縁台に腰掛けながらそれを見る婦人と子ども。

【以下三作は揃物か】

●武者絵「梶原源太景季」（寛政3年～5年〈1791～93〉）。中判色摺。春朗画。蔦屋重三郎版。20.5×15.0 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※梶原源太景季は、平安末期～鎌倉初期の武将。源頼朝に従って、治承・寿永の乱で活躍した。図は、能「箴の梅」に取材。寿永3年（1184）、生田の森での源平の戦いで、景季が梅の枝を箴（矢を入れる具）に差して戦った故事によるもの。兜を脱ぎ、ざんばら髪で刀を振りあげる鎧姿の景季の背後には梅の木が描かれる。



●武者絵「朝比奈三郎 平ノ義秀」（寛政3年～5年〈1791～1793〉）。中判色摺。春朗画。蔦屋重三郎版。20.6×15.4 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※「蔦重新板」と書かれた酒の菰樽に両肘をかけ、隈どりの顔をして大煙管を銜えた三郎と、その側にいる青鬼の図。朝比奈三郎は、鎌倉時代初期の武将。



188 朝比奈三郎 平ノ義秀（島根県立美術館）

●武者絵「能登守教経勇力」（寛政3年～5年〈1791～93〉）。中判色摺。春朗画。蔦屋重三郎版。アダチ伝統木版画保存財団蔵）

※船の上で、鎧姿の教経が二人の武者を抱え込んでいる図。

●柱絵「瀧を潜る虎」（寛政元年～5年〈1789～93〉）。柱絵判色摺。勝春朗画。ホノルル美術館蔵）

※瀧水を浴びながら正面を見据える虎の図。



●錦絵「金太郎に鷲と熊」（寛政元年～4年〈1789～92〉）。大判。春朗画。西村屋与八版 37.1×25.0 ベルリン東洋美術館/太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※左手で熊の首を押さえつけ、右手で鷲の足を文字通り鷲づかみにしている図。

189 金太郎に鷲と熊（太田記念美術館）

【春朗期の最も早い肉筆画か】

●肉筆画「婦女風俗図」（寛政4年～6年〈1792～94〉）。紙本着色二幅。無款。右：107.0×52.8 左：107.1×52.6 島根県立美術館蔵）

※各一面に4人ずつの婦女を描く。右幅図には、赤い着物の振袖

新造、白い着物で前帯の花魁、茶の着物で片膝を立えた町家の女房、黒の着物に赤と緑の襦袢見せて後ろ向きの女。

左幅図には、花柄の着物の御殿女中、横縞の着物の町家の女房、座っている茶と白の着物の娘二人が描かれる。

※「春朗」の款はないが、「鍾馗図」とともに春朗期の最も早い肉筆画（本画）と見られている。版下絵としての肉筆画は『風流東都方角』（天明5年～天明7年）がある。

190 婦女風俗図（島根県立美術館）



●錦絵「恵比寿と大黒の万歳図」（寛政5年～6年〈1793～94〉）。団扇絵。墨摺。叢春朗画。伊場屋仙三郎版。次期「宗理」を想起させる画風といわれる。東京国立博物館蔵

※正月の注連飾りの下がる前で、恵比寿が扇を口に当て、桐の模様の上掛けを着て足を上げて踊る。その横で大黒天が、打ち出の小づちを鼓代わりに叩いて拍子を取っている。

「春風に雪も氷もとくわかの 御万歳にハ笑ふ山く 松風



友成」の狂歌が記される。191 恵比寿と大黒の万歳（東京国立博物館）

●錦絵「女見立八橋」（寛政7年～11年〈1795～99〉）。横長判。宗理画）

※烏帽子を被った花魁二人が板を渡した八橋に立っている。近くで烏帽子姿の振袖新造が、アヤメの咲く水辺に下りている。『伊勢物語』「八橋」の場面を見立てている。鈴木春信も「見立伊勢物語（八つ橋）」（明和4年頃：1767）を描いている。

●肉筆画「蛤売り図」（寛政9年～10年〈1797～98〉）。紙本縦長判着色一幅。北斎宗理画。印辰印政。94.3×27.9 すみだ北斎美術館蔵）

※平成31年（2019）4月24日「読売新聞」（朝刊）で、新たな肉筆画の発見が報じられた。すみだ北斎美術館が平成30年（2018）に画商から購入したもので、それ以前に保管されていた経緯については不明という。

192 蛤売り図（すみだ北斎美術館）



画題は画材からつけたものという。蛤を入れた笊を下げた棒手振り（はまぐり）が、笠を持ち腰蓑を付けた姿で杖をつき、立ちながら休んでいる図。

図上部に月が薄く描かれ、大田蜀山人の賛「蜷子かと思ひの外ほかの蛤はまぐりは げにぐりはまな思ひつき影」が記される。「ぐりはま」とは、貝合わせではまぐりの貝を使った遊びからできた言葉で、食い違うことやあてが外れることをいい、「蜷かと思つたら蛤はまぐりだなんて、まさに〈ぐりはま〉と、思いついたよ」の意だと「北斎のなりわい大図鑑」展(2019年4月23日～6月9日 すみだ北斎美術館)で説明している。なおこの賛は、享和元年(1801)に大田南畝が大阪で蜀山人しよくさんじんを名乗り、翌2年4月に江戸に帰っているところから、享和2年以降の着賛と推測されるところとしている。

また、文化7年(1810)頃の南畝の狂歌集『あやめくさ』にある記述には「月のもとにて蜷子和尚けんすおしょうがはまぐりすくふかたかきたるに 蜷子かと思ひの外ほかのはまぐりは げにぐりはまに思ひつき影」とあり、月が描かれる点で一致しているところから、本図は、唐(618～907)末の禅僧・蜷子和尚からのモチーフを示唆しているとされる。蜷子和尚は、居所を定めず常に同じ法衣をまとい、川辺で海老や蜷をとって食べたという。

「本図は表具を修復していますが、修復前の表具の題簽には「蜷売り」との記載があり、こでまで「蜷売り」と思われてきたことが分ります。しかし、絵の描写からは北斎は「蛤売り」として描いたと推測されます」(「北斎のなりわい大図鑑」展説明)と説明されている。蜷は黒だが本図では白っぽく大きいのもその根拠としている。

●肉筆画「花魁と禿」(寛政7年～11年〈1795～99〉)。紙本着色一幅。宗理画。印宗理。85.7×33.0 ポストン美術館：ウリアム・スタージス・ビゲロー・コレクション蔵)

※典型的な宗理型美人像。細身で体をくねらせ首をかしげる花魁と、その後ろにつき添う二人の禿の図。花魁の着る打掛は、表面に飾り糸が無数に仕付けられ、前帯も黒地に縦線が強調されたものになっている。背景は黄色で塗りつぶされ、佩香園蘭丸(生没年不詳)の狂歌が添えられる。

193 花魁と禿 (ポストン美術館)



●錦絵「四つ手網漁をながめる美人図」(寛政7年～11年〈1795～99〉)か。宗理画。25.0×38.4 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

●巻物「鎌倉勝景図巻」(寛政5年～6年〈1793～94〉)。絵半切注。木版着色紙本一卷。叢春朗画。21.0×893.0 島根県立美術館：永田コレクション)

注) 絵半切：奉書を横に二つ切りにした横長のもの。本図は、約9mの長さには紙をつないだもの。厚手の奉書に、俳書の点取り用に描かれたものとされる、
 ※杉田(現在の横浜市磯子区)から鎌倉を経て江ノ島までの30図を巻物で描く。「文字や絵の描線部分は、後に墨で文字が描き込まれることを考慮して藍摺になるが、北尾蕙斎政美(鋏形溪齋)の『江戸名所図会』と同じく筆彩色が施され、黄、茶、緑、紅色が用いられている」と解説される(2019年『新北斎展図録』p48)。

巻末に、松濤庵の漢文の序文が記され、朱色の丸枠の中に画工叢春朗 彫工山口東川と

記されている。同図録によれば、杉田・六浦・切通・文学屋敷・土牢・大町村・いも神・北條屋敷・鷺塔・光明寺・大助城地・横手原・建長寺・阿仏屋敷・化粧坂・円学寺・新井・稲瀬川・松岡・人丸姫塔・大仏・虚空蔵・星井・見越嶽・長谷町・長谷寺・稲村崎・片瀬・七里浜・江嶋の順に流れるように描かれる。



194 「鎌倉勝景図巻」 大仏：部分(島根県立美術館)

●肉筆画「若衆図」(寛政7年～9年〈1795～97〉)。縦長紙本着色一幅。50.8×21.1 宗理画。印完知。フリーア美術館蔵)

※墨画に淡彩を施した画。傘を持ち、鹿の子絞りの着物に墨で描かれた羽織と黒下駄の姿で横を向いて立つ若衆。髪は、たぼが突き出し、後ろ髪を結んで突き出した若衆髷の変形と思われる。賛があったという。

●肉筆画「巻物の亀」(寛政8年～9年〈1796～97〉)。紙本墨絵風着色一幅。北斎宗理画。印師造化。32.4×22.8 北斎館蔵)

※巻物に乗りかかる亀の図。巻物の紐の朱色、巻物の裏側の薄い青以外は墨の濃淡で描く。

●肉筆画「寿亀図」(寛政8年～9年〈1796～97〉)。紙本墨絵風着色一幅。北斎宗理画。95.0×27.4 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※北斎館蔵「巻物の亀」と同画趣。巻物に乗りかかる房の尾の瑞亀が吐く息の先に「寿」の字が霧のように描かれる。不断七持の賛「万代の亀の口からふく禄寿 みつそろひつる家そめでたき」が記される。

●肉筆画「娘図」(寛政7～11年〈1795～99〉)。紙本着色一幅。宗理画。印完知 24.5×39.8 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※横判いっぱいはこちらがわに寝そべって左足を投げ出し、右肘を突いて顔を左に向けてくつろぐ娘の図。195 娘図 (島根県立美術館)



●肉筆画「文福茶釜図」(寛政7年～10年〈1795～98〉)。紙本淡彩一幅。宗理画。印北斎印宗理 89.7×27.1 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※茂林寺(現群馬県館林市掘工町1570)の老僧守鶴の愛用の茶釜の湯がなくならないことを不思議に思った住職に、守鶴は実は狸であったことを見破られ、寺から逃げたという伝説に由来する。

図は、狸が墨染の法衣を着て、湯気の立った茶釜の前に立っている様子を描く。全体に墨画風な描き方。四方真顔の賛「しもつけの国とかやいとけふかく 茂りたる林しのうち

に一ツ乃 宝物有是をのほすも自在にしてまたちゝむるも自在●●
 嗚呼奇なる哉妙なるかな 文福の茶釜にはよき かなけありもとか
 狸の金ヅてつくれハ」がある。 196 文福茶釜図（島根県立美術館）

●錦絵「梅見の官女」（寛政 7 年～享和 1 年〈1795～1801〉。横
 長判。北斎宗理画。13.9×28.4 東京国立博物館蔵）

※柵に囲まれた梅の老木の脇で、娘が指差す方向に二人の官女が目
 を向けている。官女の着物の長い裾元には仕丁（雑役の男）が二人
 平伏している。

●錦絵「夜の往来図」（寛政 7 年～10 年〈1795～98〉か。北斎宗
 理画 29.5×13.6）

※図の右から、大きな魚を風呂敷からはみ出して持つ女、手拭の端
 を口に銜え、風呂敷包みを小脇に抱える女、手拭を被り芥子房の髪
 をした赤子を背負う母親、縁台の木杵を担ぐ頬かむりの職人、
 長半纏を着て手拭を頭から顎に結んだ若衆、烏帽子を被り、刀をさ
 して大きな鈴を首からぶら下げ、「歳越」書かれた長提灯を持ち下
 駄を履いた男、山形の下に三の字が描かれた提灯を持ち、飲物を入
 れた箱を持つ男、帽子を被って正月飾りの枝を持って、向こうむき
 に歩く狂歌師らしき男、袋を肩にして「貸餅通」と書かれた帳面を
 持ち、「春」と書かれた提灯を下げて行く男等が描かれる。

●扇面画「寿の字を書く布袋図」（寛政 7 年～10 年〈1795～98〉。紙本扇面一面墨、一
 部着色。北斎宗理画。印百林。22.0×47.8 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※扇の右半分に、布袋が筆を持って、紙に「寿」の字を書いている図。筆と硯台と落款の
 印のみ朱色が施される。「寿」と書いた紙には小さく「北斎宗理画」と書かれ朱印が記さ
 れている。

印は判読が困難。2019 年『新北斎展図録』では「百琳」としてい
 るが、北斎が用いた印は「王」偏がない「百林」が認められる。

画面左が空いているのは、後に賛を入れるためと思われる。扇面画
 （扇に描く絵）としては最も早い時期のものとされている。北斎は数種
 の「布袋図」を描いている。

●肉筆画「芋茄子と赤蜻蛉図」（寛政 8 年～文化 10 年〈1796～
 1813〉北斎画。印辰印政 サミュエル・ビンガ・コレクション）

※元は画帖の一図。

●肉筆画「糸繰りの母と子図」（「絹を紡ぐ女図」とも。寛政 7 年
 ～10 年〈1795～98〉。絹本着色一幅。北斎宗理画。印不明 印不明
 85.1×31.1 メトロポリタン美術館蔵）

197 糸繰りの母と子図（メトロポリタン美術館）



※椅子に腰掛け、手回しの絹の紡ぎ機を回す手拭を被る女。足元には土釜があり、繭を煮ている。赤い着物を羽織る子どもが釜の焚口の前にしゃがんで小枝をくべている。空にはほととぎすが三羽飛んでいる。

●扇面図「梅樹図」（寛政 8 年～10 年〈1796～98〉）。紙本墨絵淡彩。扇面一面。宗理画。印北斎印宗理。上弦 46.2、下弦 21.3×17.3 フリーア美術館蔵

※扇面右下から上部中央へ伸びる白梅咲く幹を描き、下に落款を記す。扇面左に鴻台彭卿の漢句の賛が記される。「北斎」「宗理」と印が並ぶのは寛政 9 年（1797）頃か。

●肉筆画「花魁図」（「花魁道中図」とも。寛政 11 年～12 年〈1798～1800〉）。紙本着色一幅。不染居北斎画。印画狂人。156.0×53.5 中右コレクション蔵

※寛政 8 年の「花魁図立姿図」同様、横向きの花魁図は北斎の得意とするところ。横兵庫の髷を結った花魁が桶形提灯の側に立って何かを見ている図。狂歌が添えられる。打掛の裾に「寿」「福」の字。



198 花魁図（中右コレクション）

※寛政 10 年頃の「風俗三美人図」（三幅対、北斎画。印辰政）の右幅図も殆ど同じ画趣。

●肉筆画「京伝賛遊女図」（紙本着色一幅。寛政 10 年～12 年〈1798～1800〉無款。132.0×49.6 シゴゴ・ウエストン・コレクション蔵）

※上記「花魁図」とよく似た画趣。違いは落款の有無、前帯の模様、提灯の模様と数ぐらい。二つの桶形提灯の側に立って何かを見ている図。山東京伝の狂歌が添えられる。

199 京伝賛遊女図（ウエストン・コレクション）



●肉筆画「小野小町図」（寛政 10 年～享和元年〈1798～1801〉）。紙本着色一幅。北斎画。印辰政。110.0×38.1 島根県立美術館：永田コレクション蔵

※十二単姿の小野小町が憂い顔で立って上空を見ている。図の上部には貞松の賛が書かれ、墨絵風に山に咲く桜が淡く描かれる。貞松の讚。

200 小野小町図（島根県立美術館）

●肉筆画「人を待つ美人図」（「くつろぐ芸妓」とも。寛政 10 年～享和元〈1798～1801〉）。紙本着色一幅。北斎画。印辰政。39.0×48.8 島根県立美術館：永田コレクション

※白寿坊（1741～1817）の画賛に「弾き飽きて 月よりも人待宵か」とあるところからの画題。左膝を立てて扇子を持って、左手をついてい





る芸妓の前には、三味線と詞書きがある。夏の宵の趣。

201 人を待つ美人図（島根県立美術館）

●肉筆画「芭蕉図」（寛政 10 年～12 年〈1798～1800〉。享和年間説あり。紙本一幅着色。北斎画。印三径。31.2×47.6 林原美術館蔵）※芭蕉の葉の表裏を墨の濃淡で描き分け、その間から薄い朱色の花が覗く。鹿津部真顔賛「世の中をさらり

とさけしはせを葉は 音つるゝ風にこたえたにせず」の狂歌が記される。

●屏風絵「鍋冠祭図」（「御祓い図屏風」「鍋祭」「筑摩祭」とも。寛政 12 年～享和元年〈1800～01〉。紙本着色金彩。二曲屏風一隻。東陽北斎画 印画狂人 166.5×162.5 フリーア美術館蔵）

202 鍋冠祭り図（フリーア美術館：綴プロジェクト複製）

※頭に土鍋を乗せた三人の女と、その前で狩衣・烏帽子姿の神主が、大幣でお祓いをしている。女の一人は腕白小僧を連れ、子は嫌がって



母の手を引っ張っている。不

妊症を含む病気の御祓いの図。土鍋の数は、前年に関係を持った男の数という。図左の巨木は、苔が緑青の点描で描かれ。墨で枠どりという狩野派の特徴が出ているという。日本三大奇祭の一といわれる筑摩神社（滋賀県米原市朝妻筑摩 1987）の祭。

●肉筆画「大仏詣図」（「大仏殿図」とも。寛政 10 年～享和元年〈1798～1801〉。紙本着色一幅。北斎画。印辰政。118.5×26.4 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※御堂の下は霞がかって見えないほど、超縦長版を生かした空間構成になっている。京都方広寺の窓から覗く大仏の顔を下から見上げる二人の参詣人を描いている。ただし、方広寺は寛政 10 年（1798）にすでに焼

失している。絵の上下に香花園（大田蜀山人）賛が書き込まれている。

203 大仏詣図（島根県立美術館）

●肉筆画「門付芸人図」（寛政 10 年～享和元年〈1798～1801〉。縦長紙本着色一幅。無款。フリーア美術館蔵）

※門松の前を門付の二人。折烏帽子を被る男



が扇子を持っている。同じく折烏帽子の子どもが小鼓を持って風呂敷包みを背負っている。ついで来た犬が子どもを見上げ、子どもも犬を見ている。北斎門人の作という見方もある。

●肉筆画「潮干狩図」(舳先の下の子どもと亀判) (寛政 12 年～享和 1 年 (1800～01)。絹本着色一幅。画狂人北斎。印辰印政。個人蔵)

※裾をはしょって箆を持って立つ女。舟の舳先の下で亀と遊ぶ子ども。箆で貝を掬う女。箆を持って指さす女。図左では禪姿の男が二人箆で貝を漁っている。北斎は文化年間等にもいくつかの「潮干狩図」を描いている。この頃の摺物にも「汐干狩図」(しがみつく子ども判)がある。



204「潮干狩図」(舳先の下の子どもと亀判)

●摺物「汐干狩図」(しがみつく子ども判) (寛政 7 年～10 年 (1795～1798)。半切判。摺物。北斎宗理画。19.2×45.0 全紙版 35.5×49.0 島根県立美術館：永田コレクション/東京国立博物館/日本浮世絵博物館/ヴィクトリア・アルバート博物館蔵)

※遠くに貝を漁る人々。その手前で箆を持ち貝を獲る男と女二人。その手前に箆を持って別の場所に行く母親の腰にしがみつく子どもがいる。その側にしゃがんで子どもを見ている女がいる。遠くに富士山が描かれる。図の右に屋根の連なりが見え、品川近辺の潮干狩とされる。



205「汐干狩図」(半切判) しがみつく子ども版 (国立博物館所蔵品統合検索システム)

全紙判は下半分に、藤間流の舞踊発表会次第が逆さに記される。大坂市立美術館蔵の「潮干狩図」(重文)とほぼ同じ構図で、重要文化財の絵(文化 4 年～7 年)より 10 年ぐらい前の作ではないかと見られている(『秘蔵浮世絵大観四』所収解説(永田生慈) p 254)。大久保純一『北斎』(岩波新書。2012 年)では寛政後期(1789～1801)としている(p 52)。

東京国立博物館蔵の作品は「北斎」名が消されて「宗理画」となっている。

●錦絵「浮絵忠臣蔵」(寛政 10 年～享和 3 年 (1798～1803)。小判 11 枚揃。可候画。伊勢屋利兵衛版)

※織田一磨『北斎』(p 68)による。

●錦絵「新板浮絵両国橋夕涼夜見世之図」(寛政 8 年～文化 15 (1796～1818)。大横判錦絵。絵師北斎画。伊勢屋利兵衛版。日本浮世絵博物館蔵)

※天明 8 年～9 年(1788～89)に「新板浮絵両国橋夕涼花火見物之図」(勝春朗画 西村屋版)があり、画趣もほぼ同じで、「北斎」期に新板浮絵を描いていることに、今後検討

を要する。図は、右端に縦書きで「新板浮絵両国橋夕涼夜見世之図 絵師北斎画 版元の商標 下谷池ノ端仲町伊勢屋利兵衛板」と書かれる。右上に「両国橋」、左上に「両国広小路」、左下に「北斎画」と記される。隅田川西岸から東岸に架かる橋の上を多くの夕涼みの人々がいる。広小路の先には本所ほんじよ堅川かたがわの木場が見える。図の右上と左下にすやり霞が描かれる。⇒天明年間「新板浮絵両国橋夕涼花火見物之図」参照。

●錦絵「杜若」(寛政8年～9年〈1796～97〉)。半切判。北斎宗理画。17.3×48.7 日本浮世絵博物館蔵)

※朱塗りの角盆に杜若の束が横に置かれている図。元は全紙判で下半分に文字が書かれていたものか。

●錦絵「小間物売りと貴婦人」(寛政12年～文化5年〈1800～1808〉)。横長判。画狂人北斎画)

※屋敷の庭先の縁側に小間物と染め抜かれた大風呂敷に包まれた重ね箱を置き、縁側に立っている女に品物を勧めている行商人の男。部屋の奥では貴婦人と仕えの女二人が手にした品物を眺めている。

【津和野藩伝来摺物】

※2019年1月17日～3月24日まで開催された「新北斎展」(東京：森ギャラリー)で永田生慈コレクション「津和野藩伝来摺物」(島根県立美術館：永田コレクション蔵)が初めて公開された。

「津和野藩伝来摺物について」(岩切友里子『新北斎展図録』p301)によると、津和野藩主の亀井家には多数の摺物が年代ごとに帖装され寛政9年(1797)「観美集」としてまとめられた。その内、北斎の摺物も寛政9年(1797)のものが最も多い。その後1点ごとに切り離され、この内の北斎の作品が永田コレクションに収蔵されたという。津和野藩に多くの摺物が所蔵された経緯は不詳。北斎以外の摺物(26図)は省略した。

寛政元年(1789)～12年(1800)にわたり描かれた着色摺物。ほとんどは小判である。画題及び表記は永田生慈によるもの。ただし、「」の付いた表題は原画に記されているもの。詳細の図は、『新北斎展図録』(2019 森ミュージアム)を参照されたい。

本稿では制作年に幅があるが、便宜上寛政9年の項に記載する。

☆〈表紙〉「観美集」と題僉された脇に「寛政九年」「摺物帖込畧壺百九拾八枚」と表記されている。

☆〈十六むさしで遊ぶ子ども〉春朗画。絵暦。色摺。寛政元年(1789)12.8×9.0

※十六むさしは、親役と子役の二人が、三角形と正方形を組み合わせた盤の上に駒を置いて争う遊び。十六武蔵・十六六指とも表記するが、名称の由来は不明。図は、二人の子供が十六むさしの盤を前にして遊んでいる。盤上の駒に月の大小が示される。

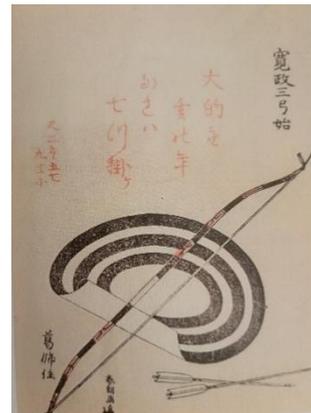
☆〈鷹狩〉〈犬を連れた鷹匠〉とも。春朗画。花押。絵暦。色摺。寛政2(1790)9.1×13.5

※二本差しの侍二人が鷹狩に行く様子。一人の肩に鷹がとまっている。一人は犬を連れていく。鷹を背負った男の頭巾に月の大小が示される。

☆〈「寛政三弓始」弓矢と的〉葛飾住 春朗画。花押。絵暦。色摺。寛政3年(1792)16.1×12.0

※寛政3年「弓に的」条を参照。書き込みの文字中に月の大小が示される。

206「寛政三弓始」弓矢と的



☆〈大筒図〉宗理写。印完知。絵暦。色摺。寛政7(1795)10.4×13.8

※寛政7年「大筒射図」条を参照。書き込みの文字中に月の大小が示される。

☆〈ざしき万ざいの大小〉宗理画。印完。絵暦。色摺。寛政7(1795)11.0×28.8

※図の右に、座敷の中、松の書かれた屏風の前で漫才師が一人、三つ葉葵の紋のある羽織を着て、扇子を掲げている。その前で男が鼓を持って立っている。図左に、「ざしき万ざいの大小」「床の大小」「中の丁の大小」と題した文が書かれ、月の大小を説明している。末尾に「寛政七 乙卯のはる」と書かれ、「落徳庵 小金厚丸作」と書かれた提灯が描かれる。

☆〈新年の子供の膳〉宗理画。狂歌。色摺。寛政8(1796)10.4×17.8

※吊るし棚にウラジロを敷いた上に鏡餅などの正月飾りが置かれ、その下で母親が芥子房髪の子供に箸を差し出して食べさせている。朱塗りの膳には椀や皿が置かれている。

☆〈大福茶〉百琳宗理画。印完知。狂歌。色摺。寛政8(1796)17.6×20.5

※大きな茶釜から椀に湯を受けて座っている女の横では、三方に松の小枝を挿したものを乗せて立っている女。大福茶は、一年の邪気を払い、新年を祝福して飲む茶を称している。遊々館長気、釣雪堂双鯉、森羅亭の狂歌が添えられる。

☆〈二階の欄干による遊女と客〉宗理画。狂歌。色摺。寛政8(1796)14.0×18.8

※民家の屋根を見下ろす妓楼の欄干から三人の遊女と、その間に居る小紋の羽織を着た客が指を挿して外の何かを見ている。禿もいる。

☆〈年礼〉宗理画。狂歌。色摺。寛政8(1796)15.3×17.8

※女主人と思われる女の前で、袴姿の男と女が手をついて新年の挨拶をしている。奥の座敷では二人の女が様子を見るように立っている。

☆〈碁盤人形〉宗理画。絵暦。色摺。寛政8(1796)13.2×8.8

※袴姿の人形遣いが、碁盤の上で花笠踊りの人形を両手で操っている。人形の帯に月の大小が示される。寛政8年条を参照。

☆〈富士に注連飾り〉宗理画。狂歌。色摺。寛政8(1796)10.3×13.8

※表題に「富士」とあるが富士は描かれない。注連縄にウラジロと伊勢海老が飾られ、松の葉の繁ったものが側に描かれる。登鯉亭湊島、森羅亭の狂歌が書かれる。

☆〈梅樹と円窓の文机〉宗理画。狂歌。色摺。寛政8(1796)13.5×25.1

※横に伸びた梅樹の枝の向こうに、庵室らしき部屋の円窓の前に置かれた赤い文机があり、

上に筆立てと硯、小さな盆栽が置かれている。図左に、秋田庵萬作、野邊春道、森羅亭らの狂歌が書かれる。

☆〈遊女の更衣〉宗理画。狂歌。色摺。寛政8(1796)10.3×19.0

※春の始め、白襦袢姿の花魁が立って春の着物を選んでいる。側で女が別の着物を持って手伝っている。部屋の奥には冬ものと思われる着物が掛かっており、その下では火の起された火鉢に湯缶(薬缶)が掛けられている。

☆〈書初めをする少女〉宗理画。狂歌。色摺。寛政8(1796)9.9×13.5

※注連飾りの下で、娘が書初めをしている。脇には大きな筆立てに入った数本の筆、背後には朱塗りの台に白紙の巻紙が三本乗せられている。菅原連の狂歌がある。

☆〈遊女の軸を掲げる福祿寿〉宗理画・鄰松画。色摺。寛政8(1796)12.9×8.1

※遊女の立ち姿を描いた掛け軸の背後から、福祿寿が大きな顔と身体を覗かせている。脇では、後ろから男が手で掛軸を支え持って顔を覗かせている。掛軸に小さな瑞亀が向かって歩いている。掛け軸を宗理が描き、それを持つ男と背後の福祿寿と瑞亀は鄰松が描く。図右に、「寛政八稔丙辰陽春旭堂羽欣」と書かれている。

☆〈正月の膳〉宗理画。絵暦・狂歌。色摺。寛政8(1796)10.8×18.9

※狂歌師の夫婦らしき二人が掛け軸を背にして膳の前に座っている。二人に下女らしき女が、正月料理の黒まめを皿に乗せて差し出している。庭には竹垣の梅が咲いている。掛け軸の文字中に月の大小が示される。如蘭、千穂庵の狂歌が書かれる。

☆〈龍宮城〉宗理画。絵暦・狂歌。色摺。寛政8(1796)10.9×18.5

※頭に魚の作り物に乗せている数人の眷族(従者)が、龍宮城の門前で向きあっている。右向きの眷族が小の月、左向きの眷族が大の月を示している。

☆〈かくれもない大小〉宗理画。絵暦・狂歌。色摺。寛政8(1796)12.0×17.0

※花魁に大きな傘を差し出す若衆。二人の衣裳に月の大小が隠れもなく示されている。絵暦は当時「大小」と呼ばれた。

☆〈鳥居前で子どもを抱く女性〉宗理画。絵暦。色摺。寛政8(1796)13.6×7.9

※本図は「鳥居下の娘と子ども」と題して本稿寛政8年条に記されている。子どもの着物に月の大小が示される。

207 鳥居下の娘と子ども

☆〈遊女と爺〉宗理画。狂歌。色摺。寛政8(1796)12.3×15.7

※横兵庫髷の花魁を横に侍らせ、胡坐をかきながら寛いでいる爺の前で、眼鏡を差し出す新造と思われる女。女の前に本が二冊置かれている。

☆〈芝居櫓〉宗理画。狂歌。色摺。寛政8(1796)13.2×17.9

※芝居を見にいくところか、角隠を被った娘と母親らしき女と供の小奴が、注連飾りを付けた芝居小屋の櫓の近くを歩いている。図左に「辰春」とある。



☆〈見立七福神〉宗理画。狂歌。色摺。寛政8(1796)13.7×17.9

※細竹の枝に鯛(恵比寿)がぶら下げられ、根元に打出の小槌(大黒)が置かれている。他に琵琶(弁財天)、巻物と筆(寿老人)、軍配(布袋)、宝塔(毘沙門天)、棒に付けた紐に結わえられた鶴の玩具(福祿寿)などが七福神に見立てて描かれる。常盤松門、四方歌壇(真顔)の狂歌が記される。

☆〈道を教える武士〉宗理画。絵暦。色摺。寛政8(1796)11.8×19.8

※本が置かれた文台の横で、座布団に座った袴の武士が、左手に眼鏡を持ち、右手で指を指して何かを説いている。その前で平伏している侍も指差す方に首を向けている。指差す先に説くべき文言が示され、その中に月の大小が示されている。

☆〈拳をする遊女〉宗理画。絵暦・狂歌。色摺。寛政8(1796)10.3×14.0

※縁側に立つ遊女と、部屋の中の女と、半開きの障子の間から拳遊びをしている。部屋の女の姿は影になっているが、手の先は障子の隙間から出ている。書き込みの文言に月の大小が示される。

☆〈房楊枝〉宗理画。絵暦・狂歌。色摺。寛政8(1796)12.3×16.1

※数本の房楊枝の房の部分が赤い楊枝入れの袋から出ている。房の部分は、白く空摺となっている。添えられた紙縫りに月の大小が記される。杉板赤實の狂歌が記される。

☆〈台に暦〉宗理画。絵暦・狂歌。色摺。寛政8(1796)11.7×14.9

※朱塗りの台に「寛政八丙辰年」と書かれた題僉のある折帖が置かれている。書き込みの文言に月の大小が示される。

☆〈「辰春 竹田口上」七福神の傀儡師〉宗理画。絵暦。色摺。寛政8(1796)14.7×17.2

※図中央に大きく書かれた大黒天に抱かれた寿老人と弁財天。その左に雲の乗った毘沙門天、右に、雲の上を行く龍頭船に乗っている福祿寿・恵比寿・布袋が描かれる。口上の文言に月の大小が示される。

☆〈富士詣の帰り〉宗理画。絵暦。色摺。寛政8(1796)13.7×9.0

※娘と母親と思われる二人と、富士詣の象徴の、竹の細竿に結わえた龍の飾り物を持った芥子房頭の子どもが立っている。子どもの着物に月の大小が書かれている。

☆〈からくり人形の書〉宗理画。絵暦・狂歌。色摺。寛政8(1796)10.2×18.3

※台の上で唐子の人形が大きな筆を持って、立ちながら紙に文字を書こうとしている。その前に袴姿の人形遣いが座り、閉じた扇子で人形を指し示しながら口上を述べている。口上に月の大小がしめされる。末尾に「辰のはる」とある。

☆〈見立三弁天〉北斎宗理画。狂歌。色摺。寛政9(1797)14.0×19.1

※横兵庫髷の花魁、麻呂眉の女、町家の娘の三人が座って向き合っている。麻呂眉の女の着物の裏地は朱塗りの桁のある屋敷の廊下が描かれている。松葉繁留、百川海成、門前市成、浅草庵の狂歌が記される。

☆〈「呉竹の七賢」〉北斎宗理画。狂歌。色摺。全紙判。寛政9(1797)37.8×51.1

※上半分に呉竹の林の前に立つ七人の狂歌師。図左から、向秀（一流斎太平時風）、嵇康（記都甘人改扇風芳）、劉伶（一嘗舍酢甘）、王戎（吾々軒薰也）、阮籍（岩田月守）、山擣（長閑舍春風）、阮咸（鳥夜亭月夜釜主）が描かれる。図下半分に各人の狂歌が反転して書かれ、末尾に「丁巳のとし 日新山人」とある。七賢人は、中国魏時代末期に、飲酒や清談（哲学的な話）をして交遊した七人の賢人をいう。

☆〈「呉竹の七賢」袋〉19.3×17.5 色摺。

※立てた巻物に「呉竹の七軒」の題簽が張られた図。

☆〈元禄の往来〉俵屋宗理画。俳諧 色摺。全紙判。寛政9（1797）41.8×56.2

※下半分に雪中庵完来主催の25名の俳諧が記される。図は、按摩、行商の男、扇子を掲げる脇差しの男。頭巾を被り杖をついた腰の曲がった老婆の子ども連れ、手拭いを被った二人連れの女、腰をかがめた奴、扇子を口元に当てた浪人風の男、深編笠の侍、背中に荷物を背負った男、肩に重ねた箱を担ぐ男などが描かれる。

☆〈海辺の梅に鶯〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9（1797）8.9×20.8

※海辺に枝を突きだして咲く梅の花。枝に鶯がとまっている。水平線には赤く朝日が頭を覗かせている。大樹庵と浅草庵の狂歌が書かれ「巳のはつ春」とある。

☆〈白梅〉北斎宗理画。印完印知。狂歌。色摺。寛政9頃（1797）21.1×7.8

※三本の幹に白梅が咲く。左の幹は途中で折り返すように下に伸びている。中の幹は真っ直ぐ上に伸び大きな花をつけている。右側の幹は細く伸びている。浅草庵市人の狂歌がある。

☆〈武蔵野の富士と筑波〉北斎宗理画。花押。俳諧。色摺。寛政9（1797）20.2×28.2

※図左に筑波山、図右に雪を抱く富士山が、いずれも薄く描かれる。図の手前には草花の咲く野原が広がる。

☆〈手妻〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9（1797）14.5×19.0 他図あり（13.7×18.0）。

※手妻は、手品のこと。富士を描いた赤い枠の衝立の前に座り、湯のみの中から蛇を出し、蛙を捕えさせようと操る手妻師。衝立の中に宗理画と書かれている。望月芦雁、清猷館倉光の狂歌が記される。図左に「寛政九巳秋」とある。

☆〈笠に若菜〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9（1797）12.7×17.3

※若菜の上に裏返された笠。その中の、赤い当て布と赤い紐が描かれる。一日庵、四方歌壇の狂歌が記される。図左に「丁巳首春」とある。首春は、初春の意。

☆〈初日の出を眺める貴人〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9（1797）9.8×18.1

※本稿「寛政9年」条に「日の出を見る貴人」（摺物。北斎宗理画）があるが、本図とは別。図は、海辺で扇をかざして、水平線に頭を出し始めた日の出を眺める立烏帽子の貴人を描く。分銅重記、浅草庵の狂歌が記される。図左に「丁巳はつ春」とある。

☆〈官女〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9（1797）10.5×18.0

※官女が板襖を半分開け、立膝で外の景色を眺めている。緑の山や木々が遠景に描かれる。浅草庵、他の狂歌が記される。図左に「丁巳はつ春」とある。

☆〈**紅梅**〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9（1797）10.0×18.8

※樹洞のできた老木の根元から別に伸びた細い幹に紅梅が咲いている。図の左半分に三人の狂歌が書かれ、「巳のとし」とある。竹永折女、松節成ら三人の狂歌が記される。

☆〈**やつし巢父許由**〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9（1797）12.0×20.4

※「やつし」とは、故事の人物等を別時代の人物や事柄等に当てはめること。「巢父許由」は、「許由巢父」の表記が通例。許由も巢父も、中国古代の高士。聖天子と仰がれた堯帝が、許由の高士であることを聞いて天下を譲ろうと言うと、許由は、汚れたことを聞いたとして、潁水で耳を洗い、箕山に隠れた。また、巢父も、堯から天下を譲られようとして拒絶した高士であったが、耳を洗っている許由を見て、そのような汚れた水は牛にも飲ませることができないと言って、引いていた牛を連れて帰った、という故事。榮貴を忌み嫌うたとえ（「精選版 日本国語大辞典」より）。

図は、一人の女が滝で朱塗りの盃を洗っている。その側で牛を連れた女が酒を入れた瓢箪の紐を肩にして立っている。水魚亭仲良の狂歌が書かれる。図左に「巳のとし」とある。

☆〈**羽根つき**〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9（1797）10.5×18.2

※雪のある外で、高下駄を履いて羽つきをする二人の娘。二人は交差するように寄り添い、羽根の先は描かれぬ。東雲鐘成、浅草菴、他の狂歌が書かれる。図左に「丁巳はつ春」とある。

☆〈**盃を運ぶ官女**〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9（1797）9.9×18.0

※垂髪、緋袴の官女が三方に乗せた盃を捧げ持って廊下に行く。下女が酒を入れた長柄銚子を持って仕えている。浅草菴、他の狂歌が記される。図左に「丁巳はつ春」とある。

☆〈**初日の出と江の島**〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9（1797）10.3×13.9

※由比ヶ浜からの干潟と緑に繁る木々の江の島の先に、顔を出した初日の出。空には鳥が三羽飛んでいる。秋仲町の狂歌が記される。図左に「丁巳のとし」とある。

☆〈**三方の盃**〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9（1797）10.0×13.5

※朱塗りの三方に注連飾りが敷かれ、その上に三つ重ねの盃が置かれている。桜木彫方、唯我堂 宮戸川面の狂歌が記される。図左に「丁巳とし」とある。

☆〈**見立毘沙門天とむかで**〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9（1797）13.2×17.9

※小さな宝塔と長柄箒を持つ女の後ろに、ぞろぞろと子どもがムカデのように連なっている図。倉部行燈の狂歌が記される。図左に「丁巳首春」とある。

208 見立毘沙門天とむかで（島根県立美術館）

☆〈**若水を汲む女**〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9 頃（1797）10.2×14.0

※元旦の若水を水汲み桶に汲んで、両手で柄を持って腰をかがめて運ぶ女。後ろに蕾の



ある梅の木が描かれる。水魚亭仲良、他の狂歌が記される。

☆〈やつし高砂〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9頃(1797) 10.7×19.1

※松の木のある海辺で、日の出を望んでいる男と垂髪の女。金砂亭如蘭の狂歌がある。

☆〈梅樹に初日〉宗理画 印百林。狂歌。色摺。寛政9頃(1797) 10.1×14.0

※樹洞のある梅の老木の小枝に白梅が咲き、背後に赤く丸い初日が大きく描かれる。長閑舎 木芳春風の狂歌が記される。

☆〈子どもの草摺引〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9頃(1797) 14.6×19.3

※草摺引は、歌舞舞踊系統の一つ。親の仇敵工藤祐経ありと聞いた曾我五郎が、鎧を小脇に駆けこむのを、小林朝比奈が草摺を捕え、引き止めて意見忠告する筋。これを舞踊化した作品の全てを〈草摺引物〉という(「世界大百科事典 第2版」による)。「草摺」は、鎧の裾に垂らして下半身を防御する部分。「下散」「垂れ」とも。

図は、紅梅の画かれた衝立の前で、長柄箒を小脇に抱えた子どもと、芥子房頭の子どもが紙に書いた草摺を引きあって遊んでいる。衝立の後ろでは母親が楽しそうに座っている。揚柳亭●元の狂歌がある。

☆〈橋の上の母子〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9(1797) 13.7×10.2

※土手に柳の木のある小川の板橋を、鋏を手にした農婦と背中に寄り添っている子どもが渡っている。毛呂利館 長井客人の狂歌が記される。

☆〈寿老人と遊女〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9頃(1797) 13.3×18.5

※寿老人と花魁が寄り添って巻手紙を読んでいる。貢菴則次の狂歌が書かれる。

☆〈洲崎の初日の出〉宗理画。漢詩。色摺。寛政9頃(1797) 12.7×16.8

※石燈籠と松の木のある岸辺の向こうから初日の出が上っている。洲崎は、「すさき」と発音し、現東京都江東区東陽1丁目辺をいう。元禄期に埋め立てられた地で、海を望む勝地として賑わった。「深川洲崎十萬坪」(現江東区木場公園辺)と称され、歌川広重も「江戸名所百景」で描いている。

図には右草亭鳩下道の漢詩が「波静滄海外 雲晴洲崎東 望恭大門客 爛酒頭上連 遊遙品川宿 道近八幡宮 四方輝初日 ●(穎か) 是龍燈紅 異地佳妓聚 弁天翠娥 (筆者注:美人のこと) 同 御膝元老若 太平樂無窮」が記される(暫定の読み下しは筆者による)。絵暦や狂歌・俳諧の摺物ではない図。

☆〈歌かるた〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9(1797) 14.8×19.5

※衝立の前で、カルタ入れに箱の上に置いたカルタを取り上げて読む母親と、その脇で腹這いになって開いた本を見ている子ども。清風亭いさ子、山陽堂、芝菴光交、万亀亭、四方歌壇の狂歌が記される。図左に「丁巳のとし」とある。

☆〈硯師〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9(1797) 12.9×13.4

※注連飾りの下がる部屋で衝立を背にして、台の上に置いた硯に鑿を当て槌を打つ硯師。相場保高の狂歌が記される。衝立には樹木鬱蒼とした海辺の島が描かれる。

☆〈七種たたき〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9頃(1797) 12.3×12.5

※正月七日の七草の節句の前夜と当日の朝、俎板に七草を乗せ、包丁やすりこぎで叩きながら「ななくさなずな、唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬさきに、ストントンとたたきなせえ」などとはやしなながら包丁やすりこぎで叩く（「デジタル大辞泉」より）。

はやし言葉は「ななくさなずな、唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬさきに 七草なずな手に摘み入れて 亢奮斗張」 「ななくさなずな、唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬさきに なずな七草 はやしてほとゝ」などいくつかのバリエーションがある。豊穰と無病息災を願う。

図は、「寿」と書かれた樽の上に置いた俎板の七草を、しゃがんですりこぎで叩いている女を描く。

☆〈力石〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9頃（1797） 20.6×9.4 他図あり（24.1×11.5）
※柵に囲まれた梅の木の前で、柵に着物を掛け、裸になって膝を折り、地から石を持ちあげようとしている旅人。●花春芳の狂歌が書かれる。

☆〈桃太郎と雉〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9頃（1797） 20.5×9.3
※松の木の前で、雉に黍団子を差し出そうとしている桃太郎。千秋菴、他の狂歌が記される。

☆〈紅梅〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9頃（1797） 20.3×6.7
※縦長に伸びた幹に多くの紅梅が咲いている。浅黄裏成の狂歌が記される。

☆〈白梅〉宗理画 印完印知。狂歌。色摺。寛政9頃（1797） 21.3×7.8
※縦長の細い幹に数弁の白梅が開いている。真砂菴の狂歌が記される。

☆〈木馬遊び〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9頃（1797） 13.0×13.2
※注連飾りのある部屋で、木馬に乗っている子どもと、木馬を支えている子ども。

☆〈年礼の武士〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9頃（1797） 13.0×17.4
※松飾りのある門前で、向こうむきで腰を少し屈めて新年の挨拶をする 袴姿の武士と、その後ろで屈んで控えている小奴。好文と森羅亭の狂歌が書かれる。

☆〈小松を引く子ども〉宗理画。絵暦・狂歌。色摺。寛政9（1797） 13.0×17.5
※小松を引き抜こうとする子どもと、後ろで見守る娘。空也の狂歌が書かれる。背後の松の大きさが月の大小を示している。

☆〈「巳のとし 小松引」〉宗理画。絵暦。色摺。寛政9（1797） 14.0×18.6
※腰を屈めて小松を引く娘と、立ってそれを見ている娘。遠景に雪を被った富士山。書き込みの文字に月の大小が示される。

☆〈楊貴妃・小野小町・蓮華女〉北斎宗理画。狂歌。色摺。寛政9頃（1797） 25.2×22.0

※図左から、胸をはだけた楊貴妃、檜扇をかざす小野小町、右手を胸の前に置く蓮華女。蓮華女は、釈迦の女弟子（蓮華色とも）。砂邑亭好文、呑口捨、俵杵成、花月庵後濱邊黒人の狂歌が記される。209 楊貴妃・小野小町・蓮華女（島根県立美術館）



☆〈節料理の用意〉北斎宗理画。狂歌。色摺。寛政9（1797）22.2×27.7

※屏風の前で、手拭を被った母親が朱塗りの盆から食材を箸で土鍋に移している。側でそれを見ている娘。外に柳が描かれる、図の上半分に、家建古住、巖苔成、墨染多もん、山鳥長尾、五月庵晴兼、四方歌壇の狂歌が記される。図左に「丁巳とし」とある。

☆〈琴を弾く官女〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9頃（1798）21.0×18.6

※几帳のある部屋で、琴を弾く官女と、それを聞いているもうひとりの官女の背中が描かれる。雪下亭呉明、浅草庵ら四名の狂歌が記される。一枚図もあり（21.2×18.8）。

☆〈巳待の御礼〉宗理画。狂歌。着色。寛政9（1797）13.8×19.0

※同図は、寛政9年、摺物「巳待」（色摺。宗理画。13.5×19.0 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）にある。本稿「寛政9年」条を参照。

☆〈妓楼の節分〉北斎宗理画。狂歌。色摺。寛政9（1797）22.1×26.2

※妓楼の一階で鬼に豆を投げる袴姿の男が遠くに描かれる。図の手前には、二階からそれを見ている花魁たちと子どもや、部屋に散らばった豆を拾う子どもが描かれる。妓楼の広さが遠近法で描かれる。増本楼吞義、雀掛升子、福寿窓笑丸、芝庵、山陽堂、四方歌壇の狂歌が記される。

☆〈「曙艸」吉野山花見〉（「吉野山貴人の花見」とも）北斎宗理画。狂歌。色摺。全紙判。寛政9（1797）42.8×57.2

※吉野山の花見に出かけた貴人たちの一行。牛車の周りには垂千の男たちや箆を背負った武人等がいる。絵の上下に朱のすやり霞が描かれる。

図の下半分は、逆さに、曙興兼の狂歌が大きく記され、続いて末程吉、常盤松成、浅草市人など16名の狂歌が列記される、図左に「丁巳の春三月」とある。曙草は、「リンドウ科の越年草で、中国および日本各地の山間湿地に生え、花は9月～10月頃開く」（『ブリタニカ国際大百科事典』による）とあるが、曙興兼に因んだ命名か。

210 吉野山花見（上図部分：島根県立美術館）



☆〈「曙艸」吉野山花見 袋〉寛政9（1797）色摺。21.5×19.6

※「曙艸」と書かれた紐付きの物入れのようなものが描かれ、脇に「本町連」と記されている。

☆〈雪中の庵〉全紙判。北斎宗理画・花押。俳諧。色摺。寛政9（1797） 41.8×56.6

※庵の門、竹垣、屋根、木々に雪が積もりひっそりした鳥瞰の風景が全紙判上部の右半分に描かれる。上半分の左側、及び下半分に逆さに雪中菴完来などの俳諧が記される。末尾に「寛政九巳冬」とある。

☆〈若水を運ぶ娘〉宗理画。絵暦・狂歌。色摺。
寛政9（1797） 14.8×20.1

211 若水を運ぶ娘

※若水を汲んだウラジロを巻いた桶の柄を両手で持ち、庭先に立つ娘。竹垣の側に松飾りが見える。部屋には、笹の小枝に福面等を付けた正月飾りを持って立っている娘と、炬燵に入っている娘が描かれる。徒然織唐、紀ノ志丸、山水舎音成の狂歌が記される。



☆〈煙管と煙草入れ〉宗理画。絵暦・狂歌。色摺。寛政9（1797） 14.6×19.5

※煙管、朱色の煙管入れ、根付けのついた朱色の煙草入れが寄り添うように置かれている。煙草入れには巳（蛇）が描かれている。岩井有常、清猷館倉光、四方歌垣 真顔の狂歌が記される。煙管の雁首と吸い口に月の大小が示される。

☆〈鶯を眺める官女〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9頃（1797） 14.8×25.8

※庭先の梅の枝先にとまった鶯を、縁側から眺める二人の官女と下働きの娘。室常春、花染袖也、延田白羽、玉樹軒千枝人の狂歌が記される。

☆〈布袋と唐子の角兵衛獅子〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9（1797） 9.4×18.2

※撥を持ち平太鼓を叩く布袋の脇で、逆立ちをする角兵衛獅子。紅梅が咲いている。文屋次丸の狂歌が記される。図左に「巳のはつ春」とある。

☆〈小松引〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9頃（1797） 16.1×28.3

※小松を引く上半身裸の男と、引き抜いた小松の束を担ぐ仕丁。それを見ている二人の官女と子ども。紀立芳輔、三陀羅法師の狂歌が記される。

☆〈汐干狩り〉宗理画。絵暦。色摺。寛政9（1797） 10.1×13.3

江の島と思われる寺社のある島に続く干潟で汐干狩りをする人々。人々の大きさと月の大小が示される。図の上下に朱色のすやり霞が描かれる。

☆〈綿帽子売り〉宗理画。絵暦・狂歌。色摺。寛政9（1797） 21.5×11.4

※「わたほうし」と書いた大きな箱を背負い、「杉野壽見」の表札のある門口に立つ綿帽子売りの男。男の煙草入れと、背負箱の上に乗せた丸めた布を縛る紐が赤く着色され、それ以外は墨摺の画。梅樹には鶯がとまっている。温故堂七持の狂歌が書かれる。綿帽子は、真綿を広げて作った女性の被り物。外出時の防寒用だったが、現在では花嫁の被り物の一つ。

☆〈新年の雪中遊女道中〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9頃（1797） 14.7×28.3

※雪を被った小松の見える所を、禿の肩に手を置いて歩く花魁。その後ろで、長柄の大

傘を差し掛ける傘持ちの男。家杉船主、千秋菴 三陀羅法師の狂歌が記される。

☆〈梅の匂い袋〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9(1797) 12.8×26.1

※梅柄の匂い袋と紐が描かれる。仙葉苑紫文、正月堂、俵和歌女、菊花街、凸凹庵賢丸、山東京伝、黒羽亭金持、一日菴、四方真顔の狂歌が記される。図左に「丁巳のはつ春 東書堂主人書」とある。

☆〈梅樹と元禄二美人〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9(1797) 14.1×18.9

※梅樹の側に立つ、元禄鬘(下げ髪を輪のようにして元結いで結ぶ)の遊女二人。一人は市松模様の帯。図左に「丁巳はつ春」とある。

☆〈初春の日本堤〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9(1797) 14.0×18.8

※遠くに吉原の家並、図左に小さく堅川の木材置き場が描かれる。手前には日本堤の道を行く鋤を担ぐ農夫が一人。野邊亭廣道の狂歌が記される。図左に「丁巳の春 東書堂主人書」とある。

☆〈夜の梅〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9(1797)

11.3×14.4

※同図は、寛政9年にある。同年項を参照。赤い部机に両肘を立て、拳に顎を乗せて窓外の梅を眺める男。嵯峨道改竹真蔭の狂歌が記される。末尾に「丁巳のとし」とある。



212 夜の梅

☆〈床几に座る官女〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9(1797) 13.9×18.6

※梁で囲った紅梅樹の側に置いた床几に座る官女と、床几の下で盆を持って控える女。丸山戸成、浅草菴の狂歌が書かれる。図左に「丁巳はつ春」とある。

☆〈縁側の官女〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9(1797) 12.9×17.8

※竹垣に囲まれた梅樹の見える縁側に座り、箱を包んだ緑の袋の紐を結んでいる官女。浅草菴、他の狂歌が書かれる。図左に「丁巳はつ春」とある。

☆〈注連飾りと羽根〉宗理画。狂歌。色摺。寛政9(1797) 10.9×14.7

※注連飾りと松飾りのある風景の上に羽根が描かれる。下手横好の「巳歳旦」「春興」と題された狂歌が記される。

☆〈鼠と弁財天と猿〉宗理画。日の干支。色摺。寛政9(1797) 11.2×23.1

※扇面画の形をとる絵。中の弁財天を挟んで白鼠と三番叟の日の丸烏帽子を被った猿が、日の干支の月日を書いた巻紙を広げている図。日の干支は、十干と十二支を組み合わせた六十干支。日にちごとに戌辰、己巳などと付けられる。

☆〈檜扇〉宗理画。絵暦・狂歌。色摺。寛政9(1797) 13.0×17.8

※開いた檜扇に蒲公英が描かれている。周りに梅の花びらが散らされ、「発為大不発為小 央発為閏 而年中知大小」と説明している(読み下しは筆者)。開いた花が大の月、蕾が小の月、半開きは閏月を表している。布流瀧津の狂歌が記される。

☆〈福豆と山椒〉宗理画。絵暦・狂歌。色摺。寛政9(1797) 10.6×14.2

※黒い福豆が大の月、茶色の山椒の実が小の月を示している。森羅亭の狂歌が書かれる。図左に「丁巳のとし」とある。

☆〈寿の字を吹き出す亀〉宗理画。絵暦。色摺。寛政9(1797) 9.1×13.0

※車の軸模様の甲羅の亀が、首を伸ばして吐く息の先に「壽」字が浮かび上がっている。「寿」字の中に月の大小が示される。

☆〈明け鳥〉宗理画。絵暦・狂歌。色摺。寛政9(1797) 9.9×13.2

※朝日の出る空に舞う鳥の群れ。鳥の大小が月の大小を示している。宝倉主、唯我堂川面の狂歌が書かれる。図右に「丁巳 立春」とある。

☆〈母子と梅の花餅〉宗理画 印完。絵暦・狂歌。色摺。寛政9(1797) 12.6×17.2

※枕屏風に布が掛かり、その前で母親が子どもに箱に入った梅の花餅を高く差し上げている。子どもは両手を合わせて頂戴の仕草をしている。箱の中の菓子と、母親の持つ菓子に月の大小が示される。光柿亭赤蒂の狂歌が書かれる。

☆〈雪間の若菜 七草〉宗理画。絵暦・狂歌。色摺。寛政9(1797) 10.6×14.1

※雪の中から緑の七草が出ている図。伊勢濱荻の狂歌の中に月の大小が示される。図左に「巳のとし」とある。

☆〈天秤棒を持って橋を渡る男〉宗理画。俳諧。色摺。寛政10(1798) 20.9×28.2

※図右に、高い桁の橋を渡る天秤棒の男が小さく描かれる。その向こうには山の頂と朝日が描かれる。「淑景」と題して、雪常亭 完義、馬紅、一樵、夷門、馬肝、雪中菴の俳諧が記される。図左に「寛政十年春」とある。

☆〈午の金物〉宗理画。狂歌。色摺。寛政10(1798) 12.7×16.1

※「午之御金物」と書かれた三段重ねの箱の蓋が開き、中に赤地に並べられた馬を模った小さな金物などが置かれている。守静館芦雁、清猷館倉光の狂歌が記される。寛政10年は戊午の年。

☆〈白馬の節会〉宗理画。俳諧。色摺。寛政10(1798) 40.0×18.6

※本稿寛政9年条にも同題の摺物がある。正月七日に行なわれる朝廷の行事注で、白馬の引きはじめを描いたもの。

注) 白馬節会：正月7日、天皇が豊楽殿(のちに紫宸殿)に出御して邪気を祓うとされる白馬を庭に引き出し、群臣らと宴を催す(「Wikipedia」による)。この日に白馬を見ると邪気を避けるという中国の風習に因んだもの。

図上半分は、門前で、轡部分と首を赤い紐縄で飾った数頭の白馬を操っている男たちが描かれる。図下半分に、葎雪菴午心の俳諧が逆さに記される。左に「戊午春」とある。

☆〈釣り人と漁師〉北斎宗理画・印師造化。俳諧 色摺。全紙判。寛政10(1798) 42.0×56.5

※向こう岸で竿を差し釣りをしている男、川のこちら側では長柄網を担ぐ男と、腰蓑を付けた漁師がいる。全紙判の下半分に雪中菴など33名の俳諧が逆さに列記される。

☆〈水祝い〉宗理画。俳諧。色摺。寛政10(1798) 20.0×27.8

※水祝いは、婚礼の際や婚礼後の最初の正月に、新郎や新婦に水を浴びせて祝う儀礼。注連飾りや松飾りがある部屋に向かう烏帽子・長袴の侍に向けて、ウラジロを付けた手桶の水を掛けようとしている男たち。全紙判の下半分に、曲傘更響美、葎雪庵午心等5名の俳諧が記される。図右に「寛政うまのとし」とある。

☆〈**鉦始め**〉宗理画。俳諧。色摺。寛政10(1798) 20.4×28.3

※鉦は、まさかり・ちょうな・かななど大工道具の類をいう。鉦始めは、番匠と呼ばれる建築の匠が正月に1年の安全を祈る儀式。図は烏帽子を被り盛装した匠の二人が指矩や墨壺を手にして祝っている。孤仙、馬肝、雪中菴完来の俳諧が記される。図左に「寛政十年春」とある。

☆〈**塀の前を行く貴人**〉宗理画。俳諧 色摺。横長判。寛政10(1798) 21.0×56.5

※図右端に塀の前を歩く貴人が小さく描かれる。雪中菴完来など6名の俳諧が記される。図左に「寛政十年春」とある。

☆〈**島台と三方と銚子**〉宗理画。絵暦・狂歌。色摺。寛政10(1798) 12.7×16.0

※蓬萊の島型に切り取った台の上に松の盆栽が置かれる。三方の下には大きな銚子が置かれている。銚子に飾られた紙に月の大小が示される。盤井有常、羽金鐵人、宝倉光の狂歌が記される。

☆〈**屠蘇を飲む福祿寿**〉宗理改北斎画。狂歌。色摺。

寛政11(1799) 13.2×18.6 213 屠蘇を飲む福祿寿

※紅梅の見える部屋で、女の注ぐ屠蘇を朱塗りの大盃に受けている福祿寿。盃の底に「寿」が書かれている。部屋の掛け軸には、この年の巳未の字が書かれ、三方には正月飾りが乗せられている。雀脛永喜、浅草庵の狂歌が記される。



☆〈**元結作り**〉宗理改北斎画。狂歌。色摺。寛政11頃(1799) 10.2×18.5

※部屋で元結いの紐を手をしている女を描く。

☆〈**小松を持つ官女**〉宗理改北斎画。狂歌。色摺。寛政11頃(1799) 12.7×18.0

※小松を持って座る官女。積薪亭黒成、淇水堂の狂歌が記される。

☆〈**烏帽子**〉宗理改北斎画。狂歌。色摺。寛政11頃(1799) 13.3×17.8

※竹を敷いた台の上に、赤い紐のついた黒い烏帽子が置かれている。千穂菴、他の狂歌が記される。

☆〈**清書双紙を持つ子供**〉北斎画。狂歌。色摺。寛政11(1799) 20.1×14.2

※梅と松の木がある家の塀に架けられた大きな額には「梅」と書かれた紙等が貼られている。その前を歩く子どもは硯箱と清書の双紙を持っている。屋寿高の狂歌が記される。

☆〈**凧を持つ娘**〉北斎画。狂歌。色摺。寛政11(1799) 10.5×19.0

※竹垣に囲まれた梅樹の前で、黄色の凧を手をしている娘。足元には凧紐が垂れている。梅の枝の先には鶯が飛んでいる。清見亭浪関盛、千穂菴の狂歌が記される。

☆〈梅を眺める官女〉先ノ宗理北斎画。狂歌。色摺。寛政12(1800) 13.8×28.3

※縁側から紅梅と、枝にとまろうとしている鶯を見ている官女。手にした短冊を離している。官女の足元に座る小侍従は硯台を持っている。大倉金満、銭屋金持、四方歌垣等5名の狂歌が記される。

☆〈猿を曳く女三宮〉先ノ宗理北斎画。狂歌。色摺。寛政12(1800) 14.2×18.8

※柳と梅の木のある庭先を部屋の戸を少し開けた間から覗く官女。庭にいる貴人と目を合わせている。貴人の側には鞆を手にした男がいる。四方真顔等、3名の狂歌が書かれる。女三宮は、光源氏と結婚するが、強引な柏木との間に薫を生んだ後出家する女性として『源氏物語』に描かれる。本図は「若菜上」の、猫が庭に逃げて、つないでいる紐が引っ張られ御簾が少し開き、中にある女三宮の姿が庭の柏木に見られる場面を見立てる。

☆〈小鍛冶〉先ノ宗理北斎画。絵暦・狂歌。色摺。寛政12(1800) 14.0×19.0

注連飾りのある作業場で刀鍛冶の様子を描く。二人で台に乗せた刀を槌で叩いている。注連飾りの太さで月の大小が示される。清猷館倉光、紀重長、四方歌垣等、3名の狂歌が記される。

214 小鍛冶



☆〈猿猴捉月を描く遊女〉北斎画。狂歌。色摺。寛政12(1800) 7.3×9.8

※三人の遊女が羽織を広げて、裏地の、猿が木からぶら下がっている絵をみている。岩井有事、四方歌垣等3名の狂歌が記される。

☆〈文机に猿の硯〉北斎画。狂歌。色摺。寛政12(1800) 12.6×8.1

※文机に筆挿しと猿を模った硯、文鎮、短冊等が置かれ、下には巻紙や露の臺が入った鉢等がある。四方歌垣、他の狂歌が記される。

☆〈鹿島踊りの猿〉北斎画。絵暦。色摺。寛政12(1800) 9.5×12.1

※烏帽子を被り扇子や御幣を持って踊る二疋の猿。扇子には富士山が描かれている。猿の着物に月の大小が示される。鹿島踊りは、鹿島神宮(現茨城県鹿島市宮中2306-1)に発祥した疫病封じの祈願の踊りと言われる。

☆〈「商」(天秤で計る美人)〉無款。絵暦。色摺。寛政12(1800) 9.3×12.3

※同図は寛政12年の摺物「土農工商」の一図にある。「定」の文字中に月の大小が示される。本稿「寛政12年」項を参照。

☆〈顔を洗う美人と猿〉無款。色摺。寛政12(1800) 13.6×18.6

※縁側で、盥の水に左手を入れ、右手で洗顔用の刷毛を顔に当てている、上半身裸の女。隣に女の着物を羽織っている猿がいる。女の腰に下ろした着物の梅の模様が月の大小を示している。狂歌・俳諧・絵暦ではない摺物。

☆〈猿曳きの衝立と手鞆を作る娘〉無款。絵暦。色摺。寛政12(1800) 13.9×18.7

※猿廻しの男が芸に使う道具を持って立っている図のある衝立を背にして、座った娘が

手鞠と糸を通した針を持っている。その前で子どもが手を差し出している。猿曳きの持つ道具に月の大小が示される。

☆〈金太郎の書初め〉先ノ宗理北斎画。絵暦・狂歌。色摺。寛政 12 (1800) 13.8×14.1

※赤い顔と身体金の金太郎が書き初めの文字を書いている。図左に「庚申春」とある。都●
賀江の狂歌が書かれる。

☆〈玉虫と子安貝〉先ノ宗理北斎画。絵暦・狂歌。色摺。寛政 12 (1800) 13.9×18.7

※箱に玉虫が二疋並べて入れてある。箱の外には子安貝が二つ置かれている。玉虫も子安貝も安産のお守りとされている。箱の蓋には白梅が描かれ、花の開き具合で月の大小が示される。四方歌垣、他の狂歌が書かれる。

●摺物「花魁と振袖新造図」(寛政 8 年～10 年〈1796～98〉) 色摺。北斎宗理画)

※図の上部に大勢の狂歌師の歌が並べて記される。図は、柵の前に立つ三人。蛇の目傘を閉じて持つ横兵庫髷の花魁、傘を広げて持ち赤い着物に格子縞の帯の振袖新造、その後ろにも傘を閉じかけた振袖新造がこちらを向いている。この振袖新造の顔は、文化元年～4 年の「振袖新造図」(紙本淡彩一幅)の顔と似ている。

振袖新造は、近世、江戸吉原で、禿から新造になった若い遊女。部屋を持たず、振袖を着ていた。振新。ふり(『大辞林』第三版による)。

●摺物「顕微鏡に蝶」(寛政 12 年～文化 2 年〈1800～05〉)

11 切判。色摺。北斎画。20.0×13.9 フランス国立図書館/
カンサス大学スペンサー美術館蔵)

※浅瀬庵永喜の狂歌「めのさめた やうなる花の 菜に遊ぶ蝶
は大かた 生粋の夢」が記される。荘子「胡蝶の夢」になぞ
らえたもの。顕微鏡に蝶がとまっている図。

215 顕微鏡に蝶 (フランス国立図書館)



●摺物「百物語」(寛政 7 年～10 年〈1795～98〉)。色摺。

応需北斎宗理席上画。19.7×33.8 北斎館蔵)

※百物語は怖い話を一人ずつ語り、語り終わると百本の蠟燭の明かりを一本ずつ消していく集い。図は、大勢の女性のいる部屋に蠟燭がとまり、怖い話に顔を見合せている図。「百物語」は、鶴屋喜右衛門版・中判錦絵(天保 2 年～4 年)揃物や、「新板浮絵 化物屋舗百物語の図」(天明年間。大判錦絵。西村屋与八版)などでも扱っている。

●摺物「三囲神社を望む」(寛政 7 年～10 年〈1795～98〉)か。色摺。北斎宗理画。30.5×43.8)

※隅田川岸の茶屋の見晴らしの欄干に手をかけたり、寄り添って坐り、茶屋下に咲く桜を眺める 3 人の女。川には四つ手網を広げた漁船が浮かび、対岸には土手の下から鳥居の天井を見せている三囲神社が小さく描かれる。

●摺物「飛鳥山桜題」(寛政7年～10年〈1795～98〉)。横長判摺物。色摺。北斎宗理画。
20.3×53.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※「飛鳥山桜題」と刻された石碑には、萬亀亭 花江戸住、日頭菴 錢屋金埒、狂歌堂 四方真顔の狂歌が記されている。側の桜の老木が咲き誇り、色幕が張られた桜の時期の飛鳥山が描かれる。

●摺物「旅姿の三美人」(寛政7年～10年〈1795～98〉)。狂歌摺物。色摺。無款 12.6×17.7)

●摺物「視機関」(寛政7年～11年〈1795～99〉)。色摺。宗理画。11.3×24.4 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵)

※正月の大道で視機関を見せている男。子ども二人が視機関を覗いている図。機関の絵柄について永田生慈は「(略)一際目をひくのは、視機関上の透視画法を用いた西洋風な画面であろう。実は、北斎は後年『北斎漫画』三編(文化12年・1815)で「三ツワリの法」と題して透視画法を図解しており、その図とほぼ同工図だからである。すでに春朗時代には、浮絵作品を発表していたであろうが、『北斎漫画』三編より約20年も前に、同工な図を描いていたという点に今更ながら驚かされるのである」と述べている(『ヒーターモース・コレクション北斎図録』による)。



216 視機関 (すみだ北斎美術館)



右：拡大図

●摺物「子供をからかう」(寛政7年～11年〈1795～99〉)。中判色摺。宗理画。東京国立博物館/島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※母親が立膝で、菓子箱から出した菓子を左手で頭上に上げ子供に向けている。子供は両手を突き出して頂戴をしている。⇒『津和野藩伝来摺物』にある「母子と梅の花餅」(寛政9〈1797〉頃。宗理画。印完。12.6×17.2 光柿亭赤帯の狂歌が記される)と同図。

217 子供をからかう (島根県立美術館)



●摺物「恵比寿と美人」(寛政7年～11年〈1795～99〉)。中判色摺。宗理画。東京国立博物館蔵)

※花魁がぼっくり下駄を履き、大きな蛇の目傘をさし、そこに寄り添うように傘に入っている恵比寿天。朱楽菅江らの狂歌が添えられる。

●墨摺版画「成身院童子経曼荼羅」(寛政7年～10年〈1795～1798〉)。無款。19.0×19.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵。43.9×19.5判、66.5×35.0判もあり)

※色紙判か。図の上部が破損。図の中央の枠に毘沙門天風の神将が描かれ、その周囲に裸体の童子が猿・馬・猪・猫・鼻・蛇・雉・鳥・犬や女人と戯れる図。

- 摺物「鳥刺」（寛政7年～10年〈1795～1798〉。色摺。無款 24.1×11.3）
- 摺物「楼上ほととぎす聴く遊女」（寛政7年～11年〈1795～99〉。大奉書色摺。宗理画。京伝写。39.5×55.5 アイルランド・チェスター・ビューティ図書館：東洋美術ギャラリー蔵）

※上半分に妓楼の二階で、大勢の遊女や禿が窓の格子に集まって何かを眺めている図を描き、下半分には逆さ向きに多数の狂歌を書き込む。縦半分のところで二つ折りにし、文字のほうを内側にして、さらにそれを三つ折りすると、いちばん上の表紙にあたるところが主な遊女三人と二人の禿を描いた絵が見え、内側を広げれば、狂歌の文字列の上に空を飛ぶほととぎすが見えるように工夫されている。ほととぎすの絵は山東京伝による（小林忠『浮世絵ギャラリー2 北斎の美人』）。主な狂歌は、司馬篁光交・銭屋金埒・先大屋裏住・四方歌垣真顔など。
- 摺物「あやとり」（寛政7年～11年〈1795～99〉。色摺。九ツ切判。宗理画。13.2×18.1 北斎館蔵）

※綾取りをする横兵庫髷の花魁と禿。背後の台に松の盆栽があり、正月の雰囲気を出す。
- 摺物「歌留多持つ美人」（寛政7年～11年〈1795～99〉。色摺。宗理画。12.1×17.1 太田記念美術館：長瀬コレクション/東京国立博物館蔵）

※衝立の前で箱から出した歌留多を持つ女の図。
- 摺物「神馬」（寛政7年～11年〈1795～99〉。宗理画。13.8×23.1 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』所収「長瀬武郎コレクション寄贈総目録」による。
- 摺物「春駒」（寛政7年～11年〈1795～99〉。宗理画。20.1×53.1 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』所収「長瀬武郎コレクション寄贈総目録」による。
- 摺物「松下三美人」（寛政7年～11年〈1795～99〉。宗理画。19.0×51.8 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』所収「長瀬武郎コレクション寄贈総目録」による。
- 摺物「黒頭巾の二美人」（寛政7年～11年〈1795～99〉。色摺。九ツ切判。宗理画。11.9×16.6 北斎館蔵）

※「両大師」と書かれた表札の前にいる御高祖頭巾の二人の女を描く。両大師は、上野寛永寺境内の輪王寺（現東京都台東区上野公園14-5）のことで、寛永寺開祖の慈眼大師（天海）と、慈眼大師（良源）が崇敬する慈恵大師を祀るので「両大師」と称せられた。
- 摺物「宝船の入港と市富士二高三茄子の蔵」（寛政7年～11年〈1795～99〉。色摺。宗理画）

※海から河口に入港した宝船が正面を向いて描かれる。張られた帆には大きな文字のようなものが描かれているが不明。

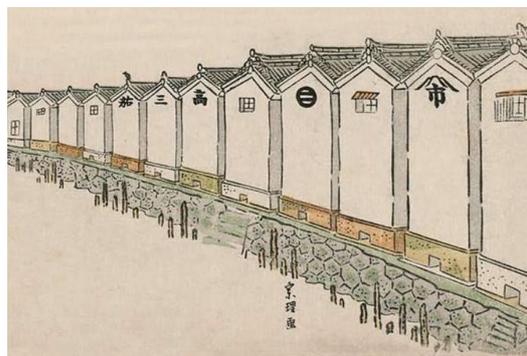
図の右には、遠近法で描かれた蔵が並んでいる。蔵の白壁には、手前の二つ目の蔵に、山形の下に「市」の商標、四つ目の蔵には「二」の商標、六つ目の蔵には「高」の商標、七

つ目の蔵には「三」の商標、「茄」の商標が描かれ、「一富士二鷹三茄子」のめでたさを表している。水平線からは朝日が頭を出し、空には黒く数羽の鳥が描かれる。



218 宝船の入港と市富士二高三茄子の蔵

拡大図



●摺物「短冊持つ女」（寛政 7 年～11 年〈1795～99〉。色摺。宗理画。14.2×16.3 北斎館蔵）

※梅見の茶屋でくつろぐ二人の女。振袖の女は短冊を持ち、側の男は「の」の字が大きく染め抜かれた羽織を着ている。

●摺物「煙草を吸う人と芸者」（寛政 7 年～11 年〈1795～99〉。色摺。宗理画。12.5×16.6 北斎館蔵）

※梅見の茶屋で、縁台に腰を下ろし、片足を台に乗せて、煙管で一服して休んでいる男に、芸者風の女が何かを話しかけている。男の側には供の小僧が座っている。

●摺物「古梅」（「梅樹」とも。寛政 7 年～11 年〈1795～99〉。色摺。宗理画。9.9×13.3 北斎館蔵）

※岸边に立つ、枝に花を咲かせる梅の古木の図。図の左に「春なれやおのがきまゝな野良梅の華にひかれてまはるのらもの 上部堅つら」の狂歌が記される。

●摺物「大黒と娘」（寛政 7 年～11 年〈1795～99〉。色摺。宗理画。13.9×18.8 北斎館蔵）

※娘が、吉原を案内する「細見」といわれる本を読んでいると、大きな袋を背負った大黒天が同じくその本を覗き込んでいる。「北斎館」資料では「菱川宗理画」とある。

●摺物「糸まき」（寛政 7 年～11 年〈1795～99〉。色摺。宗理画。13.0×18.6 北斎館蔵）

※振袖の娘が糸をほぐし、男の子が糸を両手に巻きつけている図。「北斎館」資料では「菱川宗理画」としている。

●摺物「振り返る黒犬」（寛政 7 年～11 年〈1795～99〉。色摺。宗理画。10.1×14.2 北斎館蔵）

※立派な仕様の巾着を前にした狆と思われる黒犬が、何かの気配に振り返っている。

●摺物「三味線の稽古」（寛政 7 年～11 年〈1795～99〉。色摺。宗理画。13.2×16.8 北斎館蔵）

※三味線を弾く娘の前の楽譜に「門松」や「七夕」の文字が書かれているので、あるいは寛政 12 年の絵暦であったか。「北斎館」資料では「菱川宗理画」としている。

●摺物「桃太郎」（寛政7年～11年〈1795～99〉）。色摺。宗理画。22.0×9.4 北斎館蔵）
 ※松の木の下で雉に黍団子をやる桃太郎を描く。

●摺物「綿帽子売り」（寛政7年～11年〈1795～99〉）。色摺。宗理画。21.4×11.6 北斎館蔵）

※「わたぼうし」と書いた背負い箱を背負い、家の門の前に立つ行商の男。梅の枝に鶯がとまっている。

●摺物「梅を手折る娘」（寛政8～10〈1796～98〉）。狂歌摺物。色摺、宗理画）

●摺物「扇がある文机と福寿草」（寛政8～10〈1796～98〉）。狂歌摺物。色摺。宗理画）

●摺物「正月楽屋口の景」（寛政8～10〈1796～98〉）。狂歌摺物。色摺。宗理画）

●摺物「田鶴」（寛政8～10〈1796～98〉）。狂歌摺物。色摺。宗理画 11.5×15.7）

●摺物「春庭三美人」（「新春の庭先三美人」とも。寛政8年～寛政10年〈1796～1798〉。横長判。色摺。宗理画。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※松の木の根元にしゃがんで落ち葉を掃いて塵取りに入れている下女。側で手桶を下げている女と、梅の木の前の緋毛氈を引いた床几の前で、鳥籠を手にした娘が向き合っている。

●摺物「金時と美人の屠蘇」（「金時酒宴」「金時飲酒」とも。寛政8年～10年〈1796～98〉）。横中判色摺。四方歌壇連撰。北斎宗理画。22.0×26.9 秋長堂版。北斎館/島根県立美術館蔵：永田コレクション/大英博物館蔵）

※大刀を身につけ、腹が突き出て頭の禿げた年配の金時が、遊女の注ぐ酒を大盃に受けて飲んでいる。側に「四方」の字が記された角樽を抱えている遊女と、金時の前で片膝で座る遊女がいる。「真赤なる金時山のはつ日影 四方に霞をくめるさかづき学志亭公面」、その他、芝庵（光交）、山陽堂（山陽）、四方歌壇の狂歌が図の上部に記される。

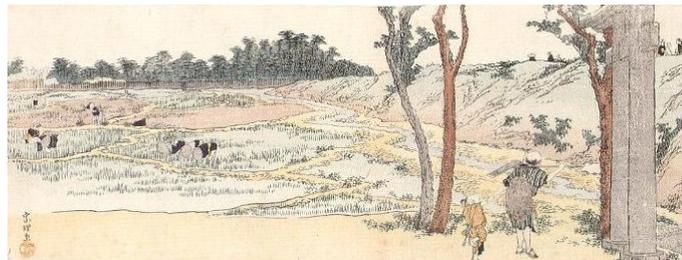


219 金時と美人の屠蘇（島根県立美術館：永田コレクションでは林忠正の所蔵印がある）

●摺物「金太郎と山姥」（寛政8～10〈1796～98〉横長判摺物。色摺。北斎宗理画）

●摺物「三圃田圃図」（寛政8年～10年〈1796～1798〉）。半切判。色摺。宗理画。印完知。17.0×48.5 東京国立博物館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※横長画面に三圃神社前に広がる田んぼの風景を描く。絵の右には隅田川堤の下に建つ三圃神社の石の鳥居が描かれ、その前に鋤を肩に担ぐ農夫と、その子どもがいる。田んぼでは稲の苗を植える三人の人。土手の上には数人が歩いている。本来は全紙判

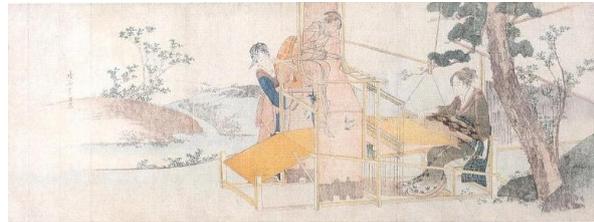


（34.0×48.5）で、半分には、深川芸者中の舞踊の番組が逆さに記されている。

220 三圃田圃図（島根県立美術館）

●摺物「機織図」(寛政8年～10年〈1796～1798〉)。寛政10年説あり。全紙判半切り色摺。北斎宗理画。42.0×56.3 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※戸外で、大きな機織り機で三人の女が機織りをしている図。下半分は、中村座や森田座での長唄等の発表会の参加者名と次第が、逆さに記されている。



221 機織図 (島根県立美術館)

●摺物「川辺の柳」(寛政8～10〈1796～1798〉)。狂歌摺物。色摺。北斎宗理画)

●摺物「社前の若水汲み」(寛政8～10〈1796～1798〉)。狂歌摺物。色摺。宗理画)

●摺物「奥座敷遊興図」(「座敷狂言春駒」とも。寛政7年～10年〈1795～98〉)。半切り判色摺。応需北斎宗理席上画。19.8×56.3 太田記念美術館/北斎館蔵)

※元は大奉書判で、下半分に四方垣連の生網屋生網の狂歌が記される。蠟燭台を三本立てた座敷で踊る女たちと、それを見ている男や女たち。手前に観客の美人の顔。その後ろから背伸びをしている人。北斎館所蔵は左約三分の一が切り取られているが、太田記念美術館所蔵では、春駒の所作事が演じられているという(2019『北斎 視覚のマジック展図録』p 152)。

●摺物「六美人」(寛政7年～10年〈1795～98〉)。色摺。北斎宗理画。18.9×25.2 北斎館蔵)

※商人の妻、見習い新造、矢場の女、女中と思われる女性たち6人が車座に集まっている。一人は本を頭上に掲げ、一人は揚弓を持っている。

222 六美人 (北斎館)



●板絵「七福神図」(寛政8年～12年〈1796～1801〉)。板絵着色一枚。無款。117.0×182.0

清安山板橋不動尊〈清安山願成寺不動院：現茨城県つくばみらい市板橋2370-1〉蔵)

※大黒天と恵比寿が腕相撲をしている。その間に行司役の毘沙門天が軍配を立てている。他の神もその周りに集まっている。

●板絵「唐子舟遊び図」(寛政8年～12年〈1796～1800〉)。板絵着色一枚。無款。117.0×182.0 清安山板橋不動尊〈清安山願成寺不動院：現茨城県つくばみらい市板橋2370-1〉蔵)

※舟の中で思い思いの楽器で演奏している唐の子どもたちの図。遠景に大きな朝日。舟端に上ろうとする瑞亀、舟の上には鶴が羽ばたく、めでたい図。

●摺物「不忍の池畔」(「不忍池」とも。寛政8年～12年〈1796～1800〉)。色摺。北斎画)

※不忍池の畔を歩く三人の女。右の女は傘を閉じて持ち、中の女は揚帽子を被っている。左の女は振り返りながら二人の女に何かを話している。その前には頭巾を頭から覆って、女たちに振り返り手を差し出している男。男の前では風呂敷の荷物を肩にしている小奴が

振り向いている。池には中島の弁財天が描かれ、水上に小さな舟が一艘浮かんでいる。

●摺物「扇屋内の図」(寛政7年～10年〈1795～98〉。横長判色摺。北斎宗理画。19.3×36.5)

※部屋の中で3人の女が立て膝で仕事をしている。一人は扇の骨に紙を当てている。一人は台の上の紙に手を当てている。その後で簪をした女が扇入れの黒い箱を持っている。部屋の外には松が見える。

●摺物「石工」(寛政7年～10年〈1795～98〉。色摺。無款 24.1×11.5)

●摺物「井戸端の仕丁」(寛政7年～10年〈1795～98〉色摺。無款)

●摺物「遊女の座敷」(寛政7年～10年〈1795～98〉。横長判(半切り)注。色摺。北斎宗理画。東京国立博物館蔵)

注)横長判(半切り)摺物は、大奉書を横に二つ折りにしたもの。下半分に諸稽古の発表会の演目や出演者を逆さに書くが、下半分を切り取り、絵だけを独立させることが多い。

※図は、火鉢と煙草盆が置かれている部屋で横兵庫齋を結った遊女と、煙管を銜えた客が寄り添って、幫間と禿が戯れているのを見ている。その側に新造が盆に乗せた何か(香か)を持って立っている。開け放した障子の向こうには梅の花が咲いている。部屋の中央には大きな箆筒が置かれた、華やかな遊女の座敷の様子が描かれる。



223 遊女の座敷 (東京国立博物館)

●摺物「江の島風景」(「江の島図」「江の島海岸」とも。寛政10年～13年〈1798～1801〉九切判色摺。ほくさゐうつす。13.6

×17.3 神奈川県立金沢文庫蔵)

※洋風画の趣で額枠の中に描かれたもの。右上にひらがなの署名がある。図の右側に山裾の干潟を渡り江の島に向う人々を描く。画面左には波が打ち寄せ、遠景に江の島弁天が小さく赤く描かれる。北斎は「江の島」を画題にしたものを数葉描いている。



224 江の島風景 (神奈川県立金沢文庫)

●摺物「かまくらの里」(寛政10年～13年〈1798～1801〉。中判色摺。ほくさゐうつす。13.6×17.3 東京国立博物館蔵)

※上記「江の島の風景」と同シリーズ。洋風画の趣で額枠の中に描かれたもの。右上にひらがなの署名がある。入江の山裾に沿った海岸沿いの道を数名の旅人が歩いている。遠景に富士が描かれ、空には雁の群れが飛んでいる。水平線には帆掛け船の帆が多く見える。

●摺物「稻扱」(寛政10年～13年〈1798～1801〉。色摺。北斎画。19.9×54.0 太田

念美術館：長瀬コレクション蔵)

※農家の庭先で稲の脱穀をする農婦と、その側で座って稲を整えている農婦。脱穀した米を箆に受けている農夫。稲を背に乗せた牛を操る子どもなどが描かれる。

●摺物「助六と揚巻」(「助六と遊女」とも。寛政 12 年～享和 2 年頃〈1800～1802〉。色摺。すみだ北斎美術館蔵)

※煙管を持つ遊女と、その前の助六の、紫の喧嘩鉢巻をした頭部のみ描かれた図。助六は、歌舞伎演目に登場する侠客。

●摺物「椿と美人」(寛政 12 年～享和 2 年〈1800～1802〉)。色摺。画狂人北斎画。18.5×12.5 すみだ北斎美術館蔵)

※四方歌壇等によるもの。吊るした花入れに椿の花を生けようと、手に椿の切り花を持っている女。

●摺物「髪飾り図」(寛政年間〈1789～1801〉)。色摺。21.9×18.5 すみだ北斎美術館蔵)

※梅花の銀の簪、黒と赤の手絡注、鶴紋の平打ち簪など、髪飾りだけを描く。

注) 手絡：丸髻などの根本に巻きつけたりする飾り布。

●摺物「雪の訪い」(寛政 11 年～享和 1 年〈1799～1801〉)。九つ切判。色摺。揃物の内二枚確認される。先ノ宗理北斎画。12.5×32.5)

☆〈女の訪い〉(下駄の女二人が、二人の女のいる部屋を訪れる図。ベレス・コレクション蔵)

☆〈男の訪い〉男が傘を閉じようと斜めに構える図。大英博物館蔵)

●摺物「遊客の図」(寛政 8 年～享和 2 年〈1796～1802〉)。色摺。無款。20.1×10.9 北斎館蔵)

※遊郭の座敷で横兵庫髻の花魁と寛ぐ男。花魁は男に横座りに寄り添っている。図の左では踊っている禿に何かを差し出している鬨間と思われる男と、立ちながらお盆の物を運ぶ前帯の女が描かれる。座敷の正面にある黒塗りの箆箆に描かれた霞模様から、狂歌グループ・千秋庵三陀羅法師の千秋連による摺物と思われる。北斎が三陀羅法師の撰で狂歌本に関わったのは主に寛政 8 年(1796)の『狂歌聯合女品定』から享和 2 年(1802)『五十鈴川狂歌車』あたりなので、その頃の作品と思われる。

●摺物「凧を持つ子ども」(寛政 11 年～13 年〈1799～1801〉)。色摺。先ノ宗理北斎画。14.0×20.3 北斎館蔵)

※三味線と撥や楽譜を畳に置いて休んでいる女。右手で簪を触っている女の側で、子どもが凧を持ちながら、花の咲く梅の枝を指差している。

●掛幅図「砧図」(寛政 11 年～13 年〈1799～1801〉)。紙本着色掛幅。北斎画。印画狂人。88.2×41.0 北斎館蔵)

●摺物「雪と美人」(寛政 11 年～13 年〈1799～1801〉)。横中判色摺。先ノ宗理北斎画。東京国立博物館蔵)

※上半身裸の女の脇の湯船に、逆様に落ちて足をばたつかせている雷。雷太鼓も落ちてきている。画題については『東京国立博物館図版目録』(昭和 38 年)の表記だが、「雷

と美人」の誤記か。

●摺物「二美人図」（寛政7年～13年〈1795～1801〉）。九切判色摺。宗理画。13.6×18.7
日本浮世絵博物館蔵

※梅の木の前に立つ二人の遊女。二人とも前帯で、一人は格子縞で、もう一人は無地の帯。二人とも顔はふっくらしている。同画題で享和元年から4年に重要文化財の掛幅絹本一幅（MOA美術館蔵）、文化前期に絹本着色一幅（北斎館蔵）にも描いている。

●合作摺物「雪道」（寛政7年～10年〈1795～98〉）。長判色摺。北斎宗理画・花押。山東京伝画。シカゴ美術館蔵

※図右に北斎が描く。雪を被った松の老木の手前で、母娘と下働きの女が遠くを眺めている。図左には山東京伝が、柴木の束を背負った馬の横で、柴木を馬に乗せようとする農夫と、馬の鼻面で柴木を持ち、煙管を銜えて、遠くを眺める農婦を描く。

●摺物「裁縫の母子」（寛政年間〈1789～1801〉）。または寛政10年（1798）か。色摺。宗理画。14.0×18.5 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション

※部屋の中で片膝を立てて裁縫をする母親と、座ってそれを見ている子ども。「佐保姫の霞の衣ぬいあけを おろすやよほど延た日のたけ 分銅重記」の狂歌がある。

●摺物「伸子張」（寛政10年～享和2年〈1798～1802〉）「洗い張り」（「二美人、洗い張り」とも。横大判色摺。宗理改北斎辰政画。24.5×35.1 日本浮世絵博物館/シカゴ美術館/ハーバート大学サックラー美術館蔵

※袋には、人屋根形「へ」の下に「三」の字が書かれている。

物干し台で朱色の反物を伸ばして風に晒している二人の女。その下で芥子坊髪の子どもが布袋と細い棒を持って遊んでいる。物干し竿の先には鯀が吊るされている。物干し台の下には家の瓦屋根が見え、傍には梅の花が咲いている。川向こうの家並みからは、凧が三つ上がっている。



225 伸子張（サックラー美術館）

●摺物「折鶴を持つ美人」（寛政年間〈1789～1801〉）。色摺。北斎画

※梅の咲く庭のある縁側に座り、折鶴の羽を広げている娘。

●摺物「手紙を取り合う母子」（寛政6年～13年〈1794～1801〉）。色摺。宗理画。21.9×18.8 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵

※娘の持つ巻紙の手紙を、娘に覆いかぶさるようにして取ろうとする母親。二人の前には盆に乗せた椀が傾き、その縁に鉢が置かれている。「山をなす長者か庭の梅の花 もつたほどある風のふくなり 花鳥庵春道」などの狂歌が記される。

●摺物「土（正月の準備をする武家婦人）」（寛政年間〈1789～1801〉）。色摺。無款。12.3×8.0 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵

※「土」と図の左上に書かれているが読み方不明。「さむらい」と読むか。『ピーターモース・コ

レクション北斎図録』では副題として「正月準備をする武家婦人」としている。図は、鎧や三方にウラジロ等を飾った部屋に、三方を持って立つ婦人が描かれる。

●摺物「歳の市帰り」（寛政年間〈1789～1801〉。紙本色摺。無款。12.9×7.6 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※歳の市は歳末に、寺社の境内で、正月用の飾りや日用雑貨などを売る市。浅草寺の歳の市が賑わった。図は、正月用の品物が入った籠を背負い、俎を持って歩く男。鉢巻に正月飾りを挟んでいる。隣に御高祖頭巾の女がいる。

●摺物「近郊宮詣子供達」（寛政11年～12年〈1799～1800〉頃か。横長判色摺。先ノ宗理北斎画）

※松の大木の脇の家の窓から、宮参りから帰ってきた子供達を見ている婦人。子供達は狐の面を付けたり、御幣の付いた棒を担いだりしている。手拭を被って扇子を手にした男もいる。

●摺物「母娘」（寛政11年～12年〈1799～1800〉頃か。横長判色摺。先ノ宗理北斎画。18.3×50.2）

※松のある高台で床几に腰を下ろしている母親が遠くを指さしている。その前に立つ振袖の娘。その先では小奴が高台下に咲く花を取ろうと前屈みになって母娘の方に振り向いている。

●摺物「越後獅子」（寛政元年～文化15年〈1789～1818〉。色紙判色摺。無款。21.0×16.6。ペレス・コレクション/フリーア美術館蔵。『美術品所蔵レファレンス事典 日本絵画篇』より）

※鼓を打つ獅子、笛を吹く男、扇で顔を隠す男、二人で獅子を踊る男。

●摺物「梅に笹」（寛政12年～文化9年〈1800～1812〉。横長判色摺。画狂人北斎画）

※右下から中央上に向かって太い幹が三本伸び、根元付近に笹が生えている。その向こうに細い梅の幹が中央下から左上に伸び、枝に花を多く咲かせている。

●摺物「柳の下の籠 午の春」（寛政8年～文化7年〈1796～1810〉。横長判色摺。北斎画。20.7×33.6 北斎館蔵）

※しだれ柳の下に、笠などが天秤の籠に乗せられて置いてある。「午の春」と書かれた下戸茂和頼（不明）の狂歌が添えられる。この絵は「北斎画」の落款のみなので、一応北斎期の作品とした。

●摺物「大子稲荷社」（寛政8年～文化7年〈1796～1810〉。横長判色摺。北斎画）

※「奉納王子」と読める長提灯の下には「富本連中」と書かれた横板が下げられている前を行く女性二人と、赤子を背負う母親がいる。その後ろには風呂敷包を背負う小僧が、鳥もち棹を持った人形を捧げ持って歩いている。女性の前には「御神燈」と彫られた石灯籠があり、その先には桶から流れ出る御手洗がある。この絵は「北斎画」の落款のみなので、一応北斎期の作品とした。

寛政13/享和1 (2/5～) (1801) 辛酉 42 歳 時太郎可候、へたさくしや可候、北斎、画
狂人北斎、北斎宗理、(春朗改群馬亭) 画狂人、ほくさゐ、北、斎：こと (31 歳)、
(富之助：15 歳)、阿美与 (13 歳)、阿鉄 (11 歳、) 阿栄 (4 歳)、多吉郎 (1 歳)

◇相撲興業（3月、深川八幡宮、11月、本所回向院）。

◇7月12日、小沢蘆庵没（79）

◇7月19日、百姓・町人に名字帯刀を禁ずる。

◇9月25日、本居宣長没（72）

○8月、志筑忠雄、ドイツ人、エンゲルベルト・ケンペル（Engeldert Kaempfer, 1690 来日）の『日本誌』のオランダ語第二版の巻末付録最終章を抄訳し『鎖国論』とする。

○小林一茶、『父の終焉日記』。

【次男誕生・父没か】

★次男多吉郎誕生か（年代不明。翌享和2年（1802）頃、本郷竹町（現東京都文京区本郷2・3丁目付近）の商人勘助の養子となったか。さらに御家人加瀬氏の養子となり、名を崎十郎と改めた。娘は白井多知女、孫は白井孝義）。

※「北斎の裔一幕臣白井家の系譜と、その遺品」（2019年。内藤正人『浮世絵芸術』177巻所収）の注3によると「加瀬家が幕府に提出した由緒書の記載によれば、文久元年（1861）5月15日病死とされるが、今回閲覧が許された白井家過去帖には、その前年万延元年（1860）5月9日に51歳で没し、青山千駄ヶ谷の慈光寺に葬られたとある。後者に従えば、北斎息子の崎十郎は文化7年（1810）生まれとなる」と記されている。文化7年の生まれとすると妹の栄（この年12歳）と年齢差があり、後妻ことは41歳の高齢であるので白井家過去帖の記載は疑問視される。

★9月27日、北斎の血縁（あるいは父か。宝暦10年：【北斎の父母・兄妹】条参照）と思われる川村市良衛門（石工・仏師。号佛清）の墓碑が、誓教寺（浅草八軒町。現東京都台東区元浅草4-6-9。北斎の埋葬寺）に建つ。墓碑の表には「元祖佛清」と彫られ、裏面には「享和元年辛酉九月二十七日」とある。同寺過去帳には「忍精信士 九月二十七日 佛師屋清七」とあるという（『年譜』、及び『北斎の研究』p164〈福本和夫 昭和19年7月 北光書房の記事を『日本浮世絵博物館所蔵 北斎』平成5年12月〈読売新聞社〉により転載紹介。p161～162）

なお、北斎の末裔については、内藤正人「北斎の裔一幕臣白井家の系譜と、その遺品」（web）に詳しい。末裔については本稿末尾に【付録】として整理記述する。

★この頃、上野の山下辺（現在のJR上野駅を含む駅前一带辺り）に住む。

※黄表紙『児童文殊稚教訓』に「ふうがでもなくしやれでもなくせうことなしのやましたへんにしやくやずまい」（後述参照）とある。

※洒落本『仇手本』（小金厚丸作）前編第一回〈白拍子〉図の左下にも「風雅でもなく洒落でもなくせうことなしの山の手に 画狂人北斎筆」とあり。山の手は、山下を指すか。

【白猿との交流】

★五代目市川團十郎、引退し白猿と名乗り秋葉神社（現東京都墨田区向島4-9-13）辺りにあった向島庵崎に隠居。北斎この頃より白猿の依頼で摺物や狂歌本の挿絵を描き交流する。

※随筆『古今雑談思出草紙』（「戯場役者市川團十郎家伝の事」の項）には以下のように記される（栗原東随舎著。天保十一年序。『日本随筆大成 第三期』所収 吉川弘文館）。

「(略) 享和元年酉年七月、或人、三圃閑居(筆者注: 先の五代目市川団十郎白猿の隠居を指す)の心をたはれ歌(狂歌)に誦とて、三圃の絵、浮世絵師北斎が書しに讃を望みぬれば 七年以前に世の勤めを捨て、廣さきに通れたる草の庵に、或日、何某の君の音信給ひて、此絹、汝じが隠遁の心を狂歌によめとの仰せに、頓に書付けて奉るのみ 芝居事遁れても又かしましや(筆者注: 芝居をやめても忙しいことよ)松が琴ひく竹の笛 行年六十一歳 反故菴注白猿越書鼻」

注) 反故菴: 本所牛島(三圃)の団十郎の隠居所。隠居後は成田屋七左衛門と称した。

※この年、引退した白猿(市川団十郎)に、北斎が「三圃」の絵を描き、白猿の隠居の心を読んだ狂歌の賛を請うたというのである。

●黄表紙『**兒童文殊稚教訓**』(1月。自画作。莊子「胡蝶の夢」に題材。三冊。画作時太郎可候注。上巻の絵題箋には「辛西北斎画」とあり、最終丁に「画作時太郎可候注1」とある。蔦屋重三郎版 17.3×12.1 大英博物館/東洋文庫: 岩崎文庫注2蔵)

注1) 時太郎可候: 「可候」の前に「時太郎」を付した号

は、黄表紙『**化物和本草**』(寛政10年: 1798)、黄表紙

『**鼈將軍勘略之巻**』(寛政12年: 1800)、黄表紙『**両面**

出世姿鑑』(享和4年: 1804)、黄表

紙『**年男笑種**』(文化元年: 1804)、

咄本『**はなし亀**』(文化元年: 1804)

などにも用いられている。

注2) 岩崎文庫: 東洋文庫は岩崎文庫とモリソン文庫から構成されており、東洋文庫岩崎コレクションという呼称は用いていない。



226『**兒童文殊稚教訓**』「へたさくしや可候」の図

※本文中に「へたさくしや可候」と書いた紙を貼った障子の敷居に肘をかけて、頭巾を被って俯く自画像と次の文を載せる。「可候」を「そろべく」と称している。

「ふうが(風雅)でもなくしゃれ(洒落)でもなく、せうことなしのやました(山下)へんにしゃくやずまひ(借家住まひ)のせけん(世間)しらず、ミずから(自ら)そろべく(可候)となりの(名乗り)、なにひとつとりえ(取柄)のなきぼうづ(坊主)ありて、ふとそうしのげさく(草紙の戯作)をつづり(綴り)しが、もとよりいろはのいのじはみしりごし(見知り越し)なれど、ちりぬるちあく(智悪)もなくならむ、うみのらち(埒)のあかぬうまれ(生まれ)つきないふんべつ(分別)のそこゝをかきぬみて(書き抜いて)、やうやく(漸く)にこしら(拵)へかけがつくりと、きくたびれ(気草臥)しておもはず(思はず)とろとろやらかすおりふし(折節)以下(略)ごろうじまし、ねたかおつきの(寝た顔つきの)やばな(野暮な)ことを へたさくしや可候」

(ルビ・句点・解釈は筆者による。)

●狂歌絵本『**女三十六歌僊絵尽**』(春。角書「**新版錦摺**」。「寛政九丁巳仲冬」とあるが、刊行は本年と見られている。色摺折本一帖。花形義融編。西村屋与八版。大英博物館/

国立国会図書館/キョツソネ・コレクション/ブルジョア・コレクション/日本浮世絵博物館蔵)

※女流歌人三十六人は鳥文斎栄之が描き、女流三十六歌仙の和歌を書道教師の花形義融の門下生の少女三十六人に書かせて一冊に仕上げた書画帖。北斎は見返しに〈公卿と下部〉一図を描く。

☆〈公卿と下部〉(画狂人北斎図。各 25.1×18.7 の二枚続き)

※三人の公卿たちが板橋を渡り、四人の下部が後に付いている。一人は鉄箱を担ぎ、一人は赤子を背負っている。それを三人の子どもが指差して見ている。

227 公卿と下部 (大英博物館)



●狂歌絵本『麓の石』(角書「浅間山」。
『布毛等濃夷詞』とも。一冊。曲木正墨・尚左堂(窪)俊満・北斎宗理画。芝の屋山陽編。
和泉屋市兵衛版 フリーア美術館蔵)

※ARC 古典席ホータルベースでは菱川宗理となっている。

●黄表紙『下界驪鼻落天狗』(三冊。『親譲鼻高名』〈天明 5 年 : 1785〉の改題再摺。春朗改群馬亭画注¹。可笑門人雀声注²作。山口屋忠右衛門版)

注 1) 春朗改群馬亭 : 『親譲鼻高名』の落款をそのまま使用したもの。

注 2) 「雀声」は北斎の戯作名かどうか諸説あり。

●洒落本『仇手本』(前編角書「仕懸幕莫」。後編角書「通神蔵」(享和 2 年刊)。一冊。小金厚丸作。画狂人北斎筆。早稲田大学図書館蔵)。

※『洒落本大成』二十二巻解題では「本書は、刊記・奥付を欠き、序の年季もなく、刊年を決定することが困難であるが(略)、北斎が画狂人を号したのは寛政十二年から文化五年の間であり、北斎号は寛政九年から文政二年までである。小金厚丸の洒落本が寛政末年から享和初年に集中していることとあわせて、ここでは従来の説にしたがって、いちおう享和元年刊としておく」としている。

『年譜』では「棚橋正博氏は、本書の版元を藤白屋太兵衛と推定される」とし、『日本書誌学大系 48 (3) 黄表紙総覧 後編』棚橋正博(青裳堂書店 平成元年)を資料としている。

※「忠臣蔵」を題材にしたもの。前編は初段～六段までを扱う(各段は回と表記)。後編(享和 2 年 : 1802 刊)は七段から十一段までの内容を扱う。

※北斎は以下の挿絵を描く。

前編 第一回〈白拍子・香保世〉(この挿絵に「画狂人北斎」の落款あり)。第二回〈若狭屋助七〉第三回〈遠州屋半兵衛〉。第四回〈大星屋由良之助〉。第五回〈舟宿・早野屋勘平〉。第六回〈侠通左佐〉。

228 後編「通神蔵」第七回香留川(早稲田大学図書館)



後編 第七回〈香留川〉（この挿絵に「画狂人北斎」の落款あり）。

第八回〈女中・於奈勢〉

第九回〈魚作・多古川〉。第十回〈妓子屋・儀平〉。第十一回〈高野屋・直右衛門〉。

●錦絵『（摺物風）江戸名所絵』（〈亀井戸開帳〉）の画があり、亀戸天満宮開帳が享和元年という考証があるので、享和元年頃の作と考えられる。従来は享和年間と幅があった。横大判錦絵揃物。無款。版元不明）

※13 図以上存在すると考えられている。従来、各画は独立して扱われていた。

☆〈上葦〉（印画狂人。24.6×38.4 太田記念美術館：長瀬コレクション/ベルギー王立美術歴史博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※不忍池を南岸からとらえた図。蓮の広がる池の端を木綿売り注の行商の若い男が扇を手にして一家の前を通り過ぎ、それを振り返る娘と傘を持つ母親。さらにそれを見る笠を被った小奴の図。

注) 高荷木綿売りと思われるが、寛政末年には見られなくなったという。「モウメンヤ、モウメン」の売り声で、化政期には一反五匁～12 匁、銭では 400 文～1000 文(約 10,000 円～25,000 円で売っていたらしい(『浮世絵八華 5 北斎』)。高荷木綿売りは、一反の木綿を高く積み重ねて背籠を背負い売り歩いた。

☆〈王子〉（印画狂人。26.5×39.0 島根県立美術館：永田コレクションシ/カゴ美術館/ベルギー王立美術工芸博物館蔵）

※杉の木の下で藁束に挿した名物の暫狐注を売る女と、子を背負った婦人ともう一人の女。その前には魚獲りの網と笊を持つ子どもと、水を入れた桶を持つ子どもが描かれる。

注) 暫狐：王子稻荷の土産物で、紙で狐の顔を象ったものを細い棒に付けた縁起物。

☆〈两国夕涼〉（印画狂人。24.4×36.4 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※河口に突き出した板の上で遊ぶ二人の子ども。その側で年増と若い女と娘が団扇を持って、稻妻（花火の軌跡とする説あり）を指差している。側の年増は団扇を下げ持って、右手を口元に宛てている。図左に两国橋。対岸に材木が林立しているのは豎川辺りか。



229 两国夕涼み（島根県立美術館）

☆〈今戸川〉（25.1×38.5 島根県立美術館：永田コレクション/東京国立博物館/メトロポリタン美術館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※今戸は、現東京都台東区山谷掘の今戸橋から法源寺辺までの隅田川沿いの地。瓦や今戸焼きと呼ばれる土器の人形を造る職人が多くいた。図は二人の職人が瓦や獅子を乾かしている様子を描く。⊕と焼かれた瓦も干されている。背景に隅田川に浮かぶ舟。

☆〈亀井戸開帳〉（印画狂人。24.9×35.9 ベルギー王立美術歴史博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/オランダ国立民族学博物館蔵）

※**亀戸天神開帳**を示す**赤い提灯**が掲げられている池のほとりを、見物の主従が通りすぎている。**揚帽子**（角隠し）をかぶる武家の母娘たちの後から付き従う者のうち、こちらを向いている下女がいる。池の上の**藤棚**から藤が咲き垂れている。

※**斎藤月岑**の『**武江年表**』に享和元年条に「三月十八日より十五日の間、浅草寺**観音開帳**○**亀戸天満宮開帳**○**目黒不動尊開帳**」とある。

230 亀井戸開帳（すみだ北斎美術館）

☆〈**江之島**〉（25.5×37.0 太田記念美術館：長瀬コレクション/シカゴ美術館蔵）

※前方に**江ノ島**を見る海岸を、**手綱**を牽く牛飼いと牛に乗った**女旅人**と**天秤**の荷物を運ぶ**供の男**たち。その側を**笠**を被った**女旅人**が二人並んで歩いている。



☆〈**すみたかハ 渡の雪**〉（仮題。印北印斎。24.0×36.6 すみだ北斎美術館/日本浮世絵博物館蔵）

※**三囲稲荷**下の**竹屋**の**渡し**といわれる**栈橋**に立つ二人の女。一人は大きな**蛇**の**目傘**を開き、もう一人の女と傘に入っている。側に立っている**供の男**も大きな傘を開いて立っている。川には船が二艘浮かび、遠景に続く土手には雪が積もっている。

☆「**蟻通神社**」（「**蟻通明神**」とも。25.2×37.2 島根県立美術館：永田コレクション/ベルギー王立美術歴史博物館/ミネアポリス美術館・ゲールコレクション蔵）

※**謡曲**「**蟻通**」に取材。**紀貫之**が和泉国**蟻通明神**前を通ったとき、馬が突然倒れたのは**明神**の祟りと告げられ「**かき曇りあやめもしらぬ大空に ありとほしをば思ふべしやは**」

と詠んで神を慰めて無事に通ったという話に取材したもの。図は、大きな傘で雨を防いで馬に乗る貫之とその周りの**供の者**たちが、**明神**の前を通過しようとしている。



231 蟻通神社（島根県立美術館）

※『**秘蔵浮世絵大観 9**ベルギー王立美術館』では、この作品も（摺物風）『**江戸名所絵**』（享和1年）に含まれているが、この絵だけが古典に取材しているので、あるいは他の揃物かとしている。

●摺物「**鶏に餌をまく神人**」（「とり」と読むか。1月。北斎画）「**とりの初春**」とある。玉樹軒千枝人の狂歌が記される（『年譜』による）。

●摺物「**笠に摘草**」（正月。「**笠 蕨 土筆**」「**笠に蔬菜**」とも。全紙版色摺。画狂人北斎写。全体 36.0×52.2 画部分 18.0×52.2 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵。画部分のみは東京国立博物館蔵）

※上部に画、下部に狂歌が反転して書かれる。裏返した笠に摘み草が乱雑に置かれ。笠の外にも**土筆**などがこぼれ出ている。図中に「**辛酉春**」とある。「**辛酉**」の年は「**辛酉革命説**」と言われる迷信から享和に改元された。

本図は「**画狂人北斎**」の落款の初出と言われる。一方、寛政12年（1800）「**扇面 富士**」

図)に画狂人北斎の落款が記されているが、作画は寛政12年以降とも見なされている。また、本年の洒落本『仇手本』前編一回と後編七回の挿絵に「画狂人北斎」の落款がある。

●摺物「月を見る母子」(「月夜の母子」とも。横中判色摺。画狂人北斎。19.8×26.9 八人の狂歌集。東京国立博物館蔵)

※松の木で子どもを抱きあげ月を見る親子。子どもは月を指差している。側には萩の花が咲いている。図の左半分には、浅草庵市人を含む八人の狂歌が記されている。

232 月を見る母子 (部分：東京国立博物館)



●絵暦「床几の男女」(色摺。摺物。北斎画。9.2×12.7 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※床几で休む男は煙管を銜え、女は立膝で休みながら足元の鶏を見ている。中国語で「鶏(ji)」と「吉(ji)」の発音が似ていることから、鶏は縁起のよい動物とされる。提灯に描かれた松(正月)、桜(三月)、柏(五月)、七つ星(七月)、月(八月)、十字型のかすり(十月)、雪(十二月)などで大の月を表している。

●絵暦「十千の内」(色摺。小判。画狂人北斎(「画」字なし)。すみだ北斎美術館蔵)

☆〈小松引き〉(14.5×19.2 すみだ北斎美術館蔵) 小松引き注をする女の後ろから抱きついて一緒に引く子ども。その側の松の木に抱きつきながらその様子を見ている二人の女。注) 小松引き：平安時代、正月最初の子の日に野山に出かけ、小松を引いて長寿を願った。

☆〈千金の春〉(14.0×18.7) 千両箱の重なる部屋で、男女の前に千両箱を差し上げる袴の男。

●絵暦「年中行司 木娘小之月」「年中行司 北之方大関」「年中行司 辰巳ノ方大関」(1月。小判錦絵三枚続き)があるという(『日本版画美術全集 第五巻』檜崎宗重)〈『年譜』による)。

●絵暦「酒宴の男女」(12.4×20.4 すみだ北斎美術館蔵)

●絵暦「娘と大黒」(13.1×18.1 すみだ北斎美術館蔵)

●絵暦「鶏を抱く子ども」(「とり」と読むか。大小摺物。色摺。無款)



●摺物「黒塀」(「子供に乳を飲ませる母図」とも。墨摺・色摺。無款。細判)

※母親の帯に「酉春」(享和元年)とある。泉楼のと女と近江楼三義の狂歌が記される。子を抱いて乳を飲ましながら黒塀の前に立つ若い母親。原画が色摺かは未見。

右図「子を連れて梅見ル空の～」の句のある絵は、俵屋宗理・ハーバード大学蔵とされるが、句は後から書き加えたものか。享和元年は宗理号を譲った後なので宗二の作との見方もある。233 黒塀 (左：立命館大学 ARC より 右：ハーバード大学)

●摺物「牡丹図」（11月頃。色摺。画狂人北斎画）

※市紅（四代目市川団蔵の俳名。1745～1808）の大坂・河原崎座顔見世興行（10月予定）をやむを得ない事情で延期することを告げた摺物。「枀からの顔見せにけり紅牡丹 市紅」の句が記される。団蔵は主に上方で出演したが、寛政10年（1798）から享和2年（1802）までは江戸で出演、その後は上方を中心に活躍した。「枀」は市川家の三升紋を指す。

●摺物「雪の鶏と遊女」（狂歌摺物。色摺。画狂人北斎画 19.2×12.8）

享和2(1802)	壬戌	43歳	画狂人北斎、画狂人北斎、北斎辰政、北斎、 印 北斎、辰政
政：こと（32歳）、（富之助：16歳）、阿美与（14歳）、阿鉄（12歳）、阿栄（5歳）、多吉郎（2歳 養子に出る）			

◇2月26日（西洋暦）、ビクトル・ユゴー生（～1885）。

◇5月9日、曲亭馬琴、江戸を出発、山東京伝の紹介を持って京都・摂津を遊歴。

◇6月27日、四代目松本幸四郎没（66）。

◇7月24日、アレクサンドル・デュマ生（～1870）。

◇7月18日、唐衣橋洲没（60）。

◇相撲興行（2月、神田明神、11月、本所回向院）。

◇オランダ商館江戸参府。

◇富士講禁止令（禁止令は寛保2年〈1742〉、安永4年〈1775〉、寛政7年〈1795〉、享和2年〈1802〉、文化11年〈1814〉、天保13年〈1842〉、嘉永2年〈1849〉と何度も出されている）。

◇江戸山谷に料理店八百善が開店（現神奈川県鎌倉市十二所33-2）。

○春、十辺舎一九、『東海道中膝栗毛』（初編。文政5年〈1822〉までシリーズ化）。妻「民」を迎える。

○山東京伝『浮世絵類考』に追考を加筆。

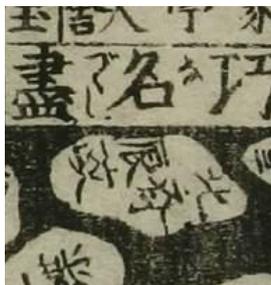
★式亭三馬『又焼直鉢冠姫 稗史億説年代記』

下巻（西宮新六版）に

「北斎独流の一派をたつ」と記される。

※同書で当時の浮世絵界を凶示（倭画功名尽）している。北斎は凶中央

上部に「北斎辰政」として、独立して記される。



234 浮世絵界図（『又焼直鉢冠姫 稗史億説年代記』所収）

★この頃、次男多吉郎、本郷竹町の商人勘助の養子となる。後に御家人加瀬氏の嗣子となり、名を崎十郎と改め跡目を継ぐ。俳号：椿岳庵木峨。

★この頃よりオランダ人に素描を売っていたといわれる。

●洒落本『仇手本 通神蔵（戯）』後編（七段目～十一段目）。前編はあるいは享和元年

に同時刊行か。各一冊。小金あつ丸作。画狂人北斎筆。15.8×11.9 大阪大学/国立国会図書館：前後合冊判蔵）⇒享和元年（1801）『仇手本仕懸莫幕』前編条参照。

※藤白屋太兵衛版か（『日本書誌学大系 48(3)黄表紙総覧 後編』棚橋正博〈『年譜』出典文献〉で紹介）

●狂詩本『潮来絶句集』（正月か。文化元年：1804 説あり。中本色摺二冊 33 丁。合本一冊。全 16 詩 16 図。北斎唯一の全て見開きの美人画集である。後、一冊に合本され、後半に曲亭馬琴の『潮来曲後集』（著作堂馬琴述）が収められた。富士唐曆（藤堂良道）の狂詩、柳亭陳人の編集の五言絶句編。画工の署名なし。但し『世界を魅了した鬼才絵師葛飾北斎』（河出書房新社 2016 年）では「葛飾北斎画」としている（P60）。二代葛屋重三郎版。19.4×13.7 北斎館/早稲田大学図書館/仏・ベレス・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/東京文化財研究所/日本浮世絵博物館蔵）

※潮来節注に合わせた狂歌と、それを五言絶句の漢詩にし、北斎が美人画（潮来の遊女）を描いたもの。わらい絵に似て彩色摺のため出版取締令により版木は壊して絶版となり、残本は焼き捨てられた。現在では稀観書の一つという（『浮世絵八華 5 北斎』所収、永田生慈「北斎の生涯」）再刻本『絵本潮来廻囃子』（版年不詳）あり。

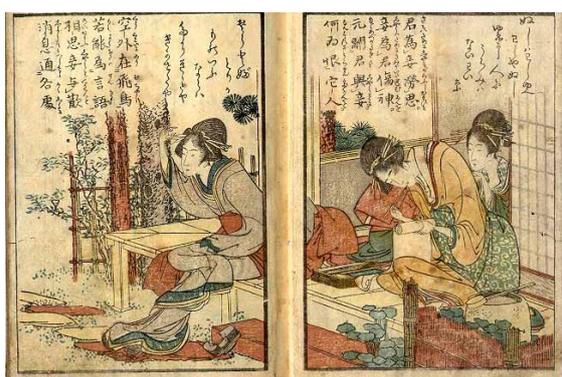
※文化 13 年(1816)『老婆心話』藤堂良道著（富士唐曆・如蘭亭主人）に次の記事がある（石川巖「『潮来絶句集』の絶版と其作者」〈「浮世絵」33 号〈大正 7 年 2 月刊〉に所収の藤堂良道の記事を『年譜』資料 10 で紹介）。

「此潮来歌の詩を作りしは余が至って若かりし時のことなり、此をもてすれば早廿五六年の昔なるべし。或時新吉原仲の町難波屋とかいへる茶屋に於いて、歌妓共多く集め遊べり。其冠たる妓には重妓遊妓など頗るみめもよきあり、潮来歌を代る代る唄ふ。其時東堤割注：谷文晁の弟安五郎と云、東江門人にて書を善くす 席にありて申さく、今歌妓の唄ふ潮来節てふものを、君、詩に作り給へ、やつかれ筆を執るべし、余も興に入て作り出しぬ、（略）其頃、書肆葛屋重三郎早くも聞て、北斎といへる画工に美人の姿を其歌に寄せて描せ、其の新板に売出し、数千（割注：千は百の誤か）部の本を估りひろごりて、利益を多く取りし由、然れども其頃は彩色摺、笑ひ面に似よれるものは禁じられぬ。かく美しき彩色なせる本は如何と御答め割注：葛屋の番頭忠兵衛召し出され、誰か此作を成せるとの御答に、私こと作り申候と申上たれば、役人申さるゝには、その方は本屋の番頭ほどあり、かくまで詩を作りしそと被申けると也。余が作と言はぬ故に夫なりにして、忠兵衛手かねにて事済みたれば、余が名包みかくれしなり。夫より断然として戯作を止ぬるなり。（略）文化十三年九月十日夜半灯火に誌す 如蘭亭主人」

これによれば、漢詩は藤堂良道（如蘭亭）が作ったが、華美な本のため御答めがあり、葛屋の番頭忠兵衛が呼び出されたが、詩は自分が作ったとし、藤堂良道の名は出さなかったというのである。

注) 潮来節：常陸国潮来村（現茨城県潮来市）で歌われたものが、遊里でも唄われるようになり、全国に流行した。

※見開き一図で左右のページに潮来節が七・七・七・五音（都々逸の旋律に同じ）で以下のように図とともに記される。



●236☆右図「あふたゆめミてわろふてさめる あたりミまはしなみだぐむ」
 ☆左図「しばしあはねバすがたもかほも かわるものかよこゝろまで」



●238☆右図「なんぼおまへがうわきじゃとても しんにほれたがしれぬかへ」
 ☆左図「くるかくとゆふつげどりの とぶをながめてしあんがほ」

●狂歌絵本『春の戯歌』（享和元年とも。1月。私家版。一冊。14.2×20.1 北斎は「福寿草に扇」一図のみを描く。画狂人北斎画。便々館湖鯉鮒編。琵琶連版。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※他に、武川亭永鯉（鳥橋斎永理）や北溪（表紙画）が描く。

☆〈福寿草に扇〉横長見開き2丁の画。染付の花器に植えられた黄色の福寿草と扇の図。『肉筆画帖』（天保5年頃：1823）にも同題の絵を描いている。

●狂歌絵本『画本忠臣蔵（内題：忠臣蔵役割狂歌）』（1月。二冊。桜川慈悲成作。北斎辰政画。西村屋与八版。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※フリーア美術館：プルヴェラー・コレクションに多色摺で、図帖最後に「画狂人北斎画」とある同題の絵本がある（20.8×15.5「フリーフリーア美術館ゲルハルト・プルヴェラー・コレクション日本絵本コレクション目録稿」による）。狂歌が巻末に収められている。

※本書下冊の最終挿絵中に「画狂人北斎戯画 印」とあり、また、慈悲成の序文には「画狂人北斎」とある。本書は文政7年(1824)の墨摺本もあるという（『年譜』による）。

☆〈松切り〉「仮名手本忠臣蔵」二段目。桃の井若狭之助が師直に対する殺意を家老の加古川本蔵に明かす。主人の意を汲み本蔵は松の枝を切り落として賛同の意を示す場面。

●235☆右図「ぬしハわしゆえわしやぬしゆゑに 人にうらみハないわいな」
 ☆左図「そらとぶとりがものいふならば たよりきゝたやきかせたや」



●237☆右図「ゆふしごげんでうれしいけれど なまじあしたのものおもひ」
 ☆左図「ぬしのこぬよハはやねてゆめに おふておもひをはらしたや」



「松切りの場面」。隣の部屋で様子を窺う本蔵の娘こなみ。

☆〈母娘道行〉「仮名手本忠臣蔵」八段目（道行旅路の嫁入）の場面を描く。山科に住む大星力弥に嫁入りするため、加古川本蔵の女房戸無瀬が娘小浪をともなつての道行場面。角隠を被った母親と振袖姿の娘が手を繋いで歩いている。この画趣は、寛政 10 年頃の『新板浮絵忠臣蔵』（横間判。伊勢屋利兵衛版）や文化 3 年（1806）の『仮名手本忠臣蔵』（横大判。鶴屋金助版）でも描いている。

●絵本『北斎忠臣蔵』（『画本忠臣蔵』の狂歌部分を削除し絵だけを抜き出して再編集したもの。半紙本一冊。画狂人北斎戯画。西村屋与八版。国立国会図書館蔵）

【全図を描いた唯一の帖装狂歌絵本】

●狂歌絵本『美やこ登里』（『みやことり』『美やこどり』『都鳥』とも。色摺半紙本折本一帖。全 23 図。見開きの図。朱楽管江の流れをくむ春江亭梅麿らの狂歌師による撰。画狂人北斎。彫刻：安藤鍋次郎。各平均見開き 24.0×37.0 丸屋甚八版。全 23 図の完本は、島根県立美術館：永田コレクションとシカゴ美術館。他は、オランダ：ライデン国立民族学博物館/ベレス・コレクション蔵）

※奥付に「享和二壬戌歳正月」「画工画狂人北斎」とある。

※『伊勢物語』の第九段「東下り」で詠まれた和歌「名にし追はばいざ言問はむ都鳥 わが思ふ人はありやなしやと」に因んで、隅田川を挟んで、浅草・本所界隈の風俗を題材にする。

全 23 図全てを北斎が描いたのは帖装の狂歌絵本として唯一のもの。『絵本 隅田川兩岸一覽』とともに狂歌絵本の佳作とされる。全体に黄味がかかった地の色に淡く彩色されている。

画題は記載された狂歌の意味からのもの。

☆〈洲崎〉「洲崎弁財天」の道標のある場所から、水平線に朝日が昇るのを眺める婦人や男達。洲崎弁財天は品川と深川にあるが、深川洲崎の図であろう。「すさき」と読む。初日の出には前夜から人が出て、境内には飲食の屋台が出て賑わったという。

☆〈佃島〉碇の置かれた浜辺で箆を持った婦人たちと子どもが、漁船の底に付いた貝類を火であぶって取ろうとしている漁師を見ている。

☆〈梅屋舗〉亀戸の梅屋敷の茶店で休む男と女。梅を見に来た旅姿の武士が二人。一人は頭に手をやり梅に感心している。

☆〈螺堂〉曹洞宗の羅漢寺（現東京都江東区大島3-1-8）の螺旋階段の三階の螺堂からは富士山が眺められる名所であった。図は、堂の見晴らし台から富士山を眺める男女や、疲れて座り込む僧が描かれる。富士山は描かれな

い。明治 42 年に目黒に五百羅漢寺（現東京都目黒区下目黒3-20-11）として移転した。

☆〈三囲〉 239 三囲（島根県立美術館）
三囲神社（現東京都墨田区向島2-5-17）の土手

の下に見える石の鳥居の屋根の側でくつろぐ男



女や子ども。空になった酒の角樽をかつぐ侍と、扇子を口に当ててなにかを唄う侍。その後ろから荷物を背負った小僧がついて行く。

☆〈首尾の松〉蔵前の隅田川のほとり（現東京都台東区蔵前1-3 辺）にあった松で、枝が川面にかかるように垂れていた。吉原通いの舟の目印となったという。寛永年間（1624～43）、隅田川が氾濫したときに、に、謹慎中の阿部豊後守忠秋が、三代將軍家光の見ている前で進み出て人馬もろとも川に入り、対岸に辿りついたので、家光から謹慎を解かれたという伝説から首尾の松と呼ばれるようになったという。吉原通いの客がこの松を見て、妓楼で首尾よくいくようを祈ったという俗説もある。現在も七代目の首尾の松が、蔵前橋の西詰め下流側のたもとに碑とともにある。図は、対岸の首尾の松を眺めながらそぞろ歩く三人の婦人と供の男が描かれる。

☆〈両国〉隅田川の岸辺の縁台でくつろぐ女と、台の上ではしゃぐ子ども。その側に立っている女。何かを唄っている侍二人と、肩に折り箱を重ねて担ぐ男。

☆〈関屋の里〉関屋の鄙びた家の前で馬の足を盥で洗う農夫の側で、子どもと一緒に蚩狩りをする農婦は、鍬を手にしている。関屋は、現在の東京都足立区千住仲町から千住関屋町付近を指す。隅田川に接し桜も美しい場所として知られた。

☆〈真崎稻荷〉浅草寺北の隅田川沿いにあったと思われるが、現在では真先稻荷として、大正 15 年（1926）に、白髭橋西側の石浜神社（現東京都荒川区南千住3-28-58）に移されている。図は、茅の輪くぐりをする親子を祀る御幣を手にした折烏帽子の男や、赤子を背負って参詣しようとする婦人と娘を描く。茅の輪くぐりは 6 月に夏越の祓として、無病息災を祈願して行われる神事。

☆〈浅茅ヶ原〉秋風に着物の裾を靡かせ、手で押さえながら歩く婦人が二人。その先には笠を被り鉦叩きの男の僧衣も靡いている。浅茅が原の往来の風景。背景には富士山が見える。

浅茅が原は、一般的には荒れ果てて淋しい場所の総称だが、ここでは浅草寺北東部の橋場町辺りと思われる。近くの鏡が池には、遊女が悲恋の末に身を投げた池ともいわれ、姥ヶ池には、娘を遊女に仕立てた母親が、娘の相手を殺して金品を奪って生計を立てたことを娘が悲しみ、自ら男装して母親に殺されたが、そのことを悔やんだ老母はこの池に身を投げたという伝説もある。いずれにしても、茅の広がるもの寂しい場所であったようだ。

姥ヶ池は、現東京都台東区花川戸2-4（花川戸公園内）にあった。240 浅茅が原（島根県立美術館）



☆〈中洲三股〉中洲は、日本橋中洲のことで、日本橋南東に位置する。隅田川の清州橋の西詰で、元は川が三方に分れていた地点で三股（三つ股・三俣・三派とも）と呼ばれた。江戸中期には埋め立てられ中洲新地として遊興客で賑わったが、洪水の影響で寛政元年（1789）に取り壊され、元の浅瀬に戻った。月の名所としても有名。

図は、月を鑑賞する屋根船の客が船端から桶の中の物を川に流して、もう一人が手を伸ばして紐に付けた箱を川面に下げている。河岸では夕涼みを楽しみ、そぞろ歩く二人の女と、酒徳利をぶらさげた供の男がいる。

☆〈あや瀬村〉鄙びた綾瀬村の畑に、手桶から水を撒く農夫。鋤を担いで手桶を持つ農婦。天秤の桶を担ぐ農婦と通りかかる旅の男。夕暮れに雁が群れて飛んで行く。綾瀬は、現東京都足立区綾瀬一帯及び、隣接して葛飾区にも南葛飾郡綾瀬町があった。

☆〈待乳山〉隅田川を眺望する夕暮れの待乳山の茶店で、縁台に腰掛け煙管を銜えてくつろぐ旅人に、茶を盆に乗せて運ぶ娘。紅葉が咲く向こうには、川に浮かぶ舟が二艘描かれる。待乳山は、待乳山聖天（現東京都台東区浅草7-4-1）の周辺の地を指す。小高い丘で、風光明美な所として人気があった。

☆〈駒形堂〉駒形堂（現東京都台東区雷門2-2-3）は、隅田川の駒形橋の傍らにある。浅草寺の本尊である観世音菩薩が推古天皇 36 年（628）にこの地に現れたことで、天慶5 年（942）建てられた堂といわれる。この側の船着き場に着いた参詣人は、まず駒形堂の本尊を拝んでから浅草寺に参拝した。4月19日に、年一回の大祭が行われる。

図は、駒形堂の船着き場から渡し舟に乗っている人々を描く。艀を操る船頭と舵をとる船頭の横には、波しぶき除けに大きな蛇の目傘を開き、その陰にいる女が二人。隣には笠に手をやり女と顔を見合わせていると思われる男。舳先には畳んだ傘を肩にして立ちながら進む先を眺めている男などが描かれる。

☆〈秋葉〉秋の落葉を熊手で描き集める母子と、繋がれて台の上にいる猿に餌をやる神官の図。秋葉は、火除けの神として信仰された秋葉大権現社（現秋葉神社：現東京都墨田区向島4-9-13）と思われる。紅葉でも有名。

☆〈梅若〉梅若は、梅若伝説に縁のある隅田川沿いの木母寺辺りを想定した図。京都の比叡山で修行中の梅若が人買いに騙されて隅田川の木母寺（現東京都墨田区堤通2-16-1）辺りまで来て夭折し、この地に葬られたところ。後に梅若を捜していた母親が、ここで我が子の弔いに遭遇したという。図は、雪の隅田川沿いの路を笠を被って鋤を天秤棒の先に付けて行く農夫と、笠を被り合羽を着て、藁に包んだ魚を手にした男の側に、御高祖頭巾の女が傘を閉じて立っている。



241 梅若（島根県立美術館）

☆〈浅草歳の市〉年の市の賑わいを描く。老木に立て掛けるように積まれた祝い酒の樽がある高台の下には、「寿」と書いた酒樽を担ぐ男や、正月の縁起物を持つ人々でごった返している。

☆〈妙見の松〉柳嶋の妙見山法性寺（現東京都墨田区業平5-7-7）は、北辰妙見大菩薩により北斗七星を祀る開運の寺として信仰された。妙見堂の前には妙見が降臨したと伝えられる周囲2m余りの影向松がある。日蓮宗の寺で、北斎が信仰していたことで知られる。

図は、根元を丈の低い柵で囲まれた太い影向松。その柵には白蛇を描いた絵馬が掛かっている。その脇には鍬を抱えてしゃがんでいる男がいる。松の手入れでもした後だろうか。松の垂れた枝の側には、婦人と娘と子どもが立っている。

☆〈一の橋〉隅田川から入って豎川に掛かる一つ目の橋なので一の橋と名づけられた。一の橋弁天があり、参拝者で賑わった。

図は、一の橋の下で釣りをする二人の女と、桶を抱える子ども。両手に竿を持って釣りをする男と、竿を置いて小さな樽に腰掛けている男。橋桁が太く描かれ、その向こうに富士山が見える。

☆〈今戸〉今戸は、瓦等の焼き物が有名な所。図は、竈に杉の葉をくべてこれから火を起し、焼き物を焼く準備をしているところ。鍬を持って竈を塞ぐ用意をする男や、これから焼く瓦を肩にして持っていく子どもと、職人に茶を持っていく女がいる。

☆〈日本橋〉図の手前には、擬宝珠のある日本橋の上を、魚河岸からの魚を入れた笊を担ぐ男や、天秤棒の先に下げた笊に入れた魚を運ぶ男。荷を背負った行商の男や職人の側で、欄干から隅田川を見る袴姿の侍などの上半身が描かれる。遠景も櫓と屋並みが小さく描かれる。



242 日本橋 (オランダ：ライデン国立民族学博物館)

☆〈石場新地〉深川の花町(岡場所)七場所注の一つ。越中島の一部で、幕府の石置き場があった。図は、三味線箱を抱えた芸者ともう一人の女が、路上で魚をさばいている魚屋の前を通ろうとしている。図の右側には、四角く切り取った石がかさねてあり、掘割に置かれた竿にかけた漁網の先が見える。

注) 七場所：深川花街の七つの岡場所。仲町、新地(大・小)、石場、(古・新)、櫓下(表・裏)、裾継、土橋、佃をいう。

☆〈吉原〉妓楼の廊下に行く、仕懸け(打掛け)を着た二人の花魁を、同じ廊下で品定めをするように見る旦那と幫間。箱提灯を持つ案内の男もいる。

●狂歌絵本『五十鈴川狂歌車』(1月。角書「五拾人一首」内題は「風流五十人一首五十鈴川狂歌車」。大本一冊。画工北斎辰政。千穂庵三陀羅法師撰。富士唐丸(唐曆：藤堂良道・如蘭亭)編。鳥屋重三郎版。島根県立美術館：永田コレクション/国立国会図書館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/大英博物館蔵) ※序文に「とりのとし初春」とある。各ページに、〈屋職堅丸・金砂如蘭〉など仮装した狂歌師50人の狂歌を百人一首風に描く。



243 『五十鈴川狂歌車』屋職堅丸・金砂如蘭 (立命館 ARC)

●狂歌絵本『同風集』(一卷。画狂人北斎・礪川亭永鯉(鳥橋斎栄里)画。節松嫁々注序) 注) 節松嫁々：朱楽菅江の妻。本名ちか。菅江没後、その社中をまとめ指導した。

●狂歌絵本『**狂歌萩古枝**』（4月12日の**桑楊庵頭光七**回忌追善集）（六巻。浅草庵市人編）

「月俵屋宗理（あるいは二世宗理か）花とちれ雪をしらけよ秋の夜は ちからまかせの米のつき影」とある。

●狂歌絵本『**画本東都遊**』（大本三冊。合本は一冊。寛政11年（1799）の『東遊』（大本一冊。墨摺）の北斎挿絵を抜き出し、北斎の監督のもと彩色した改題・改修本。絵の順番は変えてある。見開き20図と半丁（1ページ）9図。奥付には「画工北斎 筆工六蔵亭、彫刻安藤円紫」とある。袋には「画狂人北斎筆 印北斎」とある。浅草庵市人撰。オランダ人の江戸宿泊所「長崎屋」の画あり。葛屋重三郎版。早稲田大学図書館/大英博物館/島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/国立国会図書館/東洋文庫：岩崎文庫/オランダ国立民族学博物館蔵）。前川善兵衛（大坂心斎橋通）の後摺『**絵本東都遊**』がある。版木はボストン美術館に所蔵されている。

☆上巻 〈芝神明宮 春景〉 〈日本橋〉 〈飛鳥山〉 〈隅田川春雪〉 〈待乳山〉 〈請地松師〉 〈梅屋敷〉 〈牛島 中田屋〉



244 芝神明宮（早稲田大学図書館）



245 日本橋（早稲田大学図書館）



246 隅田川春雪（早稲田大学図書館）

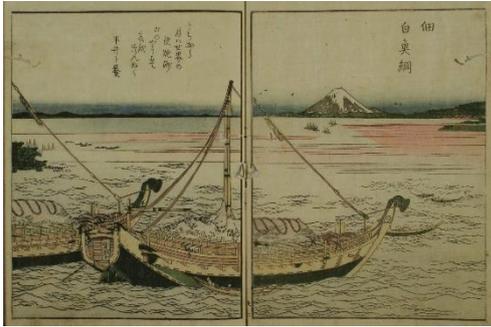


247 待乳山（早稲田大学図書館）



248 梅屋敷（早稲田大学図書館）

☆中卷 〈無題（小町桜）〉 〈日暮里〉 〈上野〉 〈佃 住吉社〉 〈佃 白魚網〉 〈品川 汐干〉 〈浅草祭〉 〈新吉原〉 〈浅草葦市〉 〈鑑匠〉



249 佃白魚網（早稲田大学図書館）



250 品川汐干（早稲田大学図書館）



251 新吉原（早稲田大学図書館）



252 鑑匠（早稲田大学図書館）

☆下卷

〈浅草海苔〉 〈王子稻荷社〉 〈王子海老屋〉 〈駿河町 越後屋〉 〈十軒店 雛市〉 〈無題（長崎屋）〉 〈元結匠〉 〈三囲神社〉 〈無題（神田紺屋）〉 〈今戸里〉 〈絵草紙店〉



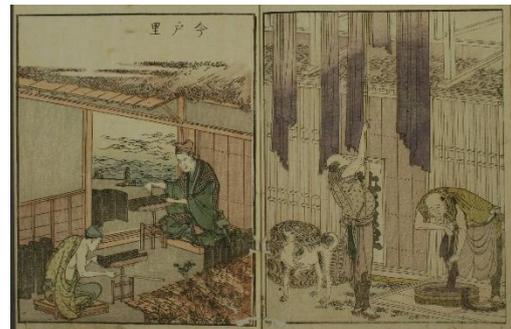
253 三囲神社（早稲田大学図書館）



254 十軒店雛市（早稲田大学図書館）



255 駿河町（早稲田大学図書館）



256 今戸里・無題：神田紺屋（早稲田大学図書館）

●肉筆画「富士図」（「富士と老松」「松に富嶽図」とも。絹本着色一幅。北斎画。印辰政。29.4×53.7 日本浮世絵博物館蔵）

※図右に松の老木が富士の右側の稜線に沿うように、墨絵風に描かれ、その遠景に富士を描く。富士の中腹には青が縦に引かれて着色される。

「遠く眺にこころ深く ちかき響きに
耳を洗うと たとき（貴き）をしえも
夏にありて 寿しさや 山うごかし
て 松風 七十老 文来庵」の賛がある。
文来庵（雪萬：俳諧師）の七十歳の
新年を祝う図。



257 富士図（日本浮世絵博物館）

●肉筆画「立美人図」（着色一幅。無款）

※後ろ帯を下げている娘の着物は墨絵風に描く。帯の下に朱色の横線が引かれている。背をそらすように立つ娘の体を包むように、白色が描かれているのが特徴的。

●肉筆画「傘持ち美人図」（着色一幅。無款）

※島田髷で前帯の女が、閉じた蛇の目傘を左手に持ち、高下駄を履いて雪道に佇む。背後に雪を被った柳が描かれる。山東京伝の狂歌がある。「柳下傘持ち美人図」（寛政8年頃：1796）や「雪中傘持ち美人図」（文化10年：1813～文政2年1819）など同趣もある。

258 傘持ち美人図（Kindle版「北斎大全 第二巻 宗理期」による）

●錦絵「傘持ち美人に小姓図」（色摺。画狂人北斎画。印不明）

※柳のある道で、だらりの帯を締め、高下駄を履き、蛇の目傘を閉じて持ち、肩に布を巻き、端を首の前でつまんでいる。側に風呂敷包みを背負った小僧が立っている（Kindle版「北斎大全 第二巻 宗理期」による）。

●摺物「角隠しする芸妓」（色摺。画狂人北斎画。13.9×18.7 北斎館蔵）

※芸妓たちが佇んでいる。左の芸妓は振袖姿で角隠しを被っている。右の芸妓の後ろには風呂敷の荷物を持った小僧がいる。図右上に「戌」の文字が記されているので、この歳作品と思われる。



●絵暦「大晦日掛取の図」（1月。大小。色摺。画狂人北斎。10.4×14.4 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※大晦日の夜、数人の掛取りが来ている様子が、閉めた障子に影となって映っている。庭先には梅が咲いている。掛取りとのやり取りの台詞が書かれ、その終わりに「戌のとし」とある。台詞中に大小月が示される。

●摺物「七小町」（十二切判注。色摺。画狂人北斎画。各21.1×8.8）

注）十二切判：大奉書（約39×約53）の12分の1。横大奉書2分の1（大判。39×26.5。実際には縦35.0～39.0、横21.5～26.5の範囲。B4判〈36.4×25.7〉に近い大きさ）にし、